

長岡京市文化財調査報告書

— 国史跡恵解山古墳の調査 —

第62冊

2012

長岡京市教育委員会

編集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市文化財調査報告書

— 国史跡恵解山古墳の調査 —

第62冊

2012

長岡京市教育委員会

編集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター



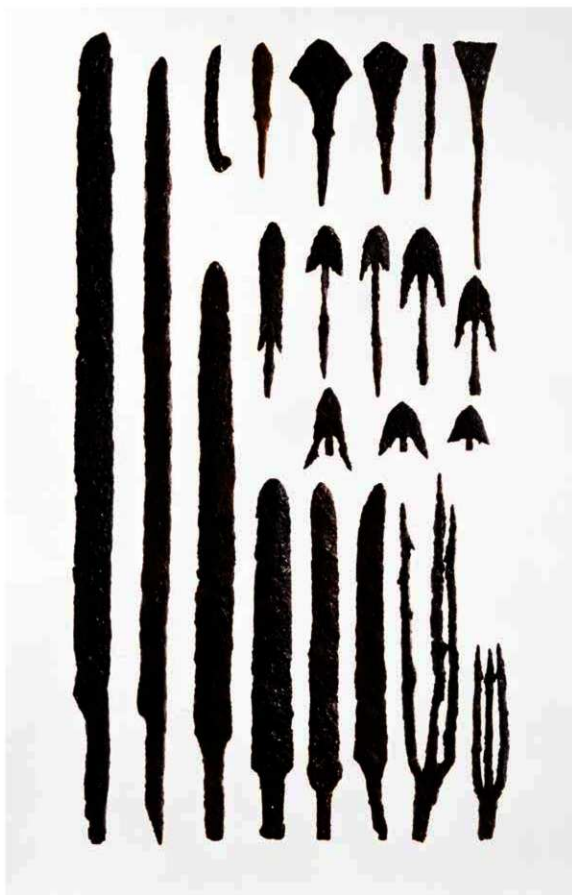
(1) 上空からみた恵解山古墳 (南西から)



(2) 恵解山古墳全景 (北から)



副葬品埋納施設全景（北西から）



鉄製武器類一括



鉄製工具、石製模造品類一括



水鳥形埴輪



円筒埴輪一括

序 文

本書は、国史跡恵解山古墳の12次に及ぶ調査の成果をまとめたものです。国史跡恵解山古墳は、京都盆地の西南部に位置する長岡京市の市域東南部、小畑川と犬川の合流地点の近くにあります。周濠を含めた古墳の全長は約180mで、乙訓地域最大の規模を有する前方後円墳です。国史跡恵解山古墳では、昭和55年に前方部から鉄製の武器など総数約700点を納めた副葬品埋納施設が発見されました。このことは中央政権との強いつながりを示すものであり、このように多量の鉄製武器が出土した例は京都府内にはなく、貴重であることから、昭和56年10月に国史跡に指定され、鉄製武器などの出土品は平成11年に京都府指定文化財になりました。

そこで本市は、国史跡恵解山古墳の保存をはかり、文化的活動・憩いの場として活用するため、平成15年度に「恵解山古墳保存整備基本構想」を策定しました。平成17年度には「国史跡恵解山古墳基本計画」を策定し、平成20年度には基本計画の一部見直しを行い、平成22年度において国史跡恵解山古墳の保存整備に係る基本理念を「歴史とみどり 人の集う 史跡公園」とし、「国史跡恵解山古墳基本設計」をまとめました。

また、本市では第3次総合計画における将来像に「住みつけたい みどりと歴史のまち 長岡京」を掲げ、地域の歴史・文化を活かしたまちづくりや、文化財に親しむことができる環境の整備を主要な施策として取り上げ、市内の文化財や景観を活かした全市民的な周遊ネットワークの構築を目指しているところです。そうした中、国史跡恵解山古墳はその中核をなす文化財の一つとして重要な位置を占めており、平成26年度の公開開始をめざして史跡公園としての保存・整備工事を進めているところです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり数々のご協力をいただきました近隣の皆様方、ご指導をいただいた諸先生方、並びに調査を担当していただいた財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。

平成24年3月

長岡京市教育委員会

教育長 芦田 富男

例 言

1. 本書は、平成15年度から平成23年度にかけて国庫補助事業として実施した恵解山古墳第4次～第12次調査の成果と、昭和55年度に国庫補助事業として実施した第3次調査の成果を併せて報告するものである。
2. 調査は、長岡京市教育委員会が主体となり、委託を受けた財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991年）によった。
4. 本文の（注）に示した長岡京に関係する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集（1985年）に従って略記した。
5. 遺構の写真撮影については、原則として各調査担当者が行ったが、遺構写真の一部および遺物写真については、高橋猪之介氏（故人）と村井伸也氏（勝京都市埋蔵文化財研究所）が撮影したものを使用した。
6. 本書で使用している方位と国土地産値は、旧座標系の第VI系によっている。
7. 本書の挿図の土層名で〈 〉を付けて表示した記号は、『新版標準土色帳』（1997年版）のJIS表記法による土色名である。
8. 付載として、第6次調査に関連して実施した地中探査の報告を再録し、また現地説明会の資料も合せて掲載した。
9. 本文の執筆は、岩崎誠、木村泰彦、中島皆夫、原秀樹、山本輝雄が分担して行った。付載の地中探査は、西村康氏、金田明大氏の執筆によるものである。
10. 発掘調査ならびに本書の作成にあたっては、下記の各氏より種々のご協力とご教示を賜った。
石野博信、内田和伸、梅本康広、小野健吉、岸本直文、國下多美樹、杉原和雄、高瀬要一、高橋克壽、都出比呂志、豊島直博、中尾芳治、瀬宜田佳男、林正憲、菱田哲郎、増渕徹、丸川義広、森下章二、山口博、和田晴吾

本文目次

第1章 古墳の位置	
第1節 位置と立地	1
第2節 周辺の遺跡	2
第2章 調査経過	
第1節 既往の調査	7
第2節 調査の経過	10
第3章 墳丘の調査	
第1節 古墳の現状	17
第2節 調査区の設定	17
第3節 後円部の調査	20
第4節 くびれ部と造り出しの調査	40
第5節 前方部の調査	80
第6節 周濠の調査	120
第7節 墳丘の復原	133
第4章 副葬品埋納施設の調査	
第1節 副葬品埋納施設の構造	139
第2節 副葬品の出土状況	143
第5章 出土遺物	
第1節 副葬品埋納施設の出土遺物	147
第2節 墳丘の出土遺物	174
第3節 周濠の出土遺物	200
第6章 まとめ	
第1節 墳丘と周濠	206
第2節 埋葬施設と副葬品埋納施設	207
第3節 古墳の評価	211
付 載	
地中探査	217
現地説明会資料	226

図版目次

- 巻頭図版 1 (1) 上空からみた恵解山古墳 (南西から)
 (2) 恵解山古墳全景 (北から)
- 巻頭図版 2 副葬品埋納施設 (北西から)
- 巻頭図版 3 鉄製武器類一括
- 巻頭図版 4 鉄製工具、石製模造品類一括
- 巻頭図版 5 水鳥形埴輪
- 巻頭図版 6 円筒埴輪一括
-
- 図版 1 (1) 古墳遠景 (南から)
 (2) 古墳遠景 (北東から)
- 図版 2 (1) 古墳近景 (北東から)
 (2) 古墳近景 (南東から)
- 図版 3 (1) 8-7区 後円部裾部の転落石検出状況 (北東から)
 (2) 8-7区 後円部裾部の葺石 (南西から)
 (3) 10-5区 全景 (西から)
- 図版 4 (1) 6-2区 後円部裾部の転落石検出状況 (西から)
 (2) 6-2区 後円部裾部の周濠の完掘状況 (西から)
 (3) 6-2区 後円部裾部の葺石 (西から)
 (4) 6-2区 後円部裾部の土層堆積状況 (西から)
- 図版 5 (1) 9-1区 全景 (東から)
 (2) 9-1区 後円部第1段平坦面の埴輪列 (西から)
 (3) 9-1区 後円部第1段平坦面の埴輪列 (東から)
- 図版 6 (1) 9-1区 後円部第1段平坦面の埴輪列と断面 (北西から)
 (2) 9-1区 後円部第1段平坦面の埴輪列と断面 (北東から)
- 図版 7 (1) 9-2区 全景 (北西から)
 (2) 9-6区 全景 (東から)
- 図版 8 (1) 9-3東区 全景 (北西から)
 (2) 9-3西区 全景 (南西から)
- 図版 9 (1) 9-4区 全景 (北西から)
 (2) 9-4区 全景 (南東から)
- 図版 10 (1) 9-4区 後円部裾部の転落石検出状況 (東から)
 (2) 9-4区 後円部裾部の葺石 (東から)
- 図版 11 (1) 9-4区 後円部第1段平坦面の埴輪列 (東から)
 (2) 9-4区 後円部第1段平坦面の埴輪列 (北から)
 (3) 9-4区 後円部第1段平坦面の埴輪列 (南から)

- 図版 12 3区 西くびれ部第3段斜面の葺石（東から）
- 図版 13 (1) 3区 後門部第3段斜面の葺石（西から）
(2) 3区 後門部第3段斜面の葺石（南西から）
- 図版 14 (1) 3区 西くびれ部第3段斜面の葺石（東から）
(2) 3区 西くびれ部第3段斜面の葺石（南西から）
- 図版 15 (1) 8-1区 全景（西から）
(2) 8-1区 近景（北西から）
- 図版 16 8-2区 全景（南東から）
- 図版 17 (1) 8-2区 西くびれ部第3段斜面の葺石（南東から）
(2) 8-2区 西くびれ部第3段斜面の葺石（南東から）
- 図版 18 (1) 8-2区 西くびれ部第3段斜面の葺石（北西から）
(2) 8-2区 西くびれ部第3段斜面の葺石（南西から）
(3) 8-2区 西くびれ部第3段斜面の葺石（北東から）
- 図版 19 (1) 5-1区 全景（西から）
(2) 5-1区 西造り出し南辺の検出状況（南西から）
- 図版 20 (1) 6-1区 後門部裾部から西造り出しの転落石検出状況（西から）
(2) 6-1区 後門部裾部の転落石検出状況（北西から）
(3) 6-1区 後門部裾部の転落石検出状況（東から）
- 図版 21 (1) 6-1区 後門部から西造り出し完掘状況（西から）
(2) 6-1区 後門部から西造り出し完掘状況（北西から）
(3) 6-1区 後門部から西造り出し完掘状況（南から）
- 図版 22 (1) 6-1区 西造り出し北辺の基底石（北西から）
(2) 6-1区 西造り出し北辺の基底石（西から）
(3) 6-1区 西造り出し北辺の基底石（東から）
- 図版 23 (1) 6-1区 西造り出し接続部の谷状の葺石（北から）
(2) 6-1区 西造り出し接続部の谷状の葺石（北西から）
(3) 6-1区 西造り出し接続部の谷状の葺石（南東から）
- 図版 24 (1) 11-2区 西造り出し接続部の検出状況（南東から）
(2) 11-2区 西造り出し接続部の完掘状況（南東から）
(3) 11-2区 西造り出し接続部の完掘状況（北西から）
- 図版 25 (1) 11-2区 西造り出し南側接続部の完掘状況（南から）
(2) 11-2区 西造り出し溝状遺構の完掘状況（南東から）
(3) 11-2区 西造り出し埴輪列の検出状況（南東から）
- 図版 26 10-2区 全景（北西から）
- 図版 27 (1) 10-2区 東くびれ部第1段平坦面の埴輪列（北東から）
(2) 10-2区 東くびれ部第1段平坦面の埴輪列（南東から）
- 図版 28 (1) 10-2区 東くびれ部第1段平坦面の埴輪列（北から）
(2) 10-2区 東くびれ部第1段平坦面の埴輪列（南東から）
- 図版 29 (1) 10-3区 全景（北西から）

- (2) 10-3区 全景(南東から)
- 図版 30 10-3区 東造り出し北辺の葺石(北から)
- 図版 31 (1) 10-3区 東造り出しの北辺の葺石(北東から)
(2) 東造り出しの北辺の葺石(南西から)
- 図版 32 (1) 11-1区 東造り出しの埋没状況(南東から)
(2) 11-1区 東造り出し上の堆積層掘削状況(北東から)
(3) 11-1区 東造り出し周辺の礫の検出状況(南東から)
- 図版 33 (1) 11-1区 東造り出しの完掘状況(南東から)
(2) 11-1区 東造り出しの完掘状況(北西から)
(3) 11-1区 東造り出し周辺の礫の完掘状況(南東から)
- 図版 34 (1) 11-1区 東造り出し南辺の基底石(北東から)
(2) 11-1区 東造り出しの区画列石(北西から)
(3) 11-1区 東造り出しの基底石と周辺の礫(北西から)
- 図版 35 (1) 11-1区 区画列石と水鳥形埴輪(南東から)
(2) 11-1区 水鳥形埴輪出土状況(南東から)
(3) 11-1区 水鳥形埴輪などの出土状況(東から)
(4) 11-1区 円筒埴輪出土状況(東から)
- 図版 36 (1) 8-4区 全景(東から)
(2) 7-3区 全景(北から)
(3) 10-4区 全景(西から)
- 図版 37 (1) 8-3区 全景(東から)
(2) 8-3区 全景(西から)
- 図版 38 (1) 8-3区 前方部東側第2段平坦面の埴輪列(北東から)
(2) 8-3区 前方部東側第2段平坦面の埴輪列(北東から)
(3) 8-3区 前方部東側第2段平坦面の埴輪列(北西から)
- 図版 39 (1) 7-2区 全景(南西から)
(2) 7-2区 前方部東側第3段斜面の葺石と土葬墓群(東から)
- 図版 40 (1) 7-2区 前方部東側第3段斜面の葺石と土葬墓群(北東から)
(2) 7-2区 前方部東側第2段平坦面と土葬墓群(北西から)
- 図版 41 (1) 11-5区 前方部東側裾部の転落石検出状況(東から)
(2) 11-5区 前方部東側裾部の葺石(東から)
(3) 11-5区 前方部東側裾部の葺石(北東から)
- 図版 42 (1) 11-5区 前方部東側裾部の葺石(北西から)
(2) 11-5区 前方部東側裾部の盛土堆積状況(北西から)
(3) 11-5区 前方部東側裾部の葺石(北東から)
- 図版 43 (1) 4-2区 前方部南側裾部の転落石検出状況(南東から)
(2) 4-2区 前方部南側裾部の葺石(南東から)
- 図版 44 (1) 4-2区 前方部南側裾部の葺石(南東から)
(2) 4-2区 前方部南側裾部の葺石(南東から)

- (3) 4-2区 前方面南側裾部の葺石（南東から）
- 図版 45 (1) 4-1区 前方面南側裾部の転落石検出状況（南西から）
- (2) 4-1区 前方面南側裾部の葺石（南西から）
- 図版 46 (1) 4-1区 前方面南側裾部の葺石（南東から）
- (2) 4-1区 前方面南側の旧表土層（東から）
- (3) 4-1区 前方面南側の旧表土層（北東から）
- 図版 47 10-1区 全景（南東から）
- 図版 48 (1) 10-1区 掘削全景（南東から）
- (2) 10-1区 掘削全景（東から）
- 図版 49 (1) 7-1区 全景（北から）
- (2) 7-1区 全景（南から）
- (3) 7-1区 墳丘盛土の単位（南西から）
- 図版 50 (1) 5-2区 全景（南西から）
- (2) 5-2区 前方面南西隅裾部の葺石（南西から）
- 図版 51 (1) 5-2区 前方面南西隅裾部の葺石（南東から）
- (2) 5-2区 前方面南西隅裾部の葺石（南西から）
- 図版 52 (1) 12-1北区 完掘状況（北西から）
- (2) 12-1北区 墳丘盛土（南西から）
- (3) 12-1区 土手下部の状況（北東から）
- 図版 53 (1) 12-1南区 前方面西側裾部の転落石検出状況（南から）
- (2) 12-1南区 前方面西側裾部の葺石（南から）
- (3) 12-1南区 前方面西側裾部の葺石（西から）
- 図版 54 (1) 7-4区 前方面西側裾部の転落石検出状況（北西から）
- (2) 7-4区 前方面西側裾部の葺石（北西から）
- 図版 55 (1) 7-4区 前方面西側裾部の葺石（北西から）
- (2) 7-4区 前方面西側裾部の葺石と杭（西から）
- (3) 7-4区 前方面西側裾部の葺石と杭（南西から）
- 図版 56 (1) 5-1区 前方面西側第2段平坦面の埴輪列（南から）
- (2) 5-1区 前方面西側第2段平坦面の埴輪列（北西から）
- (3) 5-1区 前方面西側第2段平坦面の埴輪列（南東から）
- 図版 57 (1) 11-3区 周濠の埋没状況（北から）
- (2) 11-3区 周濠の完掘状況（北東から）
- (3) 11-3区 周濠の完掘状況（南から）
- 図版 58 (1) 9-5区 周濠の検出状況（北東から）
- (2) 9-5区 周濠の完掘状況（北東から）
- (3) 9-5区 周濠の完掘状況（南西から）
- 図版 59 (1) 9-7区 全景（東から）
- (2) 9-7区 全景（北西から）
- 図版 60 (1) 4-1区 周濠の完掘状況（南東から）

- (2) 4-1区 周濠の完掘状況(北西から)
 (3) 4-1区 周濠外堤の内側斜面(北西から)
- 図版 61 (1) 11-4区 周濠の埋没状況(南東から)
 (2) 11-4区 周濠の完掘状況(南東から)
 (3) 11-4区 周濠の堆積状況(南西から)
- 図版 62 (1) 8-5区 全景(北東から)
 (2) 10-6北・南区 全景(南から)
- 図版 63 (1) 12-2区 池と水路下部(南東から)
 (2) 12-2区 周濠の西側への傾斜(北西から)
 (3) 12-2区 池、水路周濠の状況(南東から)
- 図版 64 (1) 8-6区 全景(北西から)
 (2) 8-6区 全景(北東から)
- 図版 65 (1) 7-5区 全景(北から)
 (2) 7-5区 周濠の完掘状況(南東から)
- 図版 66 (1) 3区 鉄製品出土状況(南東から)
 (2) 3区 鉄製品出土状況(南東から)
 (3) 3区 副葬品埋納施設検出状況(北西から)
- 図版 67 (1) 3区 副葬品埋納施設検出状況(北西から)
 (2) 3区 副葬品埋納施設検出状況(南東から)
- 図版 68 (1) 3区 副葬品埋納施設完掘状況(北西から)
 (2) 3区 副葬品埋納施設完掘状況(南東から)
- 図版 69 (1) 3区 副葬品埋納施設E群の断面(南東から)
 (2) 3区 副葬品埋納施設D群の断面(南東から)
- 図版 70 (1) 3区 副葬品埋納施設F群のヤス状刺突具出土状況(北西から)
 (2) 3区 副葬品埋納施設E群の鉄鍔出土状況(北東から)
- 図版 71 (1) 3区 副葬品埋納施設A群の上面
 (2) 3区 副葬品埋納施設A群の下面
 (3) 3区 副葬品埋納施設B群の上面
 (4) 3区 副葬品埋納施設B群の下面
- 図版 72 (1) 3区 副葬品埋納施設C群の上面
 (2) 3区 副葬品埋納施設C群の下面
 (3) 3区 副葬品埋納施設D群の上面
 (4) 3区 副葬品埋納施設D群の下面
- 図版 73 (1) 3区 副葬品埋納施設E群の上面
 (2) 3区 副葬品埋納施設E群の下面
 (3) 3区 副葬品埋納施設F群の上面
 (4) 3区 副葬品埋納施設F群の下面
- 図版 74 (1) 3区 副葬品埋納施設の掘形断面(北西から)
 (2) 3区 副葬品埋納施設南小口の粘土塊(北西から)

- 図版 75 A群の鉄刀
図版 76 B群の鉄刀
図版 77 C群の鉄刀
図版 78 D群の鉄刀
図版 79 E群の鉄刀
図版 80 F群の鉄刀
図版 81 鉄剣
図版 82 (1) 鉄槍1
(2) 鉄槍2
図版 83 (1) 鉄鎌1 (A形式)
(2) 鉄鎌2 (A形式)
図版 84 (1) 鉄鎌3 (B形式)
(2) 鉄鎌4 (C・D形式)
図版 85 (1) 鉄鎌5 (E形式)
(2) 鉄鎌6 (F形式)
図版 86 (1) 鉄鎌7 (G形式)
(2) 鉄鎌8 (H形式)
図版 87 鉄鎌9 (I・J形式)
図版 88 鉄鎌10 (K・L・M形式)
図版 89 ヤス状刺突具1
図版 90 (1) ヤス状刺突具2
(2) ヤス状刺突具3
図版 91 (1) 短刀
(2) 蕨手刀子
図版 92 (1) 鉄斧1
(2) 鉄斧2
図版 93 (1) 鋤先、鉄鎌
(2) 鉄剣、鉄鎌など
図版 94 円筒埴輪1
図版 95 円筒埴輪2
図版 96 円筒埴輪3
図版 97 (1) 家形埴輪1
(2) 家形埴輪2
図版 98 朝顔形埴輪、蓋形埴輪、土製品、石製品
図版 99 (1) 水鳥形埴輪
(2) 結晶片岩

挿図目次

第 1 図	恵解山古墳と周辺の地形図 (1/20000)	1
第 2 図	恵解山古墳と周辺の調査位置図 (1/5000)	3
第 3 図	乙訓地域の主要古墳分布図 (1/50000)	5
第 4 図	京都府教育委員会墳丘測量図 (1/1000)	8
第 5 図	調査経過写真	15
第 6 図	墳丘現状図 (1/1000)	18
第 7 図	調査区配置図 (1/1000)	19
第 8 図	8-7 区平面・断面図 (1/100)	21
第 9 図	10-5 区平面・断面図 (1/100)	22
第 10 図	6-2 区平面・断面図 (1/100)	23
第 11 図	6-2 区後円部第 1 段斜面と樹位	24
第 12 図	9-1 区平面図 (1/100)	25
第 13 図	9-1 区墳輪列実測図 (1/40)	26
第 14 図	9-1 区断面図 (1/100)	27・28
第 15 図	9-2 区平面・断面図 (1/100)	29
第 16 図	9-6 区平面・断面図 (1/100)	30
第 17 図	9-3 区平面図 (1/100)	31
第 18 図	9-3 区断面図 (1/100)	32
第 19 図	9-4 区東造り出し断ち割断面図 (1/40)	34
第 20 図	9-4 区平面図 (1/100)	35・36
第 21 図	9-4 区断面図 (1/50)	37・38
第 22 図	9-4 区墳輪列実測図 (1/40)	39
第 23 図	3 区平面図 (1/200)	41・42
第 24 図	3 区西くびれ部葺石実測図 (1/50)	43・44
第 25 図	3 区葺石断面図 (1/40)	45
第 26 図	8-2 区平面・断面図 (1/100)	47
第 27 図	3 区・8-2 区葺石平面図 (1/100)	48
第 28 図	8-1 区平面・断面図 (1/100)	51
第 29 図	6-1 区平面図 (1/100)	53
第 30 図	6-1 区断面図 (1/100)	54
第 31 図	転落石密集範囲図 (1/200)	54
第 32 図	6-1 区葺石平面・断面図 (1/50)	55・56
第 33 図	6-1 区後円部・くびれ部・西造り出し断面図 (1/100)	57
第 34 図	6-1 区くびれ部・西造り出し接続部実測図 (1/50)	57
第 35 図	6-1 区遺物出土量・遺物分布図 (1/200)	58
第 36 図	11-2 区平面図 (1/100)	60
第 37 図	11-2 区断面図 (1/100)	61

第 38 図	11-2 区基底石実測図 (1/20)	61
第 39 図	11-2 区埴輪列実測図 (1/20)	62
第 40 図	11-2 区溝状遺構 SD07 内の埴輪 (南西から)	62
第 41 図	10-2 区平面・断面図 (1/100)	65・66
第 42 図	10-2 区西くびれ部第 1 断平面の埴輪列実測図 (1/40・1/100)	67・68
第 43 図	10-3 区平面・断面図 (1/100)	69・70
第 44 図	8-4 区平面・断面図 (1/100)	71
第 45 図	東造り出し周辺調査区配置図 (1/200)	72
第 46 図	11-1 区断面図 (1/100)	73
第 47 図	11-1 区平面図 (1/50)	75・76
第 48 図	11-1 区基底石・区画石列実測図 (1/30)	77
第 49 図	11-1 区の埴輪出土量・種別分布図 (1/200)	78
第 50 図	8-3 区平面・断面図 (1/100)	81
第 51 図	8-3 区断面図 (1/100)	82
第 52 図	8-3 区埴輪列実測図 (1/20)	83
第 53 図	7-3 区平面・断面図 (1/100)	85
第 54 図	7-2 区平面・断面図 (1/100)	86
第 55 図	10-4 区平面・断面図 (1/100)	87
第 56 図	11-5 区平面・断面図 (1/100)	89
第 57 図	11-5 区葺石実測図 (1/20)	90
第 58 図	11-5 区周辺平面図 (1/200)	91
第 59 図	4-2 区平面・断面図 (1/100)	92
第 60 図	4-2 区葺石実測図 (1/20・1/40)	93
第 61 図	4-1 区平面・断面図 (1/100)	95・96
第 62 図	4-1 区葺石実測図 (1/20・1/40)	97
第 63 図	10-1 区平面・断面図 (1/100)	99
第 64 図	7-1 区平面・断面図 (1/100)	101
第 65 図	7-1 区埴丘盛土の単位 (1/100)	102
第 66 図	12-1 区平面図 (1/100)	103
第 67 図	12-1 区断面図 (1/100)	105・106
第 68 図	12-1 区葺石実測図 (1/40)	107
第 69 図	12-1 区と周辺調査区の葺石位置関係図 (1/200)	107
第 70 図	12-1 南区の埴丘盛土 (東から)	108
第 71 図	5-2 区平面・断面図 (1/20・1/50・1/100)	109・110
第 72 図	5-2 区葺石実測図 (1/40)	111・112
第 73 図	7-4 区平面・断面図 (1/100)	113
第 74 図	5-1 区平面・断面図 (1/100)	115・116
第 75 図	5-1 区埴輪列実測図 (1/20)	117・118
第 76 図	11-3 区平面図 (1/100)	120

第 77 図	11-3区断面図 (1/100)	120
第 78 図	11-3区周濠外提内斜面の傾斜と層位	121
第 79 図	9-5区平面・断面図 (1/100)	123
第 80 図	9-7区平面・断面図 (1/100)	124
第 81 図	11-4区平面図 (1/100)	124
第 82 図	11-4区断面図 (1/100)	125
第 83 図	8-5区平面・断面図 (1/100)	125
第 84 図	10-6区平面・断面図 (1/100)	126
第 85 図	12-2区平面図 (1/100)	128
第 86 図	12-2区断面図 (1/100)	128
第 87 図	12-2区調査状況	129
第 88 図	7-5区平面・断面図 (1/100)	130
第 89 図	8-6区平面・断面図 (1/100)	131
第 90 図	墳丘復原平面図	137
第 91 図	墳丘復原断面図	138
第 92 図	副葬品埋納施設横断面図 (1/100)	140
第 93 図	副葬品埋納施設実測図 (1/20)	141・142
第 94 図	鉄刀法量図	147
第 95 図	鉄刀実測図 1 (1/4)	148
第 96 図	鉄刀実測図 2 (1/4)	149
第 97 図	鉄刀実測図 3 (1/4)	150
第 98 図	鉄刀実測図 4 (1/4)	151
第 99 図	鉄刀実測図 5 (1/4)	152
第 100 図	鉄刀実測図 6 (1/4)	153
第 101 図	鉄剣実測図 1 (1/4)	155
第 102 図	鉄剣実測図 2 (1/4)	156
第 103 図	鉄槍実測図 (1/4)	157
第 104 図	鉄鍬実測図 1 (1/2)	159
第 105 図	鉄鍬実測図 2 (1/2)	160
第 106 図	鉄鍬実測図 3 (1/2)	161
第 107 図	鉄鍬実測図 4 (1/2)	162
第 108 図	鉄鍬実測図 5 (1/2)	163
第 109 図	鉄鍬実測図 6 (1/2)	164
第 110 図	鉄鍬実測図 7 (1/2)	165
第 111 図	鉄鍬実測図 8 (1/2)	166
第 112 図	鉄鍬実測図 9 (1/2)	167
第 113 図	短刀・蕨手刀子実測図 (1/2)	171
第 114 図	ヤス状刺突具実測図 1 (1/2)	172
第 115 図	ヤス状刺突具実測図 2 (1/2)	173

第 116 図	癒着した状態の鉄製品	174
第 117 図	鉄斧実測図 1 (1/2)	175
第 118 図	鉄斧実測図 2 (1/2)	176
第 119 図	鋤先・鉄鎌実測図 (1/2)	177
第 120 図	鉄剣・刀子など実測図 (1/2)	178
第 121 図	石製品、土製品実測図 (1/1・1/2)	181
第 122 図	円筒埴輪実測図 1 (1/6)	185
第 123 図	円筒埴輪実測図 2 (1/6)	186
第 124 図	円筒埴輪実測図 3 (1/6)	187
第 125 図	朝顔形埴輪、壺形埴輪実測図 (1/6)	188
第 126 図	蓋形埴輪実測図 (1/6)	190
第 127 図	家形埴輪実測図 (1/6)	192
第 128 図	盾形、靱形、甲冑形、埴輪実測図 (1/6)	194
第 129 図	水鳥形埴輪実測図 (1/6)	195
第 130 図	埴丘出土遺物実測図 (1/4・1/2)	198
第 131 図	周濠出土遺物実測図 1 (1/4)	201
第 132 図	周濠出土遺物実測図 2 (1/4)	203
第 133 図	周濠出土遺物実測図 3 (1/4・1/2)	204
第 134 図	副葬品埋納施設の諸例 (1/50)	209
第 135 図	埴丘測量図と調査区配置図 (1/1000)	218
第 136 図	各測定区の探索成果 (1/1000)	219
第 137 図	A 測定区平面・断面図	220
第 138 図	B 測定区平面図	220
第 139 図	C 測定区平面・断面図	222
第 140 図	D 測定区平面・断面図	222
第 141 図	E 測定区平面図	224
第 142 図	後円部頂上の測定区平面・断面図	224

付表目次

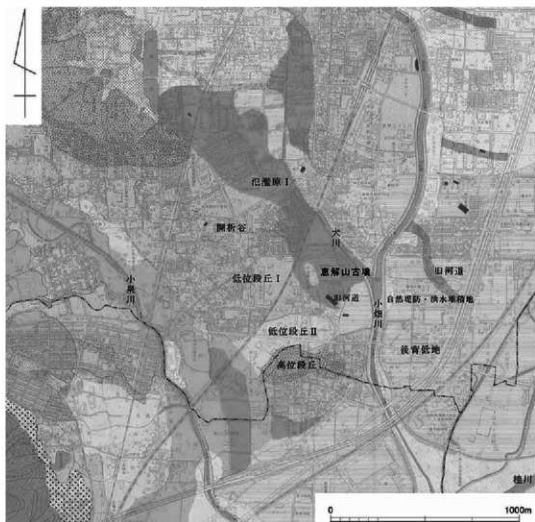
付表-1	恵解山古墳調査一覧表	12・13
付表-2	古墳規模の計測表	135
付表-3	葺石傾斜角計測表	136
付表-4	5-1区墳輪列出土の円筒埴輪一覧表	183
付表-5	副葬品埋納施設を有する古墳一覧表	210
付表-6	報告書抄録	257・258

第1章 位置と環境

第1節 位置と立地

(1) 古墳の位置

京都盆地の西南部に位置する長岡京市は、東西約6.5km、南北約4.5km、面積約19km²ほどの市域を有する人口約80,000人の地方都市である。北は京都市西京区と向日市、東は京都市伏見区、南は乙訓郡大山崎町、そして西は大阪府三島郡島本町の2市2町とそれぞれ境を接している。この地は、京都盆地形成の源である桂川、宇治川、木津川の3大河川が合流して淀川に注ぐ地点に近いこともあって、古くから交通の要衝として歴史の表舞台にたびたび登場する重要な位置を占めていた。古くは継体大王の弟国宮が置かれたのをはじめ、市名の由来となっている桓武天皇が造営した長岡京が遷都された理由が水陸の便が良かったからだと正史の『続日本紀』は記している。そうした宮都が2度までも営まれたこの地には、古山陰道、山陽道、久我堰、西国街道など



第1図 恵解山古墳と周辺の地形図 (1/20000)

といった古道が通っており、古代から近世に至るまで人々の往来が盛んであったことを示唆している。それは現在においても同様で、市内には西から阪急電鉄京都線、JR 東海道線（京都線）、国道 171 号線、名神高速道路、東海道新幹線など交通の大動脈が南北に縦走しており、大阪市や京都市への移動は至便である。

恵解山古墳は、長岡京市の南部地域に位置しており、JR 東海道線の長岡京駅から南南西に約 1 km の地点にあたる長岡京市勝竜寺 1207 他から久貝二丁目 813 他にかけて所在する。前方部を南東に向けた前方後円墳で、全長が約 128 m もある規模は、桂川右岸流域に数多く分布する古墳の中では最大級である。古墳のすぐ東側には長岡第八小学校が、北側には長岡第三中学校が、そして西側に JR 東海道本線（愛称は JR 京都線）を挟んで大阪成蹊大学芸術学部などといった教育施設が近接して位置している。

ところで、恵解山を地元では「いげのやま」と呼称しているが、この名称は古墳の北東約 350 m に所在する真言宗の寺院である勝竜寺の山号に由来するのではないかと考えられる。また、古墳の所在地を旧字名でみると、大字勝竜寺小字北栗ヶ塚および小字南栗ヶ塚となっており、この名称からすると古墳はかつて「栗ヶ塚」と呼称されていた時期があったと推察することができる。しかしながら、栗ヶ塚から恵解山に名称がいつ頃からどのような理由で変わったのかを知る手掛かりは現段階においては見いだせないでいる。

（2）古墳の立地

長岡京市の地勢は、京都盆地の西辺を限る丹波層群からなる西山山地と、そこから派生する大坂層群で構成される丘陵地、おもに砂礫層からなる高位から低位にかけての段丘、そして桂川や小畑川、小泉川などの河川が形成した後背湿地や氾濫原などというように、起伏に富んだ地形を呈しており、おおむね西から東に向かって階段状に傾斜する特徴がある。

恵解山古墳の立地を地形分類に当てはめてみると、北西から南東方向に傾斜する低位段丘Ⅰの末端から氾濫原Ⅰにかけての標高 15 m 前後に立地していることがわかる。現在、桂川の支流の一つである小畑川が古墳の東約 300 m の地点を南流しているが、これまでの調査成果や葺石の供給元の分析結果などを考慮すれば、古墳が造られた当時はこの場所を流れていなかった可能性が濃厚と考えられており、現在の景観とはおもむきを異にしていたことが想像できる。

第 2 節 周辺の遺跡

恵解山古墳の周辺においては、境野 1 号墳や南栗ヶ塚古墳、久保古墳群などといった古墳をはじめ、旧石器時代から近世に至るまでの重複遺跡である南栗ヶ塚遺跡などが分布している。さらに、長岡京跡の範囲にも含まれており、また付近には長岡京廃都後に第 3 次山城国府が設置された可能性が指摘されていることなど、歴史的な環境に恵まれた地域であるといえる。以下では、周辺の遺跡の概要を述べておこう。

(1) 境野1号墳

境野1号墳は、恵解山古墳から南へ約400mの地点、京都府乙訓郡大山崎町下植野に所在する全長57.5mに復元される前方後円墳である。これまでに9次におよぶ発掘調査が実施されており、後円部3段、前方部2段に築盛されていること、傾斜面には葎石を施し、平坦面には円筒、朝顔形、家形などの埴輪を樹立していることなどが判明している。また、埋葬施設の詳細は不明確であるが、粘土槨である可能性が考えられており、石鯛や車輪石、管玉など副葬品の一部と考えられる遺物の破片が少量出土している。恵解山古墳に先行する前期後半に位置づけられる首長墓である。

なお、1号墳の周辺には、後期の方墳で構成される境野古墳群が所在しており、V期の埴輪を出土する方墳が確認されている。

(2) 南栗ヶ塚古墳

恵解山古墳の南東部に近接する南栗ヶ塚古墳は、久貝一丁目に所在し、長岡京跡右京第39次調査(以下では、長岡京跡を省略する)によってその存在が確認された埋没古墳である。14m×17mのやや長方形に復元できる方墳で、墳丘は後世に削平を受けて埋葬施設は遺存していないが、幅0.5～1m、深さ0.15～0.4mほどの周溝内から円筒、朝顔形、家形などの埴輪が出土している。円筒埴輪は、底部径12cm前後の小型品で、外面の調整は静止痕をとどめる断続的なヨコハケを施している。焼成は密窯によるもので、黒斑を有する埴輪が主体の恵解山古墳とは様相を異にするが、恵解山古墳の周堤に近接して営まれていること、単独で存在することなどを



第2図 恵解山古墳と周辺の調査位置図(1/5000)

重視すれば、陪塚である可能性を否定することはできないであろう。

(3) 久保古墳群

久貝三丁目に所在する古墳群で、これまでに3基が確認されている。いずれの古墳も立会調査によるため、詳細は不明であるが、周溝を伴う小規模な方墳であると考えられている。周溝からは、円筒、朝顔形の埴輪片が出土しており、埴輪は窯窯焼成であること、タテハケによる調整であることなどV期の特徴を示していることが明らかになっている。後期の群集墳として、評価することができる。

(4) 南栗ヶ塚遺跡

南栗ヶ塚遺跡は、旧石器時代から近世に至るまでの重複遺跡であり、勝竜寺、久貝一丁目～三丁目、調子三丁目にかけての広範囲に所在している。以下では、時代ごとに分けてその概要を説明する。

(旧石器時代)

右京第39次調査でナイフ形石器、同121次調査で細石刃などが出土しているが、特に右京第570次調査ではナイフ形石器とともに剥片資料が出土している。剥片資料の数点は原位置を保持しており、また接合資料が確認されるなど、注目される成果が得られている。乙訓地域の旧石器資料の大部分は、旧状を保持していない2次堆積資料であるが、こうした出土事例がほとんど認められないだけに重視すべき資料である。

(縄文時代)

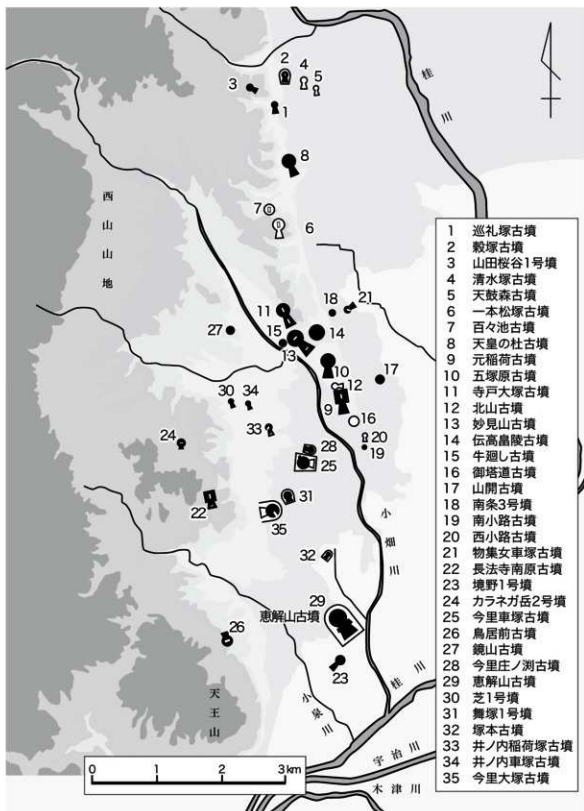
最近の右京第955次調査で、前期の竪穴住居1基が確認された他、柱穴や土坑、窪みなどの遺構群が検出されている。縄文土器や石器類のみならず、動物遺存体など特殊な出土遺物も多彩、豊富で、京都府下はもとより、近畿の縄文時代を研究する上で良好な資料が得ることができた。

(弥生時代)

前期では右京第473次と同第964次調査で土坑が、中期では右京第39次と同第587次調査で方形周溝墓、右京第964次調査で土坑などが確認されている。また後期では右京第964次調査で土坑が検出されている。このように、恵解山古墳の南東部には、弥生時代の集落と墓地の営まれていたことが明らかになっている。

(古墳時代)

右京第94次調査では、流路内から初期須恵器が出土しており、また古墳の南西部にあたる右京第812次調査で検出した落ち込み内から円筒、朝顔形、蓋形などの埴輪片がまとめて出土していることは注意すべきである。付近に、そうした埴輪を伴う古墳がかつて存在し、長岡京期以降に破壊された可能性が推察されている。埴輪は、黒斑を有するものが多いことから、恵解山古墳とおおむね同時期に比定することができ、陪塚の可能性もあながち否定できない状況であるが、今後検討を要する課題である。



第3図 乙訓地域の主要古墳分布図 (1/50000)

(平安時代)

古墳の南側を中心に西側にかけて平安時代前期の遺構群が多様な遺物とともにまとまって確認されている。右京第121次と右京第272次調査で掘立柱建物と土坑が9世紀前半代の遺物とともに確認されており、また右京第139次と右京第530次調査では南北に庇をもつ大型建物と堀が、さらに右京第419次調査でも南北に庇をもつ大型の東西棟建物などが確認されている。そして、右京第812次調査の落ち込み内からは、先述した埴輪片とともに須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器など9世紀後半代の遺物がまとまって出土していることも注目されている。そうした平安時代前期に比定される遺構群や遺物は、『日本紀略』延暦16(798)年の条に「遷任山城国治於長岡京南」と記載されている山城国府(第3次)に関連している可能性が指摘されている。

(5) 長岡京跡

長岡京は、桓武天皇が784(延暦3)年から794(延暦13)年まで存続した都城である。わずかに10年間ではあったが、これまでの2000回にも及ぶ発掘調査により、宮城はもとより京城についてもかなり整備された都であることが解明されつつある。

恵解山古墳の位置を長岡京の条坊復元に当てはめてみると、京の南部地域にあたる右京八条一坊から二坊にかけて相当し、ちょうど西一坊大路と八条条間小路の交差点が想定されている。このことは、古墳を破壊してまで長岡京の条坊が施工されなかったことを示唆しており、京の造営の進捗状況を知る上で興味深い。ただし、古墳の西側にあたる右京八条二坊では、甕堀え付け穴を伴う建物や溝、土坑など長岡京期の遺構群が確認されており、また古墳の周濠内からも長岡京期の遺物がまとまって出土しているので、古墳の近辺にも造営の軌音が響いていたものと考えられることができよう。

第2章 調査経過

第1節 既往の調査

(1) 梅原末次氏の踏査

恵解山古墳を初めて世に紹介したのは梅原末治氏である。京都府の史蹟勝地調査会の委員であった梅原は大正13(1924)年に古墳を訪れ、その観察結果を簡単に紹介している。それによれば、墳丘は全長約126mの前方後円墳で、2段に築成されていること、葺石を施し、円筒と形象埴輪を伴うこと、埋葬施設は後円部に「凝灰岩」の天井石を使用した竪穴式石室が存在し、5枚あった天井石は四散していることなどである。そして、同じ山城盆地に所在する城陽市の久津川車塚古墳に匹敵する規模の古墳であるとの評価を下している。

(2) 京都府教育委員会による測量調査

昭和42(1967)年、京都府教育委員会が実施した向日丘陵地周辺地における分布調査の一環として墳丘の測量調査が行われ、墳形や規模など古墳の概要が測量図とともに公表された。その内容を見ると、墳丘の全長が120m、後円部径約60m・高さ約8m、前方部幅約55m・高さ約6.5mの前方後円墳で、四周に幅約30mほどの盾形周濠を巡らし、京都盆地で最も低地に立地する古墳であることなどが報告された。そうした成果は、1972(昭和47)年に刊行された京都府遺跡地図に周知の遺跡として掲載され、広く世間に周知されるようになった。

ただし、墳丘測量図は等高線が1m間隔と比較的粗いものであったが、墳丘の形態がかなり収差を受けていることは、容易に想像できた。

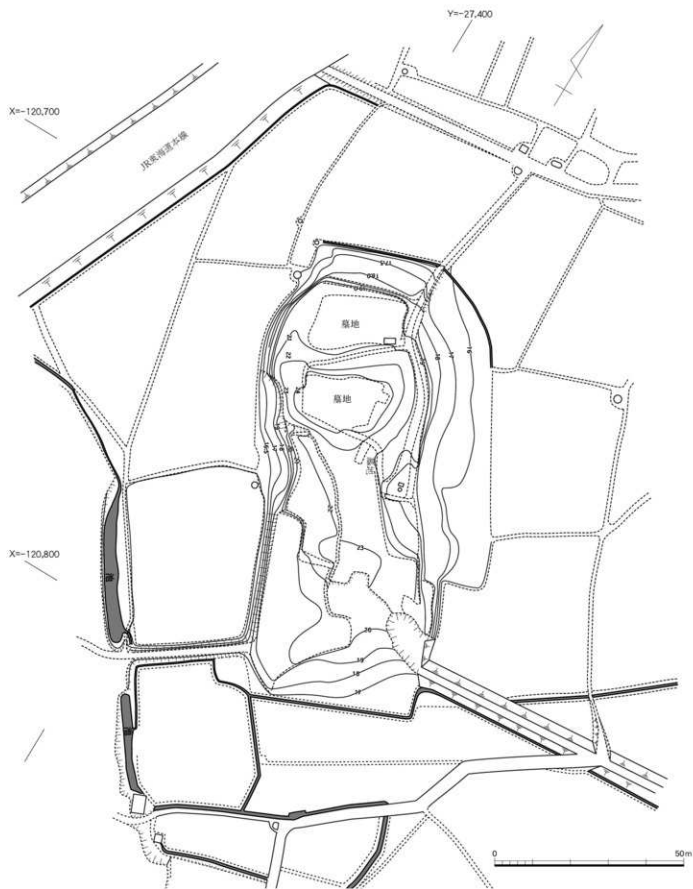
(3) 第1次調査

昭和50(1975)年、古墳の東側に長岡第八小学校が建設されることになり、それに伴う工事車両の通行と通路とを兼ね備えた新たな市道の敷設が計画された。その敷設工事に先立つ事前の発掘調査として実施されたのが第1次調査である。

第1次調査は、市教育委員会が主体となり、古墳西側の周濠外堤が想定される地点に3カ所の調査区(A～C地区)を設定し、3月10日から19日まで行われた。A地区では、沼池状の堆積を確認したのみであったのに対して、B、C地区では周濠内に堆積したとみられる土層を確認し、そこから長岡京期と平安時代、それに中世の遺物が出土している。ただし、いずれの調査区においても、外堤の存在を確認する情報を得ることはできなかった。

(4) 第2次調査

昭和51(1976)年には、古墳の周濠内に北接する長岡第三中学校の補助グラウンドの新設が



第4図 京都市教育委員会墳丘測量図(1/1000)

計画され、その事前調査として11月26日から翌昭和52（1977）年1月11日まで第2次調査が実施された。

第2次調査も市教育委員会が主体となり、周濠の北側から東側にかけての水田を調査対象として、計10カ所の調査区を設定して行われた。調査区の名称は、第1次調査の際に設定した水田ごとの区割りを踏襲したD～G区に分けられ、各区内はトレンチごとにさらにローマ数字で細分している。

そのうちDⅠ、DⅦ、DⅧトレンチにおいて後円部の裾に施された葺石が検出されたが、報告書に掲載された写真図版を検討する限り、転落石の除去を充分に行っていないようで、本来の葺石面は確認されていないことが推察された。おそらく、転落石内に基底石が埋没していることは確実であろう。また、GⅠトレンチでは前方部東側面の裾部に施された葺石の存在を確認し、前方部が大きく開く可能性が想定されていた。

周濠内からは、古墳に伴う埴輪や結晶片岩をはじめ、土師器、須恵器、瓦器、下駄、曲物の底板など長岡京期から中・近世にかけての遺物片が出土している。

（5）第3次調査

昭和54（1979）年7月、後円部の西側にあたる周濠の一角に民間の開発計画が持ち上がった。これを受けた市教育委員会では、京都府教育委員会と開発について協議するとともに、国史跡指定の見通しについて文化庁、府教育委員会の指導を受けた。翌昭和55（1980）年1月に開発計画の中止を求めるとともに、3月には市文化財保護審議会より保存すべきとの答申を受けたことで、国史跡指定の申請への準備を進めようとしていた。

そうした矢先の4月12日、墳丘上で重機が動いているのを偶然通りかかった市教育委員会の職員が発見した。直ちに現地に急行したところ、重機は地元勝竜寺墓地の拡張工事に使用されていたもので、墳丘西側のくびれ部から前方部にかけて大きく削平された状態で、各所に埴輪片が散乱していた。直ちに工事の中止を求めるとともに、京都府教育委員会文化財保護課にその旨を報告し、指導を得るための技師の派遣を要請した。しかしながら、この間も工事は進行し、前方部の中央付近で刀や鎌などの鉄製品が攪乱を受けて露出する事態が生じたため、ようやく工事は中止されるに至った。そして、当日はとりあえず現状を写真撮影した後、遊離した状態の鉄製品や埴輪などの破片を採集した。

この事態を憂慮した市教育委員会では、出土したものが鉄製品であり、現状のまま埋め戻して保存することは困難であるとの判断から、その取り扱いについて地元勝竜寺財産区、府教育委員会の3者で協議を行った。その結果、市教育委員会が主体となって緊急の発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、昭和55（1980）年度の国庫補助事業として行うことになり、調査の名称を恵山古墳第3次調査とした。そして、府教育委員会、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター（当時）の指導のもとに4月15日から開始することになった。調査にあたっては、工事によって削

平を受けた区域、古墳の部位でいうと後円部から前方部にかけての区域を対象に、鉄製品が出土した地点の詳細な調査に加え、かねてより存在が指摘されていた葺石や埴輪列などの確認に主眼を置くことにした。

まず、削平を受けた平面全体と断面の精査に着手したところ、4月22日に北西部で円弧状を呈する石列が確認された。そこで、まず石列を追究するため調査を進めた結果、くびれ部の傾斜面に施された葺石であることが判明した。葺石は、遺存状態が比較的良好で、転落石に混じって埴輪片や管玉、結晶片岩などの遺物がまぎって出土した。そして、写真撮影と実測図の作成、石材の分析などを行うとともに、5月17日に1回目の現地説明会を開催した。そして、川砂を用いて埋め戻しが終了したのは5月20日だった。

翌5月21日からは、鉄製品が出土した地点の調査に移行することにした。重機掘削で出土した鉄製品を精査した結果、原位置をとどめていない鉄製品も多くみとめられたが、鉄刀は3群に分けて置かれており、さらに南側にも続いていることが明らかになった。このため、土地所有者の了解を得て、直ちに拡張を行って鉄製品群の全容を追究することとした。鉄製品群は、埋葬施設ではなく、埋納施設に取められた副葬品であること、埋納施設はおおむね古墳の主軸上に設けられていることなどが判明した。そして、6月30日に2回目の現地説明会を開催した。その後、写真撮影や実測作業、鉄製品の取り上げ作業などに多くの手間ひまをかけたが、7月15日に川砂で埋め戻し、現地での調査を終了することができた。

調査終了後、市教育委員会では古墳を国の史跡として保存すべく、土地の所有者をはじめ関係機関との調整作業を精力的に進めるとともに、市長自らが再三上京し、文部省および文化庁との交渉を重ねた結果、昭和56(1981)年10月13日付けで国の史跡として指定されることになった。

なお、出土した大量の鉄製品は、昭和56(1981)年から昭和57(1982)年にかけて奈良国立文化財研究所(当時)において保存処理が行われた。その後、第3次調査で出土した鉄製品や埴輪などの遺物は、平成11(1999)年3月19日付けで京都府の有形文化財に指定された。

第2節 調査の経過

国史跡に指定された以降の恵解山古墳については、市教育委員会が史跡用地の買収を昭和57(1982)年から継続的に進め、20年余りを経過した平成14(2002)年度中にようやく史跡指定全域の公有化が完了するに至った。これに伴い長岡京市では、古墳を史跡公園として保存・整備し、市民に広く活用を図る施策を計画するため、平成15年度に保存整備基本構想を、次いで平成17年度には基本計画の策定を行った。そこで、保存・整備施策の計画を立案するため、墳形や規模など古墳の基礎的なデータを得る目的の発掘調査(第4次～第6次)を平成15～17年度にかけて国庫補助事業として実施した。

事業の具体化に向けて保存・整備委員会を組織した平成18年度以降は、保存活用を目的とし

た史跡整備の一環としての発掘調査（第7次～第12次）を国庫補助事業として実施し、引き続き墳丘や周濠の形態と規模、それに構造など古墳の旧状を復元するための情報を収集した。

（1）第4次調査

第4次調査は、平成15（2003）年度の国庫補助事業として行ったものであるが、調査対象地が長岡京跡の右京八条一坊十四町にもあたるため、右京第783次調査という長岡京跡の調査回数も併用した。前方部の形態と規模を確認する目的で前方部南側に2ヶ所の調査区を設定し、平成15（2003）年8月11日から調査対象地内に繁茂する雑草や孟宗竹などを伐採、搬出することに着手した。そして、8月21日から4-2区と4-1区を重機で掘削して遺構検出のための精査を進めた。開始後直ちに、両調査区において前方部前面の裾部に施された葺石を相次いで検出したため、調査区を部分的に拡張するなどして、葺石の追究を行った。その結果、墳丘は後世に大きく削平を受けていたものの、前方部の幅がこれまで考えていた規模よりも上回る事が明らかになるなど、墳丘を復元するにあたり貴重な成果を得ることができた。

そうした調査成果を公表するため、10月4日に現地説明会を開催した。その後、両調査区においてそれぞれ葺石の写真測量や写真撮影をはじめ、実測や葺石の分析など各種の作業を進め、それらの作業が終了した11月5日から埋め戻しを行い、11月10日に現地での調査を終了した。

（2）第5次調査

平成16（2004）年度の国庫補助事業として行った第5次調査（長岡京跡右京第827次調査）は、これまで情報が全くなかった前方部の西側を中心に行ったものである。

調査では、前方部から周濠を横断するように高低差約3mの5-1区と、前方部の南東隅付近に5-2区を設定し、平成16（2004）年9月1日から重機で表土などを除去することから開始した。その結果、5-1区では前方部西側第2段平坦面に施された埴輪列と、西造り出しが存在することなど予めせぬ貴重な成果を得ることができた。また、5-2区で前方部南西隅を確認できたことで、墳丘を復元する上で定点が確定した。こうした古墳の規模や構造を復元する上で貴重な調査成果は、10月2日に現地説明会を開催して一般に公開した。その後、写真測量による図化と写真撮影、円筒埴輪列の取り上げ作業を行い、10月28日に埋め戻しを終えて、現地での作業を終了した。

（3）第6次調査

第6次調査は、平成17（2005）年度の国庫補助事業として実施したもので、長岡京跡の調査では右京第859次調査にあたる。

調査区の設定にあたっては、平成17（2005）年7月22、23の両日に奈良文化財研究所の協力を得て実施した地中探査の成果を参考に行った。第5次調査で確認された西造り出しを追究するための6-1区と、情報の乏しい後円部に6-2区を設定し、9月20日から重機で表土、耕

付表-1 恵解山古墳調査一覧

調査 回数	長岡京跡 調査回数	調査期間	調査 面積	調査主体	調査の成果
		1924年		京都府	・梅原末治氏による古墳の踏査。 ・墳形と規模、葺石と埴輪を伴うこと、埋葬施設が壙穴式石室であることを紹介。
		1967年		京都府教育委員会	・分布調査の際に測量調査が実施され、おおよその墳形と規模が明らかになる。
第1次		1975年3月10日 ～1975年3月19日		長岡京市教育委員会	・市道敷設工事に伴う調査。
第2次		1976年11月26日 ～1977年1月11日		長岡京市教育委員会	・中学校グラウンド造成工事に伴う調査。 ・後門部および前方部の裾部付近の葺石を確認。
第3次		1980年4月15日 ～1980年7月15日	313㎡	長岡京市教育委員会	・墓地拡張工事に伴う調査。 ・前方部中央で副葬品のみを埋納した施設を検出し、鉄刀、鉄剣、鉄鏃など多量の武器類が出土。 ・西側くびれ部第3段斜面の葺石を検出。 ・後門部の埋葬施設に関係する管玉、結晶片岩などが出土。
第4次	右京 第783次	2003年8月11日 ～2003年11月10日	179㎡	長岡京市教育委員会	・範囲確認調査。 ・前方部前裾部の葺石を検出し、前方部幅が大きくなることが判明。 ・周濠が浅いことが判明し、堆積土中から長岡京期の遺物などが出土。 ・周濠外堤の南辺を確認。
第5次	右京 第827次	2004年9月1日 ～2004年10月28日	218㎡	長岡京市教育委員会	・範囲確認調査。 ・前方部南西隅部の確認と、西側に造り出しの存在することが判明。 ・前方部西側の第2段平坦面と埴輪列を確認。
第6次	右京 第859次	2005年9月20日 ～2005年11月9日	142㎡	長岡京市教育委員会	・範囲確認調査。 ・墳丘西側くびれ部と西造り出し、後門部裾部付近の葺石を検出。 ・西造り出しの規模が判明し、くびれ部との間から導水形とみられる家形埴輪やミニチュア土器などが出土。
第7次	右京 第893次	2006年12月1日 ～2007年3月5日	231㎡	長岡京市教育委員会	・保存整備に伴う調査。 ・前方部東側第3段斜面の葺石と第2段平坦面、西側裾部の葺石、枕などを確認。 ・墳丘盛土の構築状況などを確認。
第8次	右京 第920次	2007年11月1日 ～2008年2月29日	272㎡	長岡京市教育委員会	・保存整備に伴う調査。 ・前方部東側の第2段平坦面と埴輪列を確認。 ・西側くびれ部の第3段傾斜面の葺石と第2段平坦面を確認。 ・前方部から鉄斧、鉄鏃、鋤先などミニチュアの鉄製品が出土し、農具類を埋納した施設の存在が浮かび上がる。 ・埋葬施設に関する竜山石の破片が出土。 ・周濠外堤の南西隅部付近を確認。

第9次	右京 第959次	2008年12月1日 ～2009年3月31日	277㎡	長岡京市教育委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・保存整備に伴う調査。 ・後門部の第1段平坦面と埴輪列を確認。 ・埴丘東側にも造り出しの存在することが判明。 ・後門部の竪穴式石室に使用されたとみられる結晶片岩と石英斑岩がまぎって出土。 ・周濠外堤の東辺と南辺を確認。
第10次	右京 第987次	2009年11月24日 ～2010年3月31日	360㎡	長岡京市教育委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・保存整備に伴う調査。 ・埴丘東側くびれ部の第1段平坦面と埴輪列を確認。 ・埴丘東造り出しの形態とおおよその規模、構造などを確認。 ・後門部西側の裾部を確認。 ・前方部頂部は、後世に大きく削平を受けていることが判明。
第11次	右京 第1001次	2010年6月7日 ～8月17日 11月24日 ～12月9日	242㎡	長岡京市教育委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・保存整備に伴う調査。 ・西造り出しの基部で溝と埴輪列を確認。 ・埴丘東造り出しの南辺を確認し、州浜状の礫敷きから水鳥形埴輪が出土。 ・前方部東側面の埴丘裾部を確認。 ・周濠外堤の南辺部と北東部を確認。
第12次	右京 第1029次	2011年9月26日 ～10月27日	110㎡	長岡京市教育委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・保存整備に伴う調査。 ・前方部西側面の埴丘裾部を確認。 ・周濠外堤の西辺部を確認。

作土、床土などを除去した後、人力で調査を進めた。

両調査区とも、周濠部で葺石の転落状況を検出し、6-1区では前方部から西造り出しにかけての基底石を含む葺石を確認することができた。10月17日に写真測量を行い、10月22日に現地説明会を開催して、調査成果を一般に公開した。その後、葺石の保護処置を講じた上で、11月9日に埋め戻しを終えて、現地作業を終了した。

(4) 第7次調査

第7次調査は、2006(平成18)年度の国庫補助事業として実施したもので、長岡京跡の調査では右京第893次調査である。

調査は平成18(2006)年12月1日に着手し、竹や栗などの伐採が終了した4日から7-1区、7-2区、7-3区を順次前方部に設定して重機による掘削を開始した。さらに翌平成19(2007)年1月15日からは新たに2箇所の調査区(7-4、7-5区)を追加設定して調査を進め、3月5日にすべての作業を終了した。

7-2区では東側斜面と平坦面を、7-4区では西側裾部を確認することができた。7-1区では削平のため、埴輪列を確認することはできなかったが、埴丘盛土の構築状況を確認するなどの成果が得られた。

ちなみに、2月9日に長岡第三中学校の3年生が調査現場を見学に訪れ、2月24日には現地説明会を開催した。

(5) 第8次調査

第8次調査は、平成19(2007)年度の国庫補助事業として実施したもので、長岡京跡の調査では右京第920次調査に相当する。

調査は、当初墳丘西側のくびれ部に8-1区と8-2区、前方部の東側に8-3区と8-4区を設定し、平成19(2007)年11月1日から開始した。8-2区では、くびれ部の第3段斜面に施された遺存状態が良好な葺石を確認し、また8-3区では前方部東側の第2段平坦面と埴輪列を確認するなどの成果が得られた。

平成20(2008)年1月7日からは、追加調査として、西側の周濠部分に8-5区と8-6区、さらに後円部の西側に8-7区を設定して、調査を継続して進めた。調査の成果は、2月19日に現地説明会を開催して、広く一般に公開した。そして、埴輪列や葺石など遺構の養生処理を施してから埋め戻しを行い、現地での作業を終了したのは2月29日であった。

(6) 第9次調査

第9次調査は、平成20(2008)年度の国庫補助事業として実施したもので、長岡京跡の調査では右京第959次調査である。

この調査では、後円部の正確な規模把握のため9-1区と9-3区、後円部の埋葬施設の確認のために9-2区、東側のくびれ部や造り出しの有無を確認するための9-4区、前方部南側周濠外堤検出を目的とした9-5区を設け、平成20(2008)年12月1日より調査を開始した。

調査の結果、9-1区と9-4区で第1段平坦面の埴輪列が確認され、復元のための貴重データが得られた。さらに後円部の北側部分の墓地周辺が、古墳の墳丘を削平したのちにあらためて大規模に盛土し直したことが明らかとなった。また9-4区では、東造り出しの存在が明らかとなり、大きさも左右で非対称となる可能性が高くなった。9-5区では周濠の外堤が推定とは異なる位置で検出され、さらに南に広がることが判明した。これらの成果を受けて、新たに後円部に9-6区、周濠南側に9-7区を設定して補足調査を行っている。また3月14日には現地説明会を行い、雨の中にも関わらず多くの方々に参加を得た。その後、3月23日から順次埋め戻しを行い、3月30日をもって現地での作業を終了した。

(7) 第10次調査

第10次調査は、平成21(2009)年度の国庫補助事業として実施したもので、長岡京跡の調査では右京第987次調査にあたる。

調査区の設定にあたっては、これまでの調査成果をもとに、計7カ所の調査区を設定した。現地調査は、平成21年11月24日から対象地の竹伐採を行ない、その後順次各調査区の重機掘削と人力による検出作業を進めた。そのうち、副葬品埋納施設が複数存在する可能性を探るため前方部の最高所に設定した10-1区では、後世の墳丘改変を確認したのみであったが、東側のくびれ部に設定した10-2区と10-3区では、9-4区で確認された埴輪列の続きと、東造り



第3次調査 写真撮影風景



第4次調査 4-2区作業風景



第5次調査 5-2区作業風景



第7次調査 7-4区葺石検出風景



第8次調査 8-3区埴輪列埋し風景



第9次調査 9-4区埴輪列調査風景



第11次調査 11-1区作業風景



第12次調査 関係者説明会風景

第5図 調査経過写真

出しの形態や規模などが確認することができた。こうした調査成果を公表するため、翌平成22年2月28日に現地説明会を開催した。その後、図面作成と埴輪列などの遺構の保護処置を行ない、3月15日に埋め戻しを終了した。

(8) 第11次調査

第11次調査は、平成22(2010)年度の国庫補助事業として実施したもので、長岡京跡の調査では右京第1001次調査である。

第9・10次調査で確認された東造り出しの南辺部に11-1区、西造り出しの接続部、すなわち5-1区と6-1区の間には11-2区、後円部の北側周濠部分に11-3区、前方部の南東側周濠部分に11-4区を設定し、平成22年6月7日より現地調査に着手した。調査の結果、11-1区で水鳥形埴輪、11-2区では西造り出しの埴輪列などを検出することができたため、7月31日に現地説明会を開催して調査成果を一般に公開した。その後、11-1区～11-4区については保護処置を講じた上で、8月17日までに埋め戻しを行い、現地での作業を終了した。

11-5区は、11-1区で検出された東造り出しの区画石列の性格を明らかにするため、11-1区の南側、前方部推定位置に追加して設定した。現地調査は11月24日から再開し、12月9日までに前方部第1段斜面葺石の保護処置を講じた上で、埋め戻しを行って終了した。

(9) 第12次調査

第12次調査は、平成23(2011)年度の国庫補助事業として実施したもので、長岡京跡の調査では右京第1029次調査である。

第12次調査は、恵解山古墳の本格的な保存整備工事を前にして、前方部西側に接続する土手と西側周濠の縁辺部にある里道、国有水路と古墳との関連を明らかにするために行った。調査区は、土手の墳丘接続部分から前方部裾までの範囲に12-1区、西側周濠部から里道、国有水路にかかる範囲に12-2区を設定した。

現地調査は平成23年9月26日から実施し、12-1区においては土手の構築状況、周濠および前方部裾を明らかにし、12-2区では周濠西側の立ち上がり、里道、国有水路の敷設状況を確認することができた。こうした調査の成果は、10月24日に関係者説明会を開催して公開した。その後、12-1区の葺石および基底石について保護処置を講じた上で、10月27日に埋め戻しなどを行い、現地作業を終了した。

第3章 墳丘の調査

第1節 古墳の現状

恵解山古墳の墳丘は、後円部、前方部とも旧状が大きく損なわれていることは、京都市教育委員会が測量した昭和42年の時点で明らかになっており、その状況は基本的に大きな変化がない現状である。

後円部は、地元勝竜寺区の墓地に利用されているため大きく3段に削平を受けており、東側には参道が取り付け、周縁部は急峻な崖面になっている。後円部の中央は、地元で1号と呼ばれる墓地で、東西約25m、南北約15mの範囲が平坦化されており、標高は24m前後である。その北側が2号墓地で、東西30m、南北15mの範囲が平坦化されており、1号墓地に比べて3.5mほど低くなっている。1、2号墓地内に、江戸時代の年号を刻む墓石があることから、古くに平坦化されたものと考えられる。1号墓地の南側は第3次調査の契機になった3号墓地で、くびれ部を経て前方部にかけて延びている。墓地の周辺部は、竹藪と椿、桜などを主体とする樹木で覆われている。

一方、前方部については、その大半が孟宗竹の竹藪として利用されており、竹藪の土取り作業によって大きく改変を受けていた。中央部付近は、3.5m前後の高まりが墳丘の旧状をとどめていると考えられたが、南側は比較的緩やかな傾斜面となって墳端部に至っている。西側は、大きく削平を受けて平坦化されており、この部分はかつて畑地として、現在は栗林になっていた。また、南東隅付近は、土取によって大きく抉り取られ、そこから東に向かって里道が延びているが、その反対側においても同じ里道が堤となって取り付いていた。東西の周縁部は、後円部から続く急峻な斜面となって落ち込み、周濠へと移行している。

周濠部分については、西側と南側が水田および畑地として利用されているのに対して、北側から東側にかけては水田が造成されて長岡第八小学校と長岡第三中学校のサブグラウンドに活用されていた。

第2節 調査区の設定

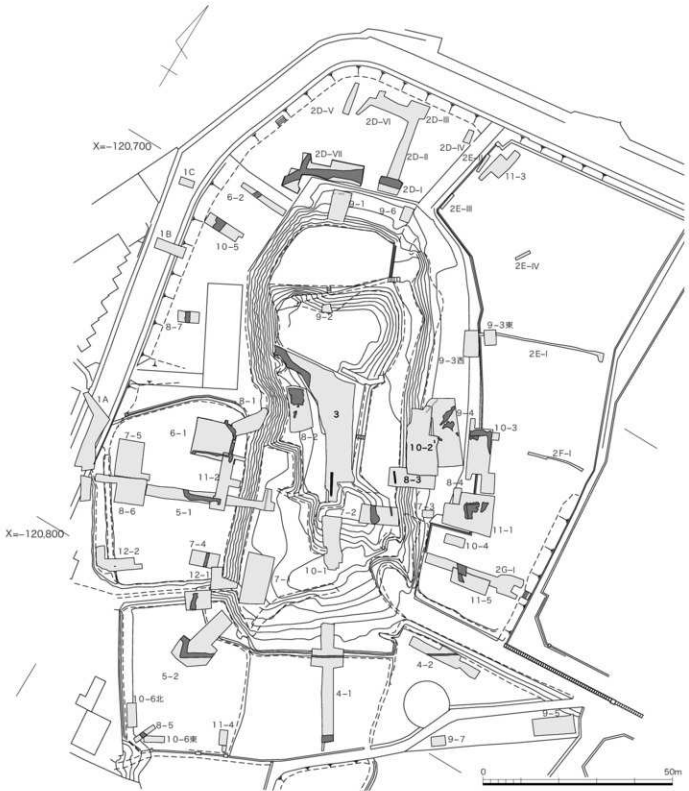
調査区の配置は、第7図に示したように、後円部に8箇所、くびれ部・造り出しに8箇所、前方部に12箇所、周濠に8箇所の合計35箇所を設定した。

調査区を設定するにあたって、平成15年度に実施した第4次調査の時点では、京都市教育委員会が作成した測量図に基づいて設定したが、第5次調査からは平成16年度作成の詳細な墳丘測量図を参照しながら、年度ごとに計画的に配置した。調査区の名称については、古墳の調査回数にトレンチ番号を付したもので、例えば第4次調査の1トレンチの場合は4-1区というように略称した。ただし、9-3区、10-6区、12-6区の場合は、2箇所に分割して設定したため、



第6図 填丘現状図 (1/1000)

Y=-27,400



第7図 調査区配置図 (1/1000)

それぞれが位置する方位を振って9-3西・東区、10-6北・東区、11-1北・南区などと呼称した。

第3節 後門部の調査

後門部に関わる調査については、西側の調査が比較的多いものに対して、東側が少く、調査成果が偏在しているきらいがある。以下、調査所見について墳丘の南西側の8-7区から東に向かって時計回りの順に説明を記述することにする。

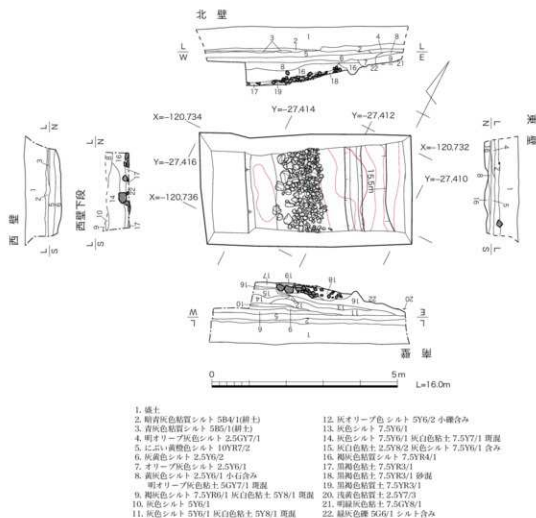
(1) 8-7区(第8図、図版3)

当調査区は、後門部西裾に設定した調査区で、後門部の規模を少しでも正確に復元できる明確な成果が期待された。調査前の現状は、盛土により整地造成された芝張り地で、調査では、近現代堆積層を重機で除去し、以下を人手による本格的な調査対象とした。調査区は、幅約3m、長さ約5.5mの範囲である。

重機で除去した土層は、約50cmの盛土層(第1層)とその下に水平堆積していた厚さ約10cmの水田耕作土(第2・3層)と、中世から近現代にかけての堆積(第4~14層)である。このうち第5層と第6層は、厚さ約20cmの水平堆積であった。また厚さ約10cmの第9層や厚さ約15cmの第11層、厚さ約20cmの第14層には、墳丘盛土に見られる灰白色粘土がブロック状に交っていた。第15層以下は、慎重に掘り下げ、遺構残存面を探ることに主眼を置いた。第15・16層は墳丘の崩落土と考えられる。第16層堆積前には、墳丘側に後門部の円弧に沿った溝が掘られている。第15層は、墳丘盛土起源と思われる白色粘土が基調をなしている。第17~19層は黒色系の粘土層で、淀んだ水中堆積と考えられる。西辺周濠堆積の大部分、特に8-6調査区などの西半部付近では、平安時代以後の砂礫堆積が周濠基盤面を侵食し、厚く覆っていることと大きな違いを見せる。周濠底が西造り出し付近の周濠底よりわずかに高いため、この付近まで、平安時代以後の流路または洪水堆積が及ばなかったと考えられる。第18層は、葎石の転落石が集積し、隙間には軟弱な黒色系粘土が詰まり、非常に細かい砂のラミナ(菜理)状堆積がみられる。この層は、古墳構築当時の元位置を保つ葎石を覆っていた。第21・22層は、葎石を築いた基盤層で、周濠部調査の各所で基盤層として検出されているいわゆる地山層である。言い換えれば、古墳構築に伴う周濠の掘り込み土層である。この層は、古墳墳丘盛土層内に各所で検出されており、周濠構築の際の掘削土が墳丘盛土に用いられていることが分かる。また、前方部先端付近の古墳裾部が盛土により成形され、その上に第1段斜面の葎石が構築されていることは、古墳構築時の地形が南に下る傾斜であったためと考えられる。第20層は、後門部の墳丘盛土層と考えられる。ここでは、多くの調査区で検出されている黒色系の(古墳構築時の)旧表土は観察できなかった。第21層は、色調が緑灰色系に発色した粘土層であるが、土中還元作用による影響で青くなっていると考えられ、本来的には灰白色粘土層と共通する土層と思われる。

遺構残存面は、調査区の東端がもっとも浅く、地表下約80cmの標高約15.8mで古墳墳丘盛

土(第20-21層)が現れた。そこから西へ約3mまで緩やかに傾斜して下る。傾斜角は約 11.3° 、勾配約20%で、傾斜部下半の約1m幅に葺石が残る。葺石に利用された石材は、径約10cm前後の石材が多い。中には20~30cm大の石材も見られる。このような少し大きめの礫は、斜面裾部から周濠内に移した平坦部に多い傾向がみられる。このうち第8図の平面図に表現した5個の石材は、比較的平坦な面を上面にもち、後門部の円弧に平行する方向に長辺を、墳丘側に短辺をもつ出土状況であった。このありかたは、8-2区検出の第3段斜面の基底石の配置方法と共通している。このことから、古墳構築当時の元位置は保っていないものの、墳丘裾部(第1段斜面)基底石が墳丘側から押し出された状況ではないかと思われる。これらの石材の出土地点が、後門部復元想定の外形線付近に散布している位置関係であることと、あながち無関係ではないと思われる。これらの石材が基底石であったとしても、前方部の墳丘裾部で検出されている元位置を保った基底石より小ぶりであり、その上に重ね積まれた葺石も小ぶりである。このような相違は、8-2区での第3段斜面の基底石の前方部側と後門部側の違いとに対比することができる。このことから、当古墳の各傾斜面の基底石は、明瞭な基底石を置く前方部とそうでない後門部と



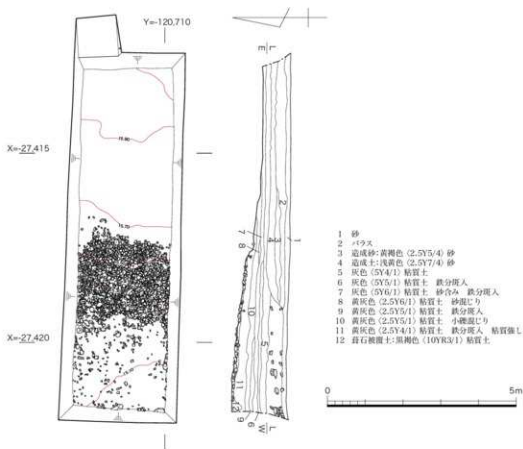
第8図 8-7区平面・断面図 (1/100)

いう特徴をもっていた可能性がある。傾斜面の元位置で残る葺石は、小ぶりの石で小口積みされており、しっかりとかみ合った部分には、傾斜面に直行方向の列石状の並びも見られた。調査区が狭いことにも起因すると思われるが、8-2区で検出した第3段斜面の葺石に見られたような、大ぶりの石材が集中する単位や、小ぶりの礫が集中する単位、また斜面に直行または平行方向の大ぶりの石材による区画列石などは観察できなかった。

(2) 10-5区 (第9図、図版3)

後門部西側の裾部および周濠内の状況などを確認する目的で、長さ10m、幅3mの調査区を設定した。

後門部はかなり削平を受けており、旧状は大きく損なわれているものと考えられた。調査区内は、砂とバラスで整地された盛土(第1~5層)が厚さ1.3m前後あり、調査区の東半部では耕作関連の堆積土(第6~8層)を除去すると地山面に至っていた。地山を削りとりて形成された裾部の傾斜面は、緩やかに周濠に向かって傾斜していた。周濠内には、人頭大から拳大程度の石材が全面に広がっており、これらの転落石を取り除くと墳丘の傾斜面に貼り付いたような状態の葺石を確認することができた。転落石には、基底石に使用されたような人頭大ほどの石材が混じっ



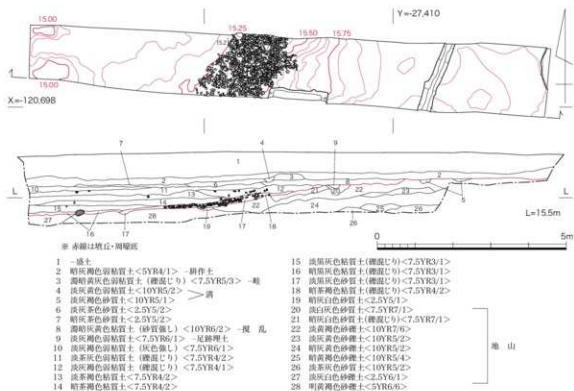
第9図 10-5区平面・断面図 (1/100)

ていたが、葺石は比較的小ぶりの石材を多く用いていた。今回確認した葺石の中には、基底石や石の並びが揃うものは見当たらず、周濠内にずり落ちたとみられるものがあつた。

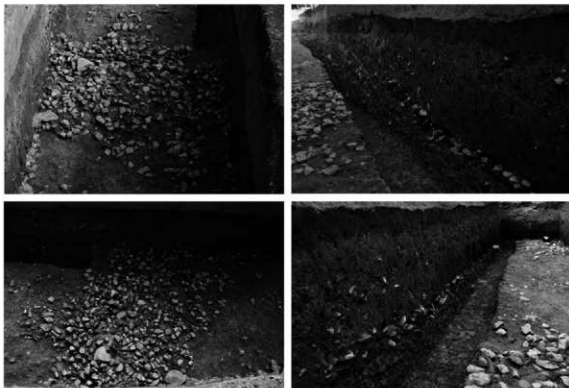
(3) 6-2区 (第10図、図版4)

後円部に関する情報は、後円部北側の第2次調査で葺石の転落状況が確認されているだけで、後円部裾部や第1段斜面の状況が分かっていなかった。このため後円部北西側の裾部をほぼ中心にして、長さ約14m、幅2mの調査区を設定して調査を行った。

調査区は盛土(造成土)で覆われており、現地表面の標高は16.6m前後を測る。盛土の下には旧耕作地に関連する土(第10図第2~7層)と、近世頃の耕作土である灰色系の第8~11層がある。第8~11層は、西造り出しで行った6-1区の第4層に対応するもので、造り出しが削平された段階に後円部の裾が2m程度削られていた可能性を示すものである。周濠埋土は第12~19層であり、6-1区より厚く0.45~0.55mを測る。灰褐~茶褐色の第12~14層(上層)と、茶褐色~黒灰色の第15~19層(下層)に大別でき、上層に中世の遺物、下層には長岡京期~平安時代の遺物が含まれていた。出土遺物には木質遺物が多く、この場所が常に湿潤な状態であったことを示している。上層を完全に除去した段階で、転落石を確認した。転落石は想定される後円部の円弧に沿って幅2m程度の帯状に密集しており、10cm程度が大半を占めるが、なかには基底石や区画列石に使用されたと推定できる大型の石材も認められる。周濠底面の標高は14.96~15.28mを測り、僅かに西側へ傾斜していた。また、調査区の西端では、底面に2



第10図 6-2区平面・断面図 (1/100)



左上：後円部裾部の検出状況（西から）
左下：後円部裾部の検出状況（北から）

右上：後円部裾部の土層堆積状況（西から）
右下：後円部裾部の土層堆積状況（東から）

第11図 6-2区後円部第1段斜面と層位

箇所の窪みか認められる。

後円部では、周濠底面から緩やかに立ち上がる地山の斜面と、その斜面を埋める大量の石材を確認したが、原位置を保持する基底石、葺石は検出できなかった。また、これまで前方部第1段斜面の基底石や葺石を安定して施すための薄い粘質土も認められない。地山斜面は周濠底面との境界が明瞭でないが、標高 15.25 ～ 15.3 m 付近から立ち上がり、約 10° の傾斜角で東側の削平された地山面に至る。

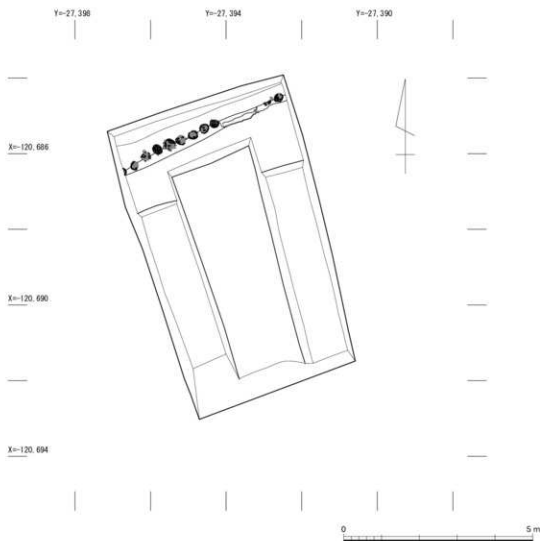
この他、近世以降の耕作に関連する畦1条と溝3条、および土坑1基を確認した。調査区東側で確認した溝は、やや円弧を持って南北方向に掘削されている。後円部が削平された後の耕地化に伴って掘削されたものであり、西側では 11-2 区や 12-1 区でも確認されている。

(4) 9-1 区 (第 12～14 図、図版 5・6)

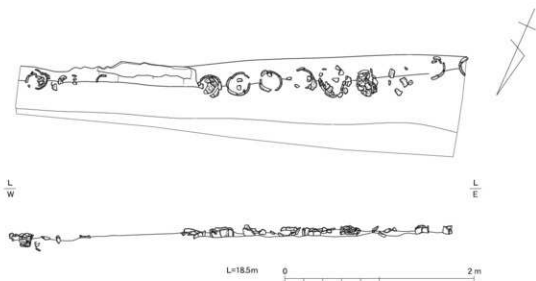
本調査区は、後円部北部の推定中軸線上に設定したものである。昭和 51 年度にすぐ北側で行われた第 2 次調査では、後円部裾部に堆積した転落石が確認されており、第 1 段平坦面と埴輪列、および第 2 段斜面と葺石の検出を目的とした。現状は竹藪であるが、以前は畑地としての利用がなされていて、東西方向の長方形の平坦地となっている。この平坦地の西側寄りに南北 8 m、東西 5 m の調査区を設けて掘り下げを行った。

旧耕作土を除去すると、地表下約0.2 mで黄褐色～黒褐色の粘質土や砂質土からなる盛土層(第7～33層)が確認された。当初はこれらを墳丘の盛土と認識したが、1～1.5 m下から上部を削平された状態で第1段平坦面に樹立された埴輪列が検出されたことにより、これらがすべて後世に二次的に動かされた墳丘の盛土であることが判明した。

埴輪列は、幅約0.4 m、深さ約0.1 mの布掘りされた溝の内部に設置されており、長さ約4.7 m分が検出された。調査区内ではほぼ直線的で、北東部が崩落しており、失われたものも含めて14個体分が確認された。埴輪は削平のため底部がわずかに遺存しているのみで、最も残りの良いものでも高さ0.1 m程しかない。したがって、最下段の突帯が残るものは皆無であった。埴輪はすべて現地保存しているため、出土状況からの計測となるが、底部の直径20～25 cmで、約10～15 cmの間隔で並べられている。埴輪は表面の残りが悪く、調整などは観察できなかった。埴輪列の下には、北半分で古墳の盛土(a～g層)が、南半分で大阪層群の白色粘土の地山が確認されている。盛土は地山を削り込んだ後に、墳丘裾部にシルト・砂質土・粘土を北から南に向



第12図 9-1区平面図(1/100)



第13図 9-1区墳輪列実測図(1/40)

かって斜め方向に積み上げており、埴輪列はその上部に設置されている。ただし先述のごとく上面は後世に削平を受けているため、本来の埴丘第1段平坦面は残されていない。この面での標高は16.6～16.7mである。

この削平面の直上には、灰黄色粘質土（第33層）が薄く堆積し、さらにその上に小片化した埴輪片を含んだ黄褐色粘質土（第32層）が約4mの範囲で広がっている。このことから、これより上の堆積土はすべて埴丘削平後のものであることが判明した。この上には、さらに黄褐色～黒褐色の粘質土～砂質土からなる固く締まった盛土層（第19～31層）が幅約6m、高さ約1mの堤状に盛られている。これらの層は、地山や埴丘盛土と共通するものもあり、周辺から運ばれたものとみられる。この堤状堆積の南側にはさらに堆積層（第7～18層）があり、この状況から見て、当調査区の南側に存在する一段高くなった墓地の平坦面は、少なくとも北側の数mまでは後世の盛土によって構成されていることが明らかとなった。これまでこの墓地の平坦面は、単に後門部を削平しただけと思われていたが、先述の如くかなり広範囲に削平を行い、改めて土盛を行っていることから、この見解を改める必要が生じてきている。ただこれらの削平と堆積の時期に関しては、現在のところ遺物の出土がないため用途を含めて今後の検討課題である。

(5) 9-2区（第15図、図版7）

本調査区は、埋葬施設に関する手掛かりを得るために、後門部のほぼ中央付近に設けたものである。現在後門部は勝龍寺地区の墓地として利用されており、南北に2段の平坦面が存在する。この平坦面の間にある墓地内の道に面した南側の崖面に東西2.5m、南北2.3mの調査区を設定した。調査区のすぐ南側の平坦面で行われた地中探査レーダーの結果（第6次調査）から、古墳

の主軸に直交する東西約10m、南北約5mの長方形落ち込みの存在が確認されており、これに関する遺構の検出を目的として設定した。ただし、現在も墓地として使用されている場所でもあり、また多くの樹木が生えていることからおのずと調査区は限定されることとなった。

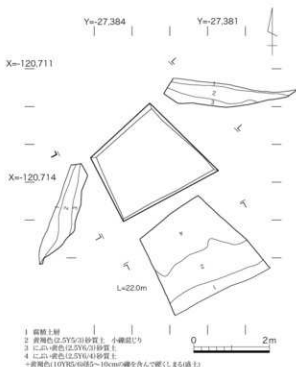
層序は表面に腐植土層(第1層)が0.3~0.5m堆積しており、その下には南側の墓地からの流入土とみられる黄褐色砂質土(第2層)・にぶい黄褐色砂質土(第3層)が約0.5~0.6mの厚さで堆積している。これらは非常に柔らかく、締まりがない。にぶい黄褐色砂質土内からは、墓地に

供えられていたと見られる土師器皿が1点出土している。これらを除去すると礫を含んだ比較的固く締まったにぶい黄褐色砂質土(第4層)となる。上面が墓地であることから、これ以上の掘削はできなかったが、おそらく墳丘の盛土層と推定される。この層の表面観察では竪穴式石室や粘土椀に関連するような土層・土質の変化などは認められなかった。

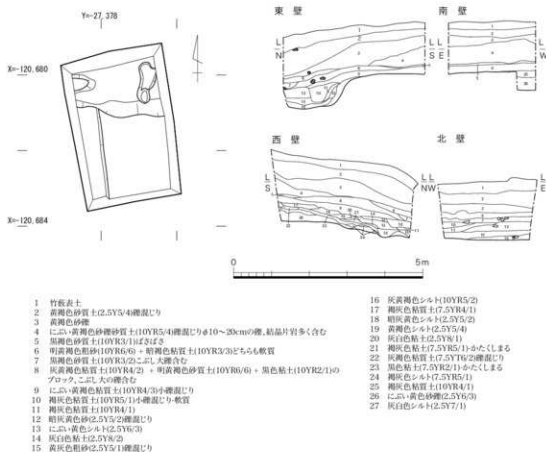
(6) 9-6区(第16図、図版7)

本調査区は、9-1区で後円部第1段平坦面の埴輪列が検出され、さらに埴輪削平後の後世の大規模な盛土が確認されたことから、両者の検出を目的として後円部北側、の東西方向の長方形の平坦地東側に設けたものである。調査区は南北4m、東西2.5mに設定し、重機で竹藪の表土を除去したのち、人力で掘り下げている。表土の下には南側からの堆積土(第2~9層)が1.2mの厚さで存在し、その下で比較的固く締まった粘質土層に至る。さらに調査区の南半分は0.5~0.6mの深さで一段落ち込んでいて、落ち込み内の堆積土(第10~16層)にはガラス片や椀瓦などを含んでおり、近・現代に大きく削平を受けていることが判明した。調査区の西辺部で断ち割りを入れて以下の堆積を確認したところ、0.1m前後の薄い粘質土~シルトの堆積層(第17~25層)が厚さ0.4mで認められ、この下にはにぶい黄褐色砂礫(第26層)と灰白色シルト(第27層)の地山となる。堆積はいずれも斜め方向で、埴輪盛土とみられる。ただし埴輪列は削平によりまったく残されていない。また9-1区で確認された、後世の大規模な造成も確認されていない。

本調査区では先述の如く椀瓦やガラス・陶磁器片などが多く出土しており、第4層からは古墳



第15図 9-2区平面・断面図(1/100)



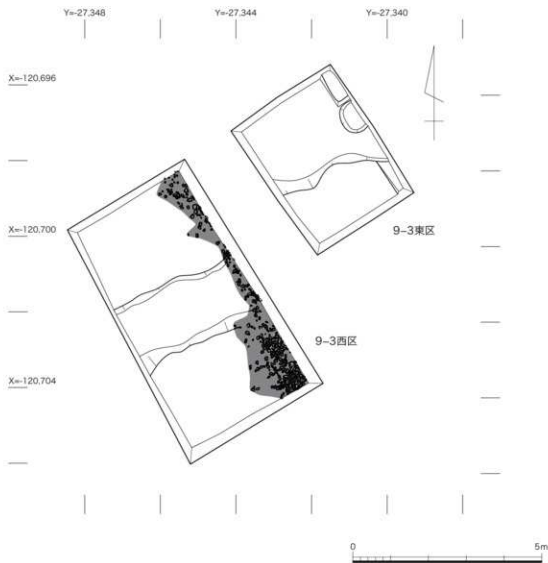
第16図 9-6区平面・断面図(1/100)

の埋葬施設に関ると見られる結晶片岩や石英斑岩も多数検出された。おそらく墓地参道沿いにあたることから、周辺整備に伴って瓦礫の処分が行われた痕跡とみられる。

(7) 9-3区(第17・18図、図版8)

本調査区は、後門部東側の墳丘裾部の検出を目的として設定したものである。推定される掘部分にはちょうど中学校のグラウンドを囲っているネットフェンスが存在しており、これを避ける形で調査区を東西2つに分けている。古墳側には南北7m、東西4mの9-3西区、中学校のグラウンド側に南北4m、東西3mの9-3東区と呼称した。

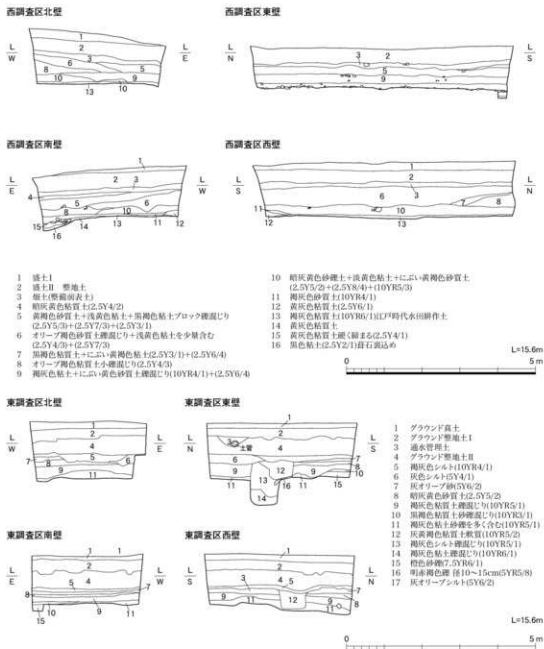
西区では、地表から0.5mが整地のための盛土(第1・2層)であり、その下に以前の畑土(第3層)が存在する。さらにその下には、西側から埋め立てられた盛土層が0.5~0.7mの厚さで堆積しており(第4~12層)、それらを除去すると地山の直上に0.1mの褐色粘質土の水田耕作土(第13層)が現れる。この面での出土遺物は非常に少ないが、染付磁器の出土から江戸時代と考えられる。水田上面での標高は14.8mである。この下から地山面と葦石・埴輪片が検出された。葦石・埴輪片は調査区の東辺部、後門部の墳丘裾部推定付近に集中しており、葦石はいずれも直径10cm前後のもので、まばらに点在しており、元位置を保つものではない。埴輪も同様に転落したものであるが、円筒埴輪や朝顔形埴輪が比較的多く出土している。また、



第17図 9-3区平面図 (1/100)

これらに混じって、長岡京期の須恵器杯Bが出土しており、この時期の何らかの手が加えられた可能性も考えられる。これらを除去すると、調査区の南東隅はわずかに東側に傾斜しており、黄灰色の固く締まった粘質土（第15層）と黒色粘土層（第16層）が薄く堆積しているのが確認された。これらは墳丘盛土の一部とみられる。残念ながら後世の削平のため、調査区内では墳丘裾を示すような基底石が並ぶような状況は確認できなかったが、東辺での状況からこれまでの推定通り、未調査のフェンス下が本来の墳丘裾とみられる。

東区では、厚さ0.8～0.9mの中学校グラウンド整地土（第1～4層）があり、その下には水田耕作に伴う堆積（第5～8層）があり、さらに周濠内の堆積土である礫混じりの粘土層（第9～11層）が存在している。水田上面での標高は15.3m、周濠堆積上面では15.0mである。これらを除去すると、橙色砂礫や灰オリーブ色シルトからなる地山面の周濠底部に至る。周濠底部は、



第18図 9-3区断面図 (1/100)

北部がわずかに深くなっており、標高は北側で14.7m、南側で14.9mである。周濠内では遺物はほとんど出土しておらず、また転落石なども確認できていない。したがって本調査区でも墳丘裾のデータは得ることができなかった。このほかには調査区東辺で水田に伴う直径約0.7mの円形素掘り井戸(第13・14層)が検出された。また東西の壁では第2次調査の2-E1区の痕も確認されている(第12層)。

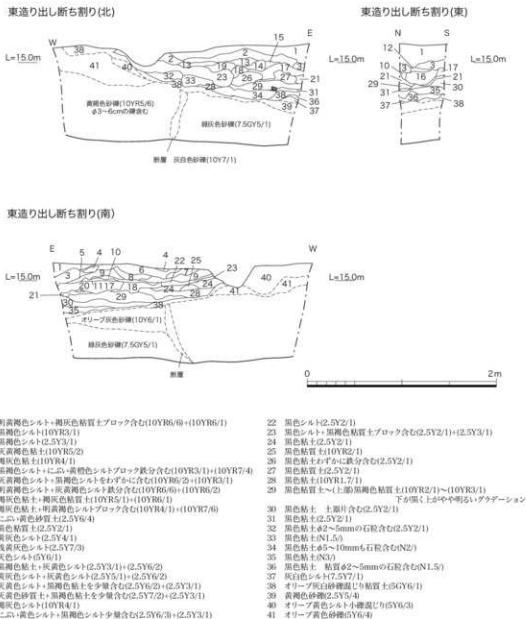
(8) 9-4区 (第19～22図、図版9～11)

本調査区は、東くびれ部の検出と東作り出しの有無を確認する目的で設定した。調査区は7×18mの矩形トレンチをくびれ部推定地に、前方形部に長軸が並行するように設定し、埴輪列の検出に伴って、西側に拡張を行った。

調査区内の層序は、西側を中心に公園整備に伴う厚さ約0.3～0.7mの盛土(第1層)があり、その下に薄く旧表土(第2層)が斜めに堆積している。さらにその下には主に埴丘側からの堆積層(第3～23層)が厚さ約0.4～0.8mで存在しており、これらを除去すると江戸時代の水田耕作土と見られる暗灰黄色砂質土(第24層)が、0.1mの厚さでほぼ水平に堆積している状況が確認された。この層は調査区の東側全体に認められることから、この時期に埴丘東側が削平されて、周濠部分の水田が拡張されたものとみられる。調査区の北西部には削平を免れた後円部埴丘が約1mの高さで残されており、削平された崖面に沿う形で、幅約1m、深さ0.3mの溝と、暗灰黄色砂質土(第24層)を断面半円形に盛って作られた幅1～1.2m、高さ0.3～0.4mの畔が作られている。溝は埴丘側からの流入土(第25～27層)で徐々に埋没しているが、最下層に砂層(第28層)の堆積が認められ、水路として利用されていたものとみられる。この溝の南側には直径3.5m以上の井戸があり、おそらく水路と一連の施設とみられる。これより東側の水田耕作土(第24層)を除去すると調査区の北側と南半部では地山面が現れ、中央部付近では灰色の粘土層と転落した状況で葦石が確認された。

南側の地山面には南北方向の幅0.5m、深さ0.2mのわずかに蛇行する溝が存在し、その北側には井戸と水溜めが設置されている。これらの遺構はいずれも水田耕作土(第24層)と床土(第31層)を除去した段階で検出されることから、周濠部分の水田が拡張される以前の施設と見られる。遺物は近世磁器などを含んでいる。井戸は南北約5m、東西約3mの非常に大きな掘形を持ち、その中央やや北寄りに直径0.8mの底を抜いた桶を倒立させた井戸枠を据えている。掘形上面および井戸内の埋土は砂やシルト層(第35～38層)で、多くの葦石を含んでいる。この井戸のすぐ北側に接して、水溜めが作られている。埋土は井戸と同じく砂礫やシルト(第32～34層)で、直径約1.6m、深さ0.8mの掘形内に直径1.3mの曲物を据えているが、曲物はかなり腐食していて、底部がわずかに残るのみであった。このほかに井戸の西側には東西方向の溝状の落込みと、円形の落込みが存在している。

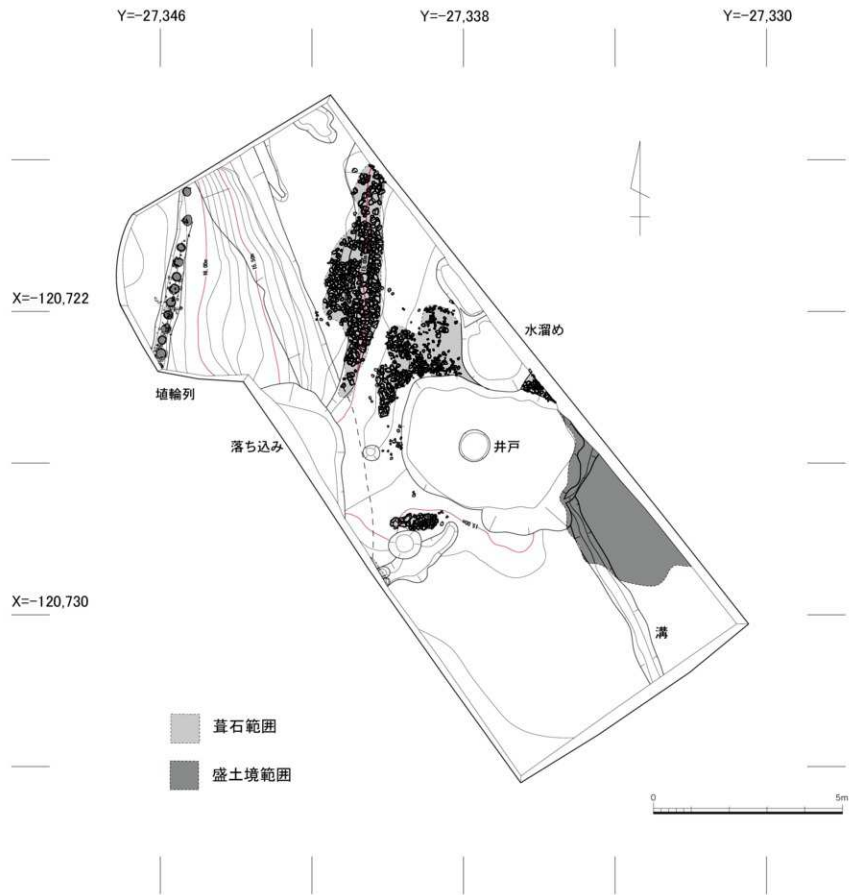
中央部付近の古墳周濠は、削平を受けていることもあり、深さ0.3～0.4mと非常に浅く、埋土は上層に鉄分を含んだ灰黄褐色粘質土(A層)があり、以下褐灰色粘土(B層)、黄灰色粘土(C層)、黒褐色粘土(D層)、黄灰色砂質土(E層)の礫を多く含んだ薄い堆積層が続く。これらを除去すると後円部東側の葦石群が検出されるが、削平と攪乱により転落したものと原位置を保つものとの区別は困難であった。検出された斜面中央付近で比較的大型の石材が、推定される後円部の裾部付近に並ぶことから、これらが基底石になると考えられる。埴丘側ではこれらの石の裏側に黒褐色の粘土層(F層)が確認され、葦石を固定するための盛土層と見られる。この他には、周濠の底部付近では葦石とは異なる直径5cm前後の細かい石が部分的に密集して張り付いてい



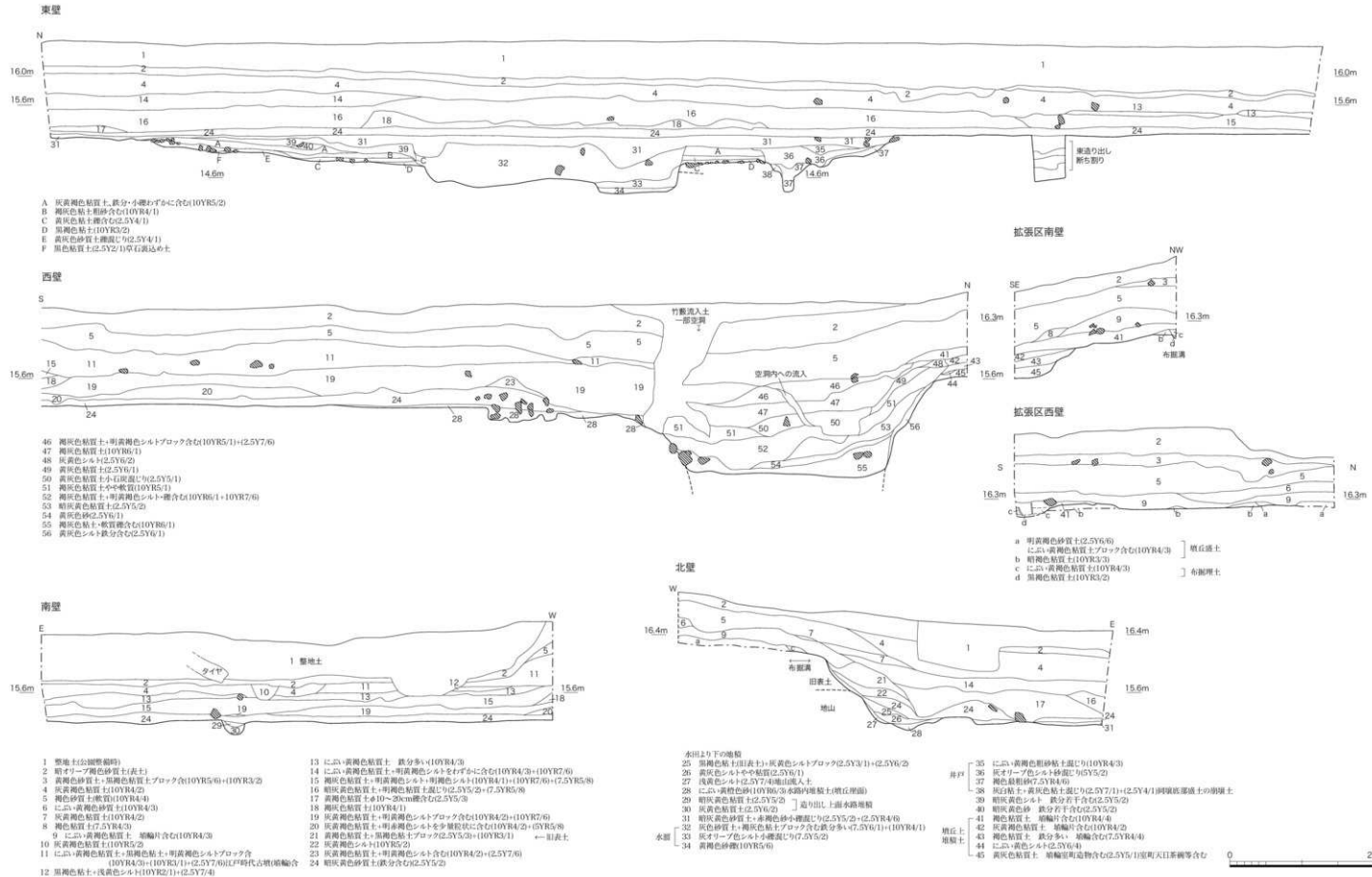
第19図 9-4区東造り出し断ち割り断面図(1/40)

るのが確認された。これらの石の間には周濠底部に接して長岡京期の遺物が出土しており、この時期に周濠に何らかの手が加えられた可能性も考えられる。また周濠内の遺物は全体に少量であり、円筒埴輪の他に朝顔形埴輪や蓋形埴輪、盾形埴輪、靴形埴輪などの形象埴輪も出土しているが、いずれも小片である。

くびれ部および東造り出しに関しては、推定位置付近に近世井戸の大きな掘形が存在していることから不明な点はあるが、本来周濠が存在する部分で地山面が検出されており、東側に造り出しが存在したことは確定となった。西側で検出された造り出しを対称位置に当てはめると、造り出しの裾が存在するべき位置で地山面が確認されることから、西側よりも一回り大きな造り出し、すなわち左右で非対称となる可能性が考えられた。また造り出し推定部の東側には南北5m、東西2m以上の範囲で地山とは別に盛土が行われていることも判明した。調査区東辺部で断ち割り



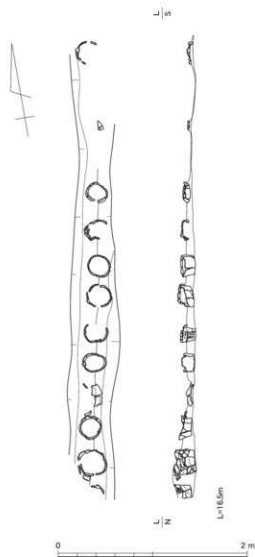
第 20 図 9-4 区平面図 (1/100)



第21図 9-4区断面図(1/50)

を入れたところ、西から東へ傾斜する細かい盛土の単位が確認された（第21図）。約0.1～0.2 mの厚さのシルト層（第1・2層）の下には厚さ約0.1～0.2 mの灰色～黒色の粘土、シルトの互層が続き、調査区の東端で最大0.7 mの厚さが確認されている。堆積単位の東側は全体に丸みを帯びており、モッコの単位、あるいは土糞の単位を思わせるものであるが、断ち割り部ではそれ以上の観察は不可能であった。これら盛土の下は砂礫層の地山となるが、断ち割りの中央部付近で幅約0.1 mの縦方向に走る灰白色の断層が認められた。この断層は井戸の掘形断面でも確認されていたもので、部分的ではあるが北西から南東方向に走っていることが確認できた。

調査区の北西で検出された墳丘部はかなり削平を受けており、厚さ約1.0～1.1 mの表土、堆積土の下に部分的に墳丘盛土（a～b層）が残るが大半は旧表土である黒色土層となる。この黒色土層は崖面の観察では約0.4 mの厚さで、その下は灰白色の大板層群の地山となっている。この面に後円部第1段平坦面の埴輪列がcaろうじて残されていた。北側は特に残りが悪いが、完全に削平されたものも含めて14個体の円筒埴輪が確認できた。これらは幅約0.4 m、深さ0.1 mの布掘り溝に設置されており、溝内の埋土はふい黄褐色粘質土と黒褐色粘質土（c・d層）で、約5 mの長さで検出されている。埴輪はすべて上部を削平されており、検出状況からの観察では、大半は底部の直径20～24 cmであるが、南から2番目の埴輪のみ直径27 cmと一回り大きく、普通円筒とは異なる埴輪である可能性も考えられる。埴輪は約12～15 cmの間隔で並べられており、南側の埴輪ほど残りが良好で、先述した一回り大きな埴輪では高さ20 cmほどあり、一段目の突帯が部分的に残されている。これらの埴輪も現地で保存しているため、検出状態での観察となるが、全体に表面の残りは悪く、部分的に縦方向のハケメが確認できるものがあつた。



第22図 9-4区埴輪列実測図 (1/40)

第4節 くびれ部と造り出しの調査

くびれ部および造り出しの調査所見について説明するが、墳丘の東西で確認した造り出しは、取り付く場所はもとより、形態と規模、それに構造などが東西で異なっていた。以下、西から東の順に説明する。

(1) 3区 (第23～25図、図版12～14)

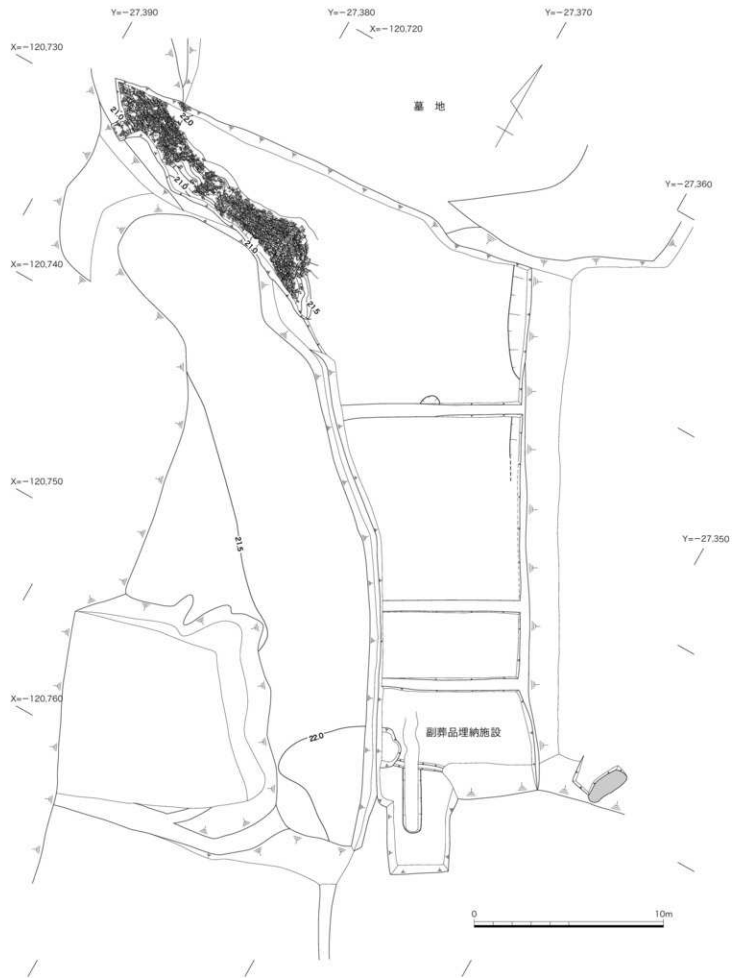
この調査区は、本来は竹藪に利用された所であったが、3号墓地の拡張工事に伴い、後円部の南部から前方部の北部にかけて大きく削平を受けた箇所、その範囲は南北約40m、東西7～10mにも及んでいた。後円部側、前方部側とも削平を受けた際に崖面が形成され、その間が大きく平坦化されていた。調査区の北西部では墳丘西側くびれ部の第3段斜面を検出するとともに、南端部では後述する大量の鉄製品を取めた副葬品埋納施設を確認するなど、注目される大きな成果が得られた。

後円部は、1.8mほど削平を受けており、北側の崖面および削平を受けた平面での土層観察によって、墳丘は盛土を施して構築していることが判明した。盛土には、暗褐色系、赤褐色系、黄褐色系などの粘質土(第24図第7～18層)を使用しており、それらを厚さが20～50cm程度の単位にして、水平ではなく、土饅頭のように交互に積み上げて構築していることが明らかになった。遺存する盛土上面の標高は23.3m前後を測り、墓地の造成によるものであろうか、おおむね平坦化されていた。

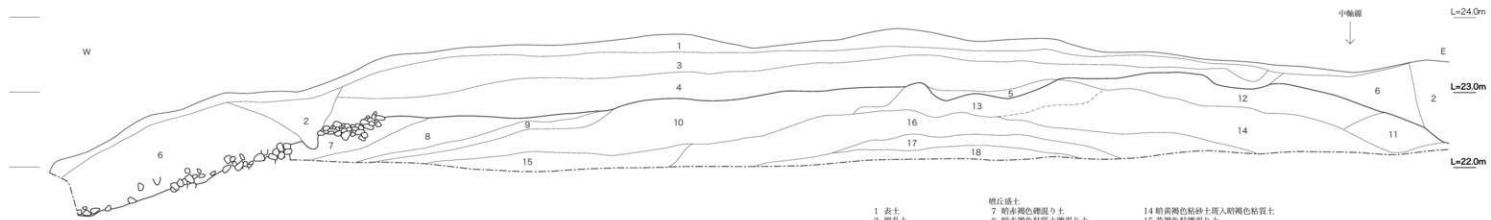
第3段斜面は、後円部側で長さ約12m、幅約3m、前方部側で長さ約4.8m、幅約2mの範囲にわたって検出した。後円部側、前方部側ともに原位置をとどめた状態の葺石をほぼ全面で確認することができたが、さらに後円部側では削平を受けた北側崖面の土層観察によって、最も高いところで標高22.7mまで葺かれていることが確認できた。葺石の上面には、竹藪の客土が厚く堆積していたが、客土中には多量の転落石とともに、円筒、朝顔形、蓋形、家形などの埴輪片を数多く含んでいた。埴輪片はいずれも細片ばかりで、それらは後円部の墳頂部に樹立されていたものと推察された。

さらに、転落石に混じった状態で結晶片岩や石英斑岩、それに管玉が1点出土した。結晶片岩と石英斑岩は、ともにこの地域には産出しない石材で、梅原末治氏がかつて推察した後円部の竪穴式石室の構築材として使用されたものであることが推察された。また、管玉は埋葬施設の副葬品の一部で、竪穴式石室が破壊された際に、石室の構築材などとともに転落したものではないかと想像された。

斜面に施された葺石は、後円部側で流出している部分もあるが、全体的にみれば遺存状況は良好といえるものであった。葺石の施工にあたっては、10～15cmほどの石材を盛土で構築された斜面に差し込むように下方から上方に向かって葺き上げたものであった。とりわけ、前方部と後円部の接続部には長軸が20～40cm大の大振りな石材を横方向に使用して下から上に向かっ



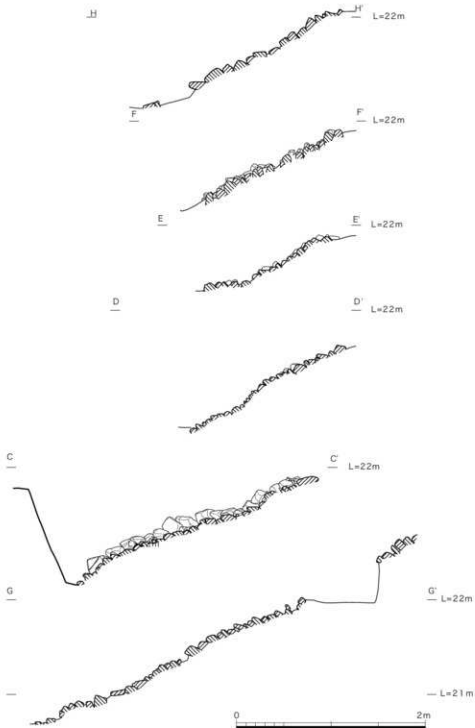
第23图 3区平面图 (1/200)



- | | | |
|------------|--------------------|--------------------|
| 1 表土 | 7 暗赤褐色礫混り土 | 14 暗黄褐色粘砂土混入暗褐色粘質土 |
| 2 礫混土 | 8 暗赤褐色粘質土混混り土 | 15 黄褐色粘混り土 |
| 3 明褐色礫混り土 | 9 黄褐色粘質土混混り土 | 16 明黄褐色砂礫土粘土混り |
| 4 暗赤褐色礫混り土 | 10 黄褐色礫混り土 | 17 赤褐色砂礫土 |
| 5 赤褐色粘土 | 11 暗赤褐色粘質土 | 18 黄褐色粘土 |
| 6 赤褐色砂礫混土 | 12 赤褐色粘質礫混り土 | |
| | 13 暗黄褐色粘質土混入暗褐色粘質土 | |



第 24 図 3区西くびれ部露石実測図 (1/50)



第25図 3区葺石断面図 (1/40)

で一筋になるように据え置いていた。さらに、その途中から前方部側には、接続部の石材よりも一回り小さい20 cm程度の石材を使用した石列が斜め方向に三角形になるように配置されていた。これも多くが長軸を横方向にし、下から上に向かって据え置かれていたものである。

一方、後円部では、くびれ部の接続部や前方部の場合ほど明瞭ではないが、20 cm程度のやや大き目の石材と10 cm前後の小振りの石材2個程度からなる石列が墳丘に直交する方向に並んだ状態で確認できた。こうした石列は、3箇所で見られたが、それらの間隔は一定ではなく、2.65

～3mほどであった。こうした石列は、葺石を葺く際の作業単位をあらわす区画のための石列と考えられ、墳丘の他の場所においても確認されているものである。葺石面での傾斜角度は、後円部、前方部とも30°前後であったが、後円部と前方部の接続部付近では16°前後と比較的緩くなっていた。

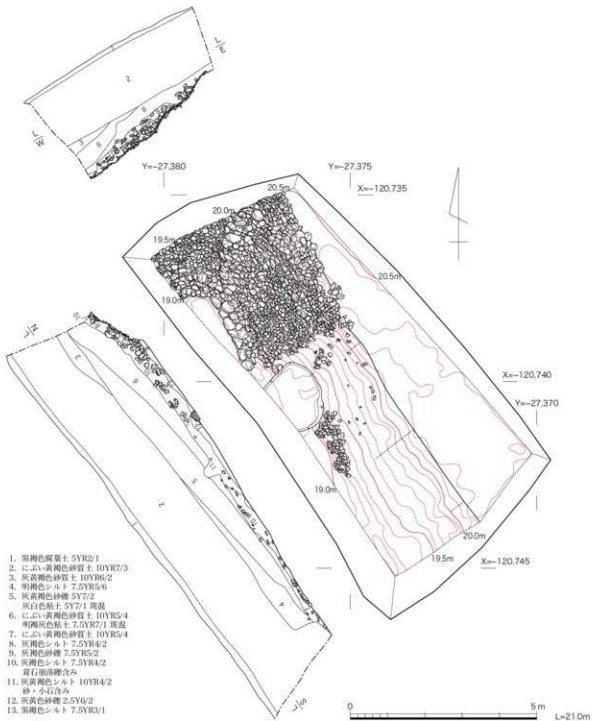
(2) 8-2区 (第26・27図、図版16～18)

当区は、8-1区と3区北西部の間で、古墳西半部の第2段平坦面から第3段斜面のくびれ部推定位置に設定した。第3次調査の当調査区に接する部分では、くびれ部の第3段斜面に葺石が良好な残存状態で検出されている。このくびれ部葺石の下半部から第2段平坦面にかけての様相を掌握する目的で設けた調査区である。調査前は、現在の古墳頂部にある墓地から続く平坦面になっており、緩やかに南西に下る地形であった。また、調査区の大部分は墓地造成時の更地であったが、西辺は8-1区から続く竹林の東辺にかかっていた。調査にあたり、調査区の西辺竹林の竹伐採後、竹の地下茎が縦横に巡る地表面とタケノコ生産の客土を重機により除去し、以下を人手による精査対象とした。調査区の規模は、幅約4.2～5m、長さ約9.5～10.5mである。

当区の土層は、地表面に厚さ約20cmの笹の葉を主とする腐葉土(第1層)が覆い、その下に厚さ約1.5mのタケノコ生産のための客土がみられた(第2層)。この客土は、厚さ5～10cm前後の薄い堆積層の重なりで、その断面観察から30年前後のタケノコ生産の土入れ経過年数を知ることができる。第3～6層は、傾斜面を平坦地に整地するため、墳丘盛土を崩して埋められた土層と考えられる。第5層には、各所で検出されている墳丘盛土と類似する灰白色粘土が多く混じり、特徴的である。第7～12層には、転落石と考えられる大小の石材が多く含まれ、第2段斜面の崩落堆積層と考えられる。遺物の出土傾向は、第2層以下に埴輪片を含むが、出土量が増えるのは第4層以下で、第10層以下からの出土量が最も多く、破片の大きさも大きくなる。出土埴輪には、円筒埴輪のほか、蓋形・盾形・甲冑形等の形象埴輪も含まれていた。また第6層以上には、近・現代の陶磁器や棧瓦の細片も少量包含していた。しかし第10層以下には、近・現代の遺物は包含せず、火銃銃の鉛弾が含まれている。この鉛弾が、山崎合戦に関係するものであるとすれば、第10層以下の堆積は、1582(天正10)年以後と考えられる。このような遺物の出土傾向から、古墳構築時の第3段斜面およびその斜面に施された葺石面を被覆する土層であることを重視すると、少なくともこの調査区の葺石が、山崎合戦の時期前後の段階には、露頭していた可能性が考えられる。当調査区の遺構検出面は、黄褐色から褐色の粘質土で、竹藪客土に近く、土層を見分けるのが困難であった。

検出遺構には、第3段斜面と葺石、第2段平坦面の一部がある。つまり、後円部から前方部にかけての西側くびれ部における第3段斜面裾部が良好な残存状態で検出できた。

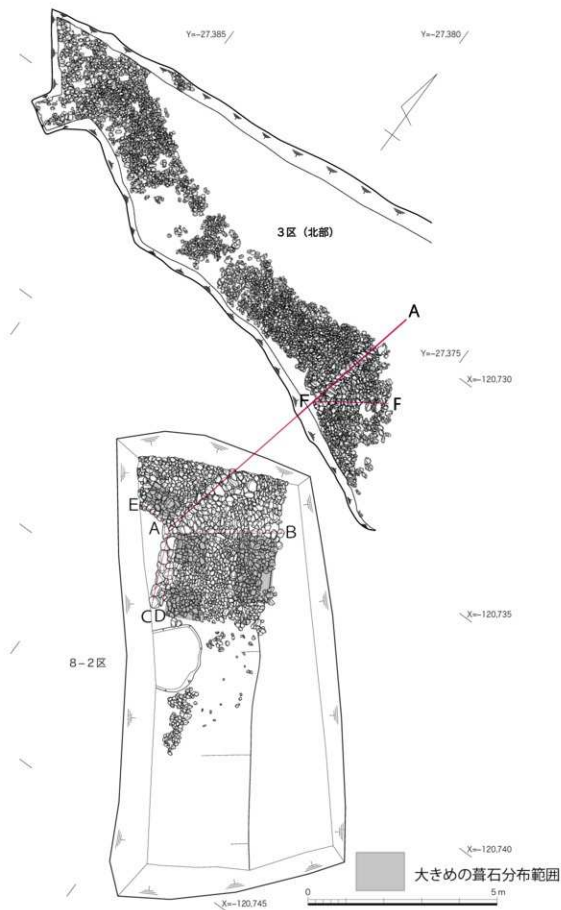
くびれ部の第3段斜面の基底石が置かれた第2段平坦面の標高は、約18.7mを測る。この近くで検出されている第2段平坦面は、約25m南の5-1区がある。そこでは、第2段平坦面の埴輪列が検出されており、その面の標高は約18.5mである。これに対比した場合、くびれ部か



第26図 8-2区平面・断面図 (1/100)

ら前方部先端に向かって傾斜角約 0.5° 勾配率約 0.8% と、わずかに降る傾斜が計測される。

第3段斜面は、当調査区中央部から北の範囲で葎石が良好に残存し、以南の葎石はごく一部に残るものの、ほとんど崩落していた。傾斜面は標高約 $18.7\sim 19.0\text{ m}$ から標高 $20.1\sim 20.5\text{ m}$ の高さまで残存し、傾斜角約 26.8° 、勾配率約 50% から傾斜角約 28.8° 、勾配率約 55% の計測値が得られた。



第 27 図 3 区・8-2 区葺石平面図 (1/100)

葺石は、後円部から前方部にかけてのくびれ部で接統部に一回り大きい石材が用いられ、この石列は3区のくびれ部接統部の石列に延びている（第27図A-A線）。基底石は、前方部側と後円部側とは違いがみられる。前方部側の基底石は、小口幅40～50cm、厚さ25～30cm、奥行き20～30cm程度の石材を並べて据え置き（第27図A-C）、その上にもほぼ同じ程度の石材を同様に並べ置き（第27図A-D）、それより上には10～20cm角程度の石材を小口積みにしていく手法であり、基底石を2重にして強固に築かれている。これに対し、後円部側の基底石（第27図A-E）は、長軸15～20cm、厚さ10～15cm、奥行き約20cm程度の石材で、これより上に積まれた葺石の中ではやや大きい目であるが、あまり大差ない。言い換えれば、後円部の第3段斜面の基底石に用いられている石材は、前方部に用いられている基底石に比べて非常に小さく、基底石とそれより上に積まれた葺石との区別が困難であるという特徴が見いだせる。この特徴は、第1段斜面の基底石のあり方に共通している。たとえば、後円部の裾部は、6-1区、6-2区、10-5区、8-7区の成果をみる限り、原位置にとどまる基底石は見られない。基底石が周濠側に押し出された可能性のある石材を推定裾部付近から抽出しても、前方部墳丘裾で検出されている基底石よりかなり小さいものが多い。

葺石の葺き方は、前方部側も後円部側も差は認められない。石材の利用の仕方は、基本的に小口の横方向が利用石材の最長辺、縦方向が利用石材の最短辺で、墳丘側の斜面に向かって約10°以下の下り傾斜となるように組み込まれている。検出面積の広い前方部側の葺石を詳細に見ると、くびれ部石列A-A線から傾斜面をほぼ垂直に上る石列の目地がみられる（第27図A-B、F-F）。この列石配置には、やや大きめの石材を用いている。また、多少波打つ様相を示すが、斜面に対し横並びの目地も各所で観察できる。この目地には、特に大きなものを選んでいない。全体としてみた場合、15cm大程度の石材を多く用いた範囲（第27図方形網掛け部）と、10cm大程度の小ぶりな石材を多く用いた範囲があり、その範囲はそれぞれおよそ1m四方の四角い形状をなす。葺石面の石材使用密度を具体的に計測してみると、細かい石材を用いた部分では、1㎡あたり約140個前後、やや大きい石材を用いた部分では、1㎡あたり80個前後である。後円部側の検出面積は狭小であるため、目地が整った線は明確に観察できないが、斜面に対して縦方向や横方向にそろっているように見える個所もいくつかあり、前方部と同様であったと考えられる。

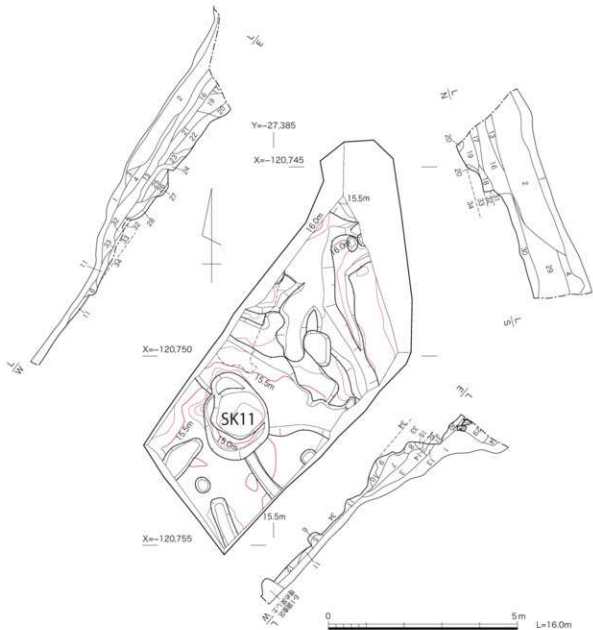
調査区東辺は、標高20.2～20.5mの平坦面になっていた。この面の大部分は第6層が被覆し、転落石をほとんど含んでいなかった。また、3区で検出された第3段斜面の葺石は、当区の標高より高い位置での検出であり、葺石残存部上端の標高は22.7mを超え、本来の高さはさらに高く想定される。したがって、当調査区東辺部で検出した平坦面は、前方部墳頂部平坦面ではなく、タケノコ生産に伴う削平を受けて形成されたものと考えられる。

(3) 8-1区 (第28図、図版15)

当調査区は、西側くびれ部の裾部の様相を掌握するために設定した。大きく削平を受けている西辺のほぼ中央部で、等高線が墳丘側に入り込んでいる部分である。この入り込みが、古墳構築当時のくびれ部の痕跡か、後世の削平なのかを明らかにすることを目的とした。前者なら、古墳の形態がより明確にでき、他の古墳との形態比較や構築モデルの検討が可能になる。また、古墳の保存・整備や復元に大いに役立つと考えられた。調査区は、幅約3.5m、長さ約7～8.5mの規模である。

調査前は、孟宗竹林の西辺の一角であったため、地表には竹の地下茎が縦横にはびこる灰黄褐色腐葉土(竹の落ち葉を主体とする)が約5～20cmの厚さで覆われていた(第1層)。この層を除去した面には、北東部に広い範囲で掘り込んだ土坑があり、チャートや砂岩を主体とする10～20cm大の石材により、40～80cmの厚さで埋め尽くされていた(第2層)。この土坑を埋め尽くした石の間はほぼ空洞で、ほとんど土は入り込んでいなかった。この礫層には、近・現代の陶磁器類やブリキ缶などとともに、埴輪片も含んでおり、葺石に使用された石材が多く含まれているものと考えられる。以下、第4層から第30層までは、タケノコ生産のための竹藪(土入れ)客土と考えられる土層(第3・4・13・16・29・30層)と、古墳の盛土を削って開墾された時の掘削土坑・溝状遺構などの堆積である。これら各層からの出土遺物は、まれに埴輪片や近・現代陶磁器の出土があったが、ほとんどなかった。また、第29層下面では、調査区南東隅部分で20cm大の石列がみられたが、この土層の西辺からの検出であることと、当土層の時期が近・現代であることから、タケノコ生産のための客土崩落を防ぐ目的で構築された遺構と判断した。石列の下にある第30層には、船形埴輪と思われる形象埴輪片が出土した。これらの各層を除去した段階で、調査区南西部中央から、直径約1.5mの円形土坑(SK11)を検出した。埋土からは、近・現代陶磁器やブリキ板片などが出土し、周濠が水田として機能していた時期の水溜めまたは井戸と考えられる。第31層は灰白色粘土層で、当古墳の広い範囲で古墳構築盛土に用いられている土層である。土中にありながら、雨の地下浸透水をあまり含まず、水分が少なく硬く締まっている。第32層は黒色粘土層で、当古墳構築前の地表面構成土と考えられる。この土層は、後円部北端から前方部西辺および前方部東辺北半部にかけて観察されている黒色系粘土層に相当するものと考えられる。当地点では、標高約16～16.1mを上面にもつ厚さ約10cmの堆積である。第33層は、厚さ約30～65cmの灰白色粘土層である。この層は、第31層に類似する土質・土色の特徴を持つが、第31層以上に硬く締まっている。第34層は、硬く締まった緑灰色礫層で、古墳西辺から南辺および前方部東辺中央部にかけての周濠底を構成する土層である。

このように、当調査区では、古墳の傾斜面や第1段平坦面など、本来の古墳構築仕上がり面は残存していなかった。この墳丘破壊は、近・現代の開墾に起因するものと考えられる。その後、竹藪の客土が運びこまれて、調査前に近い地形が築かれ、再び土取りにより掘削された大きな掘り込みが出来、そこに土入れの邪魔になる古墳の葺石を中心とする石材が集積されたと考えられる。



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰黄褐色腐葉土 10YR6/2 2. 灰白色礫 10YR7/1 3. 灰黄褐色砂質土 10YR6/2 4. 灰黄色細粒砂質土盛り 10YR7/2 5. 黄灰色シルト小石多量含み 2.5Y5/1 灰色シルト盛り 10Y6/1 6. 黄灰色シルト 2.5Y5/1 7. 灰白色礫シルト含み 10Y7/1 8. 灰黄褐色シルト 10YR4/2 9. 灰色シルト 7.5Y6/1 10. 灰白色シルト小石含み 7.5Y7/1 11. 灰白色シルト小石含み 10Y7/2 12. 暗オリーブ灰色粘質土 2.5GY3/1 13. 灰黄色シルト小石含み 2.5Y7/2 14. 浅灰色シルト小石含み 2.5Y7/3 15. 灰白色シルト 2.5Y7/4 16. 浅褐色シルト小石含み 17. にぶい・橙色 2.5YR7/3シルト小石含み | <ol style="list-style-type: none"> 18. 灰白色シルト小石含み 10Y7/1 19. にぶい・橙色 2.5YR7/3 灰白色シルト 10Y7/1 盛り 20. 灰色シルト 10Y6/1 21. 暗オリーブ灰色シルト 2.5GY7/1 22. 灰白色 7.5Y7/1シルト小石含み 23. にぶい・橙色シルト 7.5YR7/3 灰白色7.5YR8/1シルト盛り 24. 明褐色粘土 7.5YR2/2 25. 灰白色 2.5Y7/1 砂礫 26. にぶい・橙色粘土小石含み 7.5Y7/4 27. にぶい・黄褐色礫 10YR7/3 28. 褐色シルト 10YR6/1 29. にぶい・橙色 7.5YR7/3シルト小石含み 30. にぶい・橙色 5YR6/4シルト小石含み 31. 灰白色粘土 10YR 8/1 32. 黒色粘土 10Y2/1(古墳築造面表土) 33. 灰白色粘土 5Y8/1 34. 緑灰色礫 5G6/1 |
|--|---|

第28図 8-1区平面・断面図 (1/100)

(4) 6-1区 (第29～35、図版20～23)

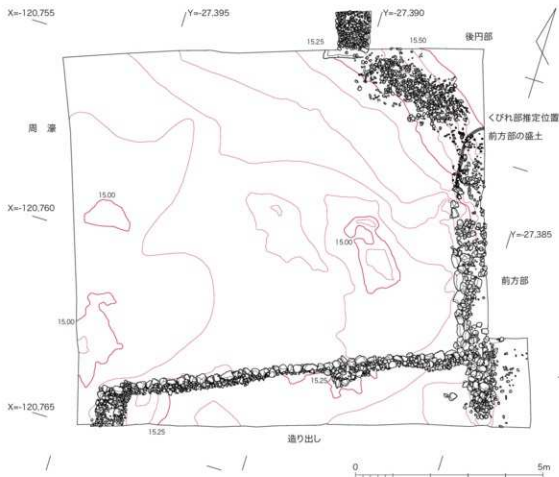
本調査区は、第5次調査において初めて検出された西造り出しの規模などを明らかにするため、造り出し北辺から西くびれ部にかけて設定した調査区である。

調査区の層序は、耕作土・床土の下に近世頃の耕作土である淡茶灰色弱粘質土（第30図第4層）がある。第4層が後述する造り出しを覆っていることから、造り出しは少なくとも近世頃に削平され埋没したことが分かる。周濠埋土は第5～17層で、厚さは0.3m前後を測る。茶灰色系の第5・10～13層（上層）と、灰褐色系の第6～9・14～17層（下層）に大別でき、埴輪片とともに上層に中世の遺物、下層には長岡京期～平安時代の遺物が含まれていた。埋土には粘質土が認められるが水を濡えた状況は窺えず、耕地化されるまで湿地状であったと考えられる。上層を完全に除去した段階で転落した葺石が現れるが、その密集範囲は想定される後円部、前方部、造り出しの輪郭に沿って幅1.7～3mの帯状を呈していた（第30図）。転落石は拳大のものが大部分を占めるが、なかには人頭大のものも認められる。第14・17層は転落石を含む砂質土層で、原位置を保つ葺石の直上に堆積する。転落石を除去した周濠底面の状態はほぼ平坦であったが、微細に見れば後円部の周辺が最も高く、南西方向へ緩やかに傾斜していた。

調査区の北東隅では耕作土直下に地山面が現れ、周濠側では多量の転落石も確認されたため、後円部裾が良好な状態で遺存するものと期待された。しかし、調査区内では後円部裾の基底石を確認することができず、転落石の下に緩やかな地山の斜面を検出しただけで、基底石などを安定して据えるために施される粘質土も確認できなかった。また、地山斜面は周濠底面との境界が明瞭でなく、約8°の傾斜で北東隅の削平された地山面に至っている。このような状況は後円部北西から西側の裾部で行われた調査区でも同様であり、前方部裾部と比較すれば、少なくとも後円部の西側は埴丘裾の構築状態が前方部と異なっていたと考えられる。

本調査区では、後円部の基底石を確認できなかったため、くびれ部の位置を明らかにできなかった。しかし、後円部想定範囲における転落石や地山斜面の状況、そして、後述する前方部の盛土範囲などから、現段階では調査区北東隅から南へ2.1m付近にくびれ部を推定することができる（第29図）。

前方部の裾部は周濠底とほぼ同じ高さから盛土を施し、その前面に基底石を据えていることが明らかとなっていたが、本調査区では前方部の盛土が後円部の地山斜面と接続する状況を確認できた（第32図）。古墳の築造に際して、まず、後円部の円弧に相当する地山斜面が削り出された想定できるが、地山の削り出しは前方部との接合部で止まらずに、さらに埴丘内側にまで至っている。そして、前方部では、地山を削り出した範囲に黒灰色系の粘質土を盛って裾部を形成し、その前面に基底石を配置し葺石を施している。前方部の基底石は、造り出しの北側接続部から後円部側へ約4mの位置までを確認した。基底石列の方向は造り出しから3m程度までは直線的であるが、くびれ部付近ではやや埴丘側へ湾曲していた。後円部、くびれ部に近い位置の基底石は、より高い位置に据えられていたため、後世の削平によって失われたと考えられる。前方部の基底石には、長辺0.2～0.55mの石材が利用され、長側辺を周濠側に向けて据えられている。造り出し接続部から約1m北までは、基底石の上に大振りの石材が重ねられ、あたかも2段階のような状況を示している。なお、北から3・4石目の基底石は後世の窪みに落ち込んでおり、本来の位置から周濠側へ動いた状態で検出された。

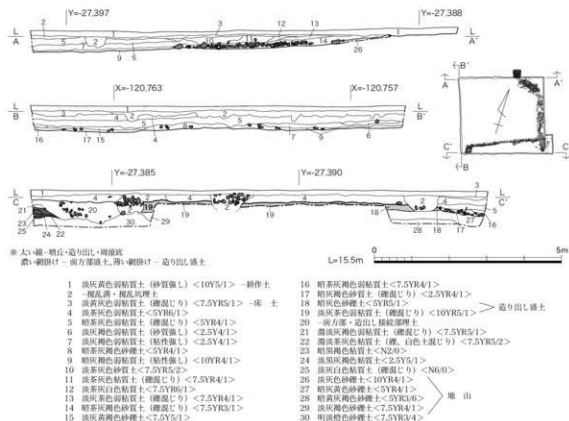


第29図 6-1区平面図 (1/100)

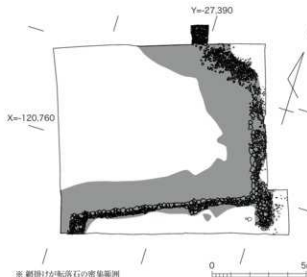
前方部の葺石は、基底石底面から高さ0.4 m程度を残すだけであった。また、その状態はやや乱れており、本来の位置を保つ範囲は限られている。造り出し接続部付近では、計測範囲や遺存状況などに制約があるものの葺石を施した斜面の角度は15°前後を測る。葺石は拳大より一回り大きいものが多数を占めるが、なかには人頭大に近いものも認められる。

西造り出しに伴うものでは、西造り出しの北辺を画する基底石、葺石と、やや不明瞭ではあるが西辺の葺石を検出した。第5次調査では造り出しが地山を削り出したものではなく、盛土によって形成されていることが明らかにされた。本調査区でも灰色系砂礫混じり土の盛土を確認しているが、盛土の厚さは0.2～0.3 mで、造り出しの下部には周濠底の地山面がほぼ水平に続いていた(第30図)。

造り出しの北辺は、くびれ部から約6 m前方部寄りに接続する。前方部と造り出し基底石の接続角度は95°で直角に近いが、造り出し北西隅は隅部処理のため約105°と鈍角であった。造り出しの規模は、前方部との接続部で南北幅12.5 m程度を測り、周濠への張り出しは、前方部の延長線上から西辺まで長さ約9.7 mに復元できる。造り出しの高さは、周濠の底面から0.3 mまでで、本来の高さを明らかにする情報は得られなかった。ただ、西辺の状況を見れば、造り出し斜面が基底石から直線的に立ち上がるのではなく、緩斜面を経て平坦面へ至る構造も想定しなけ



第30図 6-1区断面図 (1/100)



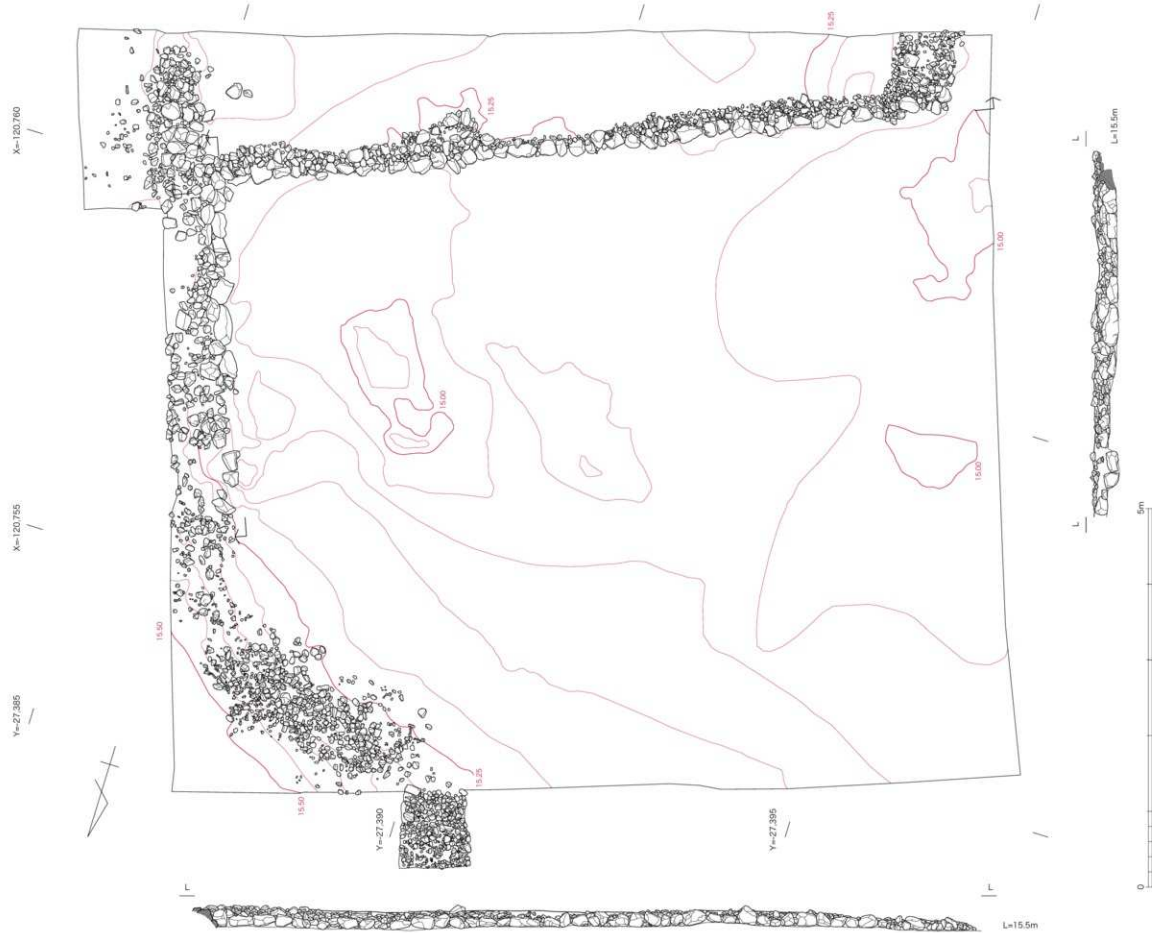
第31図 転落石密集範囲図 (1/200)

基底石の設置面は水平ではなく、前方部との接続部から造り出し北西隅に向かって僅かに傾斜していた。葺石には拳大の石材が利用されているが、部分的に人頭大に近いものや0.05 m程度の小礫が含まれていた。前方部との接続部付近など遺存状態が良好な範囲では、石材は小口を外側に向け盛土斜面に突き刺すように葺かれている。葺石面の傾斜角は20°前後を測る。

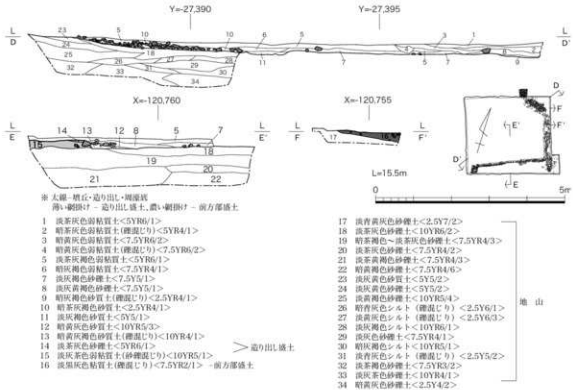
本調査区では、造り出し接続部のさらに墳丘側から葺石と掘り込み状の土層を確認した。葺石は前方部の基底石より内側にあり、接続部分から1.8 m南まで続く。また、調査区の南壁付近で

ればならない。

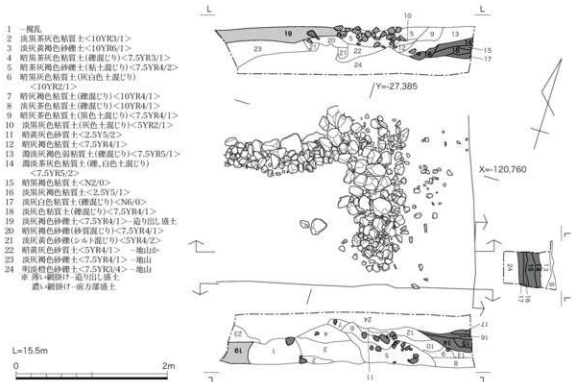
北辺の基底石は、真西に対して22°南へ振る方向に連なっている。基底石には砂岩が主体として用いられており、少量のチャート、頁岩、粘板岩が含まれていた。前方部のものに比べると一回り小さい石材で、長辺0.2～0.4 mのものが多数を占める。石材の長側面を外側に向けて据えられているが、部分的に小口を外側に向けるものがあり、石列全体の配置状況は前方部に比べて雑な印象を与える。基底



第 32 图 6-1 区基石实测图 (1/50)



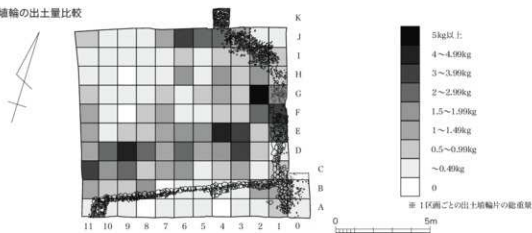
第33図 6-1区後部部・くびれ部・西造り出し断面図(1/100)



第34図 6-1区くびれ部・西造り出し接続部実測図(1/50)

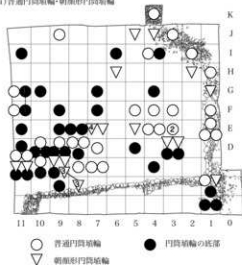
は石の数が少なくなるものの、掘り込み状の土層はさらに南側へ延びていた。5-1区では石列が確認されていないが、断ち割り壁面の対応する位置に掘り込み状の土層の変化が認められる。葺石には長辺0.15m程度の石材も用いられているが、この大振りな石材は接続部から斜め方向

A. 埴輪の出土量比較

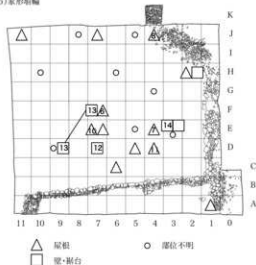


B. 遺物種別ごとの出土地区

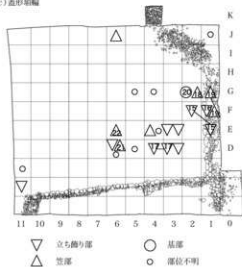
(a) 普通門筒埴輪・朝顔形門筒埴輪



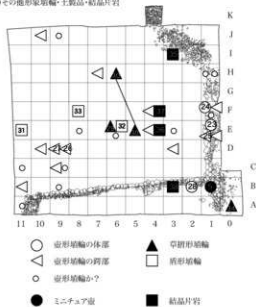
(b) 家形埴輪



(c) 蓋形埴輪



(d) その他形象埴輪・土製品・結晶片岩



第35図 6-1区の遺物出土量・遺物分布図(1/200)

に立ち上がった後、前方部裾に合致する方向へ続いていた。石材の配置状況は前方部側、そして、造り出し側から傾斜する造作が窺え、葺石部分があたかも谷状を呈していた。

断ち割り壁面の断面観察では、掘り込み状の土層（第34図第5～13層）が第14～18層の前方部盛土を切る状況が窺えた。また、石材の隙間には形象埴輪やミニチュア土器が含まれており、この葺石部分が谷状の斜面として露出していたことが分かる。このような谷状の構造物を伴う造り出しは、兵庫県朝来市池田古墳に類例を求めることができる。

6-1区は後円部から前方部、造り出しが想定されていた調査区であり、周濠内から出土する遺物の来歴を明らかにするため、調査区南東隅を起点とする1辺1mの区画（南北A～Kの11区、東西0～11の12区）を設定し、遺物の取り上げ作業を行った。

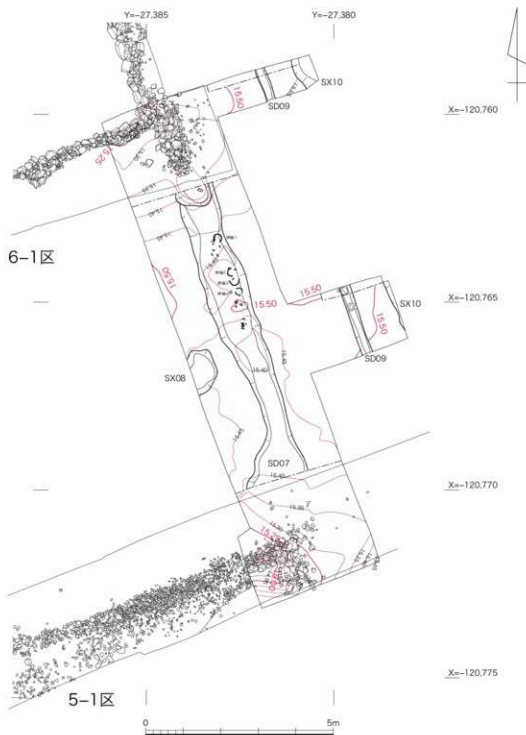
第35図Aは、出土遺物の多少を区画ごとの総重量として示した。出土遺物が比較的集中するのは、後円部裾の西側（J4～6）、くびれ部の南側（F1・2、G1・2）、造り出し接続部の北西側（E3・4）、造り出し先端部の北側（D8～10）である。このうち、最も多くの遺物が出土したのがくびれ部の南側であり、後円部、前方部に加え一部造り出しからも遺物がもたらされた結果と考えられる。一方、E3～D10の集中範囲は造り出し北辺の方向と対応しており、この範囲の遺物は造り出し上からもたらされたと考えられる。また、この範囲が造り出しの基底石列から1m以上離れた転落石密集範囲（第31図）の縁辺部に合致することも興味深い。後円部、くびれ部とは異なり、造り出し基底石付近のより古い段階の転落石を含む土には遺物が少ないことから、造り出しの削平といった大きな改変によって動かされたものと推測できる。

第35図Bには、整理作業で種別や部位が明らかになった円筒埴輪、形象埴輪と土製品、結晶片岩の出土地区を示した。最も広域に分布するのが円筒埴輪、次いで朝顔形埴輪で、ほぼ前述のA図に対応する状況を示している(a)。家形埴輪は、E3～D9の範囲に分布しており、多くが造り出し上に配置されていたと考えるのが妥当だろう。長方形に空いた床を設ける家形埴輪は最も西側から出土しているが、この範囲は後円部、くびれ部から離れており、造り出しとの関連がより強く窺える(b)。蓋形埴輪は、くびれ部の南側から造り出し接続部の北西側に分布する。立飾から筒状部と、軸受け部、笠部、基部の破片は、くびれ部の南側に集まっており、後円部からもたらされた可能性も考慮しなければならない(c)。草摺形埴輪、盾形埴輪の多くは調査区の中央部、やや遺物が希薄な範囲で出土している(d)。

(5) 11-2区(第36～40図、図版24・25)

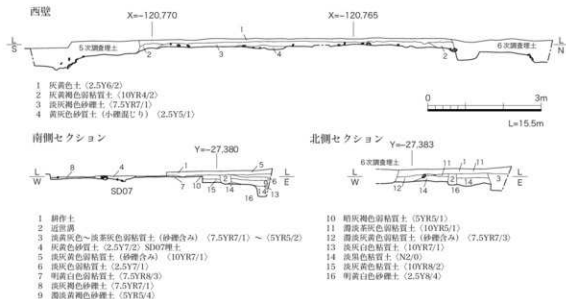
11-2区では、谷状の葺石や西造り出しの接続状況を明らかにする目的で、西造り出しの接続部に調査区を設定した。

本調査区の層序は、厚さ0.2m前後の旧耕作土（第37図第1層）を除去した段階で西造り出しの盛土（第37図上第2・3層、下第8層）が表れる。西造り出し上面の高さは、現状で北側の周濠底部より0.4m程度高い。今回、後述する方形区画の埴輪を検出したことで、西造り出し上面の高さを具体的に推定することができた。すなわち、埴輪の基部を完全に埋没させた場合、



第36図 11-2区平面図 (1/100)

想定される西造り出し上面の高さは標高約 15.7m となる。周濠底部は標高 15m 前後であり、西側造り出しは周濠底部との比高差が約 0.7m の低い形態に復元できる。西造り出しの構築手順は、まず前方部の側面を含めた範囲を掘削し、その後、改めて前方部側面を盛土で成形し、最後に前方部と異なる土で造り出しを付加したと考えられる。今回、造り出し接続部に溝状遺構を確認したことから、基底石・葺石の施工前に造り出し接続部に溝状遺構を掘削し、その後に基底石・葺



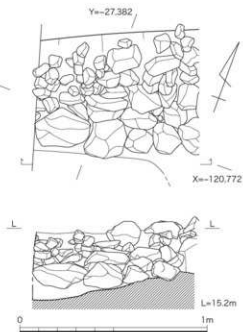
第37図 11-2区断面図 (1/100)

石・北側接続部の谷状部分の施工や造り出し上面・溝状遺構内への埴輪の配置が行われたことが確認できた。

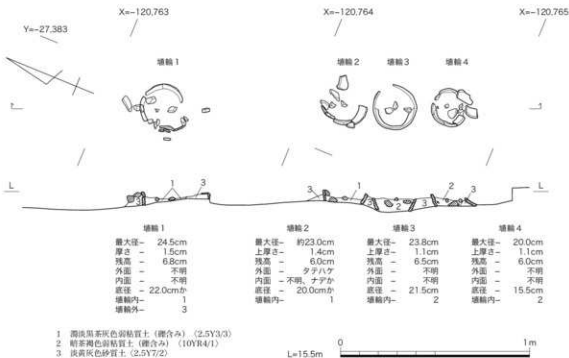
本調査区では、西造り出し南辺部分の再調査を行い、南側の接続部と西造り出し南辺の基底石を4石確認した(第38図)。西造り出しの基底石は長軸20~30cmを測り、前方部の基底石に比べると一回り小さな石材が用いられている。石材は長側辺を外側に向けて配置され、前方部との接続部付近では、その内側にほぼ同じ大きさの石材が複数配されていた。西造り出し斜面の葺石は、長軸10cm程度の石材を使い、小口を突き刺すようにして施工されている。なお、基底石、斜面の葺石の直下には、石材を安定させるための薄い明黄褐色粘質土が認められた。

調査区のほぼ中央、西造り出しの接続部において、6-1区の谷状を呈する葺石から南に延びる溝状遺構SD07を確認した(第36図)。溝状遺構は幅0.6~1.1mを測るが、深さは10cmまでの非常に浅いものであった。

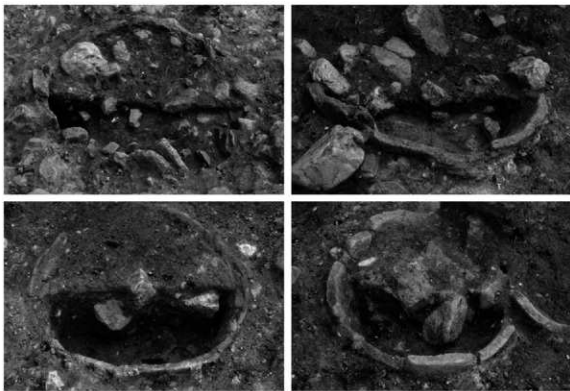
溝状遺構は、北側の谷状の葺石を施すためのものと考えられる。しかし、溝状遺構が後述する溝内の埴輪列を配置した後、完全に埋め戻され造り出し上面と同じ高さとなったのか、西造り出しと前方部との間に溝として表出していたのかを明らかにすることができなかった。前者の場合、溝状遺構は北側の谷状部および埴輪列を施工するための工法的なものと考えられる。一方、後者の場合には、それらに加え前方部墳丘から流れ落ちる水を北側の谷状部に誘



第38図 11-2区基底石実測図 (1/20)



第39図 11-2区埴輪列実測図 (1/20)



左上：埴輪1 右上：埴輪2 左下：埴輪3 右下：埴輪4
 第40図 11-2区溝状遺構S D 07内の埴輪（南西から）

導する機能を想定できる。

溝状遺構S D 07の北半部では、原位置を保つ埴輪基部を4個体確認した（第39・40図）。4個体の埴輪は、溝状遺構の底部東側（前方部側）に沿って直線的に並ぶことから、西造り出しの

上面に設けられた埴輪方形区画の一部と考えられる。埴輪2～4は底部の間隔が10cm程度で配置されており、埴輪1と2の間に2個体の埴輪が存在したものと考えられる。埴輪の底部径(第40図)は北側の埴輪1～3が20～22cmで、これまでの調査で確認されている後円部、前方部平坦面埴輪列のものとはほぼ同じ大きさであった。それに対し最も南側の埴輪4は、底部径が15.5cmと一回り小さく、器壁は埴輪1～3に比べてやや厚手であることから、形象埴輪の基部とも考えられる。埴輪4より南側では埴輪を確認できなかったが、埴輪4が埴輪方形区画の入口でこの部分に特別な埴輪を配していた可能性を指摘できる。なお、いずれの埴輪も残存高は7cmまでであり、後世の耕作などの影響を免れ、辛うじて残されたものであることが分かる。

なお、近世以降の耕作に関連する溝2条を確認した(第36図)。溝SD09は、幅0.15m、深さ0.2mの直線的な溝で、12-1区の溝SD02に接続するものである。溝SD10は、現存する墳丘裾で確認したため東側の肩部を検出できなかった。このような現状の墳丘裾に穿たれた溝や土坑は、後円部、前方部の東西側面で確認されている。

(6) 10-2区(第41・42図、図版26～28)

本地点は、8-3区で鉄製品が出土した硬く締まった白色系の粘質土層の広がり、9-4区の埴輪列の続き、およびくびれ部から東造り出しを確認する目的で長さ17m、幅8mの調査区を設定した。現況は、埴輪側が高低差3m前後の急斜面の竹林で、調査区の東は9-4区、南は8-3区と重なる。調査は、近世以後の盛土と表土を取り除くと、硬く締まった白色系の粘質土層(第41図第8層)と、比較的大きな転落石が混じる埴輪の盛土(第41図)が南と北で明瞭に分かれる。南側の白色系粘質土層が北側の前方部を欠き切るように一気に削り取っており、埴輪列は完全に失われていた。西壁では厚さ約1.4mあり、底面の標高は16m前後である。南側の8-3区では、第2段平坦面の埴輪列を残して墳丘裾まで削り取られた所に埴輪上部の盛土が下方に移動したものと想定されており、削られた長さは本地点まで14m以上である。東側は水田耕作に関わる溝に開削されている。なお、白色系粘質土層の上面から石製模造品が1点出土したが、農具類や武器類などの鉄製品は出土しなかった。

後円部から前方部の転落石を含む埴輪崩落土を除去すると、9-4区で確認された後円部第1段平坦面の埴輪列が現われる。埴輪列は削平されたものを含めて13個体分を調査でき、続く14個体目は一部確認された状態であった。調査では、No14からNo23まで9個体分と、くびれて方向が変わる前方部から削平されたものを含めてNo1～No13まで13個体分を確認した(第42図)。埴輪は残りが悪く、1段目突帯がわずかに残る程度である。埴輪を樹立する布掘りの溝は、後円部からくびれ部、前方部にかけて一段高くなっており、9-4区でのNo1～No13の埴輪列は溝底の標高が16.2mであるが、No14～No23の埴輪列は標高16.3mと一段高くなっている。今回の調査で布掘りの溝が確認できなかった点も、ここに一因があると考えられる。

一方、前方部ではくびれ部から延びるNo1～No5は後円部の埴輪列とほぼ同じ高さに樹立するが、破片から復元したものを含むNo6～No13の8個体分については、埴輪列が前に張り出

しており、埴輪が据えられた高さもNo1～No5の埴輪より低い位置にある。確実に高さが押さえられるNo13は標高16mで、その高低の差は約0.3mである。これより南に延びる埴輪の有無を確認したところ、埴輪が削り取られた後に堆積した白色系粘質土層は埴輪列を消失させるまで掘り込まれておらず、No13と同じ標高が16m前後であった。したがって、くびれ部から続く埴輪列は13個体で終止するものと考えられる。

なお、土坑状の掘形は、埴輪が樹立する前に埋められたもので、布掘りの溝は明瞭でないが、No6～No13の埴輪列が一段下がったところに位置することと、攪乱の壁面に表われた古墳造営前の旧地表土である黒い土層が傾斜して下がる状況は両者に関係があることを示すものと考えられる。東造り出しと前方部がどのように接続していたのか、埴丘の大規模な改変や近世の水田耕作に関わる井戸や溝の開削で失われていたことから判然としないが、東造り出しは地山の成形と新たな盛土が行なわれて構築された状況が明らかになった。

(7) 10-3区(第43図、図版29～31)

東造り出しの規模や構造を確認するため、当初長さ12m、幅6mで設定したが、その後部分的に拡張した。9-4区では、後円部東側の葺石が確認されたが、前方部と東造り出しは削平されており、江戸時代の水溜めと井戸、溝が開削されていた。

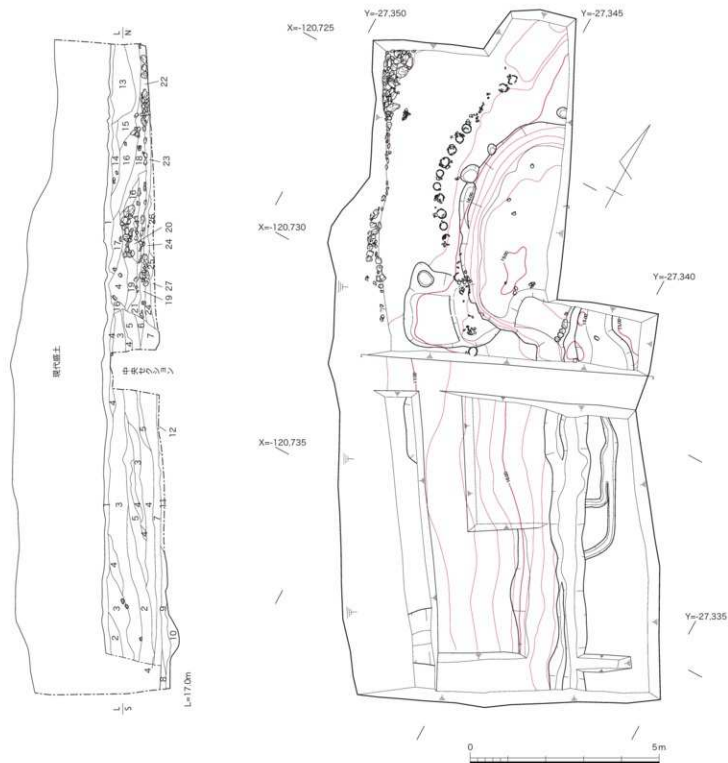
グランド造成土と水田耕作に関わる盛土を除去すると、北半部は灰褐色と黒褐色、黄褐色の粘質土が入り交じった粘質土の盛土層が、また南半部は地山面が表われる。その上面には、9-4区の井戸に続くとみられる溝と南北方向の溝、井戸が掘られていたが、かろうじて旧状をとどめた東造り出しの葺石や礎敷を検出することができた。上面での標高は、約15.2mを測る。

東造り出しは、先にも述べたように、地山の成形と斑状の盛土によって造られたことがわかった。盛土上には、比較的大きめの石材が14個程度東西一列に並ぶ状態を検出した。石列の東は、南北方向の溝と重複し、その部分では石の抜けた痕跡が確認できた。この石列は、東造り出しの北辺を限る基底石に相当するとみられ、西に延長すると10-2区で検出した第1段平坦面の埴輪列のNo.13の埴輪におおむね合致する。基底石上面の標高は14.9m前後であり、それより北側の緩斜面上には細かい礎を用いた礎敷になっていることから、州浜を形成していたものと推察された。基底石の南側でも、北側と同様の細かい礎敷を確認したが、これも旧状ととどめているものと考えられる。

東造り出しの東辺については、北辺と同じ基底石を確認していないため、明確さを欠くが、北東拡張区の南角付近が標高14.8m前後を測ることから、おおむねこの付近から南に屈曲して東辺になるものと推察した。

(8) 8-4区(第44図、図版36)

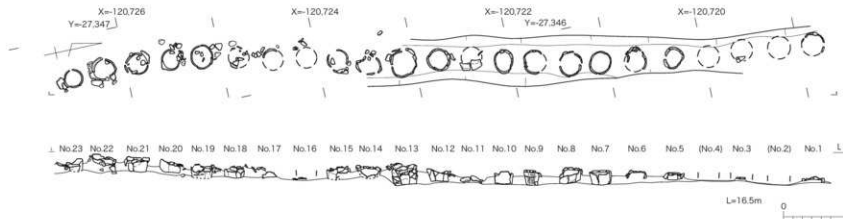
当調査区は、西造り出しに対応して、東造り出しが構築されたかどうかを明らかにする目的で、古墳中軸で西造り出しを東に反転した南辺部の推定位置に設定した。当所は、古墳東側辺に設け



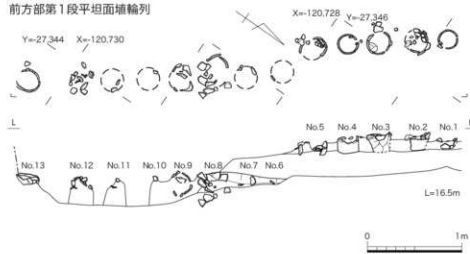
- 1 黒褐色 (2.5Y3/1) 土 礫含み
- 2 土色・黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
- 3 土色・褐色 (2.5Y5/3) 土
- 4 黄褐色 (10YR6/5) 土・灰白色 (10YR7/1) 粘質土・黒褐色 (7.5YR3/1) 粘質土ブロック状褐色 (10YR4/4) 土混じり
- 5 褐色 (7.5YR2/1) 粘質土
- 6 土色・黄褐色 (10YR3/3) 粘質土・黄褐色 (2.5Y7/4) 粘質土ブロック状じり
- 7 土色・黄褐色 (10YR7/3) 粘質土・土色・黄褐色 (10YR4/3) 粘質土混じり
- 8 黄褐色 (7.5YR3/1) 粘質土・灰白色 (10YR7/1) 粘質土混入
- 9 黄褐色 (10YR5/2) 粘質土
- 10 黄褐色 (7.5YR3/1) 粘質土
- 11 黄褐色 (10YR7/8) 粘質土・灰白色 (10YR7/1) 粘質土ブロック状じり 鉄分含む
- 12 黄褐色 (2.5Y5/2) 粘質土 鉄分混入
- 13 土色・黄褐色 (10YR5/3) 土 中や軟質
- 14 褐色 (10YR4/4) 土 黄褐色 (10YR3/1) 土混じり 礫・細礫含み
- 15 土色・黄褐色 (10YR5/4) 土
- 16 土色・黄褐色 (10YR4/3) 土 黄褐色 (7.5YR3/1) 混じり
- 17 褐色 (10YR4/4) 土 細礫含み
- 18 土色・黄褐色 (10YR6/4) 土 礫・細礫含み
- 19 土色・黄褐色 (10YR4/3) 土 多量の礫を含む ややかたじまる
- 20 黄褐色 (10YR5/5) 土 礫含み ややかたじまる
- 21 黄褐色 (10YR6/6) 土 小礫混じり かなじまる
- 22 黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 細礫混じり
- 23 黒褐色 (10YR3/2) 土 中や粘質 小礫含み
- 24 黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 小礫含み
- 25 黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 中やかたじまる
- 26 灰白色 (10YR7/1) 粘質土 黄褐色 (2.5Y7/4) 粘質土混じり
- 27 黄褐色 (10YR6/2) 粘質土 軟質

第41図 10-2区平面・断面図 (1/100)

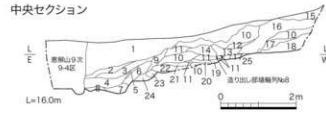
後円部第1段平坦面植輪列



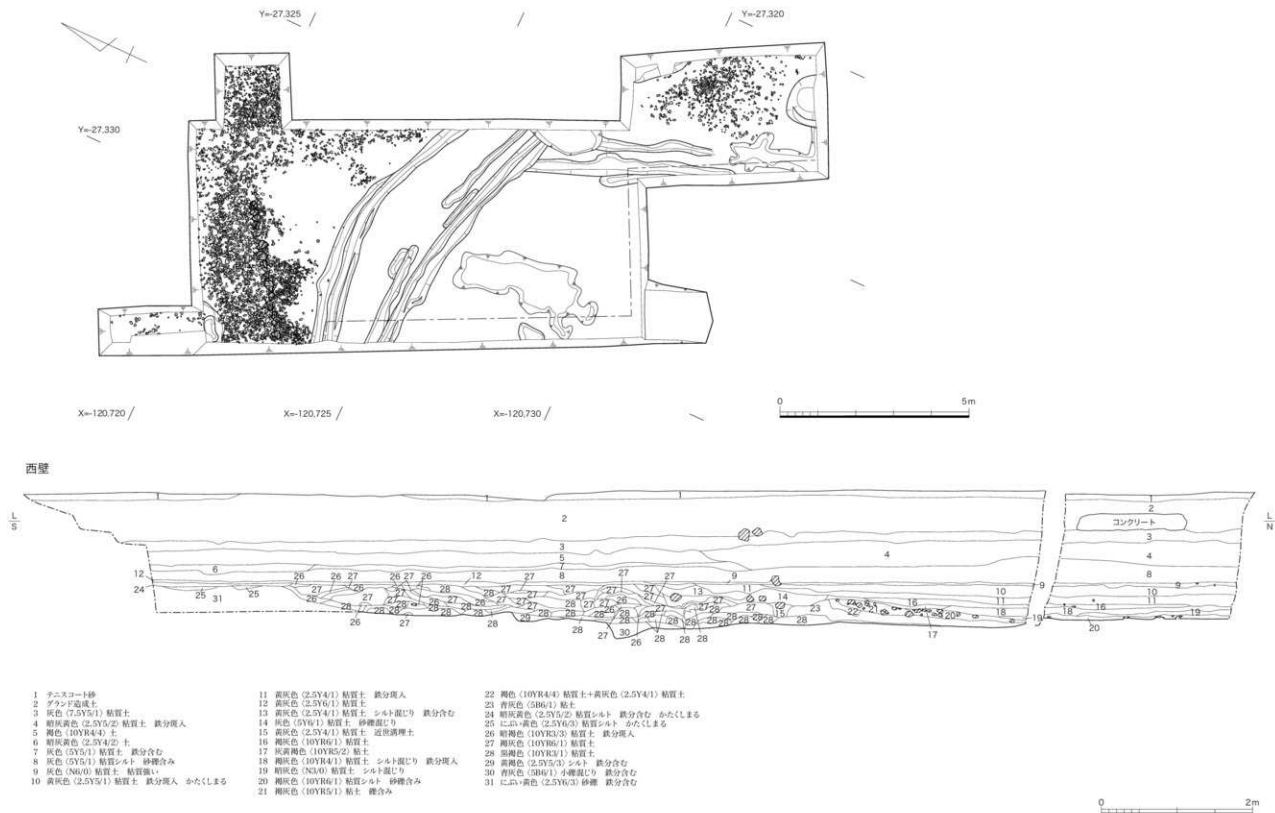
前方部第1段平坦面植輪列



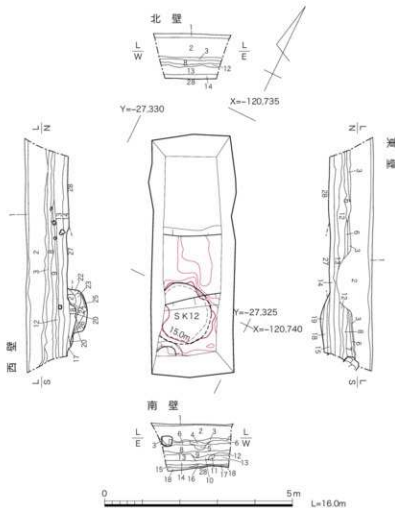
中央セクション



- 1 褐色(10YR4/4)土 雜含み
- 2 土色(黄褐色)(10YR5/3)土 鉄分混入
- 3 黄灰色(2.5Y5/1)粘質土 鉄分混入
- 4 黄灰色(2.5Y5/1)粘質土 硝灰黄色(2.5Y5/2)粘土ブロック 硝灰混入
- 5 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土 硝褐色(10YR3/2)粘質土混じり 鉄分混入
- 6 硝灰黄色(2.5Y5/2)粘質土 鉄分混入
- 7 黄褐色(2.5Y5/2)砂礫 鉄分多く含む
- 8 褐色(2.5Y2/1)粘質土
- 9 褐色(10YR4/4)粘質土
- 10 硝褐色(7.5YR3/1)粘質土
- 11 硝褐色(10YR3/3)粘質土・浅黄褐色(2.5Y7/4)粘質土ブロック混じり
- 12 土色(黄褐色)(10YR4/3)粘質土
- 13 土色(黄褐色)(10YR4/3)土 丸礫の混・硝礫片含む
- 14 土色(黄褐色)(10YR4/3)土
黄褐色(2.5YR3/1)粘質土・硝褐色(10YR3/3)粘質土・
浅黄褐色(2.5Y7/4)粘質土ブロック混じり
- 15 土色(黄褐色)(2.5Y5/3)土
黄褐色(10YR6/8)土・灰白色(10YR7/1)粘質土・
硝褐色(2.5YR3/1)粘質土・硝褐色(10YR4/4)土混じり
- 16 褐色(10YR4/4)土
- 17 土色(黄褐色)(10YR3/3)粘質土 土色(黄褐色)(10YR4/3)粘質土混じり
硝褐色(2.5YR3/1)粘質土・灰白色(10YR7/1)粘質土混入
- 18 土色(黄褐色)(10YR5/3)粘質土
- 19 黄褐色(2.5Y5/6)粘質土
- 20 土色(黄褐色)(10YR4/3)粘質土 黄褐色(10YR5/6)粘質土混じり
- 21 土色(黄褐色)(2.5Y5/4)粘質土
- 22 灰黄褐色(2.5Y5/2)土 褐色(10YR1/7)マンガン混じり
- 23 灰褐色(5Y5/1)粘質土 鉄分混入
- 24 灰褐色(5Y5/1)粘質土 砂礫混じり 鉄分多く含む
- 25 硝灰土(黄褐色)(2.5Y3/1)粘質土



第43図 10-3区平面・断面図 (1/50・1/100)



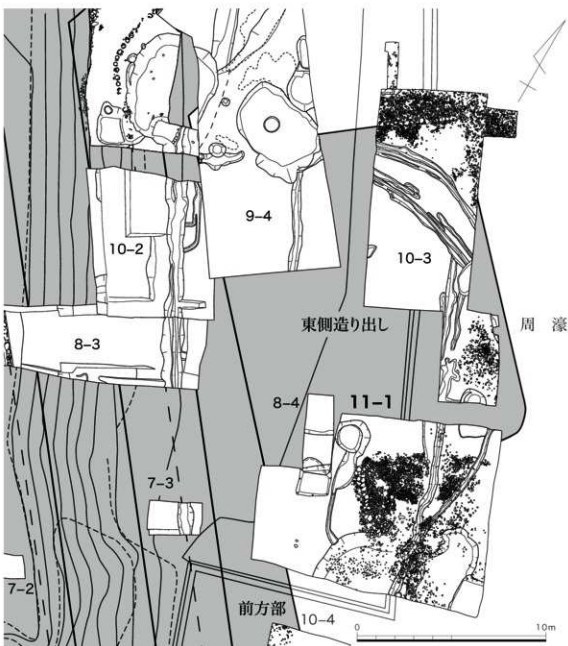
- | | | |
|--------------------------|------------------------------------|----------------------------|
| 1. オリーブ褐色砂 5YR/3 | 12. 灰黄色粘質シルト 2.5Y6/2 | 22. 赤褐色砂 2.5YR/3 |
| 2. 灰黄色粘質土 2.5Y4/1 礫～小石含み | 13. 褐色シルト 10YR/5/1 灰白色粘土 10YR/1 混り | 23. 灰白色粘質シルト 10YR/7/1 小石含み |
| 3. 灰色シルト 5Y/4/1 (旧水田耕土) | 14. 青灰色シルト 5B6/1 (旧水田耕土) | 24. 黒色粘土 0N1.5/0 |
| 4. オリーブ褐色シルト 5Y6/3 小石含み | 15. 黄灰色シルト 2.5Y5/1 小石含み | 25. 褐色砂 10YR/5/1 |
| 5. 灰オリーブ色シルト 5Y5/2 | 16. 黄灰色シルト 2.5Y5/1 | 26. 褐色粘土、灰白色粘質土 混 |
| 6. 褐色粘質シルト 10YR/5/1 | 17. オリーブ褐色粘土 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土含み | 27. 赤褐色砂 2.5YR/4/6 |
| 7. 褐色粘質土 10YR/5/1 | 18. 黒色粘土 0N2/0 | 28. 灰白色粘質土 5YR/2 礫含み |
| 8. 灰黄褐色シルト 10YR/5/2 礫混り | 19. 灰黄褐色砂 10YR/5/2 | |
| 9. 灰黄褐色粘質土 10YR/5/2 | 20. 褐色粘質土 10YR/5/1 | |
| 10. 灰オリーブ色シルト 5Y6/2 小石含み | 21. にぶい赤褐色 2.5YR/5/3 | |
| 11. 灰色シルト 5Y6/1 | | |

第44図 8-4区平面、断面図(1/100)

られた散策路として公園のように盛土整備されている。このため、重機により表土から整備前の旧水田耕作土までを掘削除去し、以下を人手による精査とした。当調査区は、幅約2m、長さ約6.5mである。

近現代の土層は、厚さ約50cmの盛土(第1・2層)下に厚さ約10cmの水田耕作土の水平堆積(第3層)があり、1時期の地表面をなしていたと思われる。その下には約40cmの厚さで4～5層の重なりに分けられる整地層(第6～13層)がみられ、この下に再び厚さ約15cmの水田耕作土(第14層)が水平堆積していた。この層の上面標高は、約15.4mで、西周濠部の現在の表土を構成する水田面標高の15.52mに近い。第4・5層は、第3層の耕作土の下の面から掘り込まれた窪みの堆積で、第10・11層は第9層下に掘られた溝内埋土である。

第14層の耕作土の直下は、第27・28層が基盤を構成していた。調査区北半部は、第27層は無く、1段低くなって第14層の旧水田耕作土直下が第28層になっていた。南端部は、第27層を掘り下げられて約20cm程度落ち込んでおり、第14層の旧耕作土直下に第15～19層の堆積があった。第15～17層には、埴輪細片とともに平安時代の土器や瓦類を少量含んでいた。第18層は、調査区内からの出土遺物はなかったが、前方部全面の周濠内での4-1・4-2区周濠内堆積の黒色土に類似する土層であった。このことから、調査区南部の落ち込みが、東造り出し南辺の残存肩部の可能性が考えられた。しかし、検出範囲が狭い事と、高低差が浅いことから、確証は得られなかった。また、調査区南部の西寄りでは、第18層下から掘りくぼめた弥生時代の円形土坑SK12を検出した。



第45図 東造り出し周辺調査区配置図 (1/200)

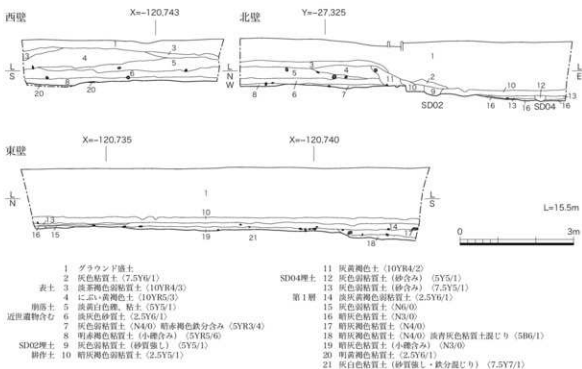
(9) 11-1区 (第45~49図、図版32~35)

東造り出しは第9・10次調査で存在が確認され、造り出し周辺に礎敷を伴い、西造り出しより一回り大きいことなどが分かっている。本調査区は想定される東造り出しの南辺に設定し、造り出しの規模を明らかにすることを目的に調査を行った。

本調査区の層序は、グラウンド盛土などの下に、旧表土および旧耕作土・床土が認められた。周濠は耕作土などを除去した段階で、調査区の東部域を中心に確認できた。周濠の埋土は、上層の灰色～灰黄褐色弱粘質土 (第46図第14層) と下層の暗灰色粘質土 (第19層) に大別することができ、埋土上層に中近世の遺物が、下層には長岡京期前後と古墳時代のものが含まれていた。周濠の底部は地山である灰白色粘質土であり、部分的な断ち割り土層観察では11-5区の周濠底部に施されたような粘質土は確認できなかった。周濠底部の標高は14.6 m前後、現地表面から周濠底部までの深さは約1.7 mを測る。周濠底部の高さは第2区の西造り出し接続部と比較して0.2 m程度低く、前方部南側の第4区とほぼ同じであった。

西造り出しで行われた5-1区、6-1区では、周濠埋土上層を除去した段階で大量の転落石が現れていたが、東造り出しの南辺にあたる本調査区では転落石の分布は比較的目立たない状態であった (図版32)。

調査では、耕作土および第14層を除去した段階で、北辺の中央部では周濠埋土の下層とは異なる黒褐色粘質土が現れ、粘質土の下から大量の礎を検出した (図版32)。このため調査区の北辺をさらに北側へ拡張し礎群の追求を行った。その結果、礎群が東造り出し周辺に施された州浜状の礎敷の一部であること、拡張範囲内で造り出し南辺の基礎石を検出し、東造り出しの規模



第46図 11-1区断面図 (1/100)

が南北幅約 18 m、周濠への張り出しが約 14 m であることが確認できた。しかし、調査区の西辺に推定される前方部との接続部分は、後世の大規模な墳丘の改変や水田耕作によって失われており、東造り出しの接続状況や構築手順を検討するための手掛かりが残されていなかった。一方、調査区の北東部、東造り出し南辺の東側にあたる部分も耕作に伴う段差や溝で削平を受けていたが、東造り出し周辺に施された礎数が僅かに残っており、その範囲を推定することができた。東造り出し上面の高さは標高 15.1 m 前後であり、10 - 3 区の南端における検出高とほぼ同じである。また、周濠底部からの残存高は 0.6 m であった。

東造り出し南辺の基底石は東西約 4 m 分を検出した。基底石には長軸 15 ~ 40 cm の石材が用いられており、より小振りな基底石が配された西側部分では、その内側にほぼ同じ大きさの石材が配置されていた。一方、斜面の暮石は、基底石の底部から約 0.15 m までの高さが残存していた。基底石上面の高さは標高 15 m 前後で、東造り出し北辺の石列に比べ 10 cm 程度高い位置にある。東造り出し北辺の石列では、石材の扁平な部位を上にして配置されていたが、南辺の石列配置は西造り出しと同様な状況であった。また、北辺では石列の内側にも平坦に施された礎数が確認されるなど、今回検出した南辺とは状況がやや異なっている。

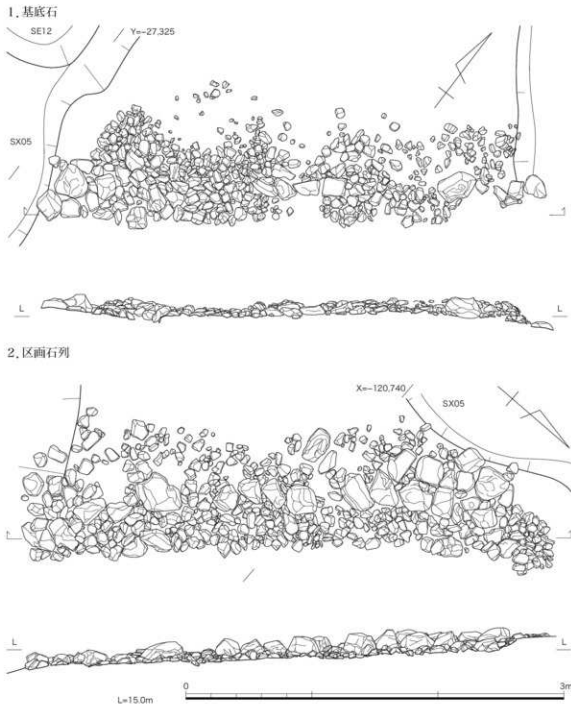
本調査区では、東造り出しの南辺で拳大までの小礎を用いた礎数を検出した。小礎は周濠底部に広く分布するが、基底石の外側約 4 m までの範囲がとくに密な状況であり、非常に緩やかな傾斜で基底石列へ至る。この礎数は東造り出しの北辺、東辺でも確認されており、東造り出しの周囲を州浜状にするため施されたものと考えられる。

礎数の西側では、北西から南東方向に延びる区画石列を検出した。区画石列は東造り出し南辺の基底石との接続部である北西端を起点に長さ約 4 m 分を確認したが、南東部は後世の削平によって失われており終点の状況は判然としない。本調査区の南側で行った 5 区では区画石列の延長部が認められなかったが、前述した小礎が調査区南壁中央部まで分布していることから、区画石列が本調査区のさらに南側まで延びていた可能性がある。区画石列には長軸 20 ~ 45 cm の石材が用いられ、東造り出し南辺の基底石に比べ大きな石材が目立つ。しかし、石材は長軸を斜めに配するものが多く、その配置状況からは粗雑な印象が窺えた。区画石列の西側にも僅かな範囲ではあるが礎が残存していたことから、この区画石列は礎数内を区切るために設けられたものと考えられる。区画石列より西側、11 - 1 区の南西隅部は前方部東側裾部が想定される位置であった。しかし、墳丘の外表は削平によって完全に失われており、良く締まった墳丘盛土ないし地山と考えられる黄褐色粘質土が現れる。区画石列より西側の高さは標高 15.0 ~ 15.2 m を測り、第 5 区で検出した前方部第 1 段斜面の基底石下端に比べ約 0.5 m 高い状況であった。前方部裾部の基底石列に段差を想定することが困難であるため、この部分には東側造り出しの南に設けられた造り出しの付加的施設が存在したと考えるのが妥当であろう。その場合、南東方向に延びる区画石列は付加的施設の東側を限るもので、小礎の分布から付加的施設の周囲にも造り出しから連続する礎数が施されていた可能性を指摘できる。

現状では、東造り出し本来の高さや上部構造を検討することは難しい。後述するように当地を



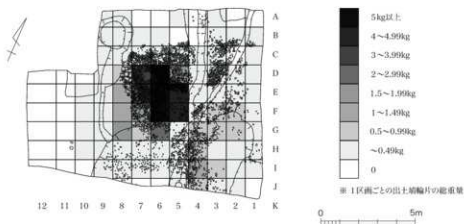
第 47 图 11-1 区平面图 (1/50)



第48図 11-1区基底石・区画石列実測図(1/30)

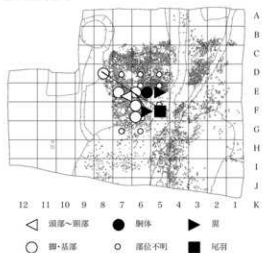
含む東側造り出し周辺では、耕作に関連する後世の溝や井戸、土坑を多数検出しており、このなかでも溝の配置が目される。本調査区で検出した溝S D04は、北側の10-3区へ延びているが、全体として大きく湾曲していた。湾曲する溝の内側、墳丘側に東造り出しの高まりがある段階まで残されており、高まりの裾を巡るように溝が掘削された可能性がある。東側造り出しが西側より高かったことを示すもので、さらには造り出し斜面の断面形状が複合的な形態であったことを推測させる。

A. 埴輪の出土量比較

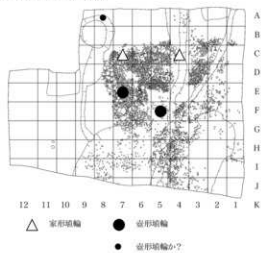


B. 形象埴輪種別ごとの出土地区

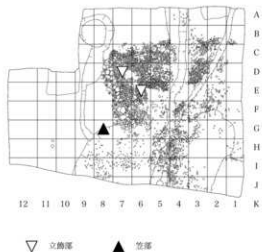
(a) 水鳥形埴輪



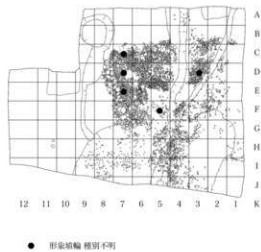
(b) 家形埴輪・壺形埴輪



(c) 蓋形埴輪



(d) 種別不明



第49図 11-1区の埴輪出土量・種別分布図(1/200)

本調査区における埴輪の出土状況としては、区画石列より東側の礎敷部分で多くの埴輪が認められた(第49図)。出土する遺物の来歴を明らかにするため、第6次調査と同様な一辺1mの区画(南北A～Jの10区、東西1～12の12区)を調査区北東隅を起点に設定し遺物取り上げ作業を行った。

第49図Aは出土遺物の多少を区画ごとの総重量として示した。遺物が集中するのは区画石列の東側(D6～F6)を中心とする範囲であり、区画石列の西側および南東側の周濠部でも一定量が出土している。一方、東造り出し南辺の基底石周辺にあたる区画(C1～7、D1～4)では、ほとんど遺物が出土していない。西造り出しの出土状況とは大きく異なっており、後世の削平による影響だけでなく、東造り出し本体と付加的施設との高さの差が削平時期の違いとして現れ、結果として遺物の分布にも影響を与えたのかも知れない。なお、今回の調査で出土した埴輪の総量は約70kgであり、同様な計測方法を行った西側造り出し北辺部の埴輪出土総量約135kgに比べると少なかった。

第49図Bには、整理作業で種別が明らかになった形象埴輪の出土地区を示した。形象埴輪では水鳥・蓋形・壺形・家形を確認しているが、盾・草摺形は出土していない。水鳥形埴輪は恵蔵山古墳における初出例で、頭部～頸部片の他に尾羽・脚・翼・胴体部の破片があり、そのほとんどが区画石列中央部の東側3m四方の範囲から出土した(a)。頭部～頸部片は1点だけで、区画石列に近い東側中央のE9区から出土した。脚部片は突帯上面に線刻を施したもので、3個体分がD8、E6・7、F6区から出土しており、複数の水鳥形埴輪が配置されていたことを示している。胴体、翼および尾羽の破片はE5・6、F5・6で出土した。こうした水鳥形埴輪片の分布状況から、水鳥形埴輪は区画石列の西側、想定される付加的施設の上に配置されていたものが削平などによって礎敷部分に動かされた可能性が高い。また、付加的施設の上に水鳥形埴輪を配置し、礎敷を施すことで州浜状の情景を表そうとしたものと考えられる。

家形埴輪は東造り出し南辺の基底石、壺形埴輪は区画石列に近い区画で出土した(b)。蓋形埴輪には立飾部と笠部の破片があり、いずれも区画石列に近い区画で出土している(c)。

円筒埴輪、朝顔形埴輪の出土地点は図示していないが、口縁部から突帯3条分を復元できる個体がD6・7、E7を中心とした区画で出土した。

なお、後世の遺構としては、耕作に関連する後世の溝3条、井戸1基、土坑2基をした。いずれも埴輪片以外の遺物が僅かであったため詳細な時期は分からないが、中近世以降のものと考えられる。このなかで最も新しい時期のものが溝S D02・05、井戸S E 12であり、染付等が出土していることから近世以降に掘削されたことが分かる。溝S D04は重複関係から溝S D02より古い段階に位置づけられる。溝S D02・04は前述したように北側の10～3区まで延びることが明らかなものであり、さらに、溝S D02は造り出し周辺域で行われた第8～10次調査において検出された溝とはほぼ同じ方向に掘削されている。

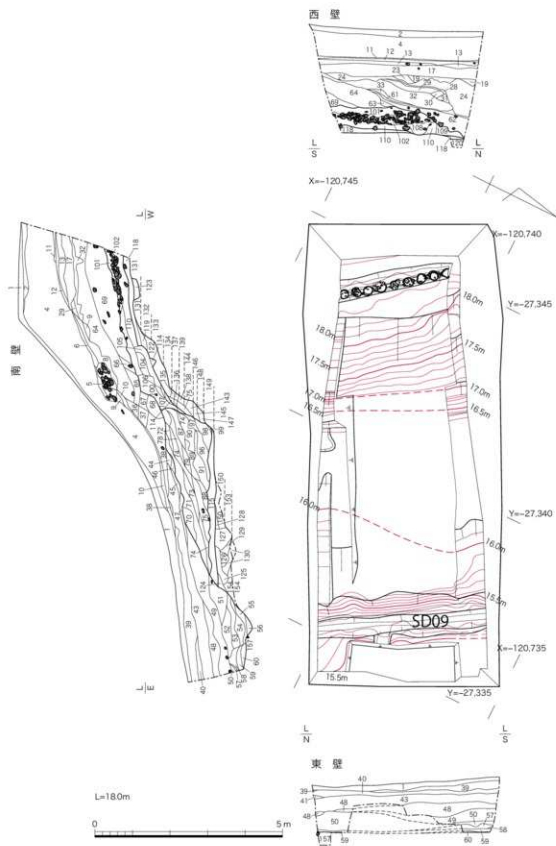
第5節 前方部の調査

前方部では、最も多くの調査を実施しており、墳丘を復原する上での貴重な調査成果を得ることができている。以下では、8-3区から南に向って時計回りの順で調査の所見を説明する。

(1) 8-3区 (第50～52図、図版37・38)

前方部東側の第1段平坦面から第2段平坦面およびこれにかかわる傾斜面付近の様相を掌握する目的で設定した。調査開始前の現状は、鬱蒼とした竹林の東辺部であった。地形は、墳頂部に所在する墓地から1段下った蓮華台や棺台の置かれているテラス面から急傾斜で残存墳丘裾部を下る傾斜地である。調査にあたり、調査区の竹を伐採した後、重機により竹の地下茎が縦横にはびこる表土(第1層)と近・現代盛土(第2～34層)を除去し、以下を人手による精査の対象とした。調査区は、幅約5m、長さ約11mである。

当調査区の土層は、近代以前の複雑な土層堆積があり、古墳本来の土層との識別に困難を極めた。近・現代の土層のうち第2層は、調査区の西辺の蓮華台などのある平坦面地表整地層である。第4層は、その平坦面を広げる際の盛土である。昭和55年の副葬品埋納施設発見のきっかけとなった墓地造成工事に伴うものと思われる。第11層は、現代の墓地造成前の地表面整地層で、以下第34層までが、その折の整地盛り土である。第14・16層にはアスファルトやコンクリートなどが含まれていた。第35～38層までは、近代の傾斜面崩落土と思われる。第39～49層は、傾斜面を平坦面に整地した土層と考えられる。第50層から第60層は、当調査区東辺で検出した溝S D 09の埋土である。第56層は当溝の流水を示す砂礫層で、それより上は溝の機能を終えた段階に埋められた土層と考えられる。第61～63層は、当調査区北西部に堆積していた。火葬骨や六道銭が散乱的に包含された黒色の炭混じり土層である。江戸時代の火葬に関連する土層か、または江戸時代の火葬墓群を削平整地した土層と考えられる。第64～69層は、灰白色から灰黄褐色の粘土層を主とする堆積である。灰白色粘土は、墳丘盛土に用いられている土層(第141層や第152層など)と酷似しており、墳丘盛土の再堆積と考えられる。特に第64層と第69層は、当調査区南西隅に限られた堆積で、各々厚さ約20～30cmと厚い。この直下には、拳大前後の石材を多く含む第101・102・110層の堆積があった。この堆積は、厚さ約10～20cm前後で平坦に見られた。両層には、近世陶器類片のほか、火葬骨の細片が包含されていた。この2層は、色調や土質に大きな差はあるが、火葬骨を含む点、第61～63層と共通する。第100～110層と第61～63層の堆積に、大きな時期差がない可能性がある。この捉え方が正しければ、第64～69層も、ほぼ同時期と考えられるが、堆積原因は分からない。第101層堆積時期の墓地整地が、墳丘を開削して行われた結果、墳丘側に崖面が生じ、その崖面が崩落したための堆積とも考えられる。そうだとすれば、第64・69層が、実測図表現の分層以上に細かく分けることが出来ないひとまとまりの土層であったことも合理的に解釈できる。第70～99層は、灰白色を主とする砂礫や粘土の傾斜堆積の重なりである。この土層群からは



第50図 8-3区平面・断面図 (1/100)



第51図 8-3区断面図 (1/100)

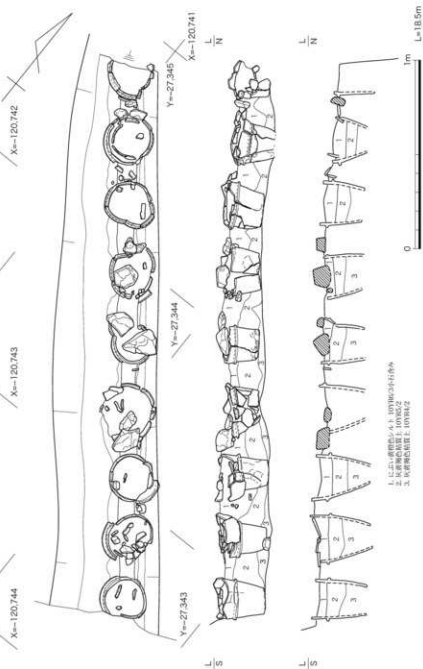
鉄製農具類が多く出土した。このことは、農具類を主とする別個の副葬品埋納施設があった可能性が浮かび上がった。また、この土層群が、墳丘盛土の再堆積層であることを裏付けた。堆積時期を示す遺物は、第74層から出土した輸入白磁皿がある。この皿の形態は、16世紀後半の所産であると考えられる。この時期に当古墳が土地利用される契機を考えると、山崎合戦が考えられる。したがって、第70～99層の堆積時期は、1582年以後と考えてよいと思われる。第

70～99層の下にある第111～115層は、古墳の東裾を開削したあと耕された耕土と考えられる。埴輪以外の遺物の出土がないため、開墾時期は明らかでない。第112層からは、鞍形埴輪片が出土した。

これらの土層を除去した面の東端部では、硬く締まった灰白色粘土の第156・157層が広がっていた。この層は、標高約15.7m前後にあり、8-1区の地盤を形成する土層で、墳丘盛土にも用いられた(第130・131・141・152層)。その上に、厚さ約20cm前後の黑色土(第153・154層)が堆積していた。この層は、他の調査区で見られる古墳構築期の旧表土層と考えられて

いる土層に類似するが、上面の標高が約15.88mと、他の調査区で検出されている標高に比べて40～50cm低い。調査区南辺の溝S D 09西方付近では、第153・154層を掘り込んだ土坑状遺構があり、土坑埋土第127層から弥生土器片が少量出土した。これより西には墳丘盛土(第131～152層)が厚さ10～30cmの盛土として重なり、西に高くなる。西辺部は東辺部より約1.5m高くなって、第2段平坦面を黄橙色の第118層が、厚さ約20cmでほぼ水平に覆う。

第2段平坦面には、そこに巡らされた埴輪列がある(第52図)。第2段平坦面の標高は、約18.3～



1. 土坑埋土第127層(弥生土器片)
2. 灰白色粘土(第156・157層)
3. 黒色土(第153・154層)

第52図 8-3区埴輪列実測図(1/20)

18.5 mで、埴輪列は布掘りの溝内に立て並べられていた。埴輪は、第1段突帯付近まで埋められた状態で検出した。このことから、第2段平坦面の検出面が、ほぼ古墳構築時の平坦面と考えられる。このことは、埴輪樹立用の布掘り溝の深さや幅が、古墳構築当時の規模であることを示している。

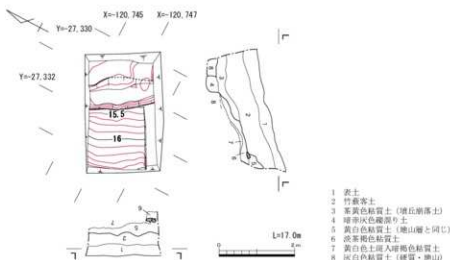
布掘り溝は、幅は約35～58 cmで、北に向かって狭まる。深さは約20 cmを測る。検出長は約3 mで、調査区北端の約30 cm間は、江戸時代の遺物包含層が落ち込み、そこにかかる樹立埴輪が縦に半裁される形で、埴輪北半部は欠損していた。埋土は3層からなる。上層の第1層には拳大から20 cm前後の石材や埴輪片を含む。第1層に包含された埴輪片には、樹立埴輪から割れ落ちた状況で出土するものや、接合関係にあるものが含まれていた。このことから、第1層は、樹立埴輪の耐久年月経過後の自然堆積と考えられる。第1層に包含されている20 cm大の礫などには、直接樹立埴輪の残存上端に接する出土状況のものもあり、第3段斜面葺石の転落石が、埴輪を損壊させた可能性がある。第1層の下方への沈み込みは、土圧によるものと思われる。第2層以下には埴輪片や石材をほとんど含まず、埴輪固定用の埋め土と考えられる。

布掘り溝に樹立された埴輪は、溝検出長約3 mの中に約35 cm等間で9個体、ほぼ元位置を保って出土した。埴輪は、すべて第1段突帯よりわずか上まで残存していた。埴輪内には、溝S D 10同様に3層の堆積があり、各層は溝S D 10の埋土に共通する。第1層に包含されている埴輪片には、各々の樹立埴輪と接合関係にあるもののほか、当樹立埴輪列と接合関係にない基底部の埴輪片などもある。当樹立埴輪に関係しない埴輪片は、埴頂部の埴輪列から崩落して、偶然に第2段平坦面埴輪列の埴輪内に入り込んだものと考えられる。

埴丘西斜面開削部分に堆積した古墳埴丘盛土起源の再堆積土層のうち、第73～77層には、農具類を主とした多くの鉄製品が包含されていた。出土状況は、1点ずつ完形品で見つかる場合はなく、ほとんどの場合は、錆により数点から十数点が塊となって、散乱した状態で包含されていた。このことから、第70～99層は、主に、鉄製品を埋納していた施設を含む埴丘の盛土が再堆積したものと考えられる。鉄製品には、鉄斧、鋤先、鎌、刀子などの農具のほか、剣、鐵等の武器類も混っていた。第3次調査で検出された鉄製品埋納施設には、武器類を主に納めており、鉄斧など農具類は含まれていなかったことから、第3次調査検出の副葬品鉄製武器類埋納施設とは別に、一部武器類を含む鉄製農具類を主に埋納した施設があったと考えられる。鉄製農具類を含む第74層からは戦国時代の輸入白磁皿が出土し、埴丘の開削・改変の一時期が捉えられる。またこの堆積には、長岡京期の土器類を含む層や平安時代から鎌倉時代の遺物も含む層が挟まれていた。これらの遺物を含む土層は、埴丘裾の堆積が起源と考えるか、埴丘上で何かの手が加えられたと考えるか、明確でない。

(2) 7-3区 (第53図、図版36)

7-2区の東側に設定した長さ約3 m、幅2 mの調査区で、埴丘の盛土や地山の堆積状況確認を目的とした。



第53図 7-3区平面・断面図 (1/100)

厚さが0.8～1mほどある表土と竹藪の客土の下で、墳丘の盛土と灰白色系の粘質土層からなる硬質の地山を検出した。また、東端部では近現代と考えられる幅0.5m、深さ0.3mほどの素掘り溝が前方部の方向に沿って南北方向に開削されていた。墳丘を構成する盛土は、非常に硬質で、黄白色系や淡茶褐色系の粘質土を使用しており、おおむね水平に堆積する2、3層の単位で構成されていることを確認した。

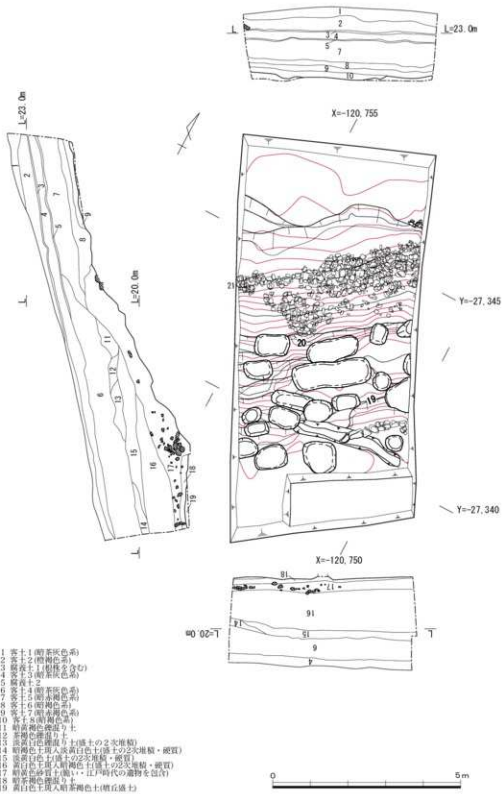
しかしながら、調査時点で墳丘の盛土と判断した上述の堆積層は、その後第8次調査の8-3区によって墳丘の盛土であることには相違ないが、旧状を保持した状態のものではなく、後世に上方から移動されて地山面上に2次的に再堆積したものであることが判明した。

ちなみに、遺物はほとんど出土しなかった。

(3) 7-2区 (第54図、図版39・40)

第3次調査で検出した副葬品埋納施設の南東部に設定した調査区。前方部西側の斜面を確認する目的で設定したもので、長さ9.5～11m、幅5mある。

調査区の層序は、第1～第10層までが竹藪の客土や腐葉土であり、全体で1～2m前後の厚さがあった。その下は、調査区の西部が削平を受けた墳丘面になっていたが、東部では第11～15層が堆積していた。淡黄白色系や暗褐色系の粘質土からなるこれらの層は、厚いところで1m前後あり、非常に硬質で、遺物を全く含んでおらず、墳丘の盛土に極めて類似したものであった。その下の第17層は、転落石や埴輪片とともに江戸時代の土師器や寛永通寶などを含む軟質の土層で、それを除去した段階で前方部東側の第3段斜面と第2段平坦面を検出した。第3段斜面は、上部が削平を受けていたが、斜面の下端から中位までの高さ約3m分、標高にすると21.5～18.5mの範囲を確認した。断ち割りを行っていないので、詳細は不明であるが、墳丘の盛土は全体的には暗褐色系の粘質土を多用しているようである。



第54図 7-2区平面・断面図 (1/100)

斜面には葺石を施していたが、流失や近世に土葬墓群が造営されたことにより、遺存状態は良好ではなく、基底石とみられる石列と斜面上部に高さにして約1m分が残存していたのみである。基底石は8石、長さにして1.8m分を確認したが、土葬墓が造営される際に動かされ、旧状をとどめていない可能性がないとはいえない。しかしながら、斜面下端から平坦面に移行する傾斜変換線上に並んでいること、長軸の長さ20～40cmの大振りな石材を横方向にして直線的に据え置いていることなどから、基底石と判断した。斜面上部の葺石は、10cm程度の石材を墳丘に差し込むよう小口積みにしていた。傾斜面の角度は、約28°である。

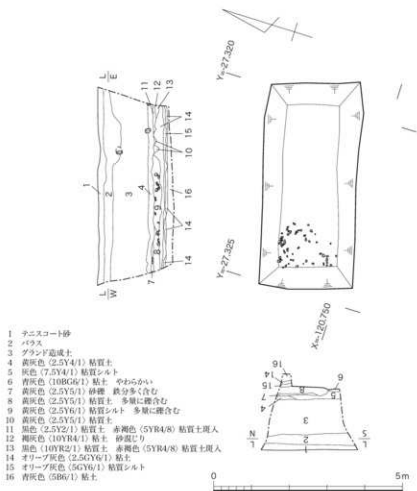
第2段平坦面は、全体の幅を確認することはできなかったが、少なくとも1.75m以上あることを確認できた。この範囲の中に、埴輪列は検出できなかった。平坦面上の標高は18.5m前後あるが、南の方向、すなわち前方部の先端に向かって非常に緩やかにではあるが傾斜していた。この数値は、第5次調査の5-1区で確認された西側第2段平坦面での標高とほぼ一致していた。平坦面上には、転落石が多量に堆積し、また土葬墓の造営も及んでいた。

傾斜面の下半部から平坦面を利用して造営された土葬墓は19基程度あったが、掘り下げを行っていないため、詳細は不明である。円形や楕円形を呈するものが中心で、埋土は非常に脆弱で、人骨の遺存するものや、土師器、寛永通寶などが出土したものを確認している。

(4) 10-4区(第55図、図版36)

前方部東側では、第2次調査のG1区において転落した葺石の堆積を確認しているが、墳丘裾の基底石と原位置を保つ葺石については未確認であったことから、改めて前方部の墳丘裾部を確認することを目的に設定した。

調査区は、ランド整地土と水田耕作



第55図 10-4区平面・断面図 (1/100)

土を除去すると青灰色粘土層の直上に細かな石と砂礫が堆積する。転落石は皆無で、もちろん基底石や葺石についても確認することはできなかったが、東壁には東造り出しの盛土に類似した暗灰色系粘土が重なる状況が認められたにすぎなかった。

(5) 11-5区 (第56～58図、図版41・42)

11-5区は前方部東側の裾部に設定した調査区で、第11次調査の補足確認調査として実施した。調査の目的は、東造り出しの南辺で行った11-1区において南へ延びる区画石列が検出されたため、この石列が南側へさらに延びるものであるのかを確認することであった。また、恵解山古墳の前方部東側では、これまで墳丘裾部の状況が明確ではなかった。このため、墳丘裾部から周濠部にかけて、第2次調査のG-1区と一部重複するように設定した。

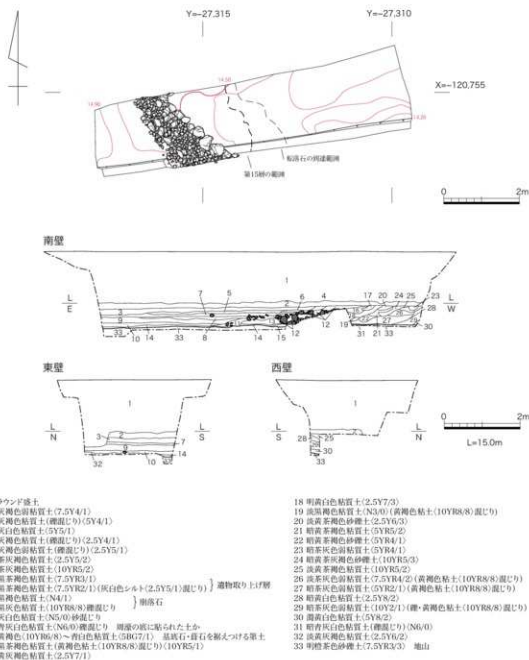
グラウンド盛土の下には全域に旧耕作土が認められ、この段階で第2次調査のG-1区を認識することができた。周濠は東西幅約6mにわたって確認した。周濠埋土には、上層の茶灰褐色弱粘質土(第56図第7・8層)、下層の黒茶褐色粘質土(第9・10層)があり、周濠底部である灰白色粘質土(第14層)に至る。周濠埋土の出土遺物は少なく、埴輪片以外では下層から長岡京期から平安時代の須臾器片が少量出土しただけであった。周濠部の調査では、第9層を除去した段階で転落石の分布範囲を確認できた。このことから、重複する第2次調査のG-1区では、転落石が現れた段階で掘削を終えられており、周濠の底部や原位置を保つ葺石などは明らかにされていないことが分かる。転落石は後述する基底石から幅約2.5mまでの範囲に分布しており、その縁辺には比較的大きな転落石が認められた。

第14層は厚さが3cm程度しかなく、その下からは地山である明橙茶色砂礫土(第33層)が現れる。墳丘裾部の断面観察では、第14層が基底石を据えるために施された青灰色粘質土(第15層)を覆う状況が確認できた。今後検討を要するが、第14層は葺石施工後に施された可能性が高く、周濠底に貼られた化粧土とも考えられる。周濠底部の標高は14.4mを測り、現地表面から周濠底部までの深さは約2mであった。

なお、調査対象であった東造り出しの周辺に施された礫敷や区画石列に関連するものは確認できず、本調査区まで伸びていないことが明らかとなった。

本調査区の西半部では、前方部東側第1段斜面の基底石と斜面の葺石を確認することができた(第56図)。

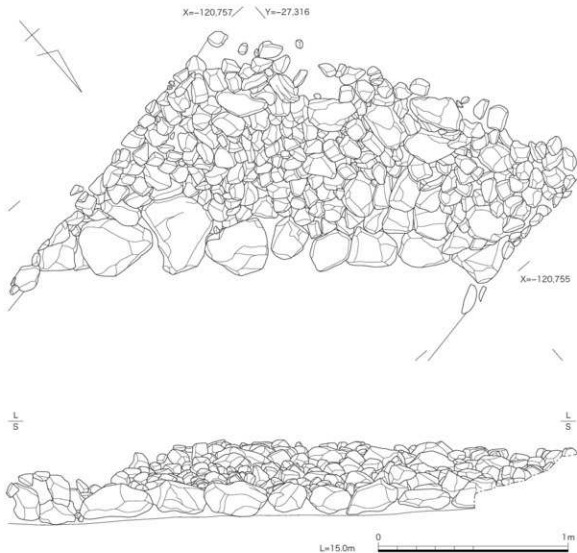
第1段斜面の裾部では基底石を9石検出している。検出した基底石列の長さは約2.5mを測り、その位置は前方部東側裾部の推定位置にほぼ合致していた。基底石には長軸30～50cmの石材が用いられており、なかでも南側の3石はこれまで恵解山古墳で確認された基底石でも比較的大きな部類に属する。石材には砂岩が主体として用いられ、他に少量の頁岩、粘板岩などが含まれていた。基底石はいずれも青灰色粘質土の上に据え置かれており、最も大きな基底石以外のものは長側辺を周濠側に向けて配置されていた。検出した範囲では基底石に乱れは認められず、また



第56図 11-5区平面・断面図(1/100)

非常に安定した状態で残されていた。北半部の小振りな基底石3石の内側には、やや高い位置にほぼ同じ大きさの石が配されている。

今回検出した基底石の位置は、第5・6・7・12次調査で検出された前方部西側裾部の基底石位置を、推定される古墳主軸を中心に東へ反転した線より約0.2m周濠側にあたる(第58図)。こうした基底石配置の誤差には、前方部裾部の出入り、周濠底から第1段平坦面までの高さの東西差、あるいは東側と西側における前方部隅部の形態差など様々な要因が想定できる。また、前方部裾部の角度も西側に比べてやや開き気味であり、今回のように限られた範囲の状況から判断することは困難である。今後、前方部南東隅を確認することや、前方部東側裾部の追加的な調



第57図 11-5区葺石実測図(1/20)

査が必要と考えられる。

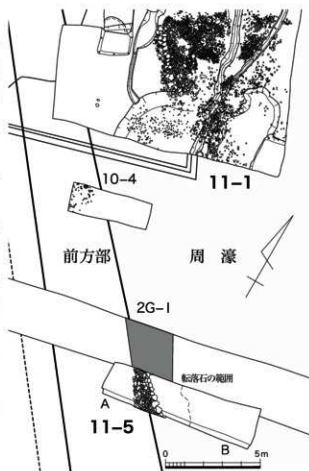
第1段斜面の葺石は比較的残りが良く、基底石の底部から約0.5mまでの高さが残存していた。検出した第1段斜面の傾斜角度は17°前後を測る。斜面の葺石が確認された他の調査区と同じように、この部分においても長軸15cm前後の石材を用い、小口を墳丘に突き刺すようにして施工されていた。また、葺石間の隙間には青灰色粘質土ないし黄褐色粘質土が認められることから、葺石も基底石と同じように粘質土の上に葺きより安定させていることが分かる。

斜面の葺石では、斜面に直交する方向の石列1条、斜行方向の石列1条の他、基底石の底部から約0.4mの高さで斜面に並行する方向の石列1条を確認した。石列には長軸30cmまでの石材が用いられ、多くの石材が長側辺を周濠側に向けて配置されていた。

本調査では、前方部裾部の構築状況を確認する目的で断ち割り土層観察を行い、基底石から約3.6m墳丘側までの範囲が盛土によって造成されていることを明らかにした(第56・58図)。断ち割り土層観察を行った葺石検出範囲の西側は、耕作土直下で墳丘を構築するための盛土が現れ

る。盛土の厚さは0.5m前後を測り、粘質土、砂礫土（第56図第16～31層）などが複雑に用いられていた。断ち割り部分の西側では12-1区と同様に、粘質土を土手状に盛り上げ、次いで内側の窪んだ部分に異なった土を充填している状況が確認できた。盛土内からは僅かではあるが、弥生土器、埴輪の細片が出土している。

盛土の下からは、周濠部分で確認した地山（第33層）が現れる。地山の高さは周濠部分とほぼ同じ高さであり、前方部東側でも西側と同じように、裾部が地山を掘削した後に盛土によって構築されていることを確認した。ただし、西側では側面の全てが盛土で構築されているのに対し、東側における盛土構築の範囲は明らかになっていない。



第58図 11-5区周辺平面図 (1/200)

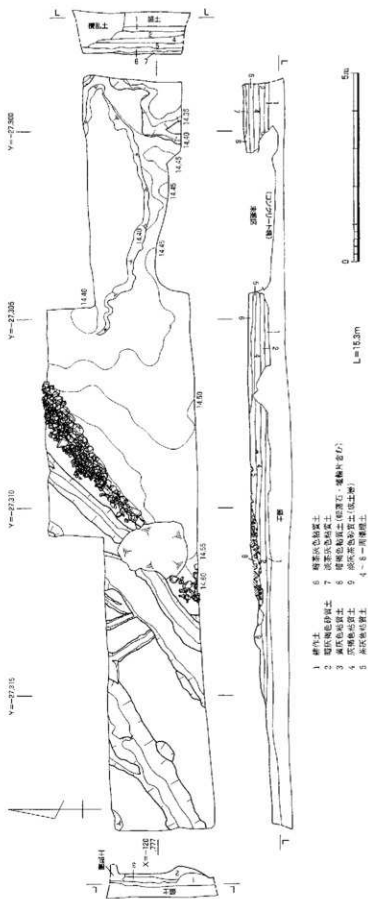
(6) 4-2区 (第59・60図、図版43・44)

現存する前方部南東隅より東側の造成地に設定した調査区で、前方部南側ないし東側の裾部を確認することを目的とした。幅約3m、長さ約20mの規模で設定したが、葺石を追究するため調査区の一部を拡張した。墳丘の大部分は地山面まで大きく削平をうけていたが、墳丘裾部に施された葺石とその背後に施された盛土層、周濠の堆積状況などを確認した。

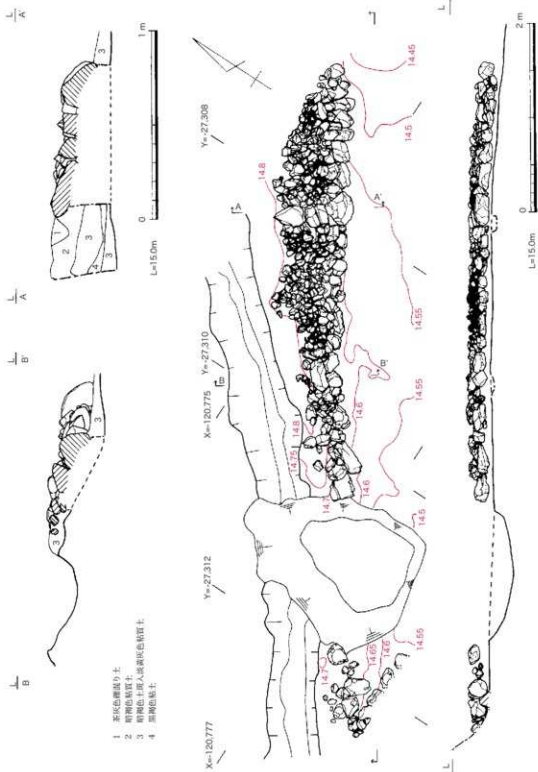
盛土（造成土）で覆われた調査区の層序は、第1層が耕作土、第2・3層が床土であり、第4～8層までが周濠内に堆積した埋土と考えられた。第8層には、多量の転落石が埴輪片とともに堆積しており、また第5・6層には長岡京期の遺物を包含していた。

墳丘の裾部の形成にあたっては、斜めに削り出された地山の前面（南東側）に盛土を施して構築していることが明らかになった。盛土の堆積状況を観察すると、黒褐色～黒色系の粘質土とそれを混じえた黄灰色系の砂質土を交互に薄く積み重ねており、その一部は周濠の底部にまで及んでいた。平面的にみると西から東に向かって徐々に幅を増加させる傾向が認められるとともに、調査区の東端部に北に屈曲して広がっている状況を確認することができた。前方部の南東隅に向かって盛土の範囲が広がって行くのであろう。

葺石の検出にあたっては、傾斜面から転落した大小様々な石材が周濠にまで広範囲に堆積しており、原位置をとどめたものとの区別が苦慮した。葺石は、基底石とその上方に幅約0.8m、東



第59図 4-2区平面・断面図 (1/100)



第60图 4-2区冢石実測图 (1/20・1/40)

西方向に長さ約8.2m分を確認することができた。基底石は、長軸が20～40cm大ほどの石材を横方向にして据え置いていたものが多いが、縦方向に使用したのもあった。地山上に直接据え置いたものではなく、周濠内に向かって薄く貼り付けられた盛土と同質の土層上に施されていた。基底石下端の標高は、14.5m前後である。基底石より上位に施された葺石は、10～20cm程度の石材を使用しており、墳丘面に対して長軸を盛土内に挿し込む状態、すなわち小口積みにして葺かれていた。裏込めは存在しない。また、基底石と同じ大きさの石材が基底石とほぼ直交するように配された石列を2箇所を確認した(図版44)。この石列は、間隔が1.7mほどあり、葺石を葺く際の作業単位を示す区画のための石列ではないかと考えられる。

なお、葺石の西側においては、前方部前端の方向に平行する溝を2条検出した。これらの溝は、地山面を掘り窪めたもので、断面U字状を呈しており、近世以降に掘削された溝と推察することができる。

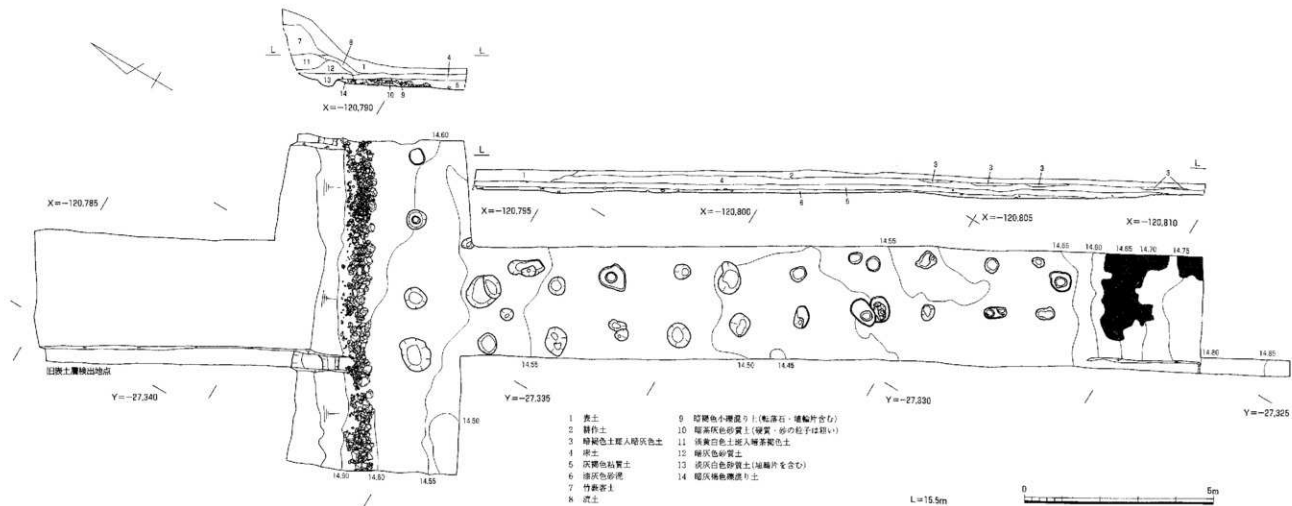
(7) 4-1区(第61・62図、図版45・46・60)

前方部南側の墳丘裾部と周濠の規模や構造などの解明を確認する目的で設定した調査区で、竹藪に覆われた墳丘から南側の水田面にかけて、おおむね墳丘の主軸に沿うように設定した。幅約3m、長さ約31mで、葺石を追究するため調査区の一部を拡張した。第1段斜面の裾部と周濠の規模、構造などを確認した。

第1段斜面の墳丘は、後世に大きく削平を受けてほとんど残存していなかったが、裾部に施された葺石と盛土の一部を確認できた。墳丘盛土は、裾部の形成にあたり斜めに削り出された地山の前面(南側)に施されていたもので、残存する範囲は乏しかった。断ち削りの結果、古墳築造時の旧表土層と見られる黒色～黒褐色系の土層を、前方部南側裾部から北に約8mの地点で確認した。旧表土層は、淡茶褐色砂質土の地山面上に堆積しており、厚さは40cmほどあるが、細かく見ると4層に細分することができた。各層は、それぞれ10cmほどの厚さで、いずれも水平に堆積しており、上面の標高は16.1～16.3mである。こうした古墳築造時の旧表土層は、今里大塚古墳や長法寺七ツ塚古墳群の調査で確認されている。

葺石の検出にあたっては、周濠内にまで広範囲に堆積していた大小様々な転落石を除去し、基底石とその上部に約0.7mの範囲、東西に長さ約8.7m分を確認できた。遺存状況は必ずしも良好とはいえない状態で、すべてが原位置をとどめるものではなかったが、それに近い状態のものだと判断した。基底石は、長さ20～40cm大の扁平な石材をおもに横位の状態にして据え置き、その下端の標高は14.7m前後である。基底石より上位の葺石は、遺存状態が必ずしも良好ではなかったが、10～20cmほどの石材を小口積にして葺いていた。葺石面の傾斜角度は20°前後であるが、遺存状態が良好ではないため、このままの傾斜角で上方に立ち上がるか否かは確認できなかった。

周濠は地山を削り出して構築しており、底部での幅約18.5m、深さは0.3m前後しかない窪地といった程度の非常に浅いものであることが判明した。底部はおおむね平坦で、最深部の標高



第61图 4-1区平面・断面图 (1/100)



第62图 4-1区葎石夷測図 (1/20・1/40)

は14.45m前後であるが、楕円形や不整形を呈した土坑状の浅い窪みを31基ほど確認することができた(図版60)。こうした土坑状の遺構は、径が0.3～0.9m、深さが0.05～0.2mほどしかない非常に浅いもので、すり鉢状に掘り窪められていた。東西に4列以上、南北に11列並ぶように配されており、それぞれの間隔は東西が1.8～2m、南北が1.5～1.8mであった。出土遺物は極めて乏しく、土師器の細片と木片を出土したものが少数あるのみで、明確な時期はもとより、性格についても不明と言わざるを得ない。

外堤内斜面は、調査区の南端から北に向かって下降していたが、その傾斜角は5°程度と極めて緩やかなものであった。傾斜面上では、小礫を州浜のように敷いた状態で検出できたが、礫敷きは密ではなく、かなり粗雑な様相を呈していた。小礫は、3～4cmほどの大きさのものが主体で、中には10～15cm大のものが所々に散在していた。石材種の大半がチャートで、他に砂岩や脈石英が少数確認されている。

周濠内には、上から灰褐色粘質土、漆灰色砂泥、淡茶灰色粘質土の3層が堆積しており、そのうちの漆灰色砂泥中には、少量の埴輪片の他に、長岡京期の土師器、須恵器、瓦、中世の瓦器、須恵器、白磁、結晶片岩などの遺物を包含していた。

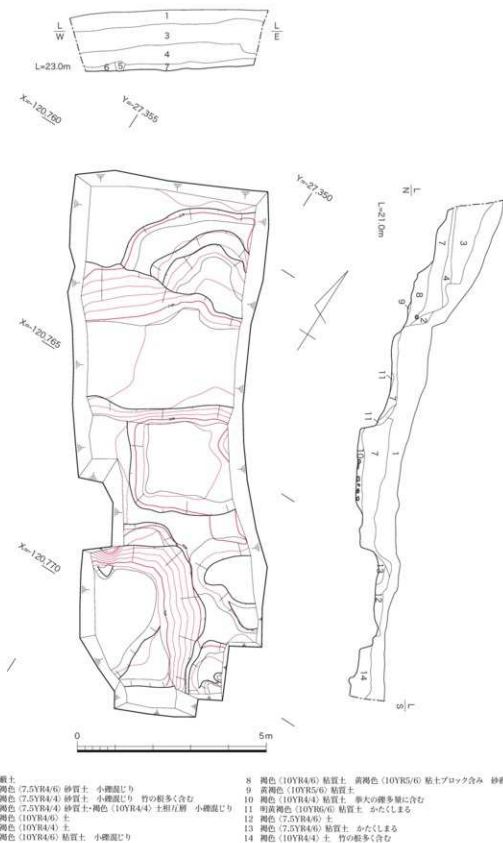
(8) 10-1区(第63図、図版47・48)

副葬品埋納施設の南側に設定した長さ14m、幅4mの調査区である。この調査区は、恵解山古墳の中軸線が想定される前方部の副葬品埋納施設の延長線上に設定した。本調査は、前方部で最も高い標高約23mの竹藪で、これより墳丘裾に至る南面は土取りの凹みと崖面が残る緩やかな斜面となる。竹の根が張る表土と竹藪の客土に覆われており、これらの土層を除去すると、黄白色系の粘質土と小さな礫を含む橙色系の土で構成される墳丘の盛土層があらわれた。

墳丘の盛土層には、北から南へ下る階段状の高低差ができており、1m以上の段差が2ヶ所で確認できた。上段の標高は現況で22m前後あり、北側の副葬品埋納施設と比べて約0.6m高くなっている。中段は、幅2m程の平坦面から約0.5m低くなった平坦面が南へ続いている。段差があるところに深さ0.7mの方形掘形があり、東へ延びる。標高は同じく20m～20.2mである。下段は、さらに約1.3m掘り下げられた掘形が西と南へ延びる。底面の標高は18.6mで、上段との高低差は約3.4mである。底には小さな礫が多量に投棄されていた。なお、下段の東壁では南が高く北に下がる傾斜角約20°の硬く締まった粘質土を細長く積み重ねた墳丘盛土の構築状況が観察できた。

このように後世の削平でできた平坦面と、前方部の調査で確認された段築の平坦面を比較すると、5-1区では第2段平坦面の埴輪列が18.5m、8-3区では同じく18.5mとなっており、近似値としては下段の標高18.6mが最も近いが、これは明らかに後世の掘削であろう。上段は削平されており確実な数値は不明である。従って、以上の平坦面は、古墳の段築を反映したものではないと考えられる。

本調査区では、古墳に関わる遺構は皆無に等しく、竹藪の客土層から近世の陶磁器類が出土し



第63図 10-1区平面・断面図 (1/100)

たほかは時期決定できる遺物はなかった。しかし、このように墳丘が大規模に改変された状況は、単なる竹藪の土取りなどでできたものではなく、大掛かりな土木工事が行なわれたことを示唆するものと考えられる。

(9) 7-1区 (第64～65図、図版49)

前方部の南西部に設定した調査区で、長さ12.5～13.5m、幅7mである。この調査区は、第5次調査の5-1区で確認した前方部西側第2段平坦面の埴輪列を追突するために設定したものであるが、大きく削平を受けて平坦化されており、近世以降と考えられる土葬墓や集石墓が営まれているのを確認したにすぎず、残念ながら、埴輪列を検出することはできなかった。ただし、墳丘の構築方法を知る興味深い手がかりを得ることができたことは、大きな成果といえるであろう。

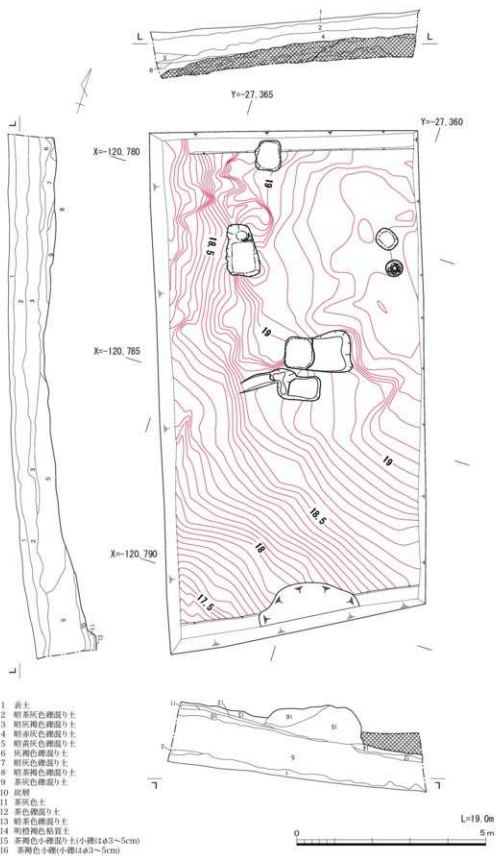
墳丘の盛土は、地表下0.6～1.5mで検出された。盛土の上面は、現状の地表面と同様におおむね北東から南西に向かって緩やかに傾斜しており、最高所での標高は19.3m前後、低所で17.3m前後と、比高は2m前後あった。平面および断ち割りの断面観察により、調査区の東西で盛土の施工方法が大きく異なっていることが判明した。

墳丘の内側にあたる東半部では、暗赤褐色系の粘質土や礫混り土を基本に、比較的大きな単位で、おおむね水平に積み上げて構築していることを確認できた。

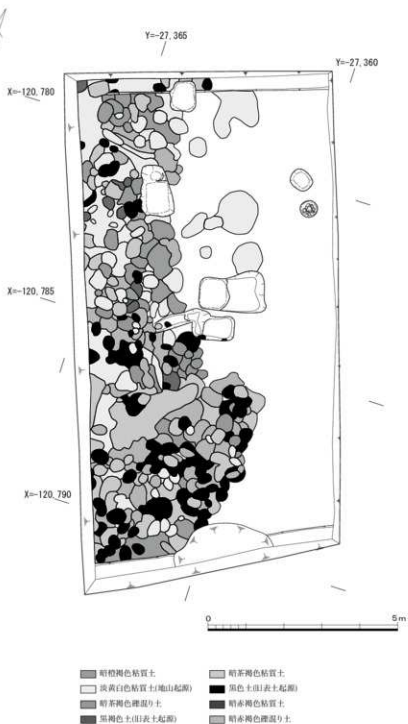
一方、その外側にあたる西半部では、非常に細かい単位の盛土で構成されており、断面形はおおむね厚さ10cm前後の凸レンズ状、平面的には径30～40cm程度の楕円形を呈した小単位がモザイク状に分布している状況を確認できた(第65図)。こうした小単位は、おそらくモッコなどを用いて盛土を運搬する際のひと塊、あるいは土嚢袋などの単位であった可能性が考えられ、9-4区、10-3区で検出された東造り出しにおいても同様の盛土工法が確認されている。盛土に使用された土層は、赤褐色系、茶褐色系、黒色系、黄白色系など色調の異なる粘質土や礫混り土など多彩であった。そのうち、黒色系や黒褐色系の土層は旧表土、赤褐色系や黄白色系は地山を削り取ったものと判断することができる。これらの土は、選り分けて集められたものが交互に運び込まれ、順次積み重ねられたものと考えられる。

この他、平坦化された墳丘盛土の上面で、土葬墓を6基検出した。掘り下げを行っていないため詳細は不明だが、方形、長方形、楕円形を呈するものがあり、埋土は脆弱で、人骨の遺存するものが多い。埴輪の破片が出土したものや、上部に礫をいくつか据え置いて、墓標とするものもあった。北側の5-1区においても、近世墓が確認されていることからすると前方部の西半部はかなり大きな墓地として利用されていたものとみられる。

なお、調査区の南端において小礫が充満した土坑状の窪みが掘り込まれていたが、近現代のものである。



第64図 7-1区平面・断面図(1/100)



第65図 7-1区墳丘盛土の単位 (1/100)

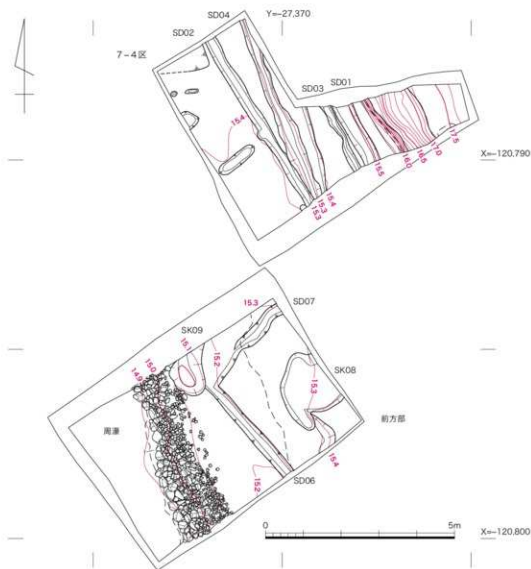
(10) 12-1区 (第66～70図、図版52・53)

前方部西側面に取り付く土手の構築状況を明らかにするため、現存する前方部墳丘および前方部裾部の基底石との関係を知り得る位置に調査区を設けた。このため調査区は、土手の最上部を中心に、墳丘側と周濠側の対角線上に2箇所を設定することになった。

対角線に設けた2つの調査区の南壁と北壁で土手延長方向の断面観察を、西壁と東壁で土手横

断面の観察を行った（第67図）。土手を構築するために盛られた土は第1・10・51・64・104・105層であり、その下には土手構築以前の耕作に関連する土（第14・16・17・56・58・59・65～71・98・99・108・109層）が埋もれていた。このうち第14層は土手最上部の南縁直下で畦畔状に盛り上がっていた。一方、墳丘斜面と土手の接続部分では、墳丘からの流失土（第11～13・23・24・29・49層）や墳丘裾に掘削された溝（第25～28層）を土手構築土が覆っていた。断面観察の結果から、この部分は墳丘側面の大規模な改変が行われた後に耕地として利用され、その後、耕地に設けられていた畦畔を覆うように土手が築かれたことが明らかとなった。

12-1南区では、土手構築土および耕作土の下で厚さ0.3～0.5mの周濠埋土（第73～76層）を確認した。灰褐～黄褐色の第73～75層（上層）と、黒褐色の第76層（下層）に大別でき、上層に中世の遺物、下層には長岡京期～平安時代の遺物が含まれていた。上層の第73層を完全に除去した段階で、後述する前方部基底石から約1m周濠側の範囲で転落した葺石を確認した。転落石は拳大程度が大半を占めるが、なかには基底石、区画石列に使用された大型の石材も認め



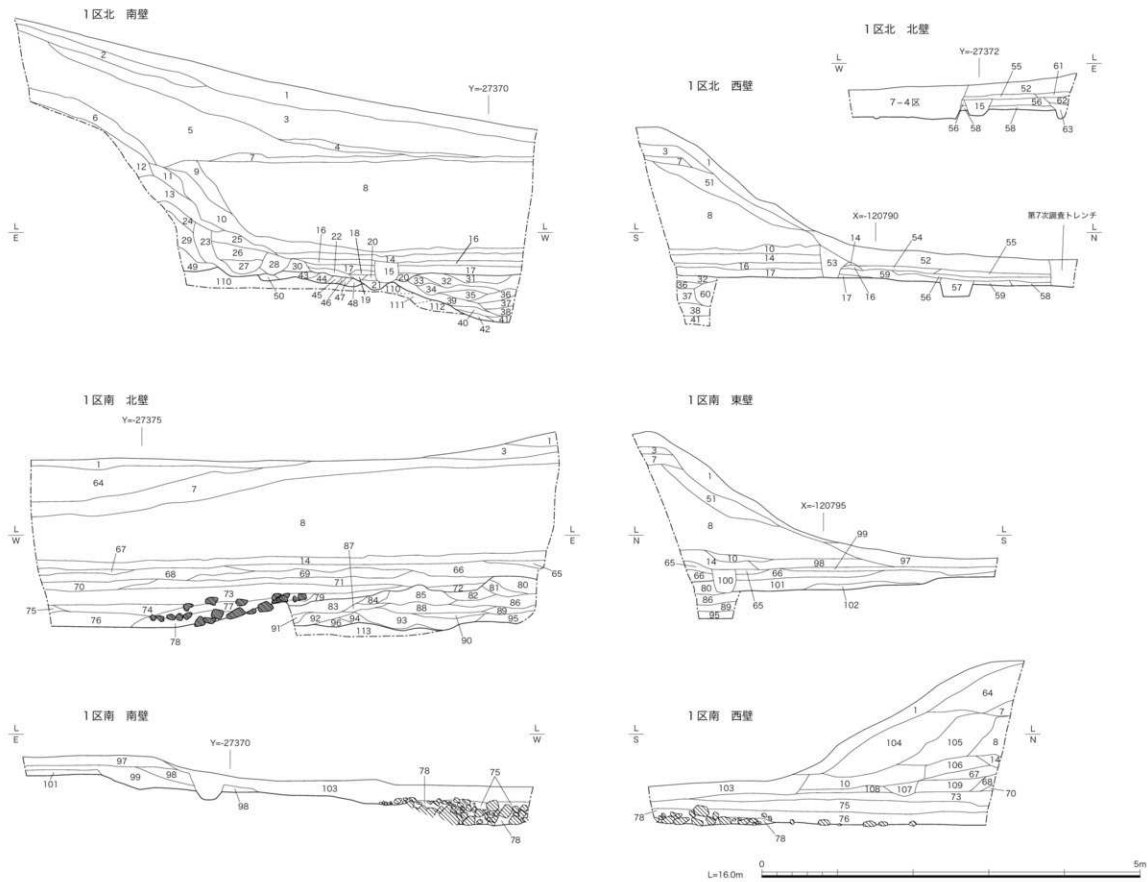
第66図 12-1区平面図 (1/100)

られる。周濠底面の標高は14.8m前後を測り、僅かに南へ傾斜していた。

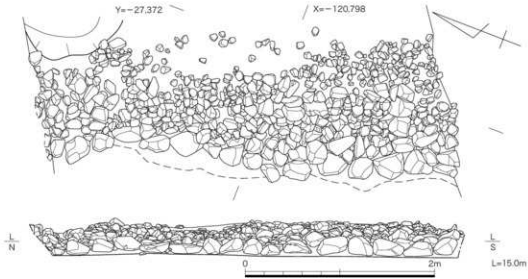
12-1南区では、前方部西側第1段斜面の基石石と葺石を確認することができた(第66図)。基石石の検出位置は、7-4区で検出されていた基石石ラインを5-2区の前前方部南西隅まで延長した推定線にほぼ合致している(第69図)。しかし、部分的に基石石が周濠側へ崩れている箇所や、中央部では基石石ラインの角度が平面的に変化する箇所が認められた。

調査区内では基石石を16石確認した(第68図)。基石石は長軸30~40cmの石材の長軸側を外側に向け、石材を安定させるために施された明黄白色粘質土の上に配置されていた。この明黄白色粘質土は基石石の最縁部より約0.1m外側の周濠底部まで施されていたため、基石石と粘質土の位置関係を観察することで、基石石が二次的に動いたものかを判断する有力な材料となった。第1段斜面の葺石は、基石石底部から約0.3mまでの高さが残存していた。石材には長軸15cm前後のものを用い、小口を埴丘の表面に施された明黄白色粘質土に突き刺すようにして施工されている。斜面の葺石では、斜面に直交する方向の石列1条と、やや石材が小振りて不明

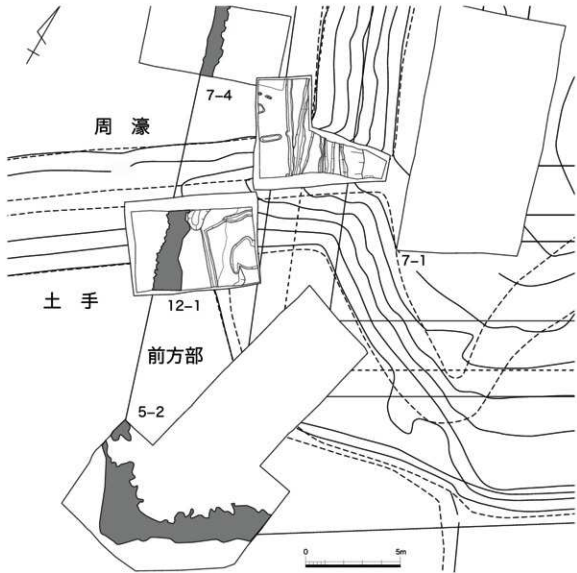
1	薄灰黄褐色粘質土(確認じり)	(7.5YR8/2)
2	薄暗黄褐色粘質土(確認じり)	(7.5YR7/2)
3	淡黄褐色砂質土(確認じり)	(7.5YR7/4)
4	淡黄褐色砂土(2.5YR7/4)	
5	暗黄土色粘質土(確認じり)	(7.5YR2/4)
6	淡黄土色粘質土(確認じり)	(7.5YR7/3)
7	薄淡黄褐色粘質土(確認じり)	(10YR6/1)
8	淡灰褐色粘質土(黄褐色土混じり)	(10YR6/3)
9	暗黄土色粘質土(7.5YR4/7)	
10	淡黄褐色粘質土(確認じり)	(7.5YR4/6)
11	淡茶褐色砂質土(黄・黄褐色土混じり)	(10YR4/3)
12	淡茶褐色砂質土(確認じり)	(10YR4/2)
13	暗黄褐色粘質土(粘質土混じり)	(10YR5/2)
14	暗黄褐色シルト(SB5/1)	
15	薄淡灰褐色砂質土(黄白色シルト混じり)	(5Y5/1)
16	暗灰黄色砂土(10YR6/1)	
17	暗灰色砂土(確認じり)	(10YR7/1)
18	灰色砂土(10YR7/1)	
19	暗茶褐色粘質土(5YR2/1)	
20	暗灰色シルト(10YR7/1)	
21	暗灰褐色粘質土(砂質強し)	(10YR5/1)
22	薄淡灰褐色粘質土(粘質強し)	(10YR5/1)
23	暗黄土色砂土(2.5YR2/2)	
24	暗茶褐色砂質土(10YR5/2)	
25	暗黄土色砂質土(確認じり)	(5Y4/1)
26	淡黄土色砂質土(確認じり)	(2.5Y5/2)
27	暗黄土色砂質土(確認じり)	(2.5Y5/2)
28	薄淡茶褐色粘質土(確認じり)	(10YR5/2)
29	淡茶褐色砂質土(10YR5/2)	
30	淡黄褐色シルト(2.5Y6/2)	
31	薄淡茶褐色粘質土(確認じり)	(7.5YR4/1)
32	薄淡茶褐色粘質土(灰色シルト混じり)	(7.5YR5/3)
33	暗茶褐色粘質土(黄褐色土混じり)	(7.5YR3/2)
34	薄淡茶褐色粘質土(灰色シルト混じり)	(7.5YR4/1)
35	暗茶褐色粘質土(黄褐色土混じり)	(7.5YR3/2)
36	薄淡茶褐色粘質土(灰色シルト混じり)	(7.5YR4/1)
37	薄淡茶褐色粘質土(黄褐色土混じり)	(7.5YR3/2)
38	薄暗茶褐色粘質土(土部・黄褐色土混じり)	(7.5YR3/2)
39	薄淡褐色シルト(黄白色土混じり)	(N6/0)
40	薄暗茶褐色粘質土(土部混じり)	(7.5YR3/2)
41	薄淡茶褐色粘質土(灰色シルト混じり)	(N3/0)
42	暗茶褐色粘質土(灰色砂混じり)	(10YR7/6)
43	暗茶灰色シルト(黄褐色シルト混じり)	(2.5Y6/1)
44	薄淡茶灰色シルト(灰色シルト混じり)	(10YR7/3)
45	薄淡黄白色シルト(灰色シルト混じり)	(2.5Y6/2)
46	暗茶灰色シルト(2.5Y6/1)	
47	薄暗黄白色シルト(灰色シルト混じり)	(2.5Y6/2)
48	暗茶灰色シルト(黄褐色砂混じり)	(2.5Y6/1)
49	薄淡黄褐色シルト(灰色シルト混じり)	(2.5YR2/2)
50	薄淡黄褐色シルト(灰色シルト混じり)	(2.5YR2/2)
51	薄暗茶褐色粘質土(確認じり)	(7.5YR4/4)
52	暗褐色シルト(粘質強し)	(N4/0)
53	薄淡茶褐色砂土(粘質強し)	(5Y6/2)
54	薄淡茶褐色砂土(7.5Y4/2)	
55	淡灰色シルト(7.5Y7/1)	
56	淡灰色砂土(10YR7/1)	測と同一
57	暗茶褐色粘質土(7.5YR5/1)	
58	暗黄土色シルト(7.5YR4/3)	
59	淡黄土色シルト(7.5Y4/3)	
60	薄暗灰色シルト(黄褐色シルト混じり)	(2.5YR6/1)
61	暗灰黄色砂土(10YR6/1)	
62	暗灰褐色粘質土(確認じり)	(10YR7/1)
63	暗灰色シルト(確認じり)	(10YR7/1)
64	淡黄褐色粘質土(確認じり)	(7.5YR7/4)
65	淡黄褐色シルト(2.5Y7/2)	
66	暗灰黄色粘質土(確認じり)	(10YR6/2)
67	淡茶褐色粘質土(確認じり)	(2.5Y6/1)
68	暗灰黄色粘質土(確認じり)	(2.5Y6/2)
69	暗灰色粘質土(確認じり)	(10YR5/1)
70	淡灰色粘質土(確認じり)	(10YR5/1)
71	淡灰褐色砂質土(確認じり)	(7.5YR5/1)
72	暗灰褐色砂質土(10YR7/2)	
73	淡灰褐色粘質土(砂質強し)	(2.5Y5/1)
74	淡灰褐色粘質土(砂質強し)	(2.5Y5/1)
75	暗茶褐色粘質土(砂質強し)	(7.5YR4/2)
76	暗茶褐色粘質土(砂質強し)	(10YR5/1)
77	暗茶褐色粘質土(粘質強し)	(N4/0)
78	淡灰色粘質土(砂質強し)	(5Y6/1)
79	暗茶褐色粘質土(確認じり)	(7.5YR6/2)
80	薄淡茶褐色粘質土(確認じり)	(7.5YR4/1)
81	薄暗茶褐色粘質土(灰色シルト混じり)	(7.5YR4/1)
82	薄淡茶褐色粘質土(灰色シルト混じり)	(N6/0)
83	薄淡灰白色粘質土(10YR6/1)	
84	薄淡灰色砂土(白色土混じり)	(N6/0)
85	薄淡灰色砂土(黄褐色砂混じり)	(10YR8/1)
86	薄暗茶褐色粘質土(黄褐色土混じり)	(N5/0)
87	薄暗黄白色粘質土(N7/1)	
88	薄暗茶褐色粘質土(黄・黄褐色土混じり)	(N3/0)
89	薄暗茶褐色粘質土(土部・黄褐色土混じり)	(7.5YR3/2)
90	薄暗茶褐色粘質土(確認じり)	(N3/0)
91	薄暗茶褐色粘質土(10YR6/1)	
92	薄淡黄褐色粘質土(灰色シルト混じり)	(N3/0)
93	薄暗茶褐色粘質土(灰色シルト混じり)	(7.5YR7/1)
94	薄淡茶褐色粘質土(灰色シルト混じり)	(N3/0)
95	薄淡茶褐色粘質土(黄褐色土混じり)	(7.5YR5/4)
96	薄淡茶褐色粘質土(灰色シルト混じり)	(7.5YR7/1)
97	淡褐色シルト(粘質強し)	(N4/0)
98	淡灰色シルト(10YR5/1)	
99	淡黄褐色粘質土(確認じり)	(10YR7/4)
100	薄淡茶褐色粘質土(確認じり)	(5Y5/1)
101	暗茶褐色粘質土(確認じり)	(7.5YR4/2)
102	薄暗茶褐色粘質土(5YR2/1)	
103	暗褐色シルト(粘質強し)	(N4/0)
104	薄暗茶褐色粘質土(確認じり)	(7.5YR5/4)
105	暗茶褐色粘質土(確認じり)	(7.5YR4/6)
106	暗茶褐色粘質土(7.5YR7/1)	
107	淡黄褐色粘質土(7.5YR6/6)	
108	淡灰色シルト(10YR5/1)	
109	薄淡茶褐色粘質土(確認じり)	(10YR5/1)
110	暗黄褐色粘質土(2.5YR8/3)	
111	明黄褐色砂土(2.5Y7/6)	
112	明黄白色シルト~黄褐色粘質土(2.5Y7/1~2.5Y8/4)	
113	明黄褐色砂土(黄褐色砂混じり)	(10YR8/1)



第 67 図 12-1 区断面図 (1/50)



第68図 12-1区葺石実測図 (1/40)



第69図 12-1区と周辺調査区の葺石位置関係図 (1/200)



第70図 12-1南区の墳丘盛土(東から)

瞭ながら同じ方向の石列と考えられるものの2条を確認した。第1段斜面の傾斜は9.8°程度と非常に緩やかであり、5-2区で確認された前方部西端に至る斜面の傾斜処理が行われているものと考えられる。

調査では、前方部裾部に施された盛土を確認する目的で断ち割り土層観察を行い、基底石から約14m墳丘側までの範囲が盛土によって造成されていることを明らかにした(第67図)。盛土はその範囲の東側1mが厚さ0.1m程度である

のに対し、それより基底石側は約30°の角度で傾斜し最も厚いところで0.7mを測る。盛土には粘質土、砂礫土、シルト(第31~48・80~96層)などが複雑に用いられており、部分的ではあるが粘質土を土手状に盛り上げ、次いで内側の窪んだ部分に異なった土を充填している箇所も看取できた。盛土内からは僅かではあるが、弥生土器、埴輪の細片が出土している。

一方、12-1北区の東側では、前述した土手構築土および墳丘流出土を除去した段階で、前方部の盛土と黒褐色の旧表土を確認することができた。旧表土上面の高さは標高16m程度、厚さは約0.25mであった。旧表土の上には拳大の礫を含む黄灰色系の墳丘盛土が認められる。

なお、本調査区では、近世以降の耕作に関連する溝6条と時期不明の土坑を1基確認した(第66図)。溝は全て土手構築以前のものであるが、なかでも溝SD02・06・07は土手構築直前の比較的新しい時期が想定できる。また、12-1南区の南東隅には耕作地の段差があるが、溝SD06は段差の境界部分を巡る排水溝と考えられ、段差が土手構築以前の段階から形成されていたことが明らかとなった。

(11) 5-2区(第71・72図、図版50・51)

前方部の南西隅に遺存する高まりに設定した調査区で、当初は長さ約17m、幅約5mの規模で設定したが、調査の進行状況に応じて部分的な拡張を行った。調査前は水田で、現況の弧状に曲がる水路と段差は後の耕作に伴う盛土であった。本来の前方南西隅は、これよりさらに南西地点から確認した。緩やかに南へ傾斜する地山面と墳丘盛土層、おおむね直角を呈する前方部南西隅の葺石が明らかとなった。

墳丘の盛土層は、断ち割りによると5-1区と同様に墳丘周囲の地山を掘り下げて主に茶褐色系と黄褐色系の粘質土で盛土している。ただし、前方部南端の西側については、盛土層の前面に灰白色粘土をさらに盛土しており、その上に葺石と細かな石が敷き詰められている。西端の方形土坑は、中世の攪乱で、深さは約20cmあった。南辺部の葺石は、長さ8m分を検出した。昨



第71图 5-2区平面·断面图(1/20·1/50·1/100)

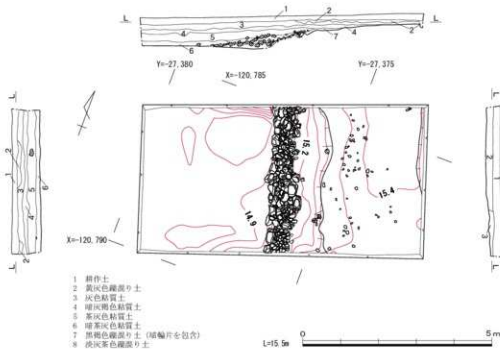
年度の第4次調査で検出した前方部の基底石と直線的に繋がっている。コーナー部分から東へ延びる基底石は、大きな石材を横長に据えた規則的な配置が確認できるが、途中から石材は小振りとなり方向も不揃いになる。西辺部の葺石は、幅約80cm、深さ約20cmの溝底東端に基底石を据えており、南辺より底面が約30cm程度低くなる。コーナー部分から北へ延びる基底石は、大きな石を横長に据えた規則的な配置は途中までで、これより北側は南面より小さなこぶし大ほどの石材を灰白色粘土に貼り付けるように施している。溝と葺石は北端でやや西へ曲がりをはじめており、北側に向かって直線的に延びる状況ではない。前方部の西側については、整地層の前面に盛られた灰白色粘土に細かな礫を貼り付けており、南面と施工方法が異なる。石材は、従来と同じくチャート、砂岩、頁岩～粘板岩が多用されている。

(12) 7-4区 (第71図、図版54・55)

第5次調査の5-1区と5-2区のほぼ中間の水田面に設定した調査区で、長さ7.5m、幅4mの規模である。調査の結果、墳丘から周濠にかけて広範囲に転落石が堆積していたが、基底石を含む遺存状態が比較的良好な葺石を検出し、前方部西側の裾部を確認することができた。

耕作土や床木など第1～3層を除去すると、調査区東部では直ちに地山面が表れた。地山面は、調査区の東端から西へ2mまでで、それより西側は盛土で墳丘裾部を構築していることが判明した。

墳丘の裾部は、茶灰色系の土層を主体とする盛土を施して構築しており、その斜面上に施された葺石は基底石とその上方に幅約0.9mの範囲で確認した。基底石は、長軸が30cm程度の大きさな石材を横方向に使用したものがほとんどで、その上方の葺石は10～20cmほどの石材を多



第73図 7-4区平面・断面図 (1/100)

用するが、30 cm大の大き目の石材も使用していることなど、積み方に明確な規則性は認められなかった。基底石端部のラインは直線的ではなく、若干出入りが認められ、下端の標高は14.9 m前後である。葺石面における墳丘の傾斜角度は、約22°である。基底石から西側は周濠に相当するわけであるが、おおむね平坦になっており、標高は14.85 m前後であった。

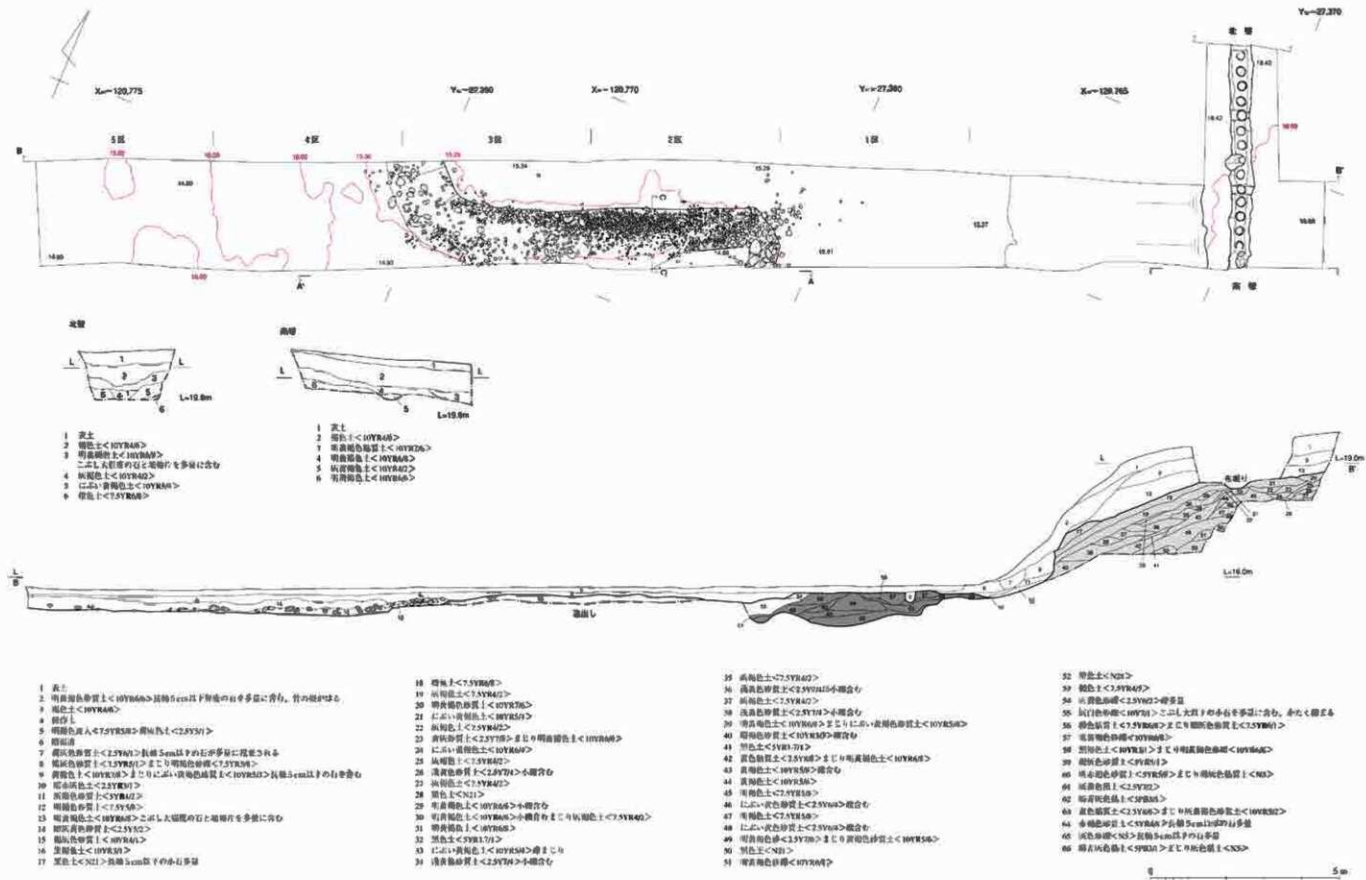
基底石の端部から0.35 mほど内側（東側）の葺石内で2本の杭を検出した。2本の杭はともに一辺が5 cmほどの角杭で、両者は約2.4 mほど離れていた。上部には多量の転落石が堆積している中、葺石の隙間を縫って打ち込まれている状況は、後世のことは考え難く、古墳の築造に伴い意図的に打ち込まれたものではないかと考えられる。墳丘を構築する際の基準杭である可能性も考えられないわけではないが、断ち割って確認していないため、確証はない。

(13) 5-1区（第74・75図、図版19・56）

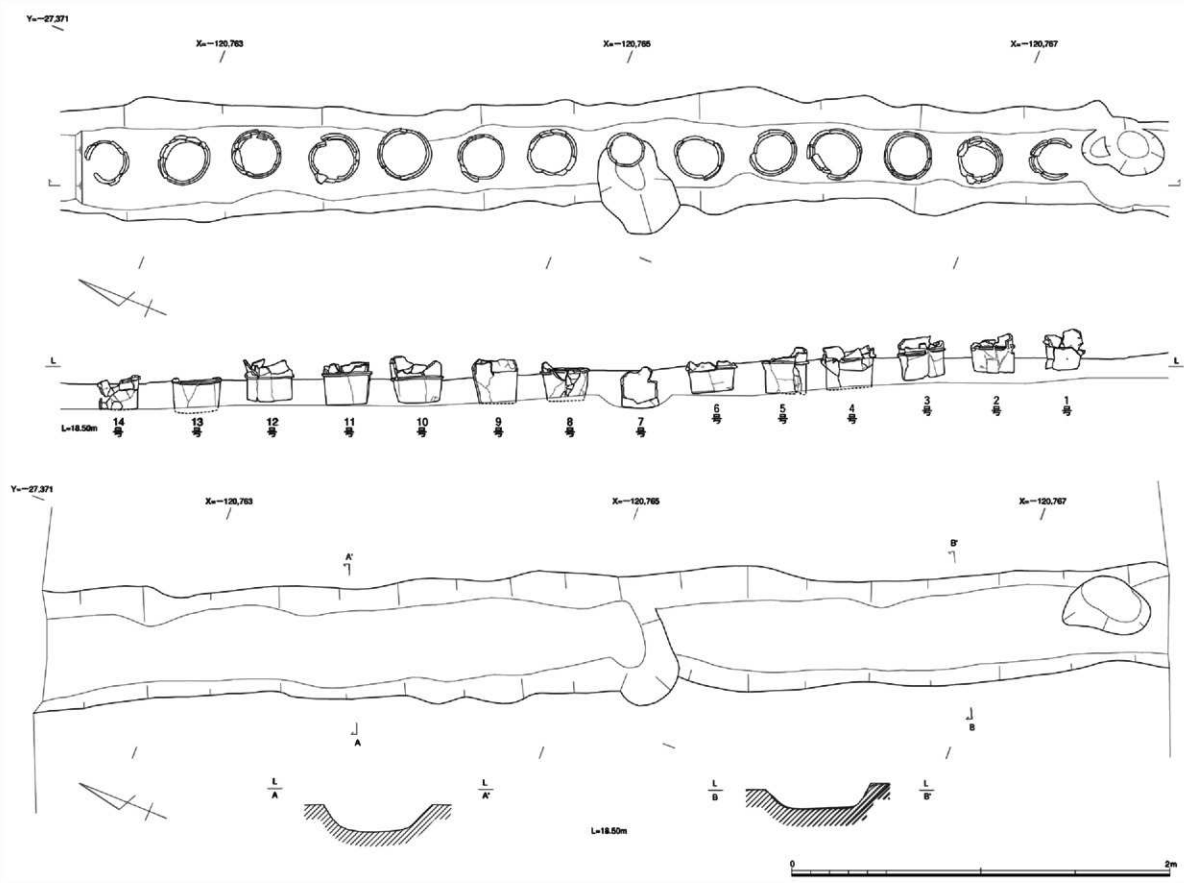
前方部から周濠部にかけて幅約2.5 m、長さ約34 mの規模で設定した調査区で、遺構の検出状況に応じて部分的に拡張を行った。調査前は、前方部側が栗林で、周濠は水田跡であった。調査区の層位は、主に耕作土、表土、攪乱層などの現代の堆積層（第74図第1～13層）、墳丘と周濠内に転落、埋没した再堆積層（第74図14～16）、墳丘を構築する盛土層（第74図17～53）、墳丘の裾部と造り出し（第74図第54～66層）を構築した盛土層に大別される。現代盛土層は、墳丘部分の表土が0.6 m～1 m、斜面部分は0.4 m前後で竹の根株と小さな石が多量に混じる。断ち割りによると、墳丘は現状の墳丘裾より約2 m内側まで削平されており、斜面と同様に多量の石が投棄されている。

この調査区では、前方部西側の第2段平坦面と埴輪列、さらに西造り出しの存在することを確認することができた画期的な調査となった。検出した第2段平坦面では、幅約0.5 mの布掘り溝に樹立する14個体分の埴輪を確認した。このうち、7号は土坑の攪乱で破損しており、1号の南側も土坑で攪乱されている。埴輪の遺存状態は、1段目の突帯と透し孔を残す程度であるが、7号については直径が小さいことから形象埴輪の可能性が指摘される。布掘り溝の底面は、北側で深く南側はやや浅くなっており、樹立する埴輪も7号以北と6号以南では底面のレベルに高低が見られる（第75図）。なお、埴輪列を覆う明黄褐色土層には、小さな埴輪片とこぶし大程度の石は混在するが、いわゆる葺石に相当するような人頭大程度の石は出土しておらず、調査区の壁断面にも見当たらない。埴輪列を検出した前方部第2段平坦面と、第3次調査の副葬品埋納施設の比高は約3 mで、前方部の基底石付近と埴輪列の比高も約3 mであるが、平坦面の幅についてはすでに墳丘斜面が削平されており、今回の調査では埴輪列の周辺から基底石を確認することができなかった。恵解山古墳で原位置を保つ樹立した状態の埴輪列が確認されたのは初めてである。

墳丘の盛土は、部分的な断ち割り調査であるが、基本的に灰褐色土層と浅黄色砂質土層を交互に積み重ねており、その間に斜面全体を化粧するように第18層や第49層が覆うとみられる。埴輪列が樹立する平坦面はほぼ水平堆積であるが、墳丘上段へ向かう部分では盛土が斜めに積み重ねる状況が認められた（第74図）。なお、平坦面上からは、近世と想定される埋葬施設を確認



第74図 5-1区平面・断面図 (1/100)



第75图 5-1区坑轴列平面图(1/20)

した。掘形は直径0.6 m前後、深さ0.6 mの円形で、上面にはかなり大きな石材が置かれており、下から頭骨を含む人骨を確認した。15号埴輪の掘形内にも骨片が入っていたことから、周辺は埋葬地であったと考えられる。

墳丘の盛土層は、断ち割りによると深さ0.3 m～0.9 mで、底面には高低がある。盛土は、主に茶褐色系と黄褐色系の粘質土が堆積しており、同様の盛土層は5-2区での状況と共通する。

前方部裾部の基底石は、現在の墳丘裾から西へ約5 mのところで確認され、改めて墳丘がかなり削平されていたことがわかった。盛土層の前面に据えられた基底石は、長さ40 cm前後の石材を横長に2個連ねている。順に積み上げられた葺石は緩やかに傾斜しており、残存する上位の葺石の形状からみて平坦面をもつ低い壇になるかもしれない。

西造り出しは、前方部の盛土層の前面（西側）に灰白色を呈する堅緻な砂礫層によって構築されている。断ち割りで確認するまでは、地山とみまらがうほどであった。上部は削平されているが、規模は前方部の基底石から西に約10 m延びて北へ折れる。裾部付近には、前方部の基底石より小振りの石材を基底石に据えているが、最終段階の断ち割りで造出し南辺に埋没する基底石を確認した。西造り出し南辺は、西辺に比べてこぶし大程度の小さな石材が多量に埋没している。西造り出しの全容解明については、本調査の未掘部分を含めて今後の調査に負うこととなった。

周濠内には、西造り出し斜面上に多量の転落石が堆積する崩落土と、おおむね3層からなる周濠堆積層がある。西造り出しの周辺に集中する人頭大の転落石は、周濠埋土の最上層にあたる。深さは30 cm前後と浅く、底部は平坦となっている。周濠内の転落石と遺物は、西造り出し南辺に集中する。

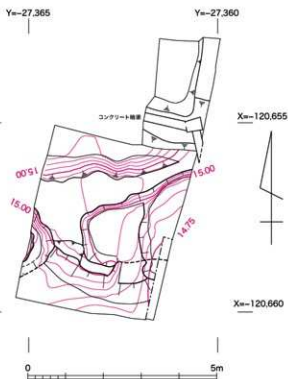
第6節 周濠の調査

周濠の調査に関して、本来ならば各所で調査区を設定すべきであったが、小、中学校のグラウンドとして使用されているという制約もあって、北側および東側は調査の対象地から除外せざるを得なかった。また、調査区の設定にあたっては、外堤の内側斜面が推定される位置を中心に実施した。以下、北東部の11-3区から時計回りの順に説明する。

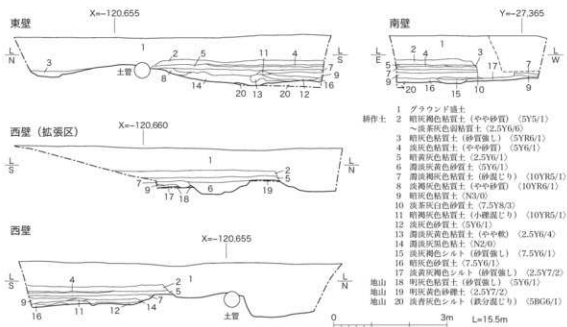
(1) 11-3区 (第76～78図、図版57)

恵解山古墳では、これまで後門部の周濠外側に関する資料が不足していた。本調査では、推定される後門部の裾部から北へ約22mの位置に調査区を設定し、周濠外堤の検出に努めた。なお、本調査区の南半部では、第2次調査の2-EII区の可能性がある攪乱坑を確認している。

本調査区は、全域にグラウンド盛土が施されている。北半部はグラウンド透水管や排水ポンプによる攪乱を受けていたが、南半部では旧耕作土・床土(第77図第2～4層)の下で周濠埋土を確認することがで



第76図 11-3区平面図 (1/100)



第77図 11-3区断面図 (1/100)



上：調査区東壁の土層堆積状況（北西から） 下：完掘状況（西から）

第78図 11-3区周濠外堤内斜面の傾斜と層位

きた。周濠埋土には、上層の黄灰色～褐色粘質土（第5～8層）と下層の灰色粘質土・黒灰色砂質土（第9～17層）があり、周濠底部である黄灰色の地山に至る。周濠底部の標高は14.8m、現地表面から周濠底部までの深さは約1.3mであった。出土遺物は少ないが、主に周濠埋土の上層から中近世のものが、下層からは長岡京期前後と古墳時代の遺物が出土している。

周濠底部の地山は、南辺から緩やかに立ち上がり、ほぼ中央部で平坦となる状況を確認した。後世の削平のため本来の高さは分からないが、この部分に後円部の周濠外堤を想定できる。周濠底部から外堤への傾斜角度は11°前後であり、現状での周濠外堤の高さは0.4m、標高15.2mを測る。周濠外堤の上端から推定される後円部の裾部までの距離は約21mであった。ただし、狭小な調査面積であり、後円部周濠の円弧や外堤の状況を明らかにするには、より広範な調査が必要と考えられる。なお、外堤の斜面を含め、周濠底部に礫の分布は認められなかった。

(2) 9-5区 (第79図、図版58)

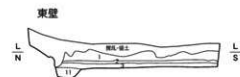
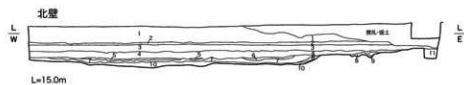
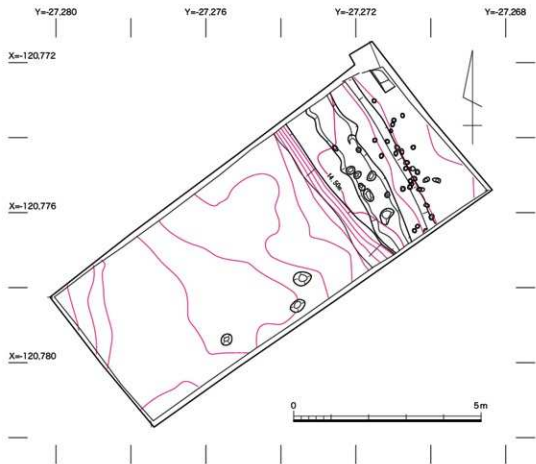
本調査区は、恵解山古墳周濠南側の外堤の検出を目的に設定したものである。恵解山古墳は周囲に周濠の痕跡を明瞭に留めており、これらの正確な形状を把握することを主眼とした。調査区は、周濠南東隅部の水田に南北5m、東西11mで設定した。推定復元では周濠の外堤部が南北方向に検出される地点であった。調査の結果、予想とは異なり、南北方向に東側の外堤が検出されることとなり、外堤部は南に広がることが明らかとなった。このため急ぎ西側に9-6調査区を設けて確認を行うこととなった。

調査区の層序は、厚さ約0.5mの水田耕作土と床土(第1・2層)があり、その下に厚さ約0.1mの中世遺物を包含する暗灰黄色砂質土(第3層)が堆積している。これを除去すると、調査区東端で明黄褐色シルトの地山面と、東から西に向かって緩傾斜する周濠の外堤部が検出された。周濠は深さ0.4mで、最上層には厚さ0.1mの長岡京期～平安時代の遺物を含んだ褐灰色粘土層(第4層)があり、その下には薄い黒褐色粘土層、灰黄褐色粘土層、褐灰色粘土砂混じり(第5～7層)が堆積している。このうち灰黄褐色粘土層の上面では、動物の足跡と見られる凹凸がほぼ全面に認められる。また周濠外堤部周辺には黒褐色粘土の基本とする2層(第8・9層)が東から西に斜め方向に薄く堆積しており、これらを除去すると周濠外堤部の東側で南北方向の溝が検出された。溝は幅0.6～0.7m、深さ0.2mで、周濠外堤部よりもわずかに南で西に振れており、調査区内南側で周濠外堤部と接している。堆積状況の観察では切り合いは確認できず、また出土遺物が少ないため時期は不明であるが、周濠外堤部にほぼ並行しており、おそらく古墳に関連する施設と考えられる。

周濠の最下層には黒色粘土と地山である淡黄色シルトが混じった薄い層(第10層)が一面に広がり、それらを除去すると地山面となる。この第10層は自然堆積したものではなく、人為的に敷かれたものとみられる。時期に関しては古墳時代よりも後の可能性も考えられるが、遺物の出土がないため不明である。地山面は東半部は明黄褐色～淡黄色シルトであるが、西半部では暗灰色の砂質土に変化する。変化の状況は周濠の底部で南北方向に明瞭に分かれており、位置と方向から9-4調査区の東造り出し付近で確認された断層の南側部分とみられる。検出面の標高は、東側の外堤部上面で14.6m、周濠底部西側で14.2mである。

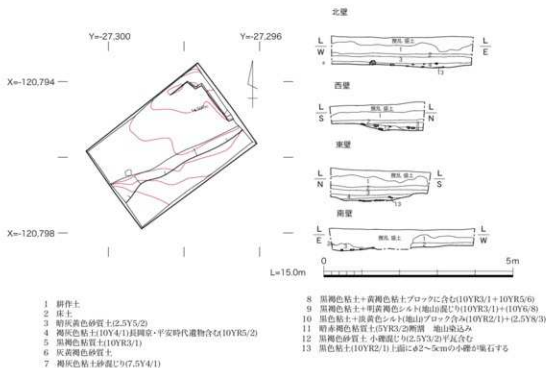
(3) 9-7区 (第80図、図版59)

本調査区は、9-5調査区で周濠外堤が南に広がるということが判明したため、急遽9-5調査区の西側24mの位置に、南北2.5m、東西4mで設定したものである。調査区の層序は、攪乱・盛土の下は9-5調査区と同じく水田耕作土と床土(第1・2層)、中世遺物を包含する暗灰黄色砂質土(第3層)が堆積しており、これらを除去すると南から北に向かって緩やかに傾斜する周濠外堤部が検出された。これにより周濠の南側がわずかに南側に広がるということが確認された。調査区内で確認された周濠の深さは0.3mと非常に浅く、地山面は青灰色の砂質土となっている。最上層は長岡京期～平安時代の遺物を含んだ褐灰色粘土層(第4層)で、その下には黒褐色小礫



- 1 耕作土
- 2 灰土
- 3 暗灰褐色砂質土(2.5Y5/2)
- 4 褐色粘土(10Y4/1)埋岡京・平安時代遺物含む(10YR5/2)
- 5 黒褐色粘質土(10YR3/1)
- 6 灰黄褐色砂質土
- 7 暗灰色粘土砂礫じり(7.5Y4/1)
- 8 黒褐色粘土+黄褐色粘土ブロックを含む(10YR3/1+10YR5/6)
- 9 黒褐色粘土+明黄褐色シルト(地山)礫じり(10YR3/1)+(10Y6/8)
- 10 黒色粘土+淡黄色シルト(地山)ブロック含む(10YR2/1)+(2.5Y8/3)
- 11 暗赤褐色粘質土(5YR3/2)断面 地山染込み

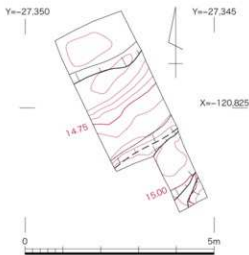
第79図 9-5区平面・断面図(1/100)



第80図 9-7区平面・断面図 (1/100)

混じりの砂質土があり、東側には部分的に黒色粘土層が薄く堆積している。この黒色粘土の上面には直径2~5cmの小さな礫が貼り付いた状態で検出された。これらの面の直上からは長岡京期~鎌倉時代の遺物が出土しており、石の集積も後世の可能性が考えられる。調査区の東側で部分的に断ち割りを行い、下層で明オリブ灰色シルト、黄灰色シルト礫混じり、灰白色シルトの順で約0.5mの厚さで堆積していることが確認された。検出面の標高は、南側の外堤部上面で14.65m、周濠底部西側で14.45mである。東側で14.55mである。

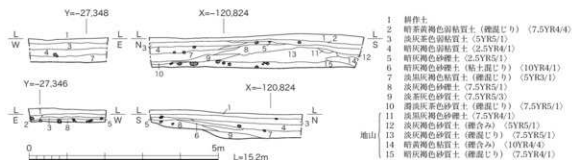
(4) 11-4区 (第81図、図版61)



第81図 11-4区平面図 (1/100)

周濠外側の南辺を確認する目的で、前方部前面の裾部から南東へ約22mの位置に調査区を設定した。調査区は当初、長さ4m、幅2mであったが、周濠外堤への立ち上がりを確認したため、さらに南東側へ幅1mで長さ1.5mの拡張を行った。また、周濠底部から外堤への立ち上がり状況を層位的に観察するため、調査区東壁付近で断ち割りを行っている。

現在の表土である旧耕作土と灰茶色弱粘質土(第82図第1・3層)の下で、灰褐色弱粘質土の周濠埋土上層(第4層)と黒灰褐色粘質土の埋土下層(第



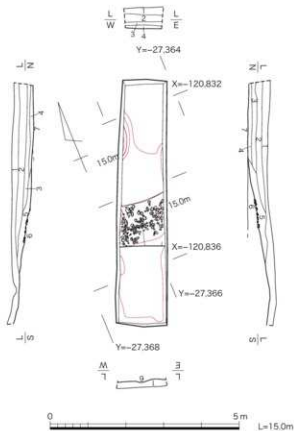
第82図 11-4区断面図 (1/100)

7層)を確認した。地表面から周濠底部までの深さは、調査区の北端で約0.7m、底部の高さは標高14.6mを測る。周濠底部の高さは、後円部北側の周濠で行った第11次調査第3区の値と比べて0.2m低だけで、恵解山古墳の周濠底部がほぼ平坦に掘削されていたことが分かる。出土遺物は、周濠埋土上層に中近世のものが、下層の黒灰褐色粘質土には平安時代以前の遺物が含まれていた。

周濠底部の地山は、北端から南約1m付近より緩やかに立ち上がり、南約3.5mで周濠外堤の上端に至る。後世の削平が想定されるため外堤本来の高さは判然としないが、現状での周濠底部から外堤までの高さは0.4mで、周濠外堤上面の標高は15mを測る。また、周濠底部から外堤への傾斜角度は12°前後であった。確認した周濠外堤への立ち上がりは、墳丘主軸延長線上で行われた第4次調査第1区より南に位置している。外堤の出入りを前提にしつつも、前方部前面で確認されている主軸に対する平面的な傾きの影響も考慮しなければならないだろう。なお、外堤内側斜面には4-1区のような礫の分布は認められなかった。

(5) 8-5区 (第83図、図版62)

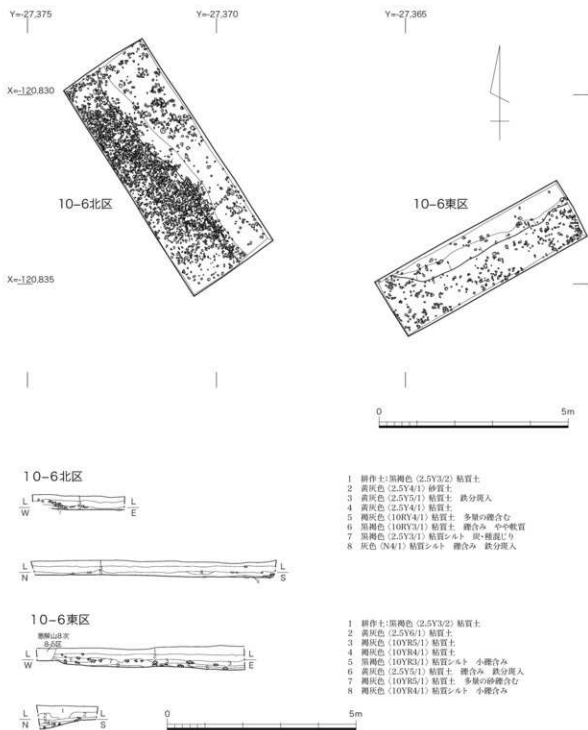
周濠の外堤内側斜の様相を把握するために、周濠の南西隅に設けた幅約1.4m、長さ約6.5mの調査区である。調査前は、水田耕作面を残す荒地で、



第83図 8-5区平面・断面図 (1/100)

重機により現地表面の水田耕作土(第1層)から第3層の灰黄色粘質土までを取り除き、以下を人手による精査の対象とした。

当調査区の基盤層は第6・7層で、第6層上面が南西に向かって高まる。第4層は調査区北半の周濠底面に堆積した土層である。土色・土質は、黒褐色粘質土で、前方部前面の周濠内で一般的に見られる土層とよく似ている。しかし、当地点では、この層より古い堆積と判断した第5層の砂礫層には、長岡京期を含む平安時代の遺物が含まれていた。第5層は、周濠底から周濠



第84図 10-6区平面・断面図(1/100)

外縁に向かって上がる傾斜面の堆積で、周濠の外縁部から崩れ落ちた土砂堆積と考えられる。第5層下面には、第6層に接して拳大以下の礫が散在するが、その大きさや配置状況から、外縁部の葺石とは考えにくく、当調査区を含む古墳西辺部の低位段丘構成土層の砂礫崩落による堆積と考えられる。この傾斜面は南西から北東方向に傾斜しており、周濠南西隅が前方部前面対岸から古墳西辺部対岸に鋭く折れ曲がるのではなく、緩やかな弧を描いて湾曲していると考えられる。

古墳周濠底と考えられる調査区北東端の標高は約14.76～15 m、周濠外縁から周濠斜面を下りた位置の標高は約14.87 m、周濠外縁部の残存面と思われる調査区南西端での標高は約15.16 mであった。

(6) 10-6区 (第84図、図版62)

周濠南西隅の外周部を確認する目的で、現在の畦畔に沿って10-6北区と10-6東区を設定した。

水田耕作に関わる堆積層を除去すると、東調査区では地山の段丘礫層が周濠内に向かって緩やかに落ち込んでいる。小さな礫をわずかに含む。深さは約0.2 mである。北調査区では、段丘礫層に堆積する多量の礫を含む粘質土層が周濠外周部に相当すると想定したが、長岡京期を中心とする須恵器や瓦を含むことから後に盛土されたものと判明した。深さは約0.2 mである。従って、本地点では周濠の南辺のみ外周部を確認し、西辺については明らかにできなかった。古墳に関する遺物には、埴輪片と結晶片岩がある。

(7) 12-2区 (第85～87図、図版63)

恵解山古墳の周濠西側には、かつて水路と池が存在した。両者については、これまで調査が行われておらず掘削時期や恵解山古墳との関連が明らかでなかった。12-2区では、水路および池の成立時期および恵解山古墳との関連を明らかにするため、池内から水路覆土を横断し、周濠に至る位置に逆L字形の調査区を設定した。

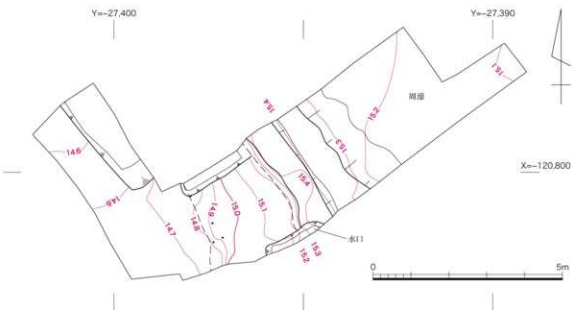
調査区の層序は、現在の表土である旧耕作土、床土と茶褐色、黄褐色土(第86図第11・12層)の下で、灰白褐色弱粘質土の周濠埋土上層(第15・16層)と灰褐色弱粘質土の埋土下層(第17層)を確認した。調査区東端における地表面から周濠底部までの深さは約0.6m、底部の高さは標高15mを測る。出土遺物は非常に少ないが、埴輪片の他に周濠埋土上層に中近世のものが、下層の灰褐色弱粘質土層には長岡京期から平安時代頃の遺物が含まれていた。

周濠底部の地山は、南壁の東端から南西約4mの位置から立ち上がり、長さ約2.4mで9°前後の緩斜面を経て周濠外堤の上端に至る(第85図)。周濠外堤は、後世の削平が想定されるため本来の高さは分からないが、周濠底部から外堤までの高さは約0.5m、周濠外堤上面の標高は15.5mを測る。周濠外堤は水路覆土の中心からやや東側の位置に埋もれていることから、周濠外堤の位置をほぼ踏襲して水路が設けられた可能性がある。

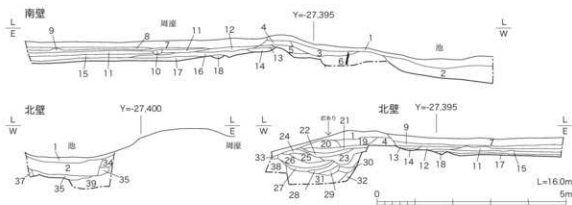
外堤の位置から周濠の規模を推定すれば、上端から墳丘主軸に直交する位置の前方部裾部まで

の幅が約21.5 mを測る。また、周濠が主軸と並行するものと仮定した場合、前部前面の西端まで約16.5 m、西側くびれ部まで約29.7 mに復元できる。なお、外堤内側斜面に礫の分布は認められなかった。

水路は現在、完全に埋没しており、その覆土が現地表面から0.15 mの畦状の高まりとして残



第85図 12-2区平面図 (1/100)



- | | | | |
|-------|------------------------------|----|-----------------------------|
| 表土 1 | 濃暗褐色粘質土(腐植土) (10YR3/2) | 21 | 淡黄褐色粘質土(硬凝じり) (5YR4/4) |
| 2 | 暗灰褐色粘質土 (N4/0) | 22 | 淡灰褐色粘質土(砂質強し) (2.5Y4/1) |
| 水1 3 | 濃暗褐色粘質土(硬凝じり) (10YR3/2) | 23 | 暗灰褐色粘質土(砂質強し) (2.5Y4/1) |
| 4 | 暗灰褐色粘質土(砂質強し) (2.5Y4/1) | 24 | 淡灰黄色粘質土(砂質強し) (7.5Y5/1) |
| 5 | 淡灰褐色粘質土(砂質強し) (10YR3/1) | 25 | 濃灰黄色粘質土(砂質強し) (7.5Y5/1) |
| 6 | 濃暗黄灰色砂礫土(粘土凝じり) (10YR5/3) | 26 | 暗灰黄色粘質土 (10YR5/3) |
| 耕作土 7 | 暗灰褐色粘質土(砂質強し) (10YR3/1) | 27 | 淡灰色粘質土 (10YR6/1) |
| 8 | 濃淡黄灰色粘質土(深褐色粘土凝じり) (2.5YR/2) | 28 | 暗茶灰色粘質土 (10YR5/1) |
| 9 | 淡灰色砂質土 (10YR6/1) | 29 | 暗灰色粘質土 (10YR6/1) |
| 10 | 暗灰色砂質土 (10YR5/1) | 30 | 濃灰色粘質土 (10YR6/1) |
| 11 | 暗茶褐色粘質土 (5YR4/4) | 31 | 淡灰色シルト (5Y5/1) |
| 12 | 濃暗茶褐色砂礫土 (10YR4/2) | 32 | 淡灰色シルト(白色凝じり) (5Y5/1) |
| 13 | 暗黄褐色粘質土 (10YR5/1) | 33 | 暗黄土色砂質土 (10YR5/3) |
| 14 | 淡灰黄褐色粘質土 (10YR5/1) | 34 | 淡黄灰色砂質土 (10YR6/2) |
| 15 | 淡灰白褐色粘質土(砂質強し) (7.5YR5/1) | 35 | 暗黄灰色砂質土 (10YR4/4) |
| 16 | 淡灰白褐色粘質土 (7.5YR5/1) | 36 | 淡灰白色シルト (5Y5/1) |
| 17 | 暗灰褐色粘質土(砂質強し) (10YR4/1) | 37 | 淡黄灰色砂質土(粘土凝じり) (10YR6/2) |
| 18 | 濃暗灰褐色粘質土(砂質強し) (10YR4/1) | 38 | 明黄褐色粘質土 (5YR4/2) |
| 19 | 暗黄褐色粘質土(砂質強し) (10YR5/1) | 39 | 明黄灰色~灰白色砂質土 (2.5YR3/3~N6/0) |
| 20 | 淡黄褐色粘質土(硬凝じり) (5YR4/4) | | |

第86図 12-2区断面図 (1/100)

されている。表土直下には黄褐色～灰褐色土（第86図第4・19・20層）が認められる。調査では、畦状の高まりの東側で溝SD10を確認した。溝SD10は、幅約2mの大規模なものであるが、埋土（第21～32層）が軟弱で、湧水も多かったため深さ1mまで確認するに止めた。出土遺物がなく溝の形状も定かではないが、その位置から溝SD10が水路と考えられた。池の埋土は粘質土・砂質土（第2・36・37層）であり、深さ0.6m程度を測る。水路、池の敷設時期は定かでないが、近代以降のものである可能性が高い。



上：周濠の堆積状況（北西から）

下：溝SD10（南東から）

第87図 12-2区調査状況

（8）7-5区（第88図、図版65）

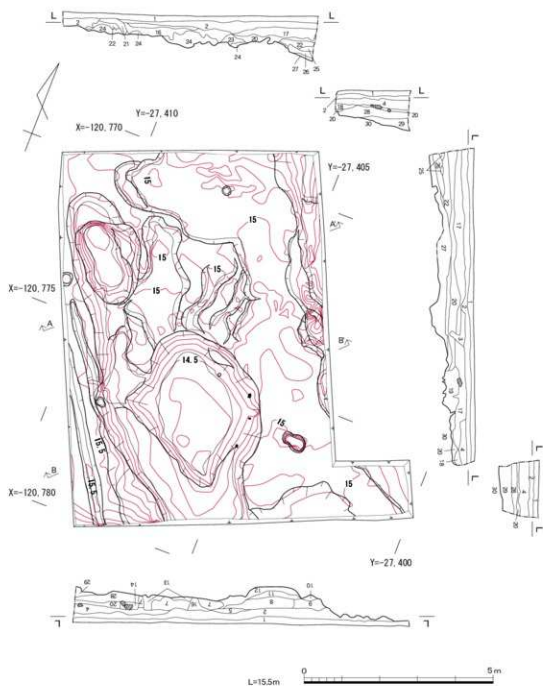
周濠西側の水田面に設定した長さ10m、幅7mの調査区で、南東隅の一部を拡張して4-1区に接続した。この地点は、第6次調査前に電気探査を実施して結果、墳丘裾のラインとおおむね平行する線上構造が確認されていた。

調査区の西端では、耕作土直下、標高にすると15.5m前後で地山面を検出した。地山は、黄白色系ないしは緑灰色を呈する硬質の粘土層や砂礫層であり、これらは大阪層群であることが判明した。地山面は、東に一段落ち込んでから緩やかな傾斜面をもちつつ東側に向かって延びていた。底部には、ところどころに大小の凹凸が認められたが、標高は15m前後である。地山面上には、暗灰色系、灰褐色系を主体とするシルト、砂層、砂礫層（第88図第16～29層）などがやや乱れた状態で堆積していたが、これらの層には長岡京期から平安時代の遺物を包含していた。また、それらの土層を切り込んで土坑状の遺構が掘り窪められていた。この遺構は、東西約4m、南北約8.7m以上、深さが約1.2m前後の長楕円形を呈し、縁部には丸杭が打ち込まれ、灰褐色系や灰色系を呈する砂礫やシルトが厚く堆積していた。これらの堆積層からは、土師器や瓦器など中世の遺物が出土している。

こうしたシルト、砂層、砂礫層などの堆積層は、近接する8-6区でその存在が明らかになっている以外は他の周濠に関係する調査区では確認されていない。

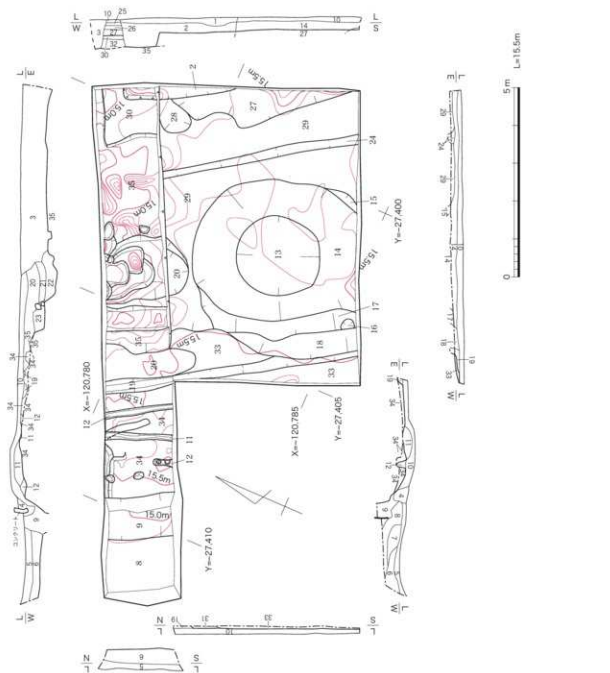
（9）8-6区（第89図、図版64）

当調査区は、西辺周濠の西外縁部の様相を把握する目的で設定した。5-1区では、西辺周濠の中央部から前方部第2段平坦面までを貫いた調査が実施され、また7-5区では、周濠西辺部



- | | | |
|------------|------------------------|----------------------|
| 1 黄土 | 11 淡黄灰色砂 | 21 淡緑灰色雑炭り土 |
| 2 淡灰褐色雑炭り土 | 12 淡灰色雑炭り土 | 22 淡緑灰色シルト |
| 3 淡灰褐色砂 | 13 暗灰色土混入暗黄灰色砂 | 23 淡黄色雑炭り粘土 |
| 4 淡灰色砂質土 | 14 暗黄灰色砂 | 24 漆黑色粘土(硬質) |
| 5 淡茶灰色砂質土 | 15 暗灰褐色雑炭り土 (SK30埋土) | 25 暗緑灰色砂 |
| 6 淡黄灰色砂礫 | 16 暗褐色雑炭り土 | 26 暗灰色粘土 |
| 7 暗灰色雑炭り土 | 17 暗灰色砂質土 | 27 暗灰色砂礫 |
| 8 暗茶灰色粘土 | 18 淡黄灰色砂礫 | 28 淡緑灰色砂 |
| 9 灰色雑炭り土 | 19 淡緑褐色砂礫 | 29 暗赤褐色砂礫(鉄・マンガンを含む) |
| 10 淡緑灰色シルト | 20 暗灰色雑炭り土(長岡京期の遺物を含む) | 30 淡緑灰色粘土 |

第88図 7-5区平面・断面図(1/100)



- | | |
|--|--|
| <p>1. 灰色シルト 5Y5/1 (5-1調査区埋土)</p> <p>2. 灰色シルト 5Y4/1 (5-1調査区埋土)</p> <p>3. 灰黄色シルト 2.5Y7/2 砂礫混 (7-5調査区埋土)</p> <p>4. 灰色シルト 5Y4/1</p> <p>5. 灰色シルト 7.5Y4/1</p> <p>6. 灰オリーブ色シルト 5Y5/2 にぶい黄褐色粘質土 10YR6/4 薄混</p> <p>7. 灰白色シルト 7.5Y7/2 明黄褐色粘質シルト 2.5Y7/6 含み</p> <p>8. 浅灰色シルト 2.5Y7/4 薄含み</p> <p>9. オリーブ帯色シルト 7.5Y3/2</p> <p>10. 黄灰色シルト 2.5Y5/1 7.5 調査区前土
5-1 調査区耕作土</p> <p>11. 浅灰色砂礫 2.5Y7/3</p> <p>12. 灰色シルト 0N4/0</p> <p>13. 灰白色シルト 10Y7/1</p> <p>14. 暗灰黄色粘質土 2.5Y5/2 砂礫含み</p> <p>15. 灰色シルト 0N6/0</p> <p>16. 黄灰色粘質土 2.5Y4/1 薄含み</p> <p>17. 灰オリーブ色粘質土 5Y6/2</p> <p>18. 灰色粘質土 5Y5/1 薄含み</p> | <p>19. 灰白色砂 0N7/0</p> <p>20. 灰黄褐色砂礫 10YR6/2 シルト含み</p> <p>21. 黄褐色粘土 10YR 4/1</p> <p>22. 明オリーブ灰色砂 5G7/1</p> <p>23. オリーブ灰色砂礫 2.5GY6/1</p> <p>24. 浅黄褐色 2.5Y7/3</p> <p>25. 灰色シルト 5Y7/2 小石含み (7.5 調査区 浅灰色砂質土)
(5-1 調査区 明褐色珪土 7.5YR5/8 黄灰色土 2.5Y5/1)</p> <p>26. 灰色シルト 5Y6/1 (7.5 調査区 浅灰色砂質土)</p> <p>27. 灰色シルト 7.5Y6/1 (7.5 調査区 暗灰色礫混り土)
(5-1 調査区 暗灰黄色粘質土 2.5Y5/2)</p> <p>28. にぶい黄褐色シルト 10YR7/2</p> <p>29. 黄灰色シルト 2.5Y5/1</p> <p>30. 暗青灰色砂礫 5P3/1 (7.5 調査区 淡緑灰色砂)</p> <p>31. 暗青灰色砂 5B7/1</p> <p>32. 明緑灰色砂礫 7.5GY7/1</p> <p>33. 棕色砂礫 7.5YR7/6</p> <p>34. 棕色粘土 7.5YR6/8</p> <p>35. 明緑灰色粘土 10GY8/1 (7.5 調査区 淡緑灰色粘土)</p> |
|--|--|

第89図 8-6区平面・断面図 (1/100)

の調査が行われている。7-5区に南接して、南北約7m、東西約8mの調査区を設け、7-5区で検出された複雑な地形変化と土層のありかたの広がりをみるとともに、その北辺を約2m幅で約6m西にのぼして、5-1区の西延長部分に予想される周濠西辺の状況を明らかにすることを目的に取り組んだ。

調査区は、水田跡の荒地地で、表土の近隣調査区埋め土(第1~3層)や近現代土層(第4~12層)と、面的な広がりをもつ部分の第14層を重機で除去し、以下を人手による精査として取り組んだ。面的に広く開けた調査区東半部は、重機掘削面の遺構検出作業と、土層変化を観察し、7-5区とのつながりを明らかにした。また北辺の幅約2m間を西延長部とともに基盤層まで掘り下げた。

基盤層は、第34層と第35層である。第89図には、平面図にも調査で掘り下げなかった遺構の埋土層番号や、基盤層番号を書き込んだ。

今回の調査から、西側周濠でもっとも深い部分は墳丘くびれ部西方あたりの周濠内で、7-5区北東隅と6-1区西辺の標高約14.5mを測る。当調査区で最も深い部分は、調査区北東隅にあり、約14.9mで約40cm高くなっている。そこから平安時代や鎌倉時代の流水による浸食による激しい凹凸を経ながら西方に向かって緩やかに高まり、西延長調査区と広域調査区の取り付き部付近で標高約15.6mまであがる。西延長調査区の西部は、かつての池跡で、今でも窪んだ湿地で、現地表面標高約15.5m以下である。この部分は、地表面から約70cmまで掘り下げても基盤層が現れず、近現代池の掘り込みでかなり深くまで掘削を受けていた。この池の攪乱埋土は、第5~9層で、攪乱坑底面は確認できなかったが、標高15m以下であるのは確実である。つまり、周濠底面より深くまで掘削攪乱を受けていることが明らかになったといえる。

堆積層のうち、第13・14層の上面には中世遺物が包含され、第20~22層や第27~29層には、長岡京期を含む平安時代の遺物が包含されていた。このような土層堆積のありかたは、7-5区や5-1区西部の堆積状況と共通する。つまり、西側周濠の西半部は、鎌倉時代から平安時代にかけての氾濫流路堆積の砂礫層が複雑に入り乱れ、流水による浸食やそれを制御するための人工的な掘り込みや杭の打ち込みなどの手に加えられたものと思われる。西側周濠の西部には、前方部南面などで見られる黒褐色系の粘土の堆積が見られない。その理由が、平安時代から中世にかけての流水による流出と考えられる。

第7節 墳丘の復原

これまでの12次にわたる恵解山古墳の発掘調査成果をもとに、墳丘の規模や形態の見直しを、恵解山古墳保存・整備委員会を通じて行ってきた。すでに削平を受け、復元に必要なデータが得られない部分もあるが、ここでは、現在掌握できたデータをもとに、古墳構築当時の姿を復原する。いまだ未解決部分も残されているが、基本的な様相は提示できる段階にあると考えている。

(1) 後円部

平面形態を掌握するデータは、第2次調査以前の成果を除いて、北西から左回りに列記すると、後円部の墳丘裾を決定するのに参考となる6-2・10-5・8-7・6-1区があり、前方部裾を確定できた6-1・5-1・7-4・12-1・5-2・4-1・4-2・11-5区がある。これらを基に、第2次調査の成果も必要に応じて取り上げる。

後円部の場合、各調査区における墳丘裾部の基底石は明瞭でなく、墳丘裾部を確定しかねる。しかし、まったく情報がないわけではなく、後円部を復元する定点として9-1・9-4・10-2区で検出した第1段平坦面の埴輪列の位置と検出面の標高がある。また、8-2区での後円部第3段斜面基底石の位置と検出面標高、およびそこから続く3区北部で検出した第3段斜面の葺石傾斜角も重要である。後円部の墳丘裾部が明確でない中、復元径を推定する根拠は、第1段平坦面の埴輪列から推定できる円弧が、第3段斜面の基底石と同心円関係にある中心点を共通の中心点として、8-7区の後円部第1段斜面を降り切った位置に散乱した基底石想定疎群の位置付近、9-4区検出の後円部裾部の葺石外縁部付近、9-3東・西区の間、6-2・2D-1・2D-VII区における転落石の検出範囲内を通過する円と考えたところにある。第1段平坦面の幅は、9-1・9-4・10-2区の埴輪列位置をもとに、前方部第2段平坦面と同じであることを前提とした。第2段平坦面は、8-2区の後円部側の第3段斜面の基底石を基点として前方部と同じであることを前提とした。後円部の頂部は、現在墓地として平坦面になっており、復元できるデータが得られる状況にない。しかし、第3段斜面の葺石傾斜角が計測されていることを最大の根拠として想定することは可能である。このように、第2次調査における墳丘裾部の転落石散乱状況も加味した概観的掌握による推定直径として、78.6m前後と考えられる。裾部で検出した傾斜面(法面)は、いずれも10°以下(約17%以下)であるが、この角度でそのまま第1段斜面を築いた場合、第1段平坦面が確保できないことになり、しだいに立ちあがって約21°(約39%)の勾配になっていたと考えられる。おそらく、この緩傾斜面部分が良好な残存状況を示し、傾斜角が増していく部分以上が崩落しているのではないかと考えられる。このような理解に立てば、第1段平坦面外縁径は約71m、同埴輪列径約65.5m、同内縁径約63m、第2段平坦面外縁径は約52.8m、同埴輪列径約49.8m、同内縁径約44.8mと想定できる。後円部頂部については、不安定な要素をめぐいきれないが、第3段斜面の傾斜角を確保しながら、コナベ古墳の後円部高(約14m)の約2分の1(約6.6m)とした場合は径約18.4m、当古

墳中間段高（約2.4 m）の3倍（約7.2 m）とした場合は径約16 mになる。

（2）前方部

前方部の中軸は、西側の第2段平坦面での埴輪列（5-1区）の北延長上と、東側の同埴輪列（8-3区）の南延長線上で、第2段平坦面くびれ部（8-2区）からの等間部における中央点と後円部中心点を結んだ直線として割り出した。この線上には、副葬品埋納施設が所在する。このほかの各施設検出位置との関係から、当直線が古墳中軸線と理解した。前方部では、埴丘裾部の基底石は傾斜面の葺石に使用されている石材より一回り大きなものを使用されており、後円部の基底石より明瞭である。つまり、前方部での埴丘裾部は、北西から逆回りに6-1・5-1・7-4・12-1・5-2・4-1・4-2・11-5区で確認されており、第3段斜面では3区北部と8-2区がある。中でも西側の残存状況が良好であることが分かる。このうち6-1・5-1区の基底石検出位置間には、西造り出しがある。残存状況の良い前方部西側における埴丘裾部の基底石の配列を、くびれ部から前端まで直線で結ぶと、周濠側に出る部分や埴丘側に入り組む部分がある。このため、各部分ごとに分解して合理的な直線で結ぶと、くびれ部から西造り出し北辺までの間、西造り出し南辺から7-4区の間、7-4区から12-1区の間、12-1区から南端（5-2区）の間のそれぞれが直線である。つまり、西造り出しの北と南で基底石列の方向が異なり、7-4区で僅かに広がり、12-1区で広がりが少なくなると考えられる。この想定線を古墳中軸線に東に折り返すと、ほぼ11-5区における裾部の基底石列に重なる。すなわち、前方部の埴丘裾部は直線的に広がるのではなく、極端に表現すれば、お好み焼きのコテ状になっていると考えられる。前方部の東西隅が極端な鋭角になるのを抑え、わずかでも先端角を和らげる工夫ではないかと考えられる。前方部前面（南辺）は、中軸付近がわずかに張り出す様相を示す。第1段平坦面のデータは少なく、10-2区での埴輪列の位置と検出面標高が唯一である。このため、第2段平坦面の復元基準に準じた。第2段平坦面は、8-2区で第3傾斜面基底石列の位置と標高がわかっており、5-1・8-3区での埴輪列の位置と標高が抑えられている。この3地点のデータから、第3段斜面の基底石から埴輪列までの間が約2.5 mに復元できる。この間隔を、埴輪列で反転して第2段斜面上端とした場合、第2段斜面の角度（勾配）が34°（68%）以上とかなり急になってしまう。この傾斜を30°以下に納めることを前提として、しかも5-1区と8-3区での成果から、埴輪列より外に約1 m以上の平坦面が必要であることが条件となることから、最大で埴輪列より外約1.5 mと想定した。埴頂部の復元には、第3次調査での鉄製武器類埋納施設検出面標高と、第3段斜面の葺石検出面標高のデータが重要である。畿内における副葬品埋納施設の検出例を重視して、副葬品埋納施設検出高の上約70～100 cmを本来の埴頂部面と考えた。前方部前面の復元に当たっては、先述した前端（南辺）の位置や形状以外に、第2段以上の部分の位置を復元するデータは皆無である。しかし、相似形と考えられるコナベ古墳との対比から、復元を試みた。コナベ古墳が恵解山古墳の約1.6倍とした場合、後円部径に對する前方部長・幅・各平坦面の様相が極めて類似する。各段の高さに関しては、コナベ古墳の

付表-2 古墳規模計測表

計測内容 部位	距離		高さ・深さ				備考
	現状規模	復元規模	現状標高	現状比高	原型復元標高	復元比高	
全長	約96m	約128m	水田面 約14.8~15.3m	—	墳丘壁 約14.7~15.25m	—	
北辺直線	幅約28m	幅約28m	テラスコート面 約16.08m	約0.95m	残存面 約14.73m	約-0.45m	11-3区
後円部 北縁	—	—	同上	同上	残存面 約15.2m	外周より約-0.75m	11-3区
北縁外	—	—	道路面17.03m	—	長岡立筋遺構残存面 約16.05m	—	R137調査
墳丘西辺直線	前方部先端 径約35m くびれ部 西約30m	前方部先端西 約15m くびれ部 西約30m	水田面15.2m	約0.70m	残存面 約14.5m	外周より 約-1.00m	8-6区
西縁	—	—	畦道約15.9m	—	残存面 約15.6m	外周より 約-0.3m	8-6区
西縁外	—	—	畑畔付面 約16.1~13m	—	残存面約15.9~18.5m	—	R560・648調査
前方部 南辺直線	幅約25m	幅約23m	水田面 約14.8m	約0.3m	約14.55m	約-0.3m	4-1区
南縁	—	—	同上	同上	残存面 約14.85m	外周より 約-0.1m	4-1区
南縁外	—	—	水田面15.1m	—	残存面 約14.96m	—	R743調査
直径	東西約20m 南北約55m	約78.6m	最高位 約23.89m	約8.59m	未残存 推定復元 約25.5~26.1m	約10.4~11m	
第1段平ら面	—	外縁径約71m 内縁径約63m	—	—	検出面 約16.35~16.51m	遺構中心 約1.51~1.65m	9-1, 9-4, 10-2区
第1段平ら面 埋輪列	—	径約68m	—	—	同上	—	同上
第2段平ら面	—	外縁径 約52.8m 内縁径 約44.8m	—	—	検出面 約18.7m~18.9m	第1段平ら面より 約2.35m	8-2区
第2段平ら面 埋輪列	—	径約49.9m	—	—	未検出推定復元 18.7~18.9m	—	
墳頂部面	—	外縁径 約15~22m	—	—	未残存 推定復元 約26.1m	第2段平ら面より 約7.2m	第2段平ら面高 ×3
墳頂部面 埋輪列	—	径約10.23~ 19.4m	—	—	未残存 推定復元 約24.9~26m	同上	同上
長さ	—	中軸断面距離 約70~72m	—	—	—	—	
くびれ部幅	約50m	約53m	—	—	—	—	
先端	東西幅 約38m	東西幅 約78.6m	最高位23.0m	約8.2m	約22.3~22.6m	約7.6~7.9m	
第1段平ら面	—	先端外縁 幅約96m 先端内縁 幅約56.8m	—	—	約16.0~16.35m 平均 約16.2m	約1.2~1.55m 平均 約1.4m	9-4, 10-2区
第1段平ら面 埋輪列	—	先端幅約62.5 m	—	—	同上	—	同上
第2段平ら面	—	先端外縁 幅約66.4m 先端内縁 幅約37m	約19.2~ 20.6m	—	くびれ部 約18.2m くびれ—先端間 約18.5m	くびれ部 2.5m くびれ—先端間 約2.3m	くびれ部 8-3区 くびれ—先端間 5-1, 8-3区
第2段平ら面 埋輪列	—	先端幅約43m	約19.2~ 20.6m	—	約18.5m	約2.3m	5-1, 8-3区
墳頂部面	—	先端幅約16m	約20.5m	—	未残存 推定復元 約22.5m	約4.2m	
墳頂部面 埋輪列	—	先端幅約13m	約20.6m	—	同上	—	
西道り出	規模	—	—	—	規模	—	
	南北幅約12 m	遺構検出比高	東道り出し州浜 上面	南北 約17.5m	遺構検出比高		
	東西 約 8.5m	約 0.4m		北辺 約14.5m	0m		
	北辺 約 9.6m	推定比高		南辺 約11.7m	推定比高		
	南辺 約 8.5m	約 0.55m		東辺 約17.3m	不明		
	西辺 約12.0m	埋輪第1段突帯基準		東道り出し州浜 上面	北辺幅 約2.9m	遺構検出比高	
		南辺幅 約3m			約 0.3m		
		東辺幅 約3.2m	推定比高				
			南側り出し約10.0m	約 0.5m			

付表-3 葺石傾斜角計測表

調査から想定した数値			遺構平面位置と調査線跡高から復元した数値			
部位	距離(m)	比高(m)	勾配(°)	角度(°)	勾配(%)	
後円部	第1段斜面1	1.5	0.25	9.46322208	9° 27' 44"	16.66666667
	第1段斜面2	2	26.566051177	26° 33' 54"	21° 26' 52"	39.28571429
	第2段斜面	5	1.9	20.8067910127	20° 48' 24"	47.00325256
	第3段斜面	8.9	4.5	26.8219812	36° 49' 19"	50.56179775
前方部	第1段斜面1	4	0.25	3.576334378	3° 34' 35"	6.25
	第1段斜面2	2	1	26.566051177	26° 33' 54"	50
	第2段斜面	5	1.9	20.8067910127	20° 48' 24"	38
	第3段斜面	8.9	4.5	26.8219812	36° 49' 19"	50.56179775
	第4段斜面	13	4.5	26.8219812	36° 49' 19"	50.56179775
前方部東側	第1段斜面1					
	第2段斜面					
	第3段斜面					
	第4段斜面					
東部	東部北出	0.5	0.7	54.46232221	54° 27' 44"	140
	東部北東	3	0.15	2.862405226	2° 51' 45"	5
	東部北西	3	0.15	2.862405226	2° 51' 45"	5
	東部南出	3	0.15	2.862405226	2° 51' 45"	5
古墳構築土	東部南東出	10	0.4	2.299610043	2° 17' 26"	4
	東部南西出	128	0.4	0.179048728	0° 10' 45"	0.3125
	東部北東出	132	0.6	0.26943268	0° 13' 32"	0.434545155
	東部北西出	139	0.3	0.219332656	0° 13' 28"	0.324545155
葺石平面	葺石北出	13	0.2	0.13209481	0° 43' 46"	33.198
	葺石北東出					
	葺石北西出					
	葺石南出					
後円部西側	第1段斜面	09° 05' 25"		角度(°)	勾配(%)	調査区
	第2段斜面	16		6-2		
	第3段斜面	10° 08' 50.53"		17.8977	10-5	
	第4段斜面	09° 06' 6.96"		16.0472	8-7	
	第5段斜面	09° 11' 29.39"		16.181	6-1	
	第6段斜面	08° 55' 1.99"		15.6944	9-4	
	第7段斜面	25° 08' 24" 5/6		46.9285 ~		
	第8段斜面	20° 09' 36"		49.1194	3	
	第9段斜面	24° 17' 41.6"		45.1406	B-2南北	
	第10段斜面	18° 40' 48"		33.8092	3	
	第11段斜面	18° 04' 43.85"		32.6437	7-4	
	第12段斜面	17° 09' 43.48"		30.8835	11-5	
	第13段斜面	08° 03' 30" 5/6		14.1608 ~		
前方部西側	第1段斜面	12° 29' 24" 5/6		34.0817	4-1	
	第2段斜面	22° 15.11"		22.1511 ~	4-2	
	第3段斜面	20° 01' 12"		35.0783	3	
	第4段斜面	28° 40' 22.39"		50.2352	B-2東西	
前方部東側	第1段斜面	29° 23' 45.79"		56.3375	7-2	
	第2段斜面					

(太字=調査良好なデータ)

調査から想定した数値

遺構平面位置と調査線跡高から復元した数値

部位	距離(m)	比高(m)	勾配(°)	角度(°)	勾配(%)	
後円部	第1段斜面1	1	0.2	11.30993247	11° 18' 36"	20
	第1段斜面2	50	2.8	24.44773633	21° 26' 52"	39.28571429
	第2段斜面	2.4	25.17517888	25° 10' 31"	47.00325256	47.00325256
	第3段斜面	14.25	7.2	26.86579833	30° 48' 21"	50.56179775
前方部	第1段斜面1	1	0.2	11.30993247	11° 18' 36"	20
	第1段斜面2	50	3.794	17.55158366	17° 33' 06"	31.62888772
	第2段斜面	4.3	2.4	28.07248694	28° 04' 21"	53.33333333
	第3段斜面	8.675	4.5	24.44773633	21° 26' 52"	39.28571429
	第4段斜面	1	0.2	11.30993247	11° 18' 36"	20
前方部東側	東部北出	0.5	0.7	54.46232221	54° 27' 44"	140
	東部北東	3	0.15	2.862405226	2° 51' 45"	5
	東部北西	3	0.15	2.862405226	2° 51' 45"	5
	東部南出	3	0.15	2.862405226	2° 51' 45"	5
古墳構築土	東部南東出	10	0.4	2.299610043	2° 17' 26"	4
	東部南西出	128	0.4	0.179048728	0° 10' 45"	0.3125
	東部北東出	132	0.6	0.26943268	0° 13' 32"	0.434545155
	東部北西出	139	0.3	0.219332656	0° 13' 28"	0.324545155
葺石平面	葺石北出	13	0.2	0.13209481	0° 43' 46"	33.198
	葺石北東出					
	葺石北西出					
	葺石南出					

※ 太字は調査良好なデータを示す

※ エクセル計算式

傾斜角計算式=ATAN(比高/距離)*180/PI()

小数点角度を度分秒表示=TEXT(小数点表示セル,"0.00" mm^2)

勾配計算式=100*比高/水平

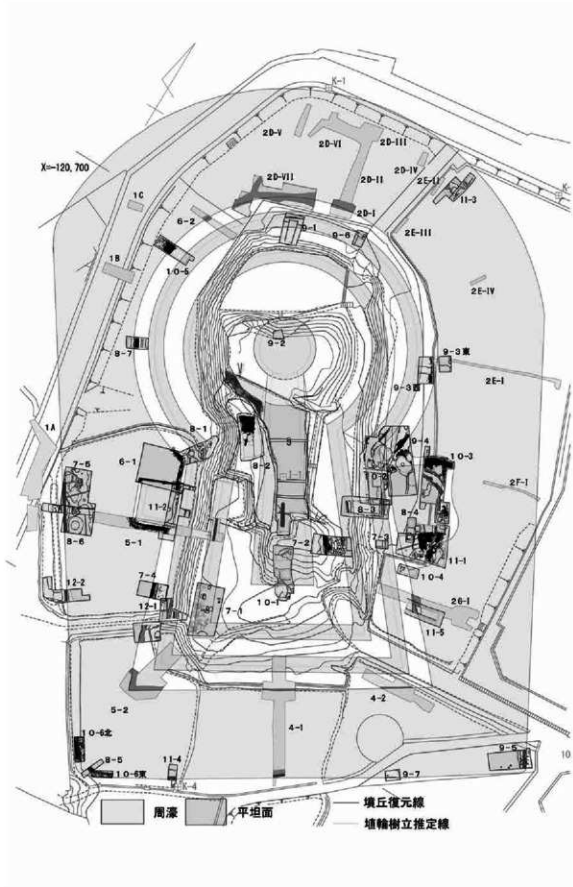
※ 備考

抽出葺石傾斜角(太字)計測データは、葺石面跡の部分のみが計測されている。したがって、葺石状況や葺石面跡の部分が、得られた数値に誤差が生じていると推定される。また、古墳構築土の傾斜角の測定は、葺石面跡の傾斜角を基準として行われ、葺石面跡の傾斜角を基準として行われる。

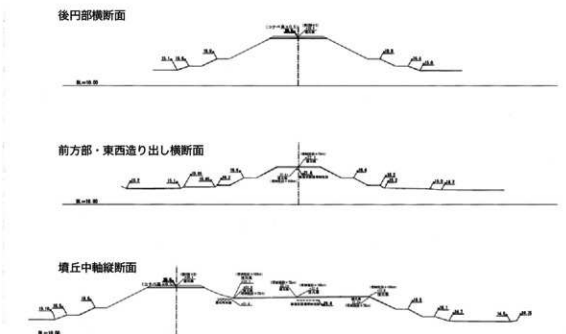
調査から想定した数値は、部分的な調査結果をもとに、その部分からの平面位置と調査線跡高をもとに復元した時点での各部位の計算上での求めた数値である。この数値は修正された数値に代わって表示され、各所に修正された数値が示されている。

遺構平面位置と調査線跡高から復元した数値は、各調査での平面位置と調査線跡高から復元した数値である。この数値は修正された数値に代わって表示され、各所に修正された数値が示されている。

調査から想定した数値は、部分的な調査結果をもとに、その部分からの平面位置と調査線跡高をもとに復元した時点での各部位の計算上での求めた数値である。この数値は修正された数値に代わって表示され、各所に修正された数値が示されている。



第90図 墳丘復元平面図



第91図 墳丘復原断面図

約2分の1の数値に近い。周濠についても似た様相と考えられる。このような関係から、コナベ古墳を参考に、各段先端位置を想定することが出来ると考えた。

(3) 造り出し

本古墳では、東西に造り出しの存在することが調査によって確認されたが、両者は取り付く位置、形態、規模、構造の何れもが大きく異なっていることが判明した。

まず、西造り出しは、5-1・6-1・11-2区において調査したが、くびれ部から5.5m前後前方部寄りに設置されており、東西9.6m前後、南北約12～12.5m規模の長方形に復原することができた。裾部に基礎石を配した葺石を斜面に施しており、頂部には円筒埴輪列を方形に巡らしているらしいことが明らかになった。削平を受けているため、造り出しの高さ測り出すことは困難であるが、埴輪列の存在などを考慮すれば、さほど高いものではないことは十分に予測することができた。

一方、東造り出しについては、8-4・9-4・10-3・11-1区で確認したが、取り付く位置を明確にすることはできなかった。ただし、西造り出しに比べて後円部寄りに設置されていたことは確かである。南北の規模は約17.5mであるが、東西長は北辺で約14.5m、南辺で11.7mと、南辺がクランク状に屈曲している形態、つまり長方形ではなく、南側に突出部を持つ形態に復元することができた。また、造り出しの周囲には、細かい礫を敷き詰めることによって、洲浜を形成し、そこには複数の水鳥形埴輪を配すという意匠を凝らしていた。西造り出しの場合と同様に、高さは低いものであることは間違いないであろう。

第4章 副葬品埋納施設の調査

第1節 副葬品埋納施設の構造

(1) 検出状況 (図版66)

第3次調査の契機となった鉄製品は、墓地造成工事に伴い重機で掘削された際に大きく攪乱を受けており、東西1.5m、南北3.5mほどの範囲に拡散していた(図版66)。そこで、攪乱を受けて散乱した状態の鉄製品の1帯を精査したところ、3群に分けて配置された鉄刀と鉄鍬を主とする鉄製品群が南北方向に帯状に連なり、そこから重機によってさらに北東の方向に引き出された状態の鉄製品群を確認することができた。引き出された鉄製品には、鉄刀、鉄剣、鉄槍、鉄鍬、鍬手刀子などがあり、破損品がほとんどであるが、完形に近いものもあり、それらが折り重なるように盛り上がっていた。また、その東側にも折れ曲がった鉄刀が3～5点ほどあることから、重機による引き出し行為は少なくとも2回はあったものと推察される。このように重機によって動かされた鉄製品は、出土状態の簡単な略測図を作成した後、移動鉄製品という名称で番号を付して順次取り上げた。

3群に分けて配置された鉄製品は、原位置をとどめていないものも少なくなかったが、さらに南側の竹藪に向かって延びていることが明らかになった。このため、南側の竹藪を拡張して追突した結果、拡張部分は厚さ1.5mほどある竹藪の客土で厚く覆われていたが、その直下で原位置を保持した3群の鉄製品を新たに追加して確認することができた。これによって、鉄製品を大きく6群に分けて埋納した施設の全体像を把握することができるようになった。

(2) 施設の構造 (第92・93図、図版67～69・74)

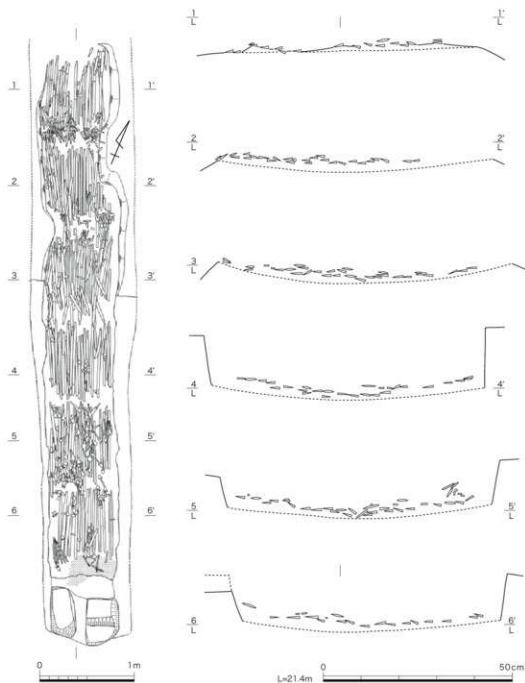
副葬品埋納施設は、上述したように、北半部が大きく攪乱を受けて底面のみがかるうじて残存していたにすぎなかったが、南半部は幸いにも旧状をとどめていた。以下では、南半部の調査所見を中心にしながら施設の構造について説明する。

副葬品埋納施設は、前方部の中央部からやや後部寄りの地点で検出されたわけであるが、墳丘の測量図に照らしてみると、おおむね墳丘の主軸上近くに平行して設置されている可能性が想定された。その後、前方部東西の平坦面上で検出された埴輪列や裾部の調査所見などを検討することによって、中軸線上で平行して設置されたものであることがほぼ確定したといえる。つまり、この施設は、極めて計画的に配置されたものであったと考えることができる。

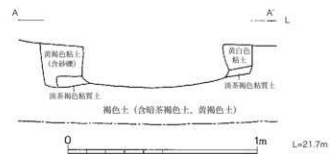
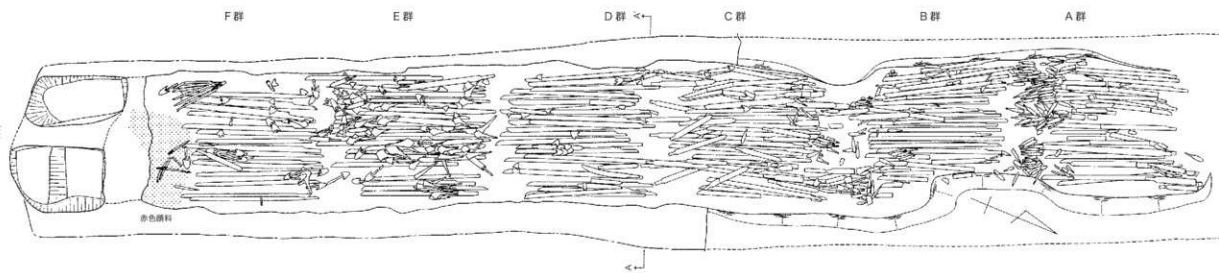
施設の掘形は、墳丘の盛土層を切り込んで穿たれていたが、盛土層と掘形埋土は類似していることもあって、両者の識別は非常に困難であった。検出した掘形の平面形態は、北半部が破壊されているため、全容は不明であるが、隅門長方形を呈するきわめて狭長なものと考えられ、その規模は長さ6.3m以上、幅0.9m程度に復元することができる。検出面での標高は、21.5m前

後を測る。掘形の埋土は、断ち割りによる断面観察により、黄褐色系や黄白色系の粘土層であることが判明した。掘形内には、木質などの痕跡を全くとどめていなかったが、土質の相違や鉄製品の出土状況などから判断して、木櫃のような構造のものであり、その中に大量の鉄製品を埋納したものと推察することができた。そして、鉄釘や鏝などが全く出土していないことからすると、この木櫃は緊結金具を用いない組み合わせ式構造の施設であったと考えることができる。

木櫃は、底面の標高が北端で約 21.3 m、南端で約 21.4 m を測り、わずかではあるが南から北に向かって傾斜している。また、横断面による底面の状況を見ると、平坦ではなくて、緩やかなU字状を呈していることがわかる（第 92 図、図版 69）。したがって、木櫃の底部は丸味を帯



第 92 図 副葬品埋納施設横断面図 (1/10)



第93图 副葬品埋納施設平面图 (1/20)

びた形状であったと推察することができる。南小口にあたる部分では、黄白色系を呈した粘土塊が検出された。この粘土塊は、施設の長軸に対して直交するように配されていて、その一部は竹の根の影響で破壊されていたが、長さ約66 cm、幅10～23 cmの長方形を呈していた。粘土塊の上面から北側の木櫃内にかけて、わずかではあるが赤色顔料（ベンガラ）の付着が認められた。北側の小口部は破壊を受けて存在していないが、南小口の場合と同じような粘土塊を配して北小口部を形成していた可能性が濃厚と考えられる。木櫃の法量は、長さ5.6 m以上、幅0.7～0.75 m、深さ0.2 m程度の規模に復元することができる。

副葬品埋納施設内には、武器類を主体とする数多くの鉄製品が上下に積み重ねられた状態で埋納されており、人体を埋葬できる余地は全くなかった。それら鉄製品の出土状況を検討すると、下面は鉄刀と鉄剣が主体であるのに対して、上面は鉄鎌、短刀、鉄槍、ヤス状刺突具などというように上下で種類の異なる鉄製品を埋納していた。さらに下面の刀剣類は、大きく6群に分けて埋置されており、それぞれの群が重複することなく埋置されていることが明らかになった。そこで、そうした群をここでは便宜上北から順にA～F群と呼称し、群ごとに鉄製品の出土状況を具体的に説明することにする。

第2節 副葬品の出土状況

(1) A群の配置(図版71)

この群は、墓地造成工事の際の攪乱が最も顕著であったため、旧状を保持している部分はもとより、数量についても本来より少ないものと考えられる。したがって、以下においては、推測を加えつつ復元的に説明することにした。

下面 鉄刀17点以上、鉄剣3点を確認することができた。刀剣類の間には隙間を有する箇所がいくつか認められるが、それは重機で掘削された際に抜き取られた痕跡であると推察される。鉄刀は、破損したものと切先のみが遺存するものが多く認められたとはいえ、完形もしくはそれに近い状態のものも10点程度あった。すべて切先を南側、すなわち前方部先端の方に向けて埋置されていた。刃部の方向は、西側を向いているものが大半を占めているが、1点だけ東側を向いていた。ただし、この鉄刀は破損品であり、原位置をとどめていない可能性が高い。鉄剣は3点あったと復元できるが、そのうちの1点は出土地点が不明である。残る2点は、群の東に偏って置かれており、鉄刀の場合と同様に切先はすべて南側を向いていた。

上面 鉄槍3点と鉄鎌50点以上を確認した。鉄槍は、群の北東部で切先を北に向けた状態で出土したものであるが、破損品であり、本来の位置を保持したのではなく、重機でこの位置に移動されたものと考えられる。

鉄鎌は、すべて同じ柳葉式(鳥舌式)のA形式のみであった。群の北側や中央部に点在しているものも少数あるが、大半は南端からB群との狭間にかけて偏在して設置されていた。これらの鉄鎌すべてが、原位置を保持したものではないが、鎌身の先端を互いに接するよう北を向いた一群と南を向いた一群とに分けられた。量的には北を向いた方が大多数を占めているが、それぞれ

が束ねた状態で埋納されたものと推察される。茎部に木質の付着しているものが多いことから、矢柄を装着して埋納していたと考えられる。

(2) B群の配置 (図版71)

この群も大きく攪乱を被っていたが、A群に比べると遺存状態はまだましな方であった。

下面 鉄刀25点以上、鉄剣1点の計26点以上が配置されていた。鉄刀は、東側に位置する7点ほどが切先のみや破損品になっていた以外は、おおむね原位置に近い状態を保持したものと考えられる。茎部の先端を揃えるように配置されているようで、切先はすべて南側を向いていた。刃部の向きは、西向きものが大半を占めるが、東を向けたもの3点は西側に偏在する。鉄剣は、切先を南側を向けて、群の西側に配置されていた。

上面 鉄槍1点と鉄鏃60点以上を確認できた。鉄槍は、中央の南端に切先を北に向けて置かれていたが、出土状態を考慮すれば、本来は南のC群上に配置されていたものが重機で引き出されてこの位置に移動したものと考えられる。

鉄鏃は、A群の場合と同様にA形式のみに限られ、南側を中心に束ねた状態にして配置されたものと推察される。切先は、北や東を向けたものもあるが、大半は南側を向けている。これとA群での配置状況を勘案すると、本来は矢柄をB群上に交叉させて配置されていた可能性が濃厚と考えられる。

(3) C群の配置 (図版72)

この群も、墓地造成工事の際に攪乱を受けているが、幸いにも群の南半部については攪乱を免れたため、旧状を保持しているものと考えられる。

下面 鉄刀23点、鉄剣2点の計25点が配置されていたが、おおむね茎部の先端をそろえるようにして配置されている可能性がある。鉄刀は、西側に折れ曲がったものが数点あるが、完形品もしくは近い状態のものが多くを占める。すべて切先を南に向けており、刃部は東側を向けたものがほとんどであるが、西側を向けた3点が西側に偏在するのは、B群の場合と同じである。鉄剣は、群の中央に1点、西寄りに1点が切先を南に向けて配置されていた。

上面 鉄槍1点と鉄鏃30点以上ある。鉄槍は、北側の一群と南端からD群との狭間にかけての一群に分けられる。前者は原位置をとどめているのに対して、後者は動かされているものが多いと推察できる。施設の長軸におおむね平行するものと斜行するように配置されたものがあるが、いずれも切先を北に向けていることは、下面の刀剣類とは真逆の方向である。

鉄鏃は、鳥舌式のA形式に短頸鏃のL、M形式が加わる。前者は群の北側に偏在し、鏃身の先端の方向は様々で、原位置をとどめていないものが多いようである。一方、後者は群の南側で、原位置を保持しているものと考えられるが、先端の方向は必ずしも一定していない。

(4) D群の配置 (図版72)

この群より以南は、攪乱を受けることがなかったため、遺存状態は良好で、埋納時の状態をほぼ保持していたものとみてよいであろう。鉄刀21点、鉄剣3点、鉄槍は5点、短刀1点、鉄鏃16点を確認することができた。

下面 鉄刀21点、鉄剣3点の計24点が配置されていた。刀剣類は、切先や茎部の先端を揃えようとする意図を読み取ることはできない。鉄刀は、すべて切先を南側に向ける。刃部の方向は、東に向けるもの4点、西を向くものが17点あるが、前者は群の西半部に偏って配置されている。鉄剣は、群の西半分に偏って配置されており、切先はすべて南側を向けられていた。

上面 短刀1点、鉄槍5点、鉄鏃16点の計22点が置かれていた。短刀は、この群にのみ埋納されたもので、しかも1点のみであった。北東部に切先を南側、刃部を東側に向けた状態で置かれていた。鉄槍は、北東部に3点、中央部の南寄りには2点が置かれていた。すべて切先を南側に向ける。

鉄鏃は、中央部に7点程度をまとめて置いている以外は、数点が散在した状態で出土している。鉄鏃には、B・F・L・Mの4形式が認められる。鏃身の先端を北に向けたものが主体であるが、南ないしは西側を向けたものも多様であり、配置に規則性は認めがたい。

(5) E群の配置 (図版73)

この群は、鉄刀20点、鉄剣2点、鉄鏃102点の計124点を配置しているが、鉄槍のないのが特徴である。

下面 鉄刀20点、鉄剣2点の計22点が配置されていた。刀剣類は、東側の4点が切先を揃えるように整然と配置されていたが、それより以西はかなりのバラつきが認められ、整列した状態とは言い難い状況であった。とりわけ、中央の1点と西端の1点は、ともに南側のF群寄りに大きく偏っていたものの、重複する状態ではなかった。鉄刀は、すべて切先を南側に向け、刃部の方向も大半が西側を向けていたが、群の中央に位置する2点だけは東向きであった。鉄剣2点は、群の東西に大きく離されて配置されていたが、ともに切先は南側を向けて置かれていた。

上面 鉄鏃は、A形式を除くB～Mの各形式のものを確認することができた。群の北東部に13点を東ねたものがある以外は、群全体に散布していて、まとまりに欠ける状態であった。東ねたものは、B・D・E・I・Jの各形式があり、同一形式のものに限定したのではない。また、鏃身の先端は、おおむね南側を向いているものが多いとはいえ、北あるいは東を向けているものもあり、その方向性に規則性を認めることはできない。

(6) F群の配置 (図版73)

この群は、鉄刀15点、鉄剣1点、鉄鏃29点、ヤス状刺突具5点からなる。鉄刀の数量は6群中最も少なく、しかも鉄剣を1点も含んでいない特徴がある。また、ヤス状刺突具は他の群にはほとんど見られない遺物である。

下面 鉄刀 15 点、ヤス状刺突具 3 点などが配置されていた。鉄刀は、点数が少ないためか、鉄刀間には隙間が多々認められた。おおむね切先を揃えるように並べ置かれており、切先はすべて南側に向けられていた。西端に置かれた 1 点だけが刃部を東に向けていた以外は、すべて西側に向けて配置されていた。

ヤス状刺突具の小型品は、南小口との間に破損した状態で埋置されていた。調査時点では、鉄鏃の破片と考えていたが、調査後の接合作業によって小型のヤス状刺突具が 3 点分になることが判明した。破片は、E 群上からも出土しており、意図的に破壊して埋納した可能性を考慮する必要がある。

上面 鉄槍 1 点、ヤス状刺突具 2 点、鉄鏃 29 点が配置されていた。鉄槍は、群中央の南寄りには切先を北側に向けて配置される。南小口に近接していることから、柄を装着しないで埋納された可能性が考えられる。鉄鏃の全体量は多いとはいえないが、B・C・D・F・G・H・J・K・L・M の 10 形式に分けられる多様なものが出土している。東にされた状態のものはなく、また特定の方向を示すといった傾向を認めることはできなかった。

ヤス状刺突具は、南西隅に大型品 2 点が折り重なるような状態で出土しており、ともに先端は南に向けて置かれていた。

(7) 小結

以上に述べてきた副葬品の内容や配置の特徴について、改めてまとめておこう。

まず、下面に 6 群に分けて配置された鉄製品は、鉄刀を主体とし、これに鉄剣が少量加わるものであった。6 群の刀剣類は、それぞれ重複が認められないことから、群の配置順の先後関係については明確ではない。刀剣を問わず、すべてが切先を南に向けていることを特徴として挙げる事ができる。また、刃部の方向については、西側に向けたものが主体であるが、東向きのもものが各群中の西側に偏在している傾向がある。

上面には、鉄鏃、鉄槍、短刀、ヤス状刺突具など各種の鉄製品を配置していたが、特に鉄鏃については、北半部と南半部とでは種類や配置の方法に大きな相違を認めることができた。すなわち、北半部では、鳥舌式の種類のみを東にして、矢柄を交差させるようにまとめて配置していたのに対して、南の 3 群では鳥舌式以外の各形式を東にしたものは極めて乏しく、あたかも散乱させたように配置している。

短刀は、下面の刀剣類と同様に切先を南に向けており、これとは反対に鉄槍は、すべて切先を北に向けて埋納されていた。また、ヤス状刺突具は、大型品 2 点は先端を南に向けて置かれていたが、小型品は 3 点とも意図的に破損した状態で埋納していた可能性が考えられる。

なお、蕨手刀子については、原位置をとどめていた C 群の南半部から F 群のいずれにも認めることはできなかったため、A 群から C 群の北半部に配置されていたものと推察される。

第5章 出土遺物

第1節 副葬品埋納施設の出土遺物

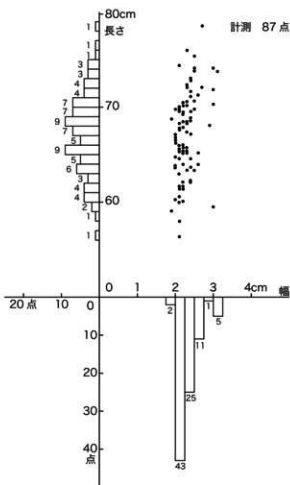
副葬品埋納施設から出土した遺物は、すべて鉄製品であった。刀剣類や鉄鏃などの武器類が大半を占めており、他にヤス状刺突具や蕨手刀子などが少量加わる程度である。施設の北半部が擾乱を受けたこともあって、厳密な意味で数量の把握は困難となっているため、ものによっては概数であることをことわっておきたい。

(1) 鉄刀 (第94～100図、図版75～80)

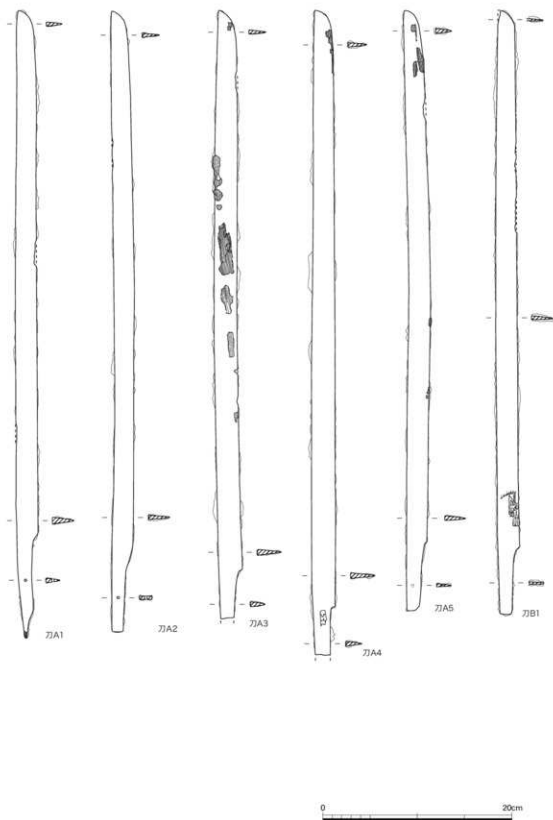
鉄刀は、本来の配置された場所が不明確なものもあるが、A群から23点以上、B群が27点以上、C群が24点以上、D群が21点、E群が20点、F群からは15点が出土しており、全体では146点前後あったものと推察される。群ごとの数量を比較すると、北に向かうにしたがつて徐々に数量が増加している傾向を読み取ることができる。

刀身部は平造りの反りをもたないいわゆる直刀がほとんどであり、緩やかな反りをもったものや、逆に内側に反ったものも認めることができる。切先はふくらをもっており、隅はすべて片開式である。刀身部の幅は2.1～3.2 cmの範囲におさまり、断面形は楔形を呈し、厚さは0.4～0.7 cm程度ある。

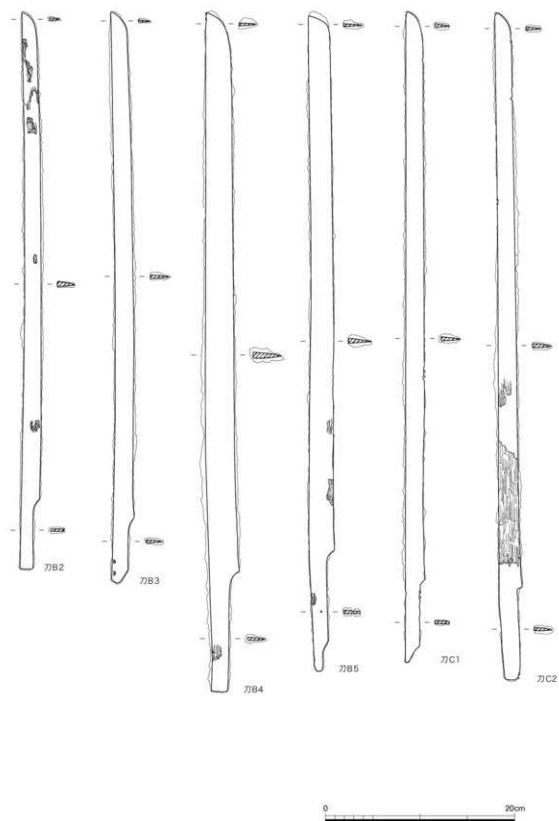
茎部は、茎尻に向かってまっすぐに延びるもの、徐々に幅を狭めていくものなどがある。長さ6.4～16 cm、幅1.3～2.1 cm程度であり、断面形は長方形を呈するものと、楔形を呈するものがある。目釘穴は、確認できたものでは1孔を有するものが大半を占めるが、2孔のものも2例ほど存在する(第98図刀D4)。1孔の中にも、本来は2孔あったものを含んでいる可能性がある。茎尻の形態は直線的におわるもの(一文字尻)、隅を斜めにおとして面取りしたもの(隅切尻)、隅を弧状に抉りおとしたもの(隅抉尻)など各種がある。隅切尻をもつものの中に、先端を叩打するこ



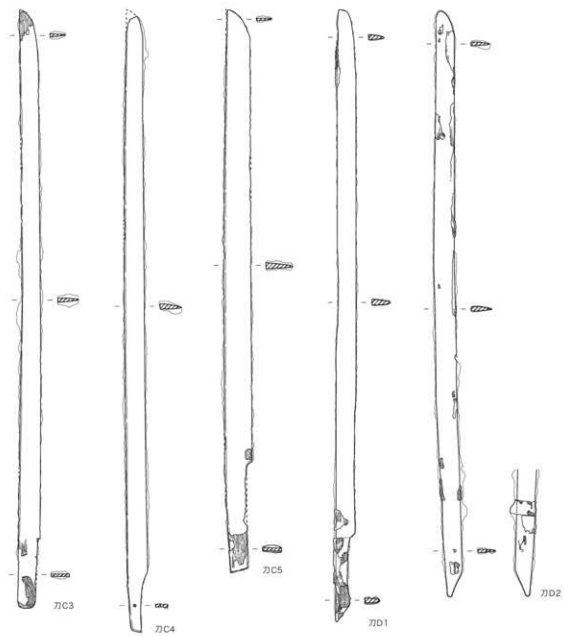
第94図 鉄刀法量図



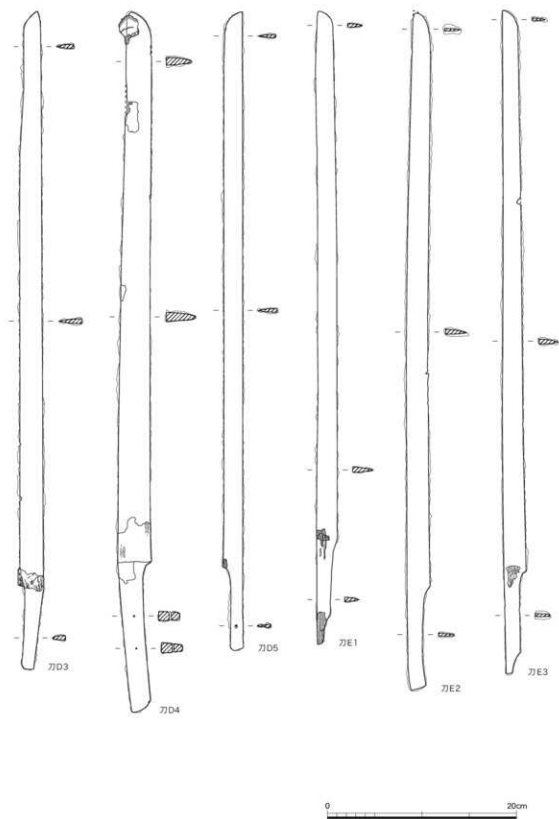
第95図 鉄刀実測図1 (1/4)



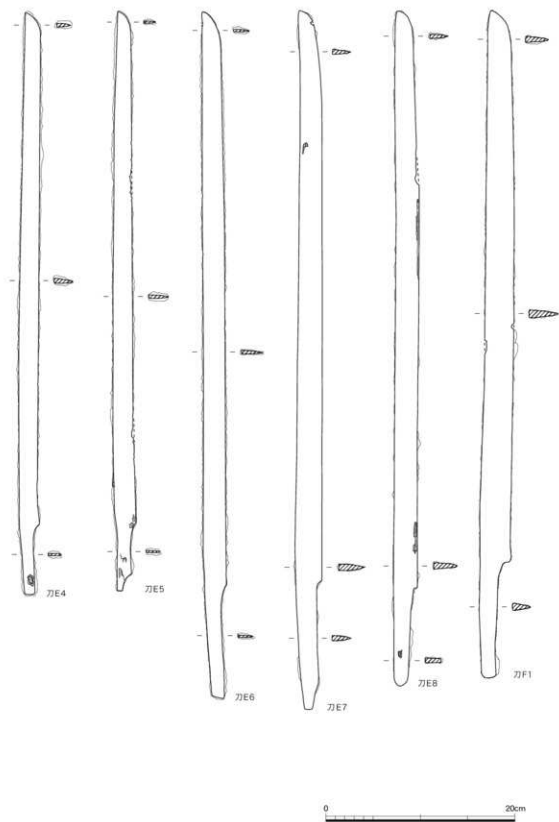
第96図 鉄刀尖測図2 (1/4)



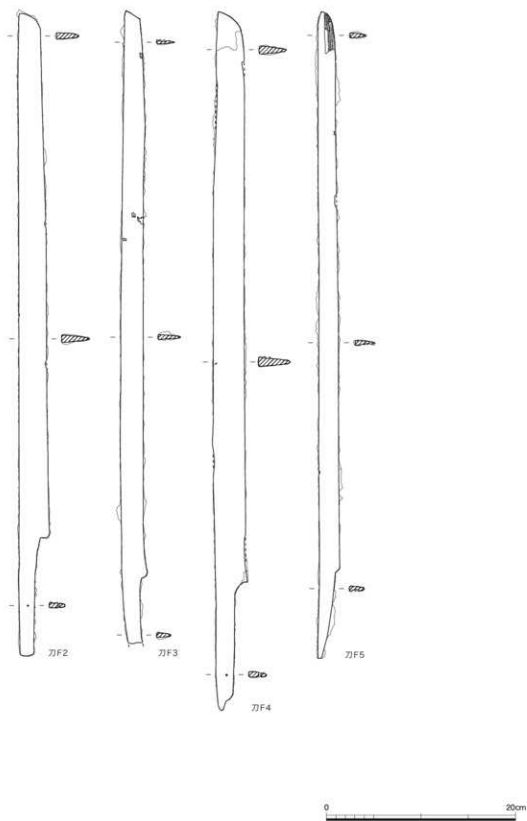
第97図 鉄刀実測図3 (1/4)



第98図 鉄刀実測図4 (1/4)



第99図 鉄刀実測図5 (1/4)



第100圖 鉄刀尖測図6 (1/4)

とによって肥厚させたものもあり、柄装具の装着にあたり不具合な形態を呈しているものがある。関部の形態は、挟られた形態、直角にくびれるものなど多様である。

茎部のみならず刀身部においても木質の遺存しているものが多く、関部には幅1～1.5 cmほどの柄縁と考えられる痕跡のあるものもあり、柄や鞘などの外装具を装着した状態で埋置されたものが多いのではなかったかと考えられる。

当古墳出土の鉄刀は、全長57.1～79.5 cm、刀身幅は2.1～3.2 cm程度と、全体に短くて細いという特徴を指摘することができる。全長を計測できた86点での平均値は67.6 cmである。この平均値を大阪府の古市古墳群において大量の鉄刀が出土しているアリ山古墳、野中古墳、西墓山古墳の3古墳と比較検討してみると、アリ山古墳の平均値が103.3 cm、野中古墳の平均値が87.4 cm、そして西墓山古墳での平均値が68.6 cmであり、アリ山古墳とは約35 cm、野中古墳とは約20 cm程度短いことがわかる。これに対して、西墓山古墳の平均値に近似していることは注目される。西墓山古墳とは、後述する鉄剣の平均値も近似しており、さらに埋納施設の構造や規模も類似していることなど、両者に共通項が多いことは、重視すべきことである。

(2) 鉄剣 (第101・102図、図版81)

鉄剣は、A群から2点、B群が1点、C群が2点、D群が3点、E群が2点、出土地点が不明瞭な1点の計11点が出土している。鉄刀に比べて、鉄剣の占める割合が低いことを指摘できる。出土地点が不明なもの、A～C群のいずれかに配置されていたものと考えられるが、そのいずれかはわからない。茎部の先端が欠損したものが4点あるが、他はすべて完形品であった。

剣身部は、断面がレンズ状を呈しており、切先に向かって細くなる形態であるが、鎧は明瞭ではない。

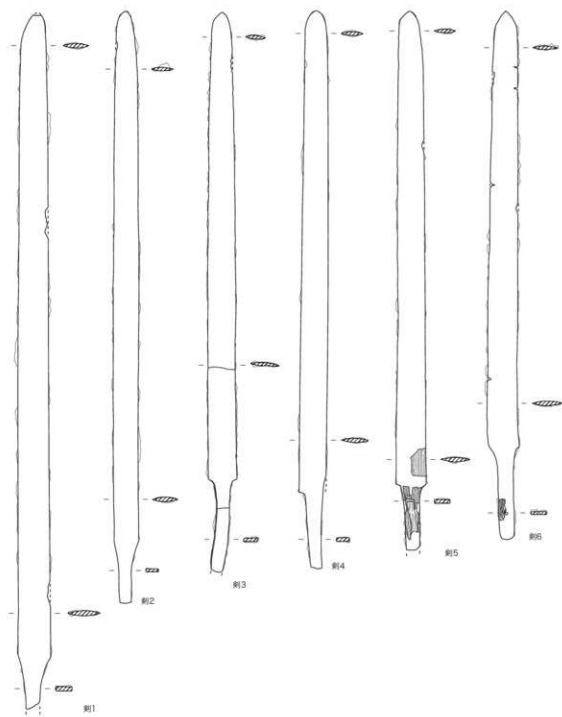
茎部は、長さ6.7～9.9 cm、幅1.3～1.8 cmで、茎尻に向かって徐々に幅を狭めている形態である。断面形は長方形を呈しており、目釘穴は1孔あることを確認している。関部は直角ではなく、緩やかに茎部に移行する形態のものが多く認められる。

剣身部や茎部には、木質の遺存しているものがあることから、木製の柄を装着し、鞘に取りめられて埋納された可能性がある。

全長は、鉄刀と比べるとやや短く、最も長い74 cmを超過する1点(第101図剣1)を除いては、おおむね53.4～62.6 cmの範囲内におさまり、全長がわかる6点での平均値は56.7 cmである。鉄刀の場合と同様にアリ山古墳などと比較してみると、アリ山古墳の平均値が74.4 cm、野中古墳の平均値が64 cm、そして西墓山古墳での平均値が58.8 cmであり、鉄剣も西墓山古墳の平均値に近いことは興味深いことである。

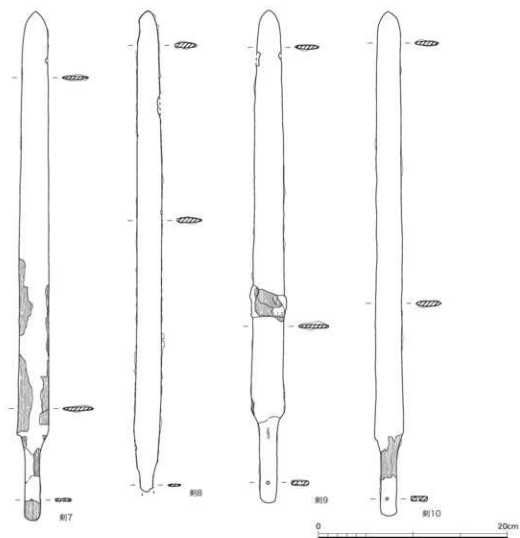
(3) 鉄槍 (第103図、図版82)

鉄槍は、剣と形態的に類似しており、両者を区別することは困難であるが、ここでは出土した位置や状態から鉄槍として取り扱うことにしたい。A群から3点以上、B群が1点以上、C群



0 20cm

第101圖 鉄刺実測図1 (1/4)



第102図 鉄剣実測図2 (1/4)

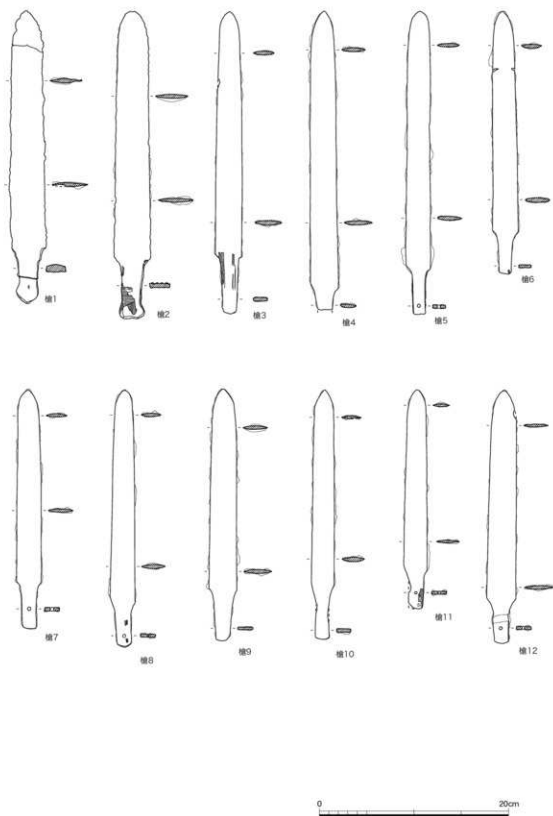
が33点以上、D群が5点、F群から1点出土している他、出土地点が不明なものも14点以上ある。

槍身部は、切先に向かって細くなる形態で、鎬はないようで、不明瞭であった。断面はレンズ状を呈し、関は緩やかである。

茎部の断面は長方形で、長さ3～6.6cm、幅は1.3～2cm前後あり、茎尻に向かって直線的に延びておさめている。目釘穴は、1孔あることを確認している。

槍身部には、鞘の木質が遺存するものがあり、また茎部にも木質の遺存するものがあるなど、柄を装着した状態で埋納されていた可能性が考えられる。

全長は23.8～32.6cm、槍身の幅は2.1～3.5cm前後の範囲に取まっているが、全長が24.5～28cmのものが多くを占めている。



第103図 鉄槍実測図 (1/4)

(4) 鉄鍬

鉄鍬は総数472点余りが出土している。一括に副葬された鉄鍬の総量としては、京都府下で最も多く、しかも種類の豊富さにおいて他を大きく圧倒している。鍬身の形態や法量などから、柳葉式、腸挟柳葉式、三角形式、圭頭式、腸挟長三角形式、方頭式、短茎長三角形式などに分けることができ、さらに方頭式は2種類、三角形式は大小の2種類、腸挟長三角形式は頸部の長短などによって6類に細分することができた。

以下では、各形式の主要な特徴を説明する。

①柳葉式鍬〈A形式〉(第104図、図版83)

典型的な柳葉式の鉄鍬で、鳥舌鍬ともいわれているものである。この形式の鉄鍬が最も多く出土しており、破損品が多いため正確さを欠くが、323点以上あったものと考えられる。出土状況を見ると、A～C群のみに存在し、南半部のD～F群中にはまったく認めることはできなかった。また、この形式の鍬は、東にして配置されるという規則性が認められる。

鍬身部は、S字状に湾曲する刃部をもち、山形に突起する関をへて茎部にいたる形態である。先端がややふくらをもち、断面形はレンズ状を呈しているが、明瞭な鑄は認められない。厚さは0.3～0.7cm前後ある。

茎部の断面形は円形で、木質の遺存しているものが多いことから、矢柄を装着し、A・B群上で矢柄を交差するように束ねた状態で副葬されたものと考えられる。全長は7.8～12.5cm前後、鍬身部の幅は1.3～2.5cm程度の範囲内に収まっている。

②腸挟柳葉式鍬〈B形式〉(第105図、図版84)

腸挟を有する大型の柳葉式鍬である。12点出土しており、出土地点はD群が1点、E群が11点と群の南半部に集中して配置されている。

鍬身部は細長く、先端はややふくらをもつ。断面形はレンズ状で、明瞭な鑄は認められない。腸挟は直線的に長く垂下しており、先端近くで外側やや広がっている。腸挟の断面形は、三角形を呈している。

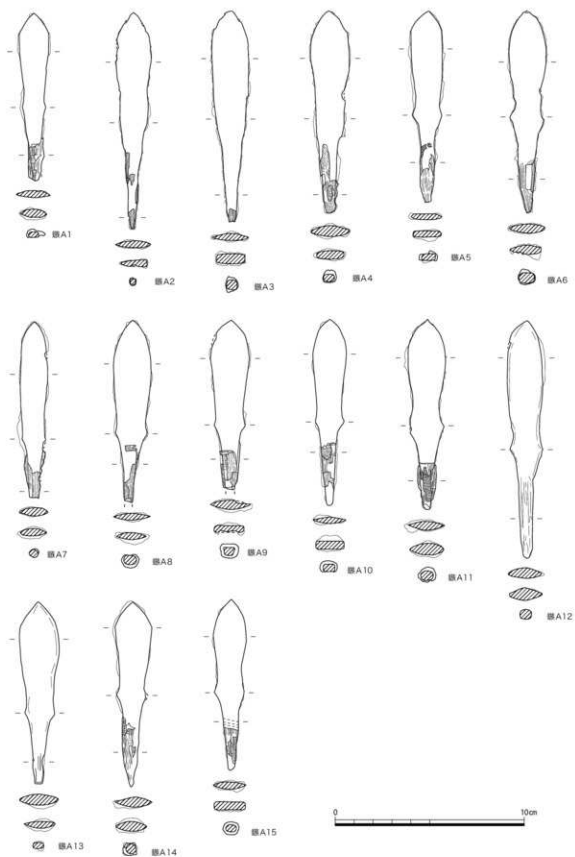
茎部は断面方形で、木質の残っているものも多く、なかには樹皮を巻いたものもある。こうした矢柄の遺存しているものから、矢柄の直径を復元すると0.9cm程度のものであったと考えられる。全長17.7～14.2cm、鍬身幅2.7～2.2cm、茎部径0.5～0.8cmである。

③三角形式鍬〈C・D形式〉(第106図、図版84)

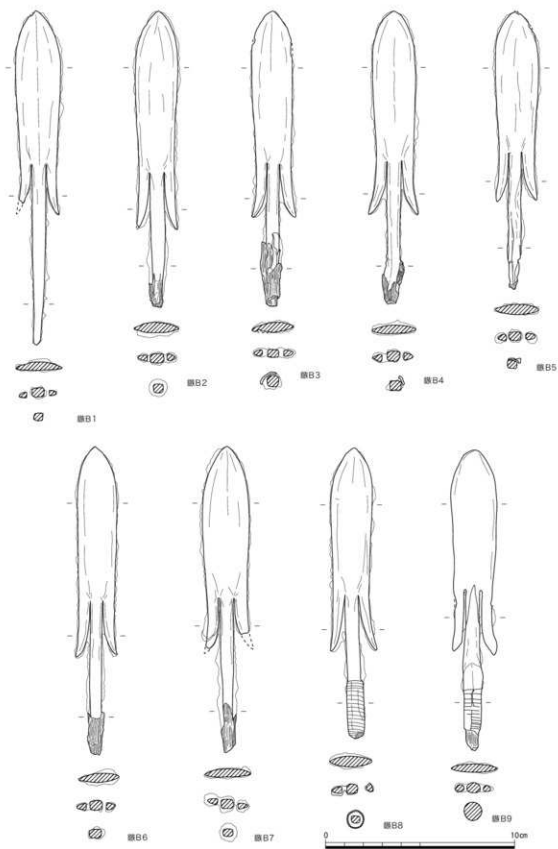
鍬身部が三角形を呈し、鍬身部と茎部との境である関が山形突起となっている形態である。法量が大きいものをC型式、小さいものをD型式とした。

C形式は、E群から5点、F群から1点の計6点出土しており、南半部に集中する。

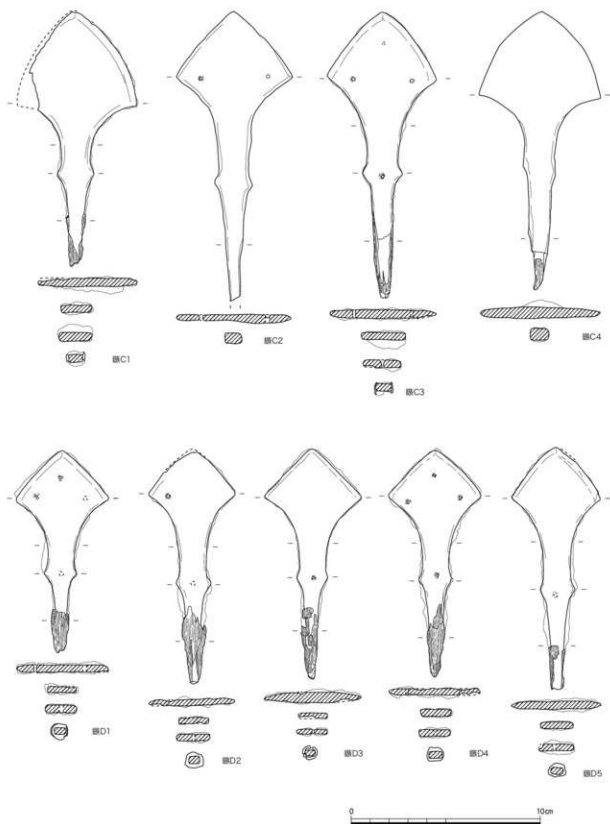
鍬身部が直線的に近いものと、ふくらをもったものがある。断面形は、扁平な板状を呈しており、厚さは0.4cm程度である。鍬身部から湾曲しながら下方に向かい、山形の関を経て茎部へと続いている。鍬身部に3個、関部に1個の小孔が認められるが、鍬身部にふくらをもつものには小孔がない可能性がある。



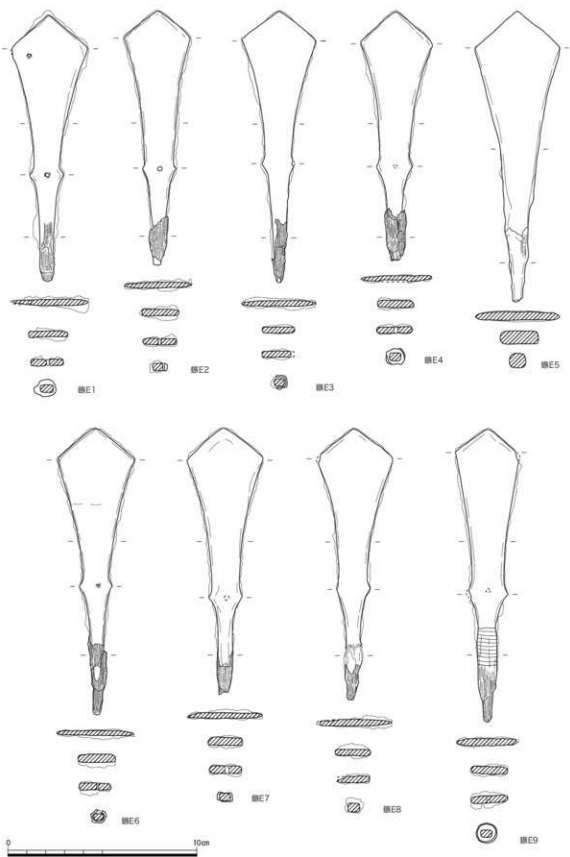
第104図 鉄鏃実測図1 (1/2)



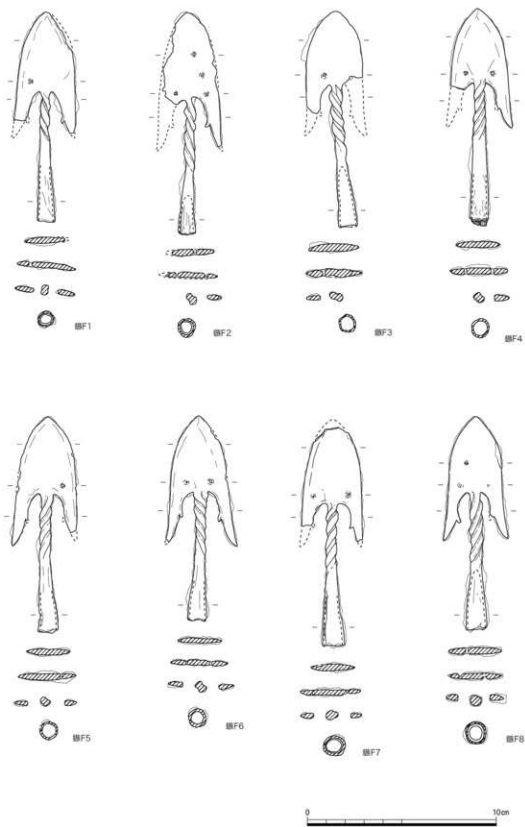
第105図 鉄鏃実測図2 (1/2)



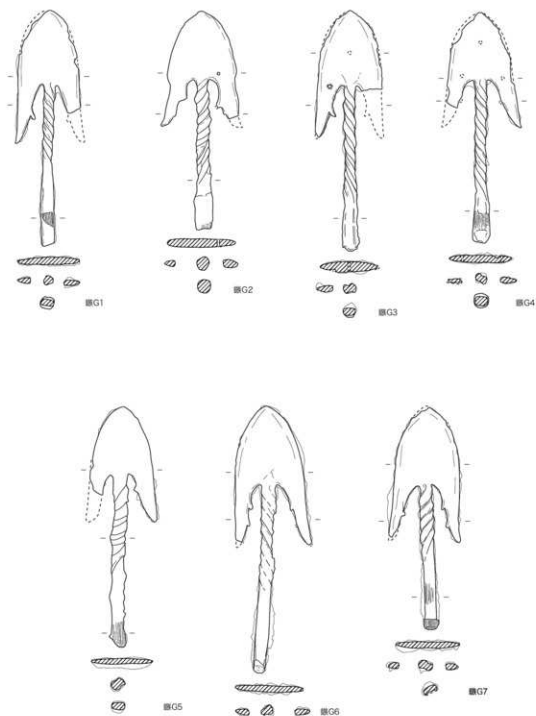
第106図 鉄鍔実測図3 (1/2)



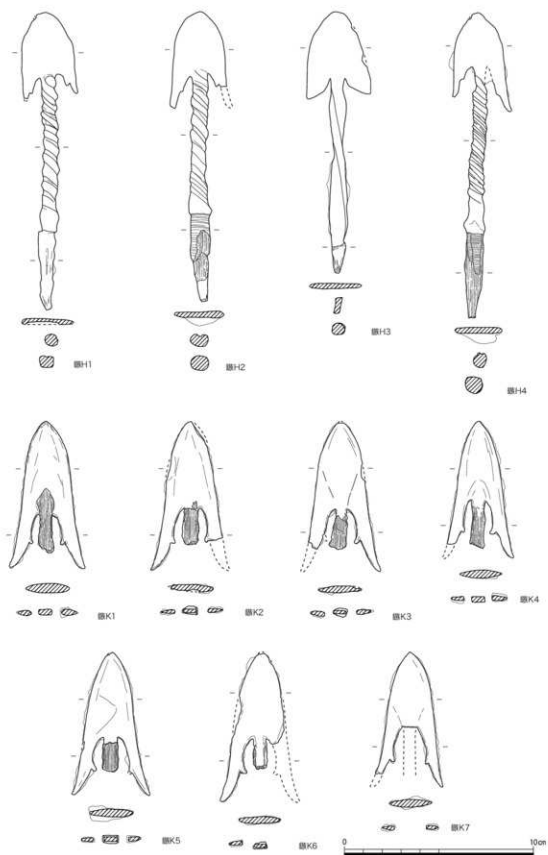
第107図 鉄鏃実測図4 (1/2)



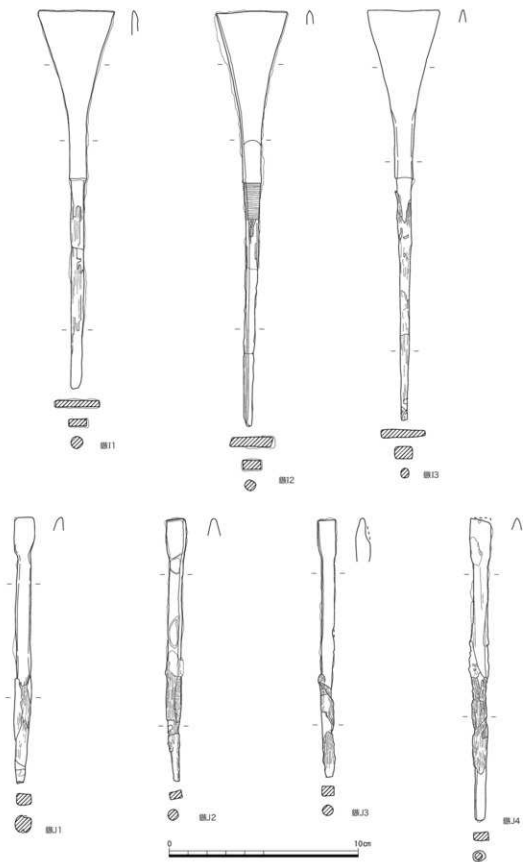
第108図 鉄鏃実測図5 (1/2)



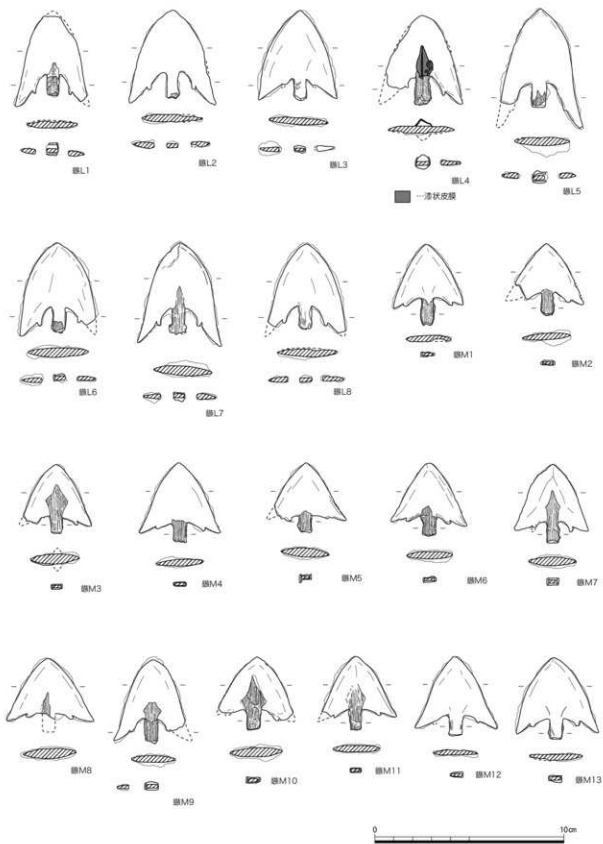
第109図 鉄鏃実測図6 (1/2)



第110図 鉄鏃実測図7 (1/2)



第111図 鉄鏃実測図8 (1/2)



第112図 鉄鏃実測図9 (1/2)

茎部は、断面長方形を呈し、木質の遺存しているものがあることから、矢柄を装着していたものと考えられる。全長は14.6～15.8cm、鎌身部幅は5.8～6.3cm前後におさまっている。

D形式は、E群から25点、F群から1点の計26点出土しており、C形式の出土傾向に類似している。

鎌身部が直線的に近い形態で、全長13.8～10.6cm、鎌身部の幅は5.3～4.2cmである。鎌身部に3個、間部に1個の小孔が認められるのは、C形式と同じである。

茎部は、断面長方形を呈し、木質の遺存するものが認められる。

④圭頭式鎌（E形式）（第107図、図版85）

鎌身部の先端が山形を呈する形態で、13点出土しており、そのいずれもがE群上に埋置されていたものである。

鎌身部の先端は直線的で、断面は扁平な板状を呈しており、茎部との境は山形に突起する関を有する。鎌身部の中央と間部に小孔の存在を確認することができた。小孔は鎌身部に3個、間部の中央に1個穿たれているようである。

茎部は、断面長方形を呈し、木質の遺存しているものがあることから、矢柄を装着したものとみられる。全長13.5～15.5cm、鎌身部の幅は3.6～4.3cm前後である。

⑤長頸重長三角形式鎌（F～H形式）（第108～110図、図版85・86）

ふくらのある鎌身部の平面形は三角形で、二重の腸袂をもち、長い頸部と茎部をもつもので、形態の相違からF～H型式に分類した。

F形式は、D群から1点、E群から4点、F群から7点の計12点出土している。

鎌身部は、ふくらを有する長三角形で、深い二重の腸袂をもつ形態である。長さ6.1～6.5cm程度、幅は約3.5cmの範囲におさまり、断面形は扁平なレンズ状を呈している。鎌身部の下半には、左右対称の位置に複数の小孔が施されていた。X線撮影をしていないので詳細は不明であるが、5個程度あったものと考えられる。頸部の上部には、振りが増えられている。振りの回数は3～5回程度であり、その方向は時計回りと、反時計回りの双方が認められ、一定していないことがわかる。

茎部は、袋部を形成していることが極めて特徴的である。袋部は、頸部から袋部端に向かって緩やかに広がる形態をもち、合せ目を1箇所確認できた。断面は円形を呈し、端部での径は1cm程度ある。袋部の内部には、木質の遺存するもの（第108図鎌F4）があることから、矢柄を挿入して装着していたものと考えられる。全長は、10.9～11.9cm前後、鎌身幅は3.2～3.7cm前後ある。

このF形式の鉄鎌は、形態的にも、機能的にも極めて特徴的で、これまでのところ他に類例が全く認められないものであるといえる。

G形式は、E群から6点、F群から6点の計12点出土しているが、そのうちF群の6点は群の中央よりやや南寄りにまとまった状態で出土している。

鎌身部と頸部は、おおむね先に述べたF形式と同様の大きさや形態を有しており、鎌身部には

小孔が3個認められた。頸部の上半部に施された振りの方向は、時計回り、反時計回りの双方があり、回数はF形式よりも回数が多い。茎部に木質の遺存するものがあることから、矢柄を装着していたものと考えられる。全長は、10.5～14.3 cm前後、鍔身の幅は3.2～4.3 cmある。

H形式は、E群から2点、F群から2点の計4点出土した。

鍔身部は、ふくらを有する長三角形で、二重の腸朒をもつ形態であるが、F、G形式よりも一回り小さい。頸部の振りは、ほぼ頸部全体に及んでいる。振りの方向は、いずれも時計回り、振りの回数も多い。ただし、鍔H3は、振りが1回のみであり、しかも鍔身部の腸朒は重朒になってはいない。全長は、13.9～16.1 cm前後、鍔身幅は2.7～3.4 cm程度ある。

⑥方頭式鍔（I・J形式）（第111図、図版87）

鍔身部の先端が直線的で、平面が撥形に開く形態のものをI形式、側面が直線的な鑿状のものをJ形式に分類した。

I形式は、3点しか出土しておらず、鉄鍔の中では最も少ない出土量であった。3点ともE群上に他の型式の鍔と束ねた状態で埋納されていた。

鍔身部から緩やかに湾曲しながら下方に延び、閔部を経てから茎部へと続くものである。鍔身部の平面形は、撥形を呈しており、先端の幅は3.8～4 cm程度ある。鍔身長は9.2 cm程度で、断面は長方形を呈し、厚みは0.2 cm程度ある。

茎部は細長く、断面は円形を呈している。すべてに木質が遺存しており、口巻の残るものもあることから、矢柄を装着して埋納されたものと考えられる。全長は20～22.9 cmもある長大な鍔である。

J形式は、E群から6点、F群から1点の計7点出土している。E群の6点は、いずれもI形式の鍔などとともに、束ねて埋納されていた。

鍔身部は、鑿状のような形態を呈しており、直線的な先端の幅は1.1～1.3 cmの範囲におさまる。断面は長方形で、厚さは0.4～0.5 cm程度ある。

茎部は細長く、断面は径0.5 cmほどの円形で、木質の遺存しているものがあることから、矢柄を装着していたものである。全長は、12.5～15.7 cm程度ある。

⑦短茎重朒長三角形鍔（K・L形式）（第110・112図、図版88）

鍔身部は長い三角形を呈し、二重の腸朒をもち、短小で扁平な茎部を有する形態で、K形式とL形式に分類した。

K形式は、E群から8点、F群から2点の計10点出土している。

縦長の三角形を呈する鍔身部は、ややふくらを有する。腸朒は深く、湾曲しながら外側に長く延びている。鍔身長は7.8 cm前後で、幅は3.7～4.3 cmほどである。断面は扁平なレンズ状を呈しており、厚さは0.2 cm前後である。

茎部は、幅0.6 cm前後で、断面形は長方形を呈する。根括みによる矢柄の痕跡とみられる木質が遺存しており、先端を鋭角に尖らせて仕上げている。

L形式は、C群から2点、D群から8点、E群から2点、F群から4点の計16点出土している。

鎌身部は長めの三角形を呈するが、K形式に比べて小型であり、後述するM形式との中間の大きさであるといえる。鎌身部は、ややふくらを持つ縦長の三角形で、長さ4.8～6.3 cm、幅は4.2～4.5 cm程度である。断面は厚みが0.4 cm前後の薄いレンズ状を呈している。2重目の脇扶は、茎部の付け根から1重目の先端までのほぼ中間に造られている。この型式の場合も、根扶を用いて矢柄を装着しており、茎部に木質の遺存するものが多く認められた。

⑧短茎重扶三角形形式鎌（M形式）（第112図、図版88）

鎌身部の平面形は三角形で、二重の脇扶をもち、短く張り出した茎部をもついわゆる短茎鎌である。C群から1点、D群から5点、E群から14点、F群から8点の計28点が出土している。

鎌身部は、長さが3.5～4.5 cm、幅が2.8～4.9 cm前後の大きさで、断面形は厚さ0.2～0.4 cm程度の薄いレンズ状を呈している。2段に造られた脇扶の先端は、おおむね一直線に揃っているものと、1段目が2段目よりも突出していないものに細分することができる。

茎部は、幅が0.5 cm程度で、断面は長方形を呈する。多くに木質が遺存しており、根扶みによって矢柄を装着していたことがわかる。矢柄は、根扶みの先端を尖らせた形態で、鎌身部の中位を上回る位置まで延びている。

（6）短刀（第113図、図版91）

短刀は、D群から1点のみが出土している。

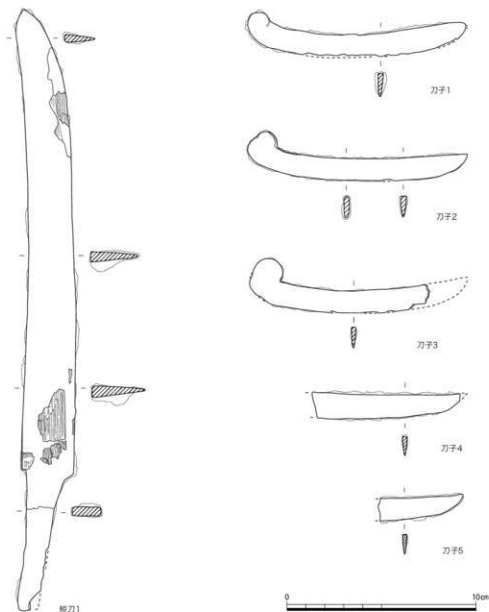
刀身部は、鉄刀の場合とは異なり、緩やかな反りを有しており、切先は丸みを帯びている。上下に閔をもつ両閔式で、閔は背側が直角、刃側が袈裟状になっている。刃部の断面形は、楔形を呈する。刃部には、鞘の痕跡とみられる木質が遺存していた。

茎部は細長く、茎尻の一部が欠損しているが、直線的におさめるものとみられる。断面形は長方形で、厚さは0.4 cmあるが、目釘穴は確認できていない。全長32.2 cm、刀身幅2.4 cm、茎部長7.4 cmである。

（7）蔵手刀子（第113図、図版91）

蔵手刀子は、その可能性があるものも含めて10点出土している。A～Fのいずれの群中にも、破損品すら認めることができなかつたため、本来の埋納位置は不詳といわざるを得ない。おそらくは、擾乱を受けたA～C群のうちでも、その度合いがもっとも顕著なA群、埋納施設の北小口付近に埋置されていた可能性を指摘できる。

柄の先端を蔵の頭状に丸く巻いた形状の刀子である。蔵手部は、円形に近い形態であるが、巻き込みは表現されていない。蔵手部の径は1.1～1.5 cm程度ある。刃部は、緩やかな反りをもっており、断面は楔形で、切先は尖り気味におわっている。全長は11.7 cm前後、身幅1.1～1.5 cm、厚さは0.2 cmである。



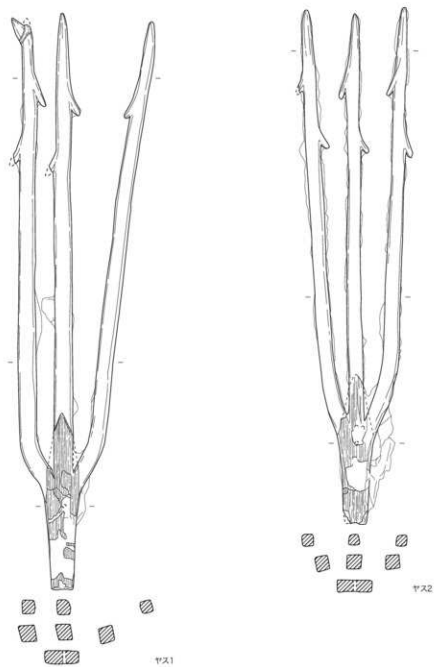
第113図 短刀、藏手刀子実測図(1/2)

(8) ヤス状刺突具(第114・115図、図版89・90)

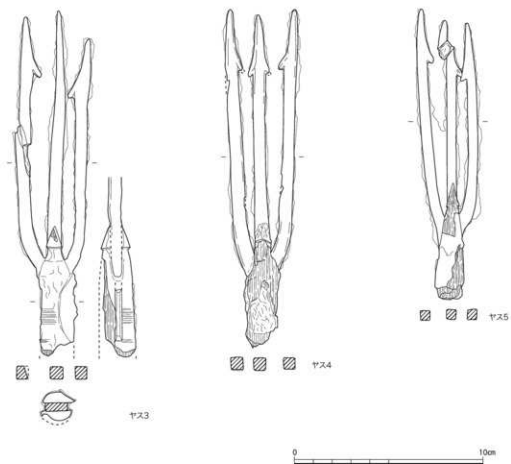
茎部から三叉に分かれた刺突部をもつ形態で、大型品2点と小型品3点の計5点出土している。形態的な特徴から、漁具であるヤス状刺突具という名称を使用した。その形態や大きさなどからすれば、武器としての機能を十分に持ち合わせているといえよう。

大型品(ヤス1、2)は2点とも完形品で、F群の南西隅に重ねるように並べて置かれていた。三叉に分かれた刺突部は、断面が方形であるが、先端は尖り気味におわっている。それぞれの刺突部には、上下2重に鵬挾が施されている。鵬挾は、先端からやや下がった位置と、さらに下がった位置にそれぞれ方向を違えて取り付けられていた。

茎部は、茎尻に向かって徐々に幅を狭める。断面は長方形で、厚さは0.7 cmほどある。茎部に



第114図 ヤス状刺突具実測図1 (1/2)



第115図 ヤス状刺突具実測図2 (1/2)

は、目釘穴が1個認められ、柄の痕跡とみられる木質が中央の刺突部にまで及ぶ状態で遺存しているが、木材の先端を削って尖らせたもので挟み込んで固定したものと考えられる。

ヤス1は、全長30.6 cm、幅6.8 cmで、刺突部の一つは外側に大きく開き、方向の異なる腸扶が一つ付けられていた。ヤス2は、全長27.3 cm、幅5.4 cmで、ヤス1よりも一回り小さい。

小型品(ヤス3～5)は、3点とも破損品であるのみならず、E・F群内に散在した状態で出土したもので、整理の段階で完形に復元することができたものである。意図的に破損した状態で埋納されたものと考えられることができる。形態的には、大型品と基本的に同様であるが、刺突部の腸扶が2重ではなく、その取り付け方向にも相違が認められる。

ヤス3は、全長18.2 cm、幅3.8 cmである。中央の刺突部は、両側に比べてわずかに突出しているが、腸扶はないようである。両側の刺突部は、それぞれ内側に向かって腸扶を付けている。

茎部から中央の刺突部にかけて、木質が良好な状態で遺存していた。先端を加工して尖らせた木材で挟み込み、糸巻きによって柄を固定したものと考えられる。遺存する木質から、柄の直径を復元すると、径1.8 cmほどになるものと推察される。

ヤス4は、全長18 cm、幅3.7 cmである。中央の刺突部は、両側の刺突部に比べわずかに短く、

両側に向かって腸袂を付ける。外側の刺突部は、腸袂を内側に向けて付ける。本例も木質が比較的良好な状態で遺存しており、ヤス3と同じ方法で柄を装着したものと考えられる。

ヤス5は、全長15.4cm、幅3cmと最も小型品で、各刺突部の長さはそれぞれ異なる。腸袂の配置はヤス4に類似するものである。木質の遺存も、他と同じ状況であり、柄を装着して埋納されたものとみられる。

第2節 墳丘の出土遺物

墳丘からは、様々な遺物が出土しているが、古墳に伴うものと、そうでないものとに分類することができる。古墳に伴う遺物は、副葬品と考えられるもの、墳丘に供えられた埴輪や石材などに分けられる。

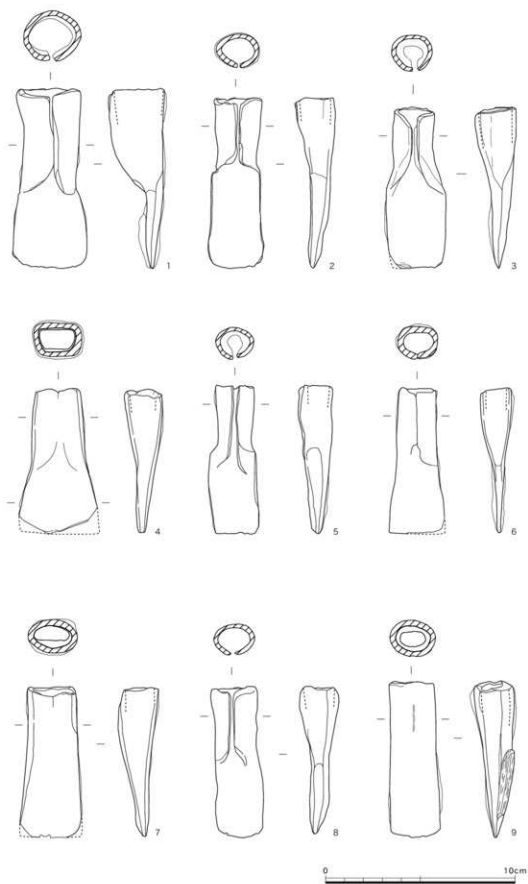
(1) 鉄製品(第116～120図、図版92・93)

鉄製品は、第8次調査の8-3区および第10次調査の10-2区で確認された墳丘盛土の2次的な堆積土層からまとまって出土したものである。出土した場所や互いに癒着したものが多く認められることなどから、本来は前方部に設けられた埋葬施設ないしは埋納施設に副葬された一括品である可能性が濃厚と考えられる。その場所を特定することはできないが、第3次調査で確認された副葬品埋納施設より北側および東側に存在した可能性は指摘できそうである。

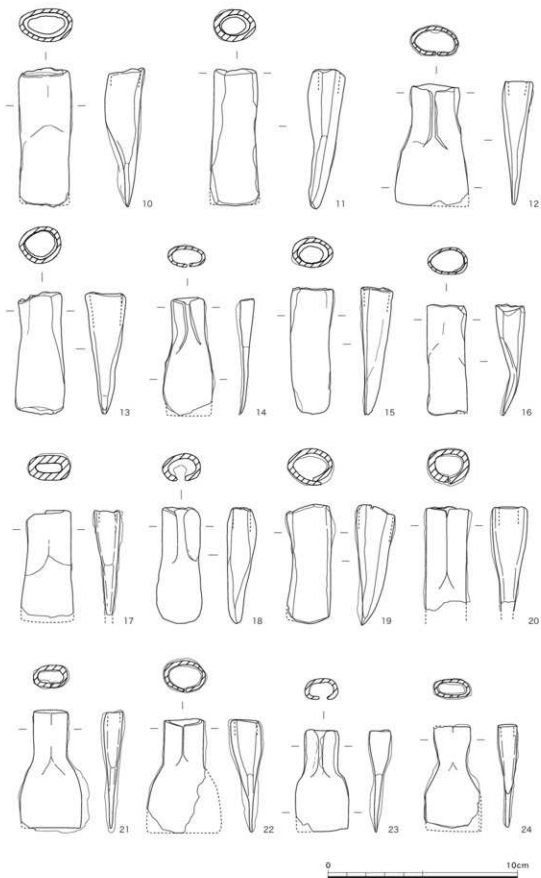
鉄製品には、鉄斧、鋤先、鉄鎌、刀子などの農・工具類の他、鉄剣や鉄鏃などの武器類を確認できたが、破損品も多く、形態の分からないものも少なからず存在する。そのうち大半を占める



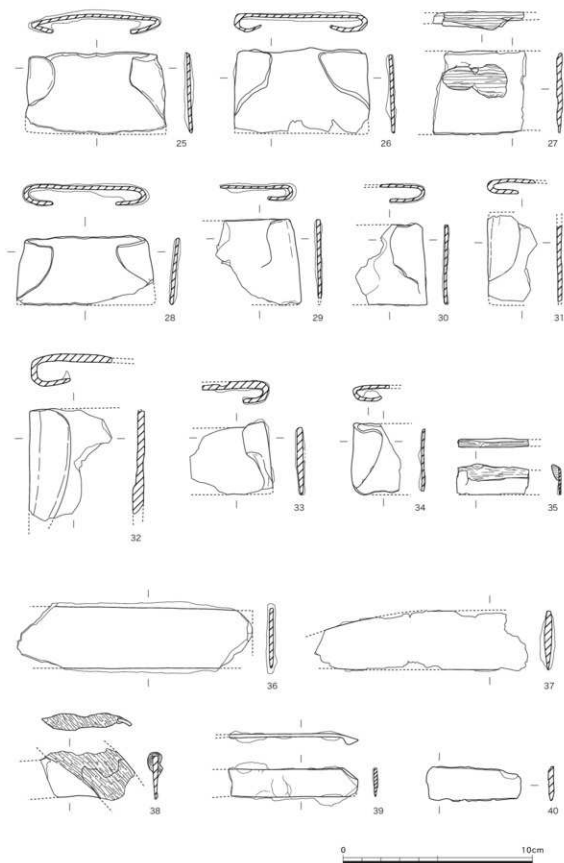
第116図 癒着した状態の鉄製品



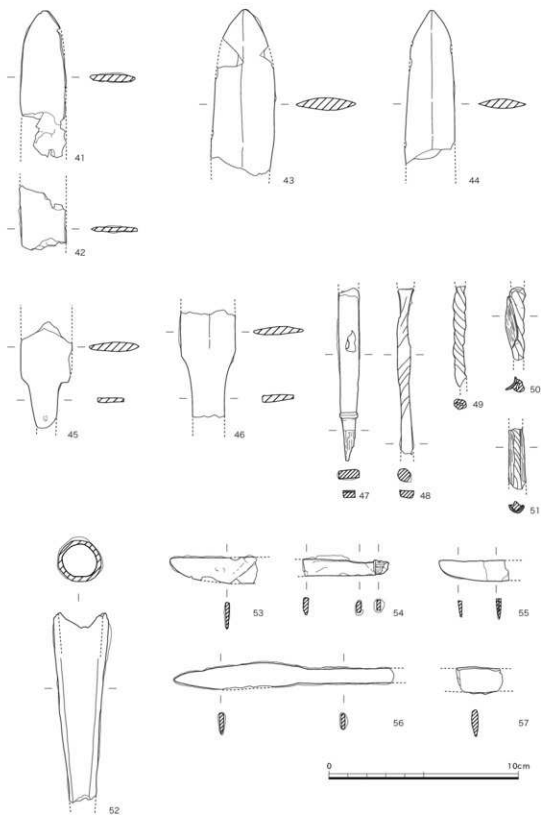
第117図 鉄矛実測図1 (1/2)



第118図 鉄矛実測図2 (1/2)



第119図 勸先・鉄鎌実測図(1/2)



第120図 鉄剣・刀子など実測図(1/2)

のが鉄斧や鋤先などの農工具類であり、武器類は少ない傾向にある。

① 鉄斧

鉄斧（1～24）は、すべて柄を挿入するための袋部をもつ有袋式の鉄斧で、36点以上あることを確認した。

刃部は、直刃のものと同弧状を呈するものがあるが、刃を造り出しているか否かは不明である。肩の張る有肩タイプと張り出しをもたない無肩タイプの二者に分類できるが、肩の張りは緩やかなもの、屈曲するものなどがある。

袋部の横断面は、楕円形、長楕円形、隅円方形など各種あるが、楕円形のもが大半である。袋部の折り返しは、隙間が認められるものと密着していて不明瞭になっているものがある。最も大きな1は、全長9.5 cm、刃部最大幅3.8 cm、袋部最大径3 cmを測り、わずかに肩をもち、袋部断面は楕円形を呈する。最も小さい23は、全長5.3 cm、刃部最大幅2.8 cm、明瞭な肩部をもち、袋部断面は最大径1.8 cmを測る長楕円形を呈する。全体的な法量は、おおむね全長5.3～8.5 cm、刃部最大幅2.1～4.2 cm前後の範囲内に取まっている。

② 鋤先

鋤先（25～34）は、長方形の鉄板の両端を折り返して着柄部を形成したものである。10点以上あることを確認しているが、破損品が多く、全形をうかがい知れるのは25・26・28の3点のみであった。形状は、横に長い長方形を呈するものばかりと考えられ、正方形や縦長の形態をもつものはないようである。

刃部は、おおむね直線状を呈し、27には木目が横方向の木質が遺存していた。25は、刃部幅7 cm、長さ4.5 cm、26は刃部幅7 cm、長さ4.2 cm、28は刃部幅7.2 cm、長さ3.5 cmを測る。他の破損品も、刃部幅が7.1～7.4 cm、長さ3.7～4.4 cm前後の範囲に取まるものがほとんどであるが、32のように厚手で、長さが5.8 cm以上ある鋤先は例外的なものである。

③ 手鎌

手鎌（35）は1点を確認した。横長の細長い鉄板の両端を折り曲げて柄を装着する小型品で、横方向に木目のある木質が遺存していた。破損品であるため、全容は不明だが、刃幅3.8 cm以上、長さは1.3 cm前後である。

④ 鉄鎌

鉄鎌は、5点以上あることを確認している。先端が欠失しているため、刃部の形態は不明であるが、37が曲刃鎌である可能性のある以外は、いわゆる直刃鎌と考えられる。36は、直角に柄を装着するもので、長さ12.4 cm以上、刃部幅3.2 cm、厚さ0.2 cmある。37は、曲刃鎌の可能性があるので、長さ11.3 cm以上、刃部幅3.1 cm、厚さは0.3～0.4 cmある。38は、一方の角を斜めに折り返し、柄に対して刃部が鈍角となって着柄するもの。柄の痕跡である木質が遺存し、木質の範囲から復元すると、柄の幅は2.2 cm前後あったと推察される。刃部の幅は2.1 cmを測る。39は、全長6.6 cm以上、刃部幅1.5 cmの小型品で、柄を鈍角に装着するもの。40も刃部幅1.8 cm前後の小型品である。

⑤ 刀子

53・55 は、刃部のみ破片で、切先は丸味を帯び、断面は楔形を呈する。現存長は、53 が 4.5 cm、55 は 3.4 cm を測る。54 は刃部から茎部にかけての破片で、現存長は 4.5 cm ある。茎部には木質が遺存している。56 は茎尻を欠損し、現存長 11.6 cm を測る。明瞭な関をもたず、刃部は断面楔形で、幅は約 1.1 cm を測る。茎部の断面形は長方形で、幅 0.8 cm である。57 は刃部の小片で、刃部幅約 1.4 cm を測る。

⑥ 鉄剣

鉄剣は、剣身部 (41～44) と茎部 (45～46) の破片がある。剣身部は、断面形がレンズ状で、鑄は明瞭なものと不明瞭なものがある。剣先は、わずかにふくらみをもっている。41 は幅 2.4 cm、厚さ 0.5 cm、43 は幅 3.3 cm、厚さ 0.6 cm、44 は幅 2.7 cm、厚さ 0.5 cm である。45 は直角に近い関をもち、茎尻を欠損する。基部は断面長方形で、幅 1.4 cm、目釘穴を 1 孔確認できた。46 は緩やかな斜角関をもち、茎部は断面長方形、幅は 1.7 cm である。

⑦ 鉄鎌

47 は、鎌身を欠失する頸部から茎部にかけての破片で、全長は 9.1 cm 以上ある。頸部は断面長方形で、幅 1.1 cm、厚さ 0.5 cm である。棘状の関をもち、茎部は短い。茎部は断面長方形で、幅 0.6 cm、厚さ 0.3 cm あり、木質が遺存していることから、矢柄を装着したものと推察することができる。

⑧ その他

48～51 は、振りを施した棒状の鉄製品である。48 は、長さ 8.7 cm 以上あり、振りが施された中央部は断面円形であるが、上下は断面が長方形を呈する。振りは、時計回りに施されている。49 は、逆時計回りに振じられた棒状品で、断面は径 0.7 cm の楕円形、長さは 5.3 cm 以上ある。48・49 は、先に述べた副葬品埋納施設から出土した鉄鎌の F～H 形式の頸部に大きさや形態が類似していることから、鉄鎌の頸部である可能性が濃厚である。50・51 は、逆時計回りに振りを加えた棒状品であるが、表面には木質が遺存しており、柄の中に挿入された状態であることを示唆しているものと考えられる。

52 は、両端を欠損するが、先端を尖らせ、基部が中空になる鉄製品。現存長 10 cm、基部の径 2.8 cm を測り、断面形は円形になっている。石突きになるのであろうか。

(2) 石製品 (第 121 図、図版 98)

第 3 次調査で出土した管玉 1 点と第 10 次調査の 10-2 区から出土した斧形石製品 1 点あるが、ともに原位置を留めた状態で出土したものではない。

① 管玉

管玉は、西側くびれ部第 3 段斜面の葺石上に堆積した転落石に混入した状態で出土したものである。出土地点を考慮すると、後円部に設けられた埋葬施設 (竪穴式石室) の副葬品である可能性が濃厚で、埋葬施設が破壊された際に転落して埋没したものと考えられる。

緑色凝灰岩製であるが、全体に風化による摩滅が顕著で、しかも一部が破損している。現存長3.3 cm、径0.6 cmで、片面から穿たれた孔径は0.2～0.3 cmである。

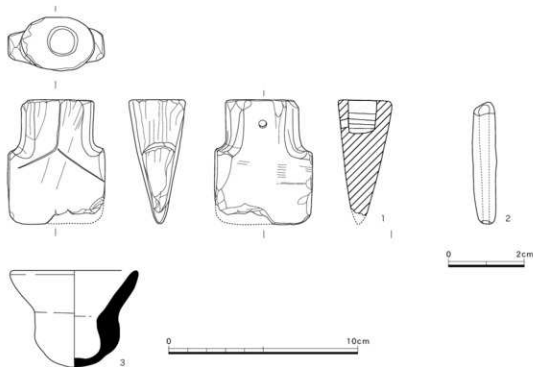
② 斧形石製品

先に述べた鉄製の農・工具類が出土した同じ墳丘盛土の2次的な堆積土層から出土したものである。

有袋鉄斧を模倣した石製品で、肩がやや張った形態を呈しているが、刃先部の約半分ほどを欠失している。袋部の横断面は楕円形で、折り曲げ部は逆Y字状に施した細い線刻によって表現し、その背面には径約0.4 cmの円孔が穿たれている。滑石製で、法量は全長6.6 cm、袋部の長径3.8 cm、短径3 cm、刃部の最大幅は5.2 cmである。表面は、鉄錆によって赤褐色を呈している部位が認められることから、先に述べた鉄製の農・工具類などと同じ施設内に埋納されていた可能性が濃厚と考えてよいであろう。

(3) 土製品 (第121図、図版98)

6-1区において、前方部と西造り出しとの接続部にあたる墳丘側の石列内からミニチュア土器が1点出土している。小型丸底壺を模倣した形態で、外反気味にのびる口縁部と丸底に近い底部をもつ。器壁は全体に厚く作られ、口径6.8 cm、器高5.1 cmに復元することができる。胎土は比較的細かく、淡褐色を呈している。



第121図 石製品、土製品実測図 (1/1・1/2)

(4) 埴輪(第122～129図、図版93～99)

埴輪は、墳丘に設定した各調査区から出土しているが、後世に墳丘が大きく改変された際に破壊を受けた影響で、原位置をとどめず、破片になったものがほとんどであった。また、第1段平坦面を確認した9-1区、9-4区、10-2区、第2段平坦面の5-1区、8-3区、そして西造り出し部の11-2区では、原位置をとどめた状態の埴輪列を確認できたが、いずれの調査区でも上面が大きく削平を受けていた結果、ほとんどが底部しか遺存していなかった。比較的遺存状態が良好なもので第3段突帯あたりまで、悪いものでは第1段突帯以下とごくわずかであった。そうした原位置を留めた状態の埴輪列の内、調査時点で取り上げを行ったのは5-1区の14個体のみであり、8-3区、9-1区、9-4区、10-2区、11-2区の埴輪はいずれも取り上げることをせず、現地に保持した状態のまま埋め戻しを行った。

埴輪には、円筒埴輪と朝顔形埴輪はもとより、壺形埴輪や家形、蓋形、盾形、靴形、甲冑形、水鳥形、船形など各種類の形象埴輪の存在を確認した。出土量は、もちろん円筒埴輪が最も多く、朝顔形埴輪や蓋形埴輪がそれに次ぎ、他の形象埴輪についてはそれほど多くない状況であった。以下では、円筒埴輪から順に概要を説明する。

① 円筒埴輪(第122～124図)

ここではまず、5-1区(前方部西側第2段平坦面)で原位置を保持した状態で出土した埴輪列の埴輪について、その特徴の説明からはじめ、その内容を踏まえて各調査区から出土した円筒埴輪について解説することにした。

円筒埴輪列の埴輪(第123図、図版93～95、付表4)は、14個体が樹立した状態で発掘された。それらの遺存状態をみると、底部はおおむね全周していたのに対して、器高については最も良好なもので4段目の下半(12号、残存高約41cm)までであって、それ以外は3段目の下半より下が残る程度のものであった。外形は、垂直気味に立ち上がるものも少数あるが、やや開き気味に上方へ向かうものが大多数を占めている。ただ、開き気味といっても、口縁部に向かってそれほど広がらない形態になると推察される。

透孔は、すべて円形で、2段目に2孔ずつ開けている例が14個体中で12個体あり、残りの1個体(14号)については残存状態が悪く、透孔の有無が確認できなかったものである。残るもう1個体(12号)については、2段目に透孔を有しないことは確実で、4段目に穿孔されていることを確認することができた。この個体は、円筒ではなく、朝顔形など他の形態の埴輪になる可能性を考慮すべきであろう。

突帯の形状は、基本的に断面形状を呈しているものがほとんどであるが、ナデを施す際の強弱によってややM字状を呈しているもの(2号)や沈線が施されているもの(13号=第123図25)なども認められた。突帯の幅は1.5～2cm前後あり、突出の度合いは比較的小さくて、1～1.5cm程度のものであった。

底面は、基本的に調整を加えておらず、比較的平坦なものと同凸の認められるものの2者ある。前者には、粘土帯を接合した痕跡や木目状の条線とみられる痕跡などが認められた。一方、後者

には棒状のものとみられる圧痕が顕著に認められるもの（1号＝第123図24、2・3・6・7号）があり、このため底面が分厚く、大きく変形しているものもあった。この圧痕を有する埴輪を後述する法量と外面調整に対応させてみると、底部高（底面と第1突帯上辺までの距離）が13cm前後のもので、かつ1次調整のナナメハケのみで終わるものに限定できそうである。

法量についてみると、底部径はおおむね18～23.6cmまでの範囲に収まり、平均すると20.5cmほどになり、法量の分化は認められない。19cm以下の小さなものが1点（7号）、23cm以上の大きなものも1点（12号）あり、それらは朝顔形埴輪や象形埴輪など、円筒埴輪以外のものを考慮する必要がある。特に12号は、先述したように、外形が垂直気味に立ち上がることや透孔が2段目にはなくて4段目にあることなど、他の個体と異なる特徴があることから、その可能性は濃厚といえそうである。

付表－4 5-1区埴輪列出土の円筒埴輪一覧表

	法量(単位はcm)				外面調整		内面調整	底面の状況	透孔	施文	色調	胎土	備考
	底部径	底面高	突帯間隔	残存高	1次	2次							
埴輪列1号	21.1	13.2	-	21.8	ナナメハケ		ナデ	棒状の圧痕顕著	円形2段目	良好黒褐色	淡褐色	緻密	
埴輪列2号	20.8	13.4	12.6	30.7	ナナメハケ		ナデ ナナメハケ	棒状の圧痕顕著	円形2段目	良好	淡褐色	やや粗い	
埴輪列3号	20.1	12.9	11.8	27	ナナメハケ		ナデ	棒状の圧痕顕著	円形2段目	良好黒褐色	淡褐色	やや粗い	
埴輪列4号	21.2	15.4	-	25.4		板状ナデ	ナデ	凹凸有り	円形2段目	良好	淡褐色	やや粗い	一部摩滅している
埴輪列5号	20.3	16.2	11.9	29.7	タテハケ	B種ヨコハケ	ナデ タテハケ	平坦	円形2段目	良好黒褐色	淡褐色	緻密	
埴輪列6号	20.8	13.4	-	22.3	ナナメハケ		ナデ	棒状の圧痕	円形2段目	良好黒褐色	赤褐色	緻密	全体に摩滅している
埴輪列7号	18	13.2	-	18.2	ナナメハケ		ナデ	棒状の圧痕	円形2段目	良好	赤褐色	緻密	全体に摩滅している
埴輪列8号	19.9	16	-	23.9		B種ヨコハケ	ナデ	平坦	円形2段目	良好	淡褐色	緻密	
埴輪列9号	19.2	16.4	-	25.7		板状ナデ	ナデ	平坦	円形2段目	良好	褐色	緻密	
埴輪列10号	20.4	13.9	12.4	34.7		板状ナデ	ナデ タテハケ	凹凸有り	円形2段目	良好黒褐色	淡黄褐色	緻密	
埴輪列11号	19.7	16.3	12.6	29.8	タテハケ	B種ヨコハケ	ナデ	平坦	円形2段目	良好黒褐色	褐色	やや粗い	内面に粘土帯の接合痕有り
埴輪列12号	23.6	13.3	12.2	41	タテハケ	A種ヨコハケ	ナデ	凹凸有り	円形4段目	良好黒褐色	褐色	緻密	朝顔形円筒埴輪か?
埴輪列13号	21.6	16	-	22.6		板状ナデ	ナデ	凹凸有り	円形2段目	良好	黄褐色	緻密	内面に粘土帯の接合痕有り
埴輪列14号	20	16	-	21	タテハケ	B種ヨコハケ	ナデ タテハケ	平坦	不明	良好黒褐色	淡褐色	緻密	内面に粘土帯の接合痕有り

底部高については、13.2～16.4 cmの間に分布しているが、13 cm前後を測る一群（A類）と16 cm前後のもの（B類）に集中する傾向が認められた。しかも両者は、それぞれ7個体ずつあって、数量的にみても拮抗するという特徴がみられた。

また、突帯間の幅（第1突帯上辺から第2突帯上辺までの距離）が分るものは6個体しかないが、11.8～12.6 cmの間に収まり、平均すると12.25 cmになる。この数値を先述した底部高と比べてみると、13 cm前後の底部高を有するものとは近い値であるが、16 cm前後のものとは格差があるといえる。

調整技法について、まず外面の調整は1次調整のタテハケないしはナナメハケを施すのみで終わるものと、さらに2次調整を加えて仕上げるものとに大別することができる。後者は、断続的なヨコハケを施すもの、連続的なヨコハケを施すもの、そして条痕が不明瞭な板状の工具でナデするものなどを認めることができた。そのうち連続的なヨコハケは、工具を止めながら連続して施すB種に分類されているものであるが、静止の痕跡は比較的明瞭で、その間隔は狭いものであった。また静止痕の角度は、突帯に対しておおむね垂直であるものが多く、傾斜しているものでもその角度は小さいという特徴がみられた。ハケ原体の条数は、1次調整のタテハケ（ナナメハケ）が比較的細かいのに対して、2次調整のヨコハケはやや粗いという特徴がみられる。

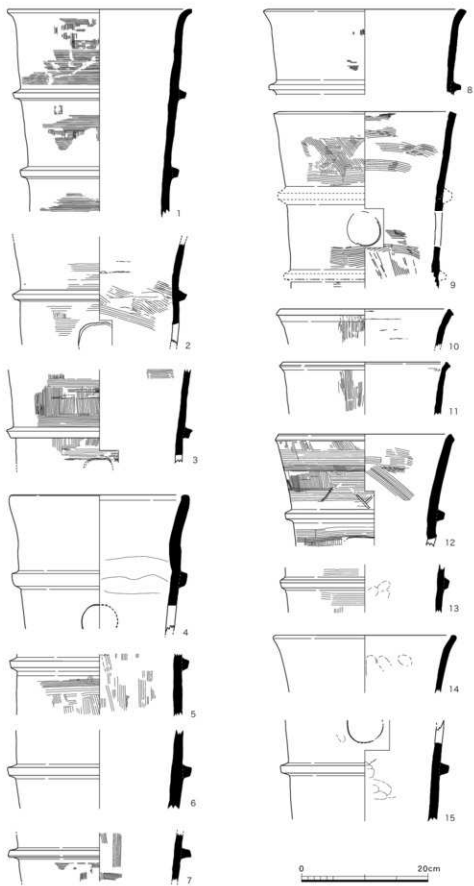
内面の調整を見ると、ナデや指オサエのみによって仕上げるものが主体であるが、ナデとタテハケ（ナナメハケ）を併用するものなどもあって、多様であるといえる。ナデについては、指によるとみられるナデの単位が明瞭に分かるものがある。また、ナデの施工が弱いことによって、粘土帯の接合痕をとどめている個体もいくつか認められた。

焼成については、おおむね良好で、土師質に焼き上がっており、須恵質など密窯で焼成されたと考えられるものは認められなかった。また、黒斑は8個体で確認できたが、その占める範囲は比較的狭く、複数個所みられるものはほとんどなかった。色調については、淡い橙褐色や赤橙色系を呈しているものが大部分を占めており、赤色顔料などを塗布されたものは確認されていない。胎土は、全体的に緻密で均一なものほとんどあって、肉眼観察によって大きな相違を認めることはできなかった。

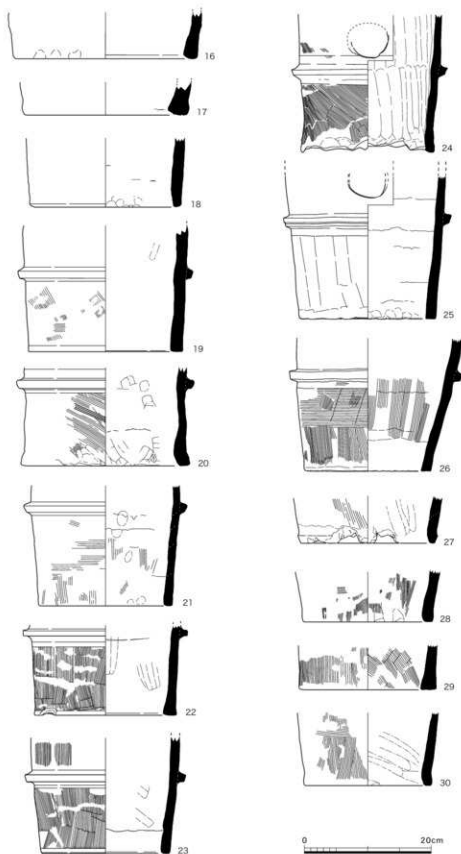
12と32に線刻が描かれているが、そのうち32は口縁部の下の段に3本線による逆V字形の線刻が描かれている。

以上が、第2段平坦面上に樹立された円筒埴輪の底部を中心とした様相であるが、引き続き他の地点から出土した底部についてみるとしよう。1～3・10・11・16～18は後円部（9-3、9-4区）、5・6・8・9・12～15・20は前方部（4-1、7-2区）、4・19・21～23は西くびれ部（8-1、8-2区）、7・27～30は東くびれ部（10-2区）、そして31は東造り出し（11-1区）から出土したものである。

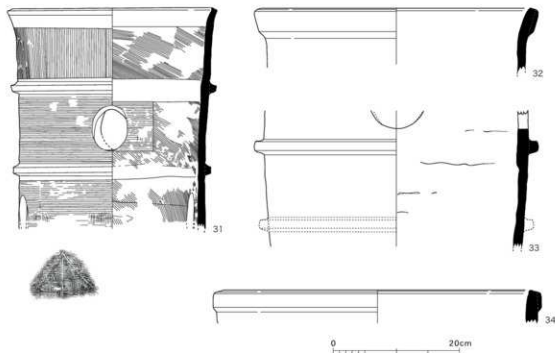
底部径は16・17・20が25 cmを超過するやや大きい部類に属するものであるが、18・19・21～23・27～30は先述した5-1区出土のものにおおむね類似している。また、底部高についても、19・20・22・23がA類、21がB類の範疇に属しており、8-3区（前方部東側第2



第122圖 円筒埴輪尖測図1 (1/6)



第123図 円筒植輪夾漈図2 (1/6)



第124図 円筒埴輪他実測図3 (1/6)

段平坦面)の原位置をとどめた埴輪もA類とB類の二者確認されていることからすると、本古墳に使用された円筒埴輪の多くがこの規格で作製されていた可能性が考えられる。外面の調整は、1次調整のナナメハケないしタテハケのみのもの(20・22・23・27・29)、2次調整にヨコハケを施すもの(21・28・30)などが認められる。

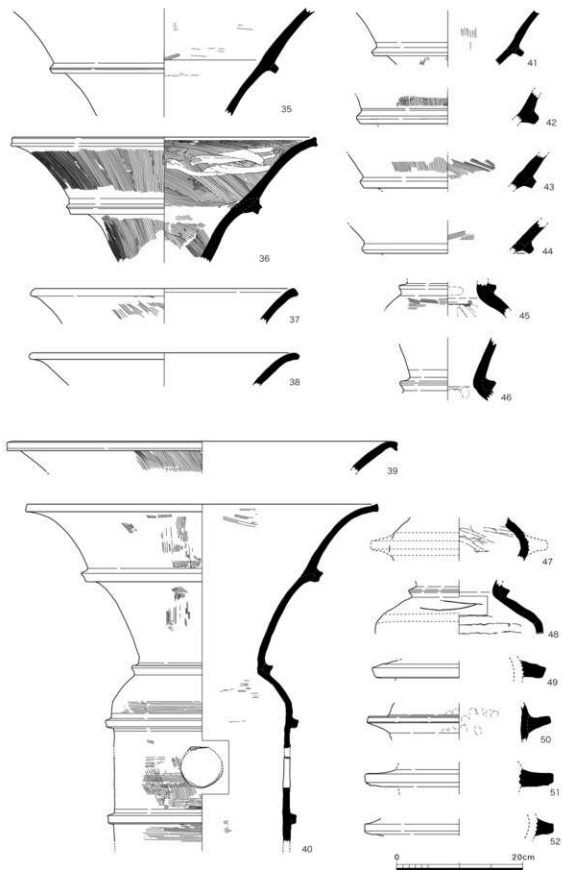
次に、口縁部については、底部に比べると出土量は多くないが、形態は全体に外反するもの(10・12・14)、口縁部まで垂直気味に立ち上がるもの(9)、口縁部付近で外反するもの(1・8・11)、口縁部付近で内湾するもの(4)などに分けることができる。そのうち4は、幅が2.5cm前後の広くて突出度の低い突帯を貼り付け、色調も淡白褐色を呈するなど、他の円筒埴輪とは様相が大きく異なる特徴がある。あるいは通常の円筒埴輪ではなく、形象埴輪になる余地も考えておく必要がある。口縁部径は26.6～33cmの範囲、口縁部高はおおむね12～13.2cmの範囲内に収まっている。

以上見てきたように、全体の形態を知りうる個体は確認されていないため、器高はもとより突帯の条数などを知りうる情報はないが、全体的なプロポーシオンや透孔の位置、口径や底部径などの法量を参考にすると、本古墳の円筒埴輪の標準的な形態は4条突帯の5段構成に復元できるのではないかと推察できる。

② 朝顔形埴輪(第125図)

朝顔形埴輪は、円筒埴輪とともに各調査区から出土しており、40が後円部(9-3区)、35・38・43・44は前方部(7-4、10-2区)、36・41・46は西くびれ部(6-1区)、37・42・45は東くびれ部(10-2区)、39は東造り出し(11-1区)から出土したものである。

全形をうかがい知れるものはないが、40は比較的遺存状態が良好で、残存高が51.6cmまで復



第125図 朝顔形埴輪・壺形埴輪実測図(1/6)

元できたものである。突帯や透孔の形態、調整技法などが円筒埴輪と大差がなく、破片資料から両者を区別することができなかったため、ここでは口縁部、頸部、肩部など明確に朝顔形埴輪と判断できるものを取り上げて説明することにする。

口縁部は二重に大きく開く形態で、口縁端部は外傾ないし垂直する面をもっている。口縁部径は、42 cm前後のもの(37・38)、48.5 cm前後のもの(36)、56～62 cm程度的大型品(39・40)に分けることができる。二重に開く口縁部の屈曲部には、外下方に鋭く突出させた突帯を貼り付けている。突帯の断面形は、方形に近い形態をもつもの(35・41)、台形状を呈するもの(42～44)、幅の広いM字形を呈するもの(36・40)などがある。頸部には、断面が三角形を呈する突帯を貼り付けている。

調整は、口縁部から頸部にかけての外面にはタテハケないしナナメハケを施しているが、内面はヨコハケとナデによって調整するものが多い。肩部から円筒部の外面は、2次調整に断続的なヨコハケを施す(40・45)。

焼成が良好で硬質に仕上げられている36以外は、比較的焼成のあまいものが多い。

③ 壺形埴輪(第125図)

壺形埴輪は、各調査区から出土しているが、体部から剥離した鈎部の破片が多く、全形がわかるものはない。また、朝顔形埴輪の頸部や形象埴輪の台部に形態が類似しているため、ここにあげたものがすべて壺形埴輪にならない可能性があることをことわっておく。47～49・51・52は西くびれ部(6-1区)、50は東造り出し(11-1区)から出土した。

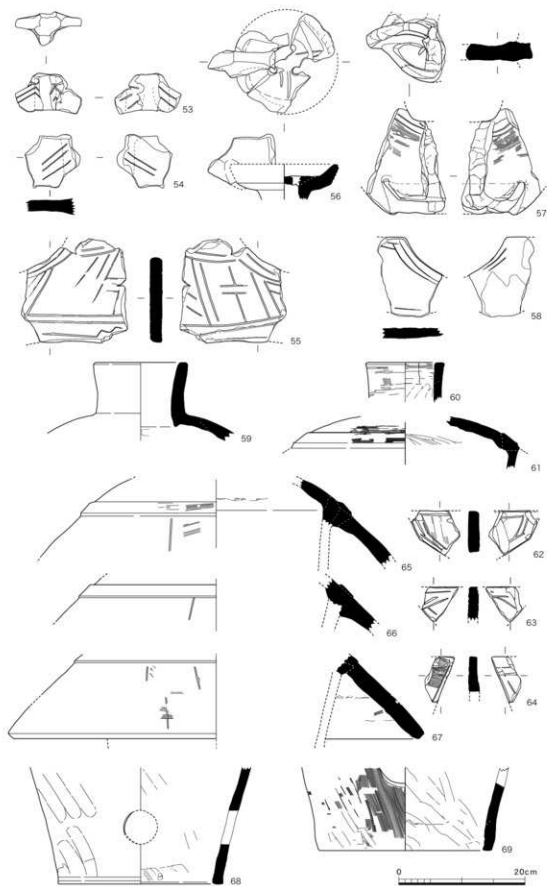
47は鈎が剥離した肩部の破片で、最大径が22.4 cmを測り、剥離の痕跡をとどめている。48は頸部から肩部にかけての破片で、鈎は剥離して存在しないが、頸部には断面三角形の突帯を貼り付けている。肩部には、2条の線刻が認められる。49～52は鈎の破片で、50・51は突出の度合いが大きく、50は径29.5 cm、51は径30.5 cmに復元することができる。

④ 蓋形埴輪(第126図)

蓋形埴輪は、各調査区から出土しているが、ここに取り上げた58・59・68は前方部(7-2区)、53～57・60～67・69は西くびれ部(6-1、7-2、8-2区)から出土したものである。蓋形埴輪は、立ち飾部、笠部、台部などが破片となって出土したもので、全形をうかがえるものはなかった。

53は立ち飾り接続部の破片で、十文字に立ち飾りのつくことが分かる。飾り板の各面には、2～3条の直線的な線刻を施している。

56・57は、飾り板受け部の破片である。56は、受け口状に短く外傾して立ち上がる口縁部をもち、口径は17 cm前後を測る。受け部の内面には粘土を充填するが、円孔を開けている。飾り板は1面のみがわずかに遺存しているが、文様は認められない。57は受け部の立ち上がり部を欠損するが、飾り板の1面が残存する。飾り板の両面は細かいハケによって調整されており、上部には平行する2条の線刻が施されている。粘土で受け部の内面を充填するが、刺突による小さな孔を穿っている。



第126図 蓋形埴輪尖測図(1/6)

54・55・58・62～64は飾り板の破片である。54はナデ調整で、両面に2条ないし3条の線刻が施されている。55は、外形に沿って二重の線刻を入れ、その下に横方向および縦方向に複数の線刻を施して加飾している。58は表面が磨減していて遺存状態は良好でないが、線刻による文様が認められた。文様は両面ともほぼ同じで、外形に沿って二重の線を施している。62・64は、両面とも同じ線刻による文様が施されているが、63は線刻の数が異なっている。62と64にはハケメによる調整、63はナデを施して調整していた。

59は軸受部から笠上半部にかけての破片である。軸受部は、緩やかに開きながら立ち上がるが、口縁部と下端には突帯を巡らさず、口縁部径は14.6cmを測る。60は軸受部の破片で、直立する口縁部をもち、端部はやや肥厚させる。口縁部径は12.5cmを測り、内外面ともハケメによって調整している。胎土、色調などが61・69に類似することから、同一個体になるものと考えられる。

61・65～67は笠部の破片である。上半部から下半部にかけて遺存するもので、中位には突帯を貼り付けて巡らしている。突帯は断面台形を呈し、突出の度合いは低く、幅は2.5cm前後を測る。笠縁部まで残る67の笠部径は66cm前後に復元できる。笠下半部は、不明瞭ではあるが1条の線刻を巡らして上下2段に分割し、それぞれ放射状の線刻を互い違いに施して布張りの装いを表現していた。61・65・67の外面には、わずかにヨコハケ調整の痕跡をとどめている。

68・69は外上方に立ち上がる台部の破片である。68は底部径26.3cm、残存高は18.5cmを測り、高さ6.2cmのところに径が5cm前後に復元できる円形の透孔を穿っている。内外面ともナデ調整によって仕上げられており、黒斑が認められる。69は底部径27.6cm、残存高13.3cmを測り、高さ約10cmの部位に径が8cm程度に復元できる円形の透孔を穿っている。外面はナナメハケを施して調整しており、内面はナデによる調整で、黒斑が認められる。

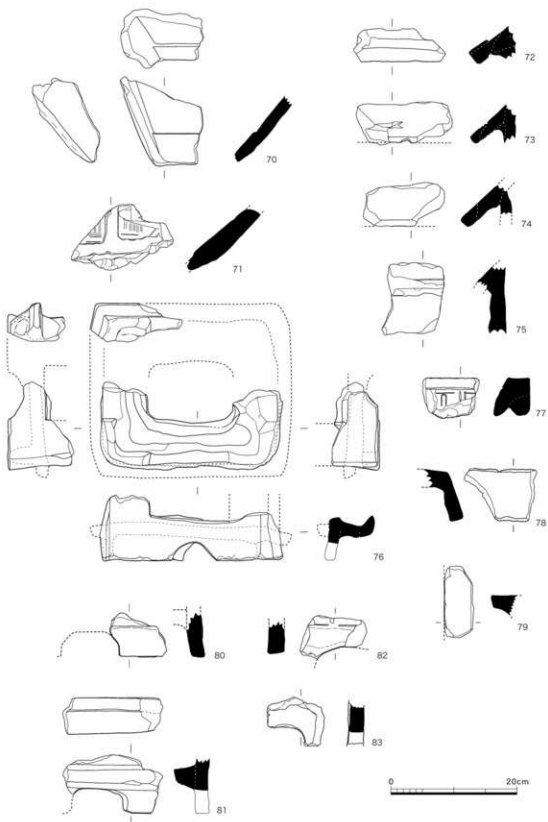
⑤ 家形埴輪 (第127図、図版97)

家形埴輪も各調査区から出土しているが、これも破損品ばかりであって、全体の形状がわかるものはない。77は後円部(10-5区)、78・80・82は前方部(8-3区)、70・72～76・81は西くびれ部(6-1区)、71は東くびれ部(10-2区)、79・83は東造り出し(11-1区)から出土したものである。

70～72は屋根の破片である。70は破風から軒にかけての破片で、軒先には幅4.5cm前後ある押縁突帯を貼り付けている。71は縦方向の突帯と横方向の突帯がT字状に接続して貼り付けたもので、その左右には縦・横方向に施した線刻で網代を表現している。72は屋根の軒先で、幅3.5cm前後の押縁突帯を貼り付けている。

73～75は、屋根の軒先から壁体にかけての破片で、75には押縁突帯を貼り付けているが、73・74は何の表現もされていない。

76は、基部から壁体にかけての破片で、長さ29cm前後、幅24.5cm前後に復元できる小型の家形埴輪になるものと考えられる。壁体は四隅のみにあり、四面の中央には大きな開口部を設けている。基部の中央部には、半円形の透かしを切欠いており、その上部には短く水平に突出する



第127図 家形埴輪尖頭図 (1/6)

裾廻突帯を貼り付けているが、その大部分は剥離して遺存していない。四隅の外側に粘土を補填して接合部を補強している。基部の内側には、厚さが2 cm程度の粘土紐を2～3重に継ぎ足して幅約6 cmの周帯を設けており、裏面には粘土紐の接合痕が明瞭に残っていた。周帯の縁部が盛り上がり斜め上方に屈曲し、断面がU字状を呈していることから、あたかもこの部分が溝(樋)のような構造を呈しているようにみえる。仮にこれが溝(樋)を表現したものとすれば、導水などの施設を備えた家形埴輪になる可能性も考えられ、出土地点がくびれ部と西造り出しの間であることも興味深いことである。

77～79は、裾廻りないし壁体面を巡る突帯の破片である。77の突帯は水平に短く伸びてから斜め下方に屈曲するもので、斜面には縦横に線刻を施して装飾している。裏面には、突帯との接合を補強するため幅2.5 cm程度の粘土塊を補充していた。78も突帯が水平に伸びてから斜め下方に屈曲する形態。79は短く突出する突帯で、上面は平坦に作られている。

80～83は、基部の破片である。81はまっすぐ突出する裾廻り突帯を貼り付けたもので、半円形の透しを施す。突帯は断面台形で、3.5 cmほど突出する。82は、裾廻り突帯の剥離痕が残っているが、剥離した箇所の上に貼り付けの位置を示すために施されたと思われる線刻が1条残っていた。半円形を呈する透しを施す。83は半円形の透しを施す。

⑥ 盾形埴輪・鞍形埴輪 (第128図)

盾形と鞍形埴輪は、他の形象埴輪に比べて出土量が乏しく、小片がほとんどである。87・88は後門部(9-6区)、84は前方部(8-3区)、85は西くびれ部(8-2区)、86は東くびれ部(9-4区)の各所から出土している。

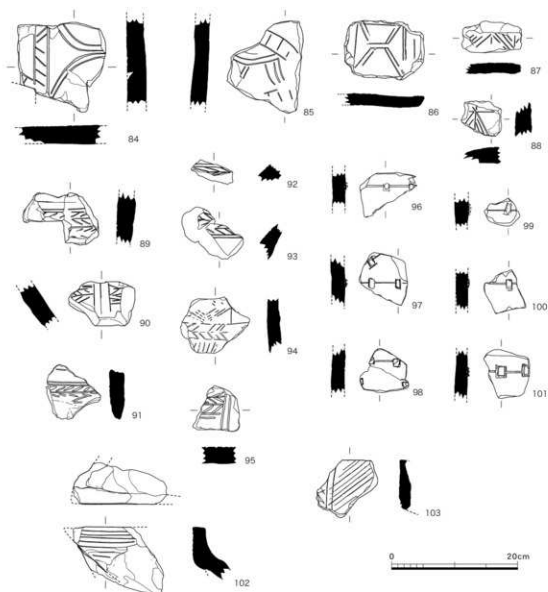
84・85は、鞍形埴輪の背板部の破片である。84は、厚手で扁平な板面に2条の線刻によって連続的に描いた弧文や平行する2条の直線文内に斜線文をシンメトリックに描いている。淡灰褐色という特徴的な色調を呈しており、硬質に焼成されているが、黒斑が認められる。85は、梯子状の線刻帯と直弧文とを基本とした文様を線刻で表示している。胎土に砂粒を含み、淡赤褐色を呈している。

86・87・88・90・94・95は、いずれも小片であるが、盾形埴輪の破片と考えられる。86は、盾面の中央に相当すると考えられる部位の破片で、線刻によって台形状の文様を対になるように配し、その周囲を線刻で区画している。87・88は、線刻によって直線文と鋸歯文を描いており、胎土や色調が類似していることから、同一個体と考えられる。90・94・95は、直線文、菱形文、綾杉文などを線刻で描いている。

第124図に示した32～34は、口縁端部外面に幅広の突帯を貼り付けた形態で、口縁部径は32が42.2 cm、34が48.2 cmを測る大型品である。淡灰褐色を呈するなど、他の円筒埴輪にみられるような橙褐色系～赤褐色系の色調とは異なる特徴があり、法量からすると盾形埴輪の口縁部になる可能性が濃厚と考えられる。

⑦ 船形埴輪 (第128図)

102は、西くびれ部にあたる8-1区から出土したもので、詳細な形態は不明であるが、船形



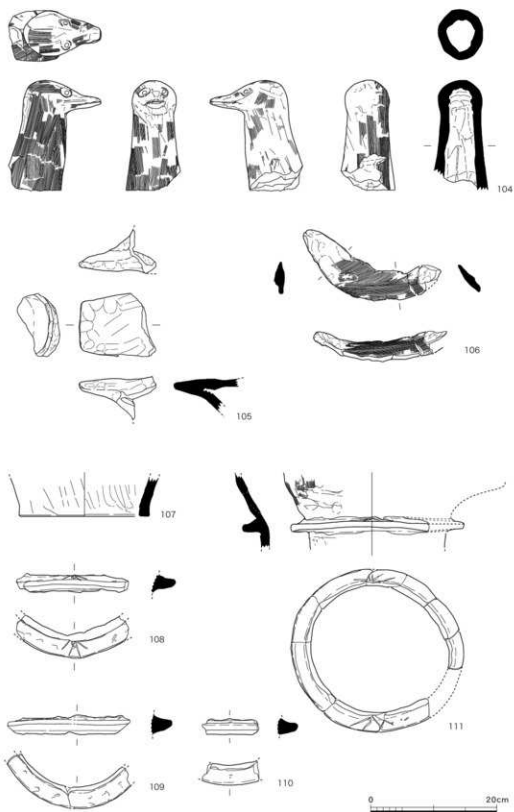
第128図 盾形、靴形、甲冑形、船形埴輪実測図(1/6)

埴輪の船首ないしは船尾の破片と考えられる。舷側板は、粘土板を貼り付けて成形しており、横方向に7条の線刻を施している。内部には隔壁部が剥離した痕跡をとどめている。灰褐色系の色調を呈し、胎土に砂粒を多く含んでいる。同じ地点から出土した103は、8条程度の線刻が施されているが、胎土や色調が102に類似していることから、同一個体になる可能性も考えられる。

⑧ 甲冑形埴輪 (第128図)

甲冑形埴輪は、短甲および草摺部分と考えられる破片が確認されているが、いずれも小片のため、全形をうかがうことはできない。89・90・96～101は西くびれ部(8-2区)、91～93は(10-5区)から出土したものである。

89・91～93は、草摺部分の破片と考えられるものである。線刻によって直線文や綾形な



第129図 水鳥形埴輪実測図(1/6)

どを施している。

96～101は、三角板葺短甲の破片である。色調と胎土などが類似していることから、同一個体になるものと考えることができる。線刻によって三角板を表現し、その上に配された葺部分には周囲を線刻によって粗く線取りし、その中に方形ないし長方形を呈した粘土塊を貼り付けて立体的に表現している。

⑨ 水鳥形埴輪 (第129図、図版99)

水鳥形埴輪は、東造り出し(11-1区)上から出土したもので、これまでのところ他の調査区では確認されていない。頭部から頸部、胴部、尾羽、翼などが破片となって出土したもので、少なくとも2個体分以上あったのではないかと考えられる。

104～110は、同一個体になるものと考えられる。103は頭部から頸部にかけての破片で、頭頂部は丸みを帯びており、嘴は尖り気味に突出させている。嘴は線刻によって表現し、2重に描かれた目は外側を線刻、内側は刺突によって表現する。両目とも、外側の線刻は全周せずに途切れている。中空に作られており、外面はタテハケを密に施して丁寧に調整しているが、内面は指ナデを施すのみである。残存高は17.4cm、後頭部から嘴の先端までの長さは12cm程度である。105は右側の翼である。付け根部分から湾曲しながら斜め上方に延びる形態で、先端はやや尖り気味に収束させる。外面は細かいハケメによって調整し、内側には胴部との貼り付け痕が残っている。長さは21cm、幅は4.6～5.2cm前後を測る。106は尾羽の破片で、先端に向かって幅を徐々に狭める形態をとる。残存する長さは12.2cm、先端の幅は7cmを測る。全体にナデを丁寧に施して調整しており、黒斑が認められる。107は台部の破片で、底部径20.5cm、残存高は7cmを測り、外面は横方向、内面は斜め方向にナデ調整して仕上げている。108～110は、胴部と台部の境に貼り付けられた鈎で、突出の度合いは高く、径は26cm前後に復元できるものである。108の上面には、水掻きを表現したとみられる4条の線刻が放射状に施こされている。

111は、別個体と考えられる水鳥形埴輪である。胴部から台部にかけての破片で、残存高は11.6cmを測る。胴部と台部の境に貼り付けられた鈎の上面には、4条の線刻を放射状に施して水掻きを1対表現している。突帯の突出度は大きい、幾分歪んでおり、径は25.8～28.5cmの範囲におさまる。胴部の外面には、わずかにタテハケの痕跡をとどめている。

(4) 石材 (図版99)

本古墳からは、葺石に使用された各種の石材の他、結晶片岩や石英斑岩、竜山石など他地域から搬入された石材が出土している。

葺石の石材種としては、砂岩、チャート、頁岩～粘板岩、玢岩、緑色岩、フォルンフェルス、石灰岩などが確認されている。それらの多くは、丹波帯の岩石であり、本古墳の西側にあたる西山山地に広く分布していることが知られている。数量的にはおおむね砂岩とチャートが相半ばするものの、両者を合わせると全体の9割以上を占めており、他は少ないが稀に認められる程度のものである。これらの石材は、本古墳の南西800mの地点を南東に向かって流下する小泉川の中、

下流域の河床礫であることが判明している。

結晶片岩は、3区、4-1区、8-2区など15調査区から広範囲に出土している。10cm以下の小片が多く出土しているが、20～30cm程度の大型石材も10点ほど出土しており、いずれも扁平な板状を呈するものであった。色調は、赤味を帯びたものや、緑色ないし青色がかつたものなど多彩で、一様ではないことがわかる。出土量は、石英斑岩に比べると多い傾向にある。

石英斑岩は、3区、8-2区、8-7区、9-1区、9-6区において7点ほど出土しており、15～30cm程度の比較的大きな石材が目立つ。この石材も、結晶片岩の場合と同じく、扁平な板状を呈しているが、全体に角がとれて丸みを帯びている。

竜山石は、8-3区において小片が1点出土している。長さ7.5cm、幅6cm、厚さ2.5cm程度の大きさで、各面とも旧状をとどめていない。

(5) 古墳に伴わない遺物 (第130図)

① 弥生土器

1は口縁部が大きく外反する壺の頸部片で、8-3区から出土したものである。4条のヘラ描き直線文が施されており、前期に属するものである。2も、8-3区から出土した壺の頸部片で、屈曲部に凸帯を巡らし、肩部には烈点文を施している。

3・4は壺の底部片と考えられるもので、ともに11-1区から出土した。3は底部径3.9cm、残存高1.6cm、4は上げ底気味の底部径6.8cm、残存高1.8cm程度あり、ともに外面には右上がりのタタキの痕跡をわずかにとどめている。後期に属するものであると考えられる。

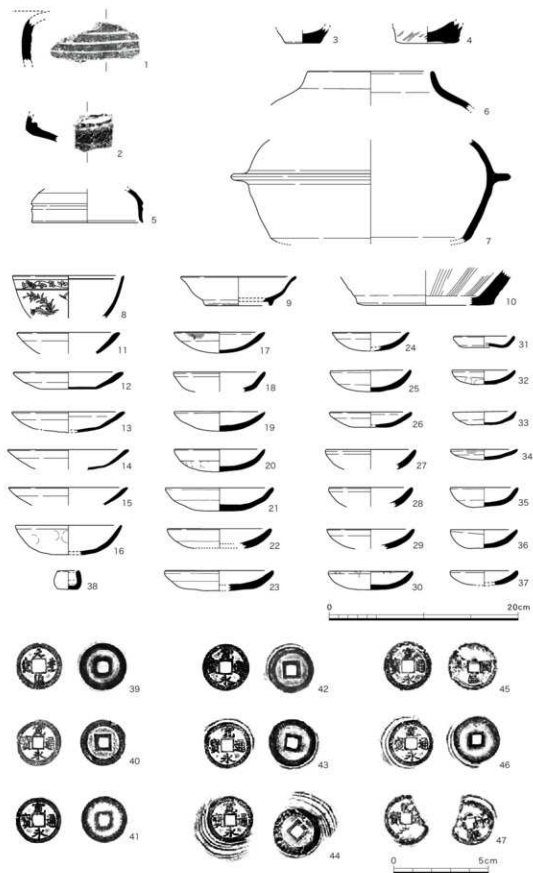
② 土師器

11～37は土師器の小皿で、特に7-2区、8-3区、9-2区などから比較的まとまって出土しており、その大半は近世以降のものであると考えられる。

11～15・17～20・24～29・31・34～37は、7-2区の葺石上面に堆積した土層から出土したものである。11～15は、平底の底部よりも口縁部の方を厚く作っており、他の小皿と形態が異なっている。また、法量も土師器の小皿の中では大きい方で、口径10.9～12.8cm、器高は2.2cm前後とおおむねまとまっている。次いで大きいのは17～20・24・27～29で、口径8.1～9.8cm、器高2.1～2.5cmを測る。丸底気味の底部をもち、内面と口縁部外面のみをナデ調整する以外は未調整のままである。31・34～37は、口径6.5～7.2cm、器高1.1～2.1cmを測る小型品であり、特に34は器高を低くして扁平になるように作っている。そのなかで17と34は、口縁端部に油煙の痕跡をとどめていることから、灯火器として使用されたことが知られる。

16・32・33は、8-3区から出土したものである。16は口径11.2cm、器高3.1cmに復元でき、皿というよりは碗の範疇に入れたほうがよいかもしれない。32・33は口径6.7cm、器高1.5cm前後あり、7-2区出土の小型品に法量が類似する。

21～23は、9-3区から出土したもので、口径は11～11.4cm、器高2～2.5cmの範囲に



第 130 図 墳丘出土遺物実測図 (1/4・1/2)

法量がおおむねまとまる。器壁は厚手で、茶褐色を呈し、全体的に粗雑な作りである。

30は10-2区から出土したもので、口径9cm、器高2cmを測り、口縁端部に油煙の痕跡をとどめる。灯火器として使用されたものである。

38は手づくねで成形された紅壺である。体部がやや膨らむように作られており、口縁端部を丸くおさめる。口径2.4cm、器高は2cm、底部は平底で、内面にはナデによる稜線が数条認められる。7-2区から出土した。

6は壺の口縁部片で、内傾気味に立ち上がる口縁部をもち、端部を丸くおさめる。口径13.4cm、残存高は3.6cmを測る。9-4区から出土した。

7は羽釜の体部片である。鈔は尖り気味に大きく突出しており、鈔部の径は29.6cm、残存高は10.8cmを測る。器壁は赤褐色を呈しているが、内外面は暗灰色を呈する。9-4区から出土したものである。

③ 須恵器

5は杯蓋の破片であり、口径は11.8cm、残存高は3.6cmを測る。口縁部と天井部との境界には明瞭な稜がみられ、口縁端部の内面には段をもつ。天井部をヘラケズリする以外は、ロクロナデによって調整して仕上げる。9-6区から出土したもので、古墳の築造時期より新しい陶器窯のTK47型式に比定できるものである。

④ 陶磁器

8は染付の碗で、口径11.8cm、残存高は4.5cmを測る。外面には3条の横線と草花文が染付で描かれ、口縁部の内面には1条の横線を染付けている。7-2区から出土。

9は白磁の皿である。外反する口縁部をもち、口径12.2cm、器高は3.1cmを測る。高台の端部は、袖剥ぎされている。8-3区から出土し、戦国時代のものであろう。

10は播鉢の底部片である。内面は平滑にされた使用痕が明瞭であるが、わずかに1単位5条の櫛目目が遺存していた。底部径は14.4cm、残存高は3.8cmで、10-2区から出土している。

⑤ 金属製品

金属製品には、銭貨や火縄銃の銃弾などが出土している。39は北宋銭である元豊通寶、40～47は寛永通寶で、40が7-2区の土葬墓から、39・41～47は8-3区の火葬骨包含する堆積層から出土したものである。緑錆で被われているものがほとんどであるが、銭文は47を除くいずれもが比較的鮮明であった。42は3点、43は2点、44は8点、45は3点、46は4点、47は2点の銅銭が段状に錆着した状態になっており、錆着した他の銭貨の銭文は不明である。こうした複数点が錆着した銭貨は、六道銭など墓の副葬品である可能性が高い。

銃弾は8-2区から6点ほど出土している。いずれも鉛製で、淡い白黄色を呈した球形のものである。完形のもの、径が約1.6cm、重さは22g程度であるが、なかには大きく拉げ、球形形状をとどめていないものがあることから、古墳において被弾したものと考えることができよう。

第3節 周濠の出土遺物

墳丘の裾部に近い周濠内からは、転落石に混在した状態で埴輪片がまとまって出土しているが、それ以外は土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、墨書土器、白磁、青磁、軒平瓦、丸・平瓦、土馬、土錘、陶硯、銭貨など長岡京期、平安時代、中世の遺物が埋没していた。以下では、周濠から出土した埴輪を除く遺物についての概要を説明することにする。

(1) 長岡京期の遺物 (第131～132図)

① 須恵器

須恵器には、杯A、杯B、杯B蓋、皿A、壺A、壺A蓋、壺L、壺M、甕などの器種があり、その大半は長岡京期に比定できるものであるが、平安時代や中世のものも少量出土している。

1～3は杯B蓋で、1は口径12.6cm、2は口径14.5cmに復元することができる。3は、口径16.8cm、器高1.6cmあり、天井部には扁平なつまみを貼り付けている。内面が非常に平滑であることから、硯として転用されたものと考えられる。1は9-5区、2は7-4区、3は7-5区から出土している。

4～7・10・11は杯Bである。外上方に延びる口縁部と平坦な底部に高台を貼り付けた形態で、ロクロナデによって調整するが、底部外面はヘラキリのままである。全体に焼成は良好で、暗灰色を呈したものが多く、4・5は口径15cm、器高は4.9～5.2cm、6・7は口径16～18cm、器高は5.3cm前後で、4・5・7が7-5区、6が9-5区から出土した。

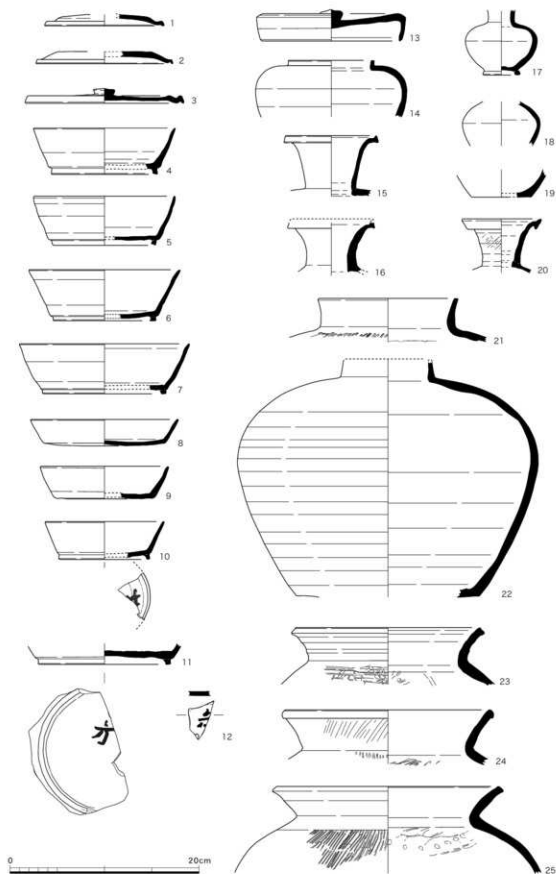
10は、底部の外面に墨書されたものであるが、破損しているため、判読しがたいところがある。口径12.6cm、器高は4cmで、7-5区から出土した。11は、底部外面に「方」を1字記した墨書土器であり、内面は非常に平滑になっていることから、硯にでも転用されたものであろうか。高台径14cm、残存高は1.2cmで、7-5区から出土している。12も墨書土器の細片であるが、文字は判読することはできない。8-6区からの出土。

8は皿Aで、口径15.6cm、器高は2.8cmを測る。調整はロクロによるナデを施し、底部外面はヘラオコシのまま終わっている。軟質に焼成されており、灰白色を呈し、口縁部外面には煤の付着が認められる。7-5区から出土した。

9は杯Aで、口径13.6cm、器高3.5cmに復元できる。ロクロナデによって調整するが、底部外面のみはヘラオコシのままである。8の皿Aと同じく軟質焼成で、灰白色を呈し、外面には火禿の痕跡をとどめる。7-5区出土。

13は壺Aの蓋で、口縁端部の外面には段を有している。つまみが付く天井部は、内側に大きく歪んでおり、外面には自然釉の付着が認められる。口径14.8cm、器高3.4cmを測り、9-5区から出土した。

14は壺Aの口縁部から体部上半にかけての破片である。短く直立する口縁部の径は9.2cm、残存高6cmを測り、肩部には自然釉が付着し、重ね焼きの痕跡をとどめている。7-5区出土。



第131图 周濠出土遺物実測图1 (1/4)

15・16・20は壺Lの口縁部片で、口縁端部を上下に拡張させた面をもち、いずれも内外面に自然釉が付着している。15・17は賢密に焼成されて暗灰色を呈しているが、16の断面がレンガ色になるように焼成されている。口径は15が9.6cm、20は8.4cmで、15・16は7-5区、20は9-6区から出土している。

17・18は壺Mである。17は球形に近い体部に高台を貼り付けた底部をもつが、口縁部を欠失している。高台径3.9cm、残存高は6.8cmあり、7-5区出土。18は口縁部と底部を欠失して19は7-5区から出土した壺底部の破片である。底部はヘラオコシのままであり、底部径は6.4cm、残存高は2.9cmに復元できる。軟質に焼成されており、灰白色を呈する。

21・22は直立する口縁部をもつ大型の壺である。8-5区から出土した21は、口径14.8cmを測り、体部外面には平行タタキの痕跡をとどめる。22は内傾気味に立ち上がる口縁部をもち、体部は大きく膨らむように張り出している。体部外面はロクロによるケズリで調整し、全体に自然釉が付着している。体部最大径は31.8cm、残存高は24.9cmを測る。7-5区出土。

23～25は壺の口縁部片である。23と25の端部は外傾する面をもつが、24は肥厚させて丸くおさめている。外面には平行タタキの痕跡をとどめ、内面は同心円の当て具痕が残る。口径は23が19.6cm、24が22.4cm、25が23.4cmを測り、23・25は7-5区、24は7-4区からの出土である。

② 土師器

土師器には、皿A、皿B、皿C、杯A、碗A、壺E、甕Aなどの器種が出土している。

26・27は皿Aである。26は口径20cm、残存高が2cmあり、口縁端部を肥厚させて丸くおさめている。外面の調整は、口縁部までヘラケズりするc手法で仕上げている。27は8-6区から出土したもので、口径15cm、2.5cmを測る。口縁部より下半が未調整であることから、平安時代ないしは中世にまで時期が下る可能性がある。

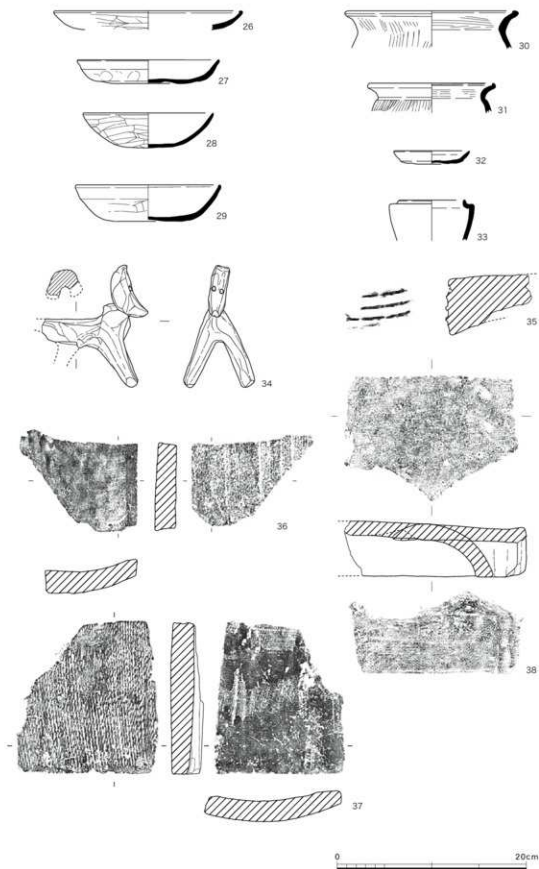
28は碗Aである。調整手法は、外面全体をヘラケズりするc手法で仕上げている。口径13.8cm、器高3.7cmを測り、7-5区から出土した。

29は杯Aで、口縁端部を内側に丸めておえる。口径15.4cm、器高3.9cmを測り、外面の調整は、口縁部の上半部をケズリ残すb手法で仕上げている。7-5区出土。

32は口径8cm、器高1.4cmを測る小型の皿Cである。内面と口縁部外面をナデ調整して仕上げるが、底部外面は未調整のままである。7-5区から出土。

33は、短く直口する口縁部と肩の張る体部をもつ形態の壺Eであるが、底部を欠損する。内外面とも磨滅しているため調整手法は不明である。口径7.1cm、残存高は4.3cmあり、8-6区から出土した。

30・31は甕Aである。くの字状に屈曲する口縁部をもち、口縁端部を内側に肥厚させて丸くおさめる。外面は縦方向にハケメを施した後、口縁部を横方向にナデを加えて調整する。口縁部内面は、横方向にハケメ調整する。30は口径18.4cm、残存高4cm、31は口径13.6cm、残存高3.2cmで、ともに煤の付着は認められず、7-5区から出土。



第132图 周濠出土遺物実測図2 (1/4)

③ 瓦類

35は重画文の軒平瓦で、瓦当面および凸面は剥離しているため、遺存状態はあまり良好ではない。瓦質に焼成されており、凹面には布目の圧痕がわずかに残っている。7-5区出土。

36・37は平瓦の破片である。ともに凹面に布目の圧痕を、また凸面には縄タケの痕跡をとどめている。端部をケズリによって整えており、須恵質に焼成されている。

38は丸瓦の破片で、軟質に焼成されている。凹面には布目の圧痕がわずかに残り、凸面はナデ調整、端面はケズリによって調整して仕上げている。

④ 土馬

後ろ肢2本と尻尾を欠失する。頭部は三日月形で、竹管を押し当てて目を表現している。現存長は11.2cm、頭頂部までの高さは12.9cmを測り、7-5区からの出土。

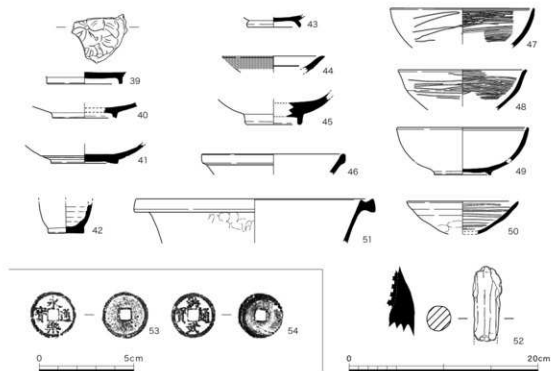
(2) 平安時代の遺物 (第133図)

① 須恵器

42は瓶子の底部片である。内外面をロクロナデによって調整し、底部外面全体に自然軸の付着が認められる。平底の底部径は3.8cm、残存高は3.2cmほどあり、8-6区から出土。長岡京期のものではなく、平安時代前期に下るものであろう。

② 緑釉陶器・灰釉陶器

39～41は緑釉陶器皿の底部片である。39はケズリ出して輪高台を成形しており、高台径は



第133図 周濠出土遺物実測図3 (1/4・1/2)

8 cm、残存高は 1.3 cm である。硬質に焼成され、見込みには花文を施している。釉薬は薄い黄緑色を呈し、7-5 区から出土した。40 もケズリ出しによる輪高台で、高台は内傾している。軟質に焼成されており、ヘラミガキにより密に調整している。高台径 6.8 cm、残存高は 1.6 cm で、7-5 区から出土。41 の高台はケズリ出しによる蛇の目高台で、硬質に焼成され、淡い黄緑色の釉薬を施している。高台径 7 cm、残存高は 2.1 cm で、9-5 区からの出土である。

43 は灰軸陶器の皿で、9-5 区から出土した。内面の見込みの周囲にうっすらと残る釉が認められ、高台径 5.4 cm、残存高 1 cm を測る。

(3) 中世以降の遺物 (第 133 図)

① 瓦器

47～50 は瓦器碗である。47～49 は、内湾気味に立ち上がる口縁部をもち、端部がわずかに外反するもの (48) と内面に 1 条の沈線を施すもの (47・49) がある。47・48 は、外面のヘラミガキは粗雑であるが、内面は密にヘラミガキ調整して仕上げられており、49 の底部には断面三角形の低い高台を貼り付けている。焼成は、47・48 が硬質に仕上げられているのに対して、49 は焼成があまく、軟質気味である。47 は口径 14.3 cm、残存高 3.8 cm で、10-6 北区から出土。48 は口径 13.6 cm、残存高 3.9 cm、10-6 東区から出土。49 は口径 14 cm、器高 5 cm で、10-6 東区から出土。50 は、直線的に外上方に延びる口縁部をもち、内面のヘラミガキは粗雑である。口径 11.8 cm、残存高は 3.5 cm で、7-5 区から出土したものである。47～49 は 13 世紀の前半、50 は 13 世紀末から 14 世紀前半の時期に比定することができる。

51 は鍋の口縁部片である。受け口状に屈曲する口縁端部をもち、口径は 25 cm、残存高は 4.7 cm 程度ある。内外面は、摩滅によるものか炭素の吸着は認められず、全体に淡い白褐色を呈している。7-5 区から出土したものである。

52 は三足羽釜の脚部片で、瓦質に焼成されており、脚部の径は 2.6 cm を測る。9-7 区から出土した。

② 白磁・青磁

44 は白磁皿の口縁部片で、9-5 区から出土したものである。口縁部の下半には施釉しておらず、口縁端部は丸くおさめている。口径 10.8 cm、残存高は 1.7 cm を測る。46 は 10-5 区から出土した白磁碗の口縁部片である。玉縁状の口縁端部をもち、玉縁の直下に沈線を 1 条巡らせている。口径は 15.2 cm、残存高は 2.2 cm を測る。

45 は青磁碗の底部片で、器壁は重厚な作りである。素地は緻密で灰褐色を呈し、底部外面以外は緑灰色を呈した釉薬を施している。高台径は 5.6 cm、残存高は 2.7 cm を測る。9-5 区出土。

③ 銭貨

53 は永楽通寶、54 は洪武通寶で、ともに 7-5 区から出土した宋、明からの渡来銭である。この他、寛永通寶なども出土している。

第6章 まとめ

第1節 墳丘と周濠

(1) 墳形

恵解山古墳は、墓地の造成など後世の墳丘改変に伴い、本来の形状が大きく損なわれていたが、これまでの発掘調査によって築造時の形態と規模をある程度復元することができるようになった。特に、いくつかの調査区において墳丘の裾部を確認したことで、墳丘の全長が約128mに達する前方後円墳であることが明らかになった。後円部径約78m、前方部幅は約80mに復元できる墳丘の規模は、京都盆地において同じ中期に位置付けられる久津川車塚古墳(約180m)に次いで大きいことが知られ、椿井大塚山古墳(約175m)、黄金塚2号墳(約120m)、妙見山古墳(約110m)などといった前期の古墳を含めても屈指の規模を誇っているといえよう。

発掘調査で新たに解明されたことは、東西のくびれ部付近に造り出しを設けていることである。東西の造り出しは、未解明な点があるとはいえ、取り付く位置はもとより、形態と規模、それに構造などが相違し、兵庫県池田古墳にみられるように非対称形であることが判明したことは興味深い。このことは、同じ造り出しであっても、その機能が異なっている可能性を考慮する必要がでてきたといえる。こうした複数の造り出しが発掘調査された事例は、必ずしも多くないだけに、造り出しの性格を検討する上で貴重な指標になるものと考えられる。

(2) 墳丘と外表施設

墳丘の調査では、第1段平坦面および第2段平坦面を確認することができ、後円部、前方部とも3段に築成されていることがほぼ確定した。さらに、墳丘の大半は盛土を施して構築していること、各段築の傾斜面には葺石を施していること、そして平坦面には埴輪を配列していることなどを確認することができた。

墳丘は、おおむね第1段までが旧地形を利用し、それより上位は盛土によって構築していることを推察できるが、盛土は墳丘の部位ごとに構築の単位や過程の異なっていることが明らかになった。また、墳丘裾部の形成にあたっては、後円部が地山を削り出している可能性が濃厚と考えられた。これに対して、前方部では削り出した地山の前面に盛土を施して構築しており、東西の造り出しも盛土工法で形成していることがわかった。盛土に使用された土は、周濠を開削した際に出た地山である砂礫や粘質土を多用している他、古墳築造時の旧表土と考えられる黒褐色系の土なども使用していた。

葺石は、第2段斜面は未確認であるが、第1段斜面と第3段斜面において確認することができ、おおよその特徴を掌握することができた。まず、基底石は長軸が20～40cm程度の大型石材を横方向に用いて据え付けた場合が多く、後円部は不明瞭であったが、前方部においては顕著に認められた。斜面の葺石は、拳程度の石材を多用し、それらを下から上に向かって小口積にして

葺き上げていたが、前方部と後円部の境目はもとより、墳丘の各所で基底石並みの石材を用いた区画列石とみられる目地が、墳丘に直交および平行する状態で認められた。葺石に使用された石材種は、チャートと砂岩が主体で、頁岩～粘板岩、緑色岩、玢岩、ホルンフェルス、脈石英などが含まれていた。こうした石材の種類および現河川や旧河川の河床礫の分析などから、本古墳の葺石は境野1号墳と同様に小泉川の中・下流域から採取された石材を多用していることが橋本清一氏の研究によって解明されている。

埴輪は、第1段および第2段平坦面において原位置を保持した状態のものを確認した。遺存状態が良好といえるものではなかったが、個別に掘形を設けて樹立したのではなく、布掘りの溝内に樹立されたものであることが明らかになった。乙訓地域では、カラネガ岳2号墳に次いで2例目の確認である。埴輪の大きさや配列の間隔は、第1段、第2段平坦面とも大きな差はなかった。基底部しか遺存していないため、明確に埴輪の配列を復元することはできないが、円筒埴輪を主体として、ある一定の間隔で朝顔形埴輪ないし形象埴輪を配置していた可能性を推察せしめる。また、埴輪の模様は不明瞭であるが、後円部、前方部とも斜面から家形、蓋形など形象埴輪の破片が出土していることから、円筒埴輪や朝顔形埴輪に加えて各種類の形象埴輪が樹立されていたことは間違いないであろう。さらに、くびれ部と西造り出しとの間から導水に関わると考えられる小型の家形埴輪やミニチュア土器が、また東造り出しからは水鳥形埴輪が出土しており、造り出しの性格を考える上に重要である。

(3) 周濠

周濠は、墳丘の周辺に残る地割などから盾形周濠であることが推察されていたが、これまでの発掘調査によって、不明確な点は残るものの、おおよその形態と規模を把握することができた。周濠は、低段位丘の地山を開削して構築しており、底部での幅は後円部側で約18m、前方部前縁では20m前後になるものと復元することができる。ただし、周濠の深さは、わずかに0.4m前後しかなく、非常に浅いことが明らかになった。さらに、周濠内には、常時水を湛えたような形跡を認めることはできず、どちらかというとき空堀的な様相であった可能性が考えられた。周濠内からは、長岡京期、平安時代、それに中世に比定することができる遺物がまぎって出土した他、埴輪は墳丘裾部の転落石に混在した状態で出土しているが、外堤の内側斜面付近ではほとんど出土していない。この点を考慮すると、外堤には埴輪列を施していなかった可能性が考えられる。このような状況からみて、恵解山古墳の周濠は、墳丘と外部とを十分に隔絶する機能を有していなかった可能性が濃厚であるといえよう。

第2節 埋葬施設と副葬品埋納施設

(1) 埋葬施設

本古墳の埋葬施設については、後円部に竪穴式石室の存在したことが梅原末治氏によって早くに推察されていたが、発掘調査によって直接その痕跡を確認することはできなかった。しかしな

から、結晶片岩や石英斑岩、それに竜山石などといったこの地域には産出しない石材が出土していることは、埋葬施設の内容を考える上で参考になる。

結晶片岩は和歌山県の紀ノ川流域から四国徳島県の吉野川流域にかけて産出する変成岩、石英斑岩は兵庫県と大阪府の境に位置する猪名川流域付近に産出する火山岩と考えられており、ともに淀川水系に分布する大阪府弁天山C1号墳、岡嶋山古墳、紫金山古墳、將軍山古墳など前期古墳の竪穴式石室構築材として多用されていることが知られる。この点を考慮すれば、結晶片岩と石英斑岩は、本古墳において梅原氏が推測した竪穴式石室に使用されたものとみてほぼ間違いはないであろう。

また、竜山石は、兵庫県の加古川流域で産出する溶結凝灰岩で、長持形石棺の部材や竪穴式石室の天井石として使用されていることが知られている。竜山石が、梅原氏のいう石室の天井石に使用された「凝灰岩」であると決めつけることはできないが、竪穴式石室の天井石あるいは石室内に安置されたとみられる長持形石棺の破片である可能性は十分に考えられることである。

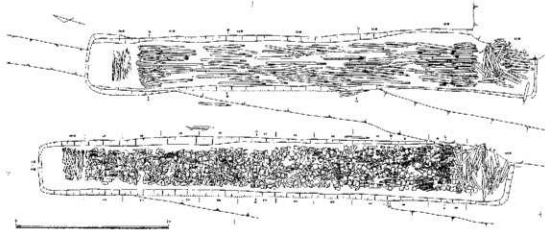
(2) 副葬品埋納施設

恵解山古墳を特徴づける最たるものは、何と言っても前方部に設置された副葬品埋納施設であろう。この施設は、古墳の中軸線上に計画性をもって設置されており、長さが6 m余りもある狭長な木櫃内に鉄刀や鉄鏃などの鉄製武器類を主体とする大量の副葬品が埋納されていた。さらに、前方部の東側において、二次的に再堆積した盛土層から鉄斧や鋤先などの鉄製農・工具類、斧形の石製品が出土したことで、先の埋納施設とは別の埋納施設が前方部に存在し、後世に破壊されたことが新たに考えられるようになった。そこには、鉄剣や鉄鏃などの武器類を含みつつも、農・工具類を主体とする鉄製品や石製品が副葬されていたと推察することができる。つまり、武器類と農・工具類を分けて埋納していた可能性が想定できるのである。ただし、埋葬施設である可能性も考えられないわけではないが、いずれにしても前方部には複数の埋納（埋葬）施設が存在した可能性が濃厚になったことは重視すべきことである。

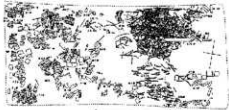
本墳のような前方後円墳で、前方部に副葬品の埋納施設を有する古墳は、大阪府黒塚山古墳・百舌鳥大塚山古墳・塚原古墳、奈良県今井2号墳、福井県向山1号墳、岐阜県遊塚古墳などが知られているが、複数確認されているのは、現在のところ百舌鳥大塚山古墳のみであって、きわめて類例の乏しいことがわかる。また、大阪府の百舌鳥や古市、それに奈良県の佐紀盾列などの大古墳群では、主墳である大型前方後円墳に付随する小型の円墳や方墳からなる陪塚にも副葬品埋納施設が存在が確認されている。百舌鳥古墳群ではカトンボ山古墳や七観山古墳、古市古墳群では西墓山古墳、野中古墳、アリ山古墳が、佐紀盾列古墳群の大和5号、6号墳などがそれに相当する。その中で、埋納施設の形態や規模、構造などを比較すると、本古墳は西墓山古墳に極めて類似していることが知られる。さらに、副葬品の品目や鉄刀、鉄剣などの法量についても、西墓山古墳に近似していることは重視すべきことである。西墓山古墳は一辺約20 mの方墳で、全長約225 mの前方後円墳である墓山古墳の陪塚、とりわけ人体埋葬を伴わない副葬用の陪塚と考



恵解山古墳



西基山古墳 (上—東列、下—西列)



アリ山古墳 北施設 (上—上層、下—下層)



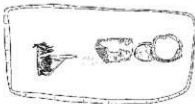
百舌鳥大塚山古墳 4号施設



野中古墳 第1列



黒姫山古墳



今井1号墳

第134図 副葬品埋納施設の諸例 (1/50)

えられており、本古墳が大王墓を含む古市古墳群と深い関わりをもっていたことをうかがい知ることができる。

(3) 副葬品

恵解山古墳では、埋葬施設の副葬品はその可能性がある管玉1点のみしか知られていないが、副葬品埋納施設から多量の鉄製品が出土しており、その内容は武器類に加えて農・工具類と斧形石製品が存在することが新たに判明した。

鉄刀は、全体に細くて短い小型品に限定したものが集中する特徴があり、また鉄鎌は13形式に分けられる多彩なものがあるが、その中には某部が袋状になったものや頸部に振りを加えたものなど類例の乏しい特殊な形態のものを含んでいることから、外来系の技術的な影響を受けて製作されたものとみる見解も出されている。

こうした特徴のある鉄刀や鉄鎌は、本来の武器としての機能を備えた実用的なものではなく、たとえば葬送など儀礼用として特注されたものであると考えられているが、その可能性は充分にありうることである。新たに確認された鉄製の農・工具類の多くが、ミニチュア品であることも同じ性格を有しているものと理解できる。

第3節 古墳の評価

(1) 古墳の築造時期

古墳の築造時期について考えてみると、円筒埴輪は黒斑を有していて、密窯焼成のものをほとんど含まない点、外面の2次調整にB種ヨコハケ技法を採用していること、甲冑形埴輪は三角板革綴短甲を表現したものであることなどから、川西宏幸氏による編年のⅢ期に属するものと推察される。また、副葬品埋納施設に供えられた鉄製品は、おおむね武器類と農・工具類であって、甲冑などの武具類を全く含んでいないこと、ある程度の時期と出土古墳を限定できる藤手刀子が出土していることなどは、古墳の築造年代を検討する上で参考になる。

以上の特徴を前方後円墳集成の編年に当てはめてみると、おおむね中期前半にあたる6期の古墳に比定することができるであろう。

(2) 被葬者の性格

最後に、恵解山古墳の性格については、桂川右岸流域では最大の規模を誇る3段築成の前方後円墳で、東西に造り出しを設け、遠隔地から搬入された石材で構築した埋葬施設と多量の鉄製品を中心とする副葬品の埋納施設を営んでいることなど、これまでこの地域では認められなかった傑出した属性を有する首長墓との位置づけが可能であろう。先述したように、副葬品埋納施設や副葬品の特徴は、百舌鳥や古市古墳群と共通する要素が多いことから、恵解山古墳の被葬者は中央の政権と密接な関係を結びつつ、その関係を背景にして政権内での地位を確立し、この地域を

掌握していたのではないかと考えることができる。その範囲は、桂川右岸流域のみならず、京都盆地をも含めた、北山城にも及んでいた可能性を想定しておきたい。

(参考文献)

- 大塚市『大塚市史』考古編 2011年
- 大阪府教育委員会『黒姫山古墳の研究』 1953年
- 大山崎町教育委員会『境野1号墳』 2007年
- 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年
- 北野耕平『河内における古墳の調査』 1964年
- 北野耕平『河内野中古墳の研究』 1976年
- 京都府『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊 1925年
- 京都府教育委員会『京都府概報』1968 1968年
- 古墳文化研究会『日本古代文化研究』創刊号 1984年
- 近藤義郎編『前方後円墳集成』近畿編 1992年
- 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市センター年報』昭和62年度 1989年
- 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市センター年報』平成2年度 1992年
- 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市センター年報』平成4年度 1994年
- 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市センター年報』平成9年度 1999年
- 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市センター年報』平成16年度 2006年
- 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市センター年報』平成20年度 2010年
- 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市センター報告書』第1集 1984年
- 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市センター報告書』第2集 1985年
- 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市センター報告書』第13集 1999年
- 城陽市『城陽市史』第3巻 1999年
- 末永雅雄『奈良県史跡天然記念物調査抄報』第4冊 1950年
- 末永雅雄編『盾塚 鞍塚 珠金塚』 1991年
- 高槻市立しろあと歴史館『三島古墳群の成立』 2006年
- 豊島直博「鉄器埋納施設の性格」『考古学研究』第46巻第4号 2000年
- 長岡京市『長岡京市史』資料編1 1990年
- 長岡京市『長岡京市史』資料編3 1992年
- 長岡京市『長岡京市史』本文編1 1995年
- 長岡京市教育委員会『長岡京市報告書』第2冊 1976年
- 長岡京市教育委員会『長岡京市報告書』第3冊 1977年
- 長岡京市教育委員会『長岡京市報告書』第8冊 1980年
- 長岡京市教育委員会『長岡京市報告書』第11冊 1983年
- 長岡京市教育委員会『長岡京市報告書』第46冊 2004年
- 長岡京市教育委員会『長岡京市報告書』第47冊 2005年

- 長岡京市教育委員会『長岡京市報告書』第48冊 2006年
長岡京市教育委員会『長岡京市報告書』第52冊 2008年
長岡京市教育委員会『長岡京市報告書』第54冊 2009年
長岡京市教育委員会『長岡京市報告書』第56冊 2010年
長岡京市教育委員会『長岡京市報告書』第58冊 2011年
長岡京市発掘調査研究所『長岡京市発掘調査研究所報告書』第1集 1979年
中川和哉「第3次山城国府に関する新提言」『長岡京古文化論叢』Ⅱ 1992年
奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報1983年度』第二分冊 1984年
樋口隆康「和泉国七観古墳調査報告」『古代学研究』27 1961年
藤井寺市教育委員会『西墓山古墳』1997年
向日市文化資料館『向日丘陵の前期古墳』2004年

付 載

地中探査

(1) 探査の目的

本古墳における探査では、先に第5次調査によって墳丘西側に造り出し部分の存在することが判明していたが、これの規模と形態を探ると同時に、古墳の周囲において周壕の範囲と規模に関する情報を得て、全体の規模を推定することを目的とした。また、後門部頂上においては埋葬施設の有無を探る探査も実施した(第135図)。

(2) 探査の方法

探査に際しては、墳丘の外周に沿ってAからEまでの「測定区」を設定して、その範囲を対象に測定した(第8図)。これら測定区は、予め平面直角座標系第6系に依拠して設定されていたが、遺跡探査の実例のなかでは希な例といえる。これにより、地形図の中へ探査結果を正確に表示できるので、記録の方法としては理想的であったといえる。しかし、E測定区と後門部墳頂測定区においては探査範囲の制約があり、任意の座標系で探査して、後に平面直角座標へ関連づける方式をとった。なお、実際の測定では必ずしも事前の設定範囲にこだわらず、地形にあわせて測線を適宜延長あるいは縮小した。探査に要した時間は合計2日間である。

本古墳で採用した方法は地中レーダー探査である。使用した装置はアメリカ GSSI 社製 SIR-2P 型で、対象地域により 200MHz (60b 角) と 400MHz (30b 角) のアンテナを使い分けた。一般に 200MHz など低い周波数のアンテナは探査深度が深いが高分解能は劣る。一方、高い周波数では波長が短いので分解能に優れ、小さな対象物も判別できるが有効探査深度は浅い。近畿地方で一般に見られる水田土壌の場合、400MHz アンテナで約 1 m 強、200MHz で約 2～3 m の深さが探れるとみられる。

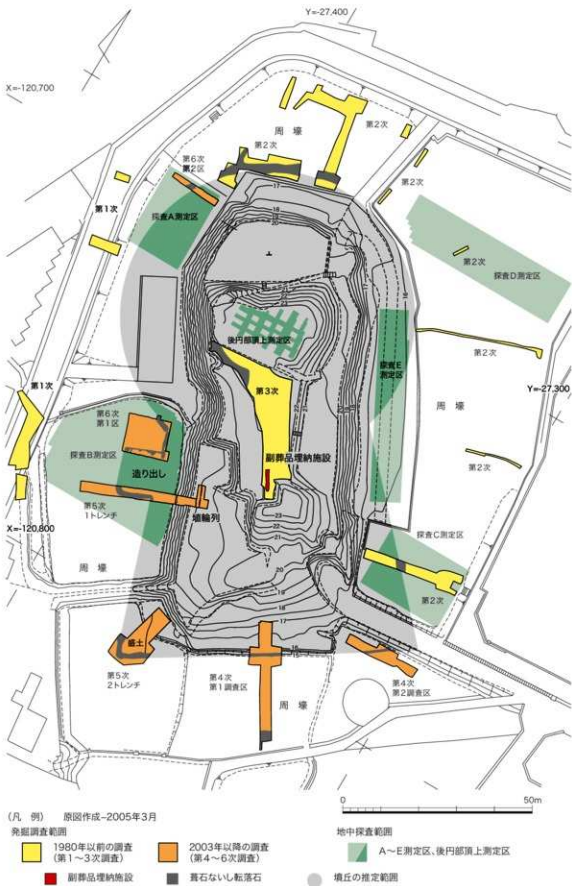
本古墳の場合には、墳丘の外周に沿って探査範囲を設定したが、それぞれの地区における地形を考慮して、使用するアンテナを選択した。すなわち、例えば北西側で後門部の外周を探った A 測定区では、後世の客土があると推定されたので、200MHz アンテナを使用した。

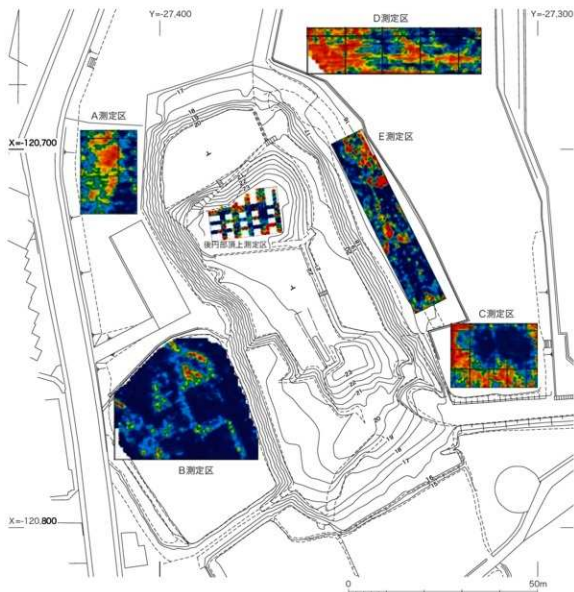
墳丘の東側では、測定区がゲートボール場やテニスコートなど整地された地面であったので、遺構は深いかも知れないと予想されたが、C～E 測定区では高い解像度を求めるために、400MHz アンテナにより探査した。しかし、探査結果を当日に概略処理したところ、有効な結果が得られていないらしいことを認めたので、翌日に 200MHz アンテナを用いて追加測定した。

これら再測を含めたいずれの探査地区でも、測定した測線間隔はすべて 50b で、データの記録時間は 60ns (ナノ秒) である。なお、2 日間でアンテナを走査した総延長距離は、2 種類のアンテナによる重複測定を含めて約 8 d である。

(3) 探査の結果

探査の結果は平面図を作成して、それを判読することを基本としたが、平面図のみでは理解が困難な場合には、断面画像 (profile) も適宜参考にした。平面図を作成する際には、50b 間隔の各測線における断面画像の中から、ある一定の深さに対応するデータを取り出す。断面は時間で記録されており、その中からデータを切り取るところから、この方法はタイムスライス (Time





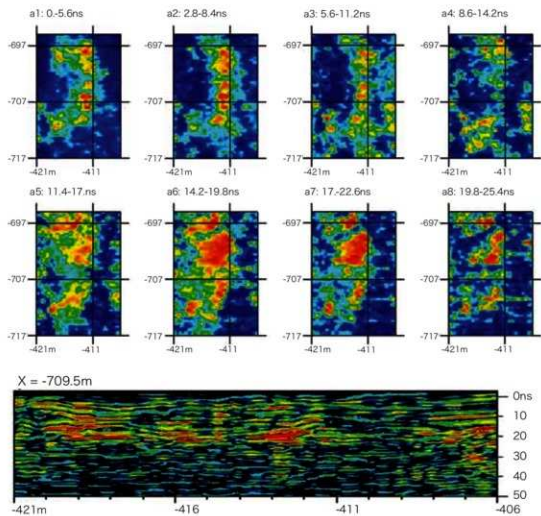
第 136 図 各測定区の探査成果 (1/1000)

Slice) と呼ばれている。これにより、特定の深さにおける電波の反射、屈折、減衰などの挙動の分布をみる事ができる。平面図作成処理に用いたソフトは GPR-SLICE (参考: <http://www.gpr-survey.com/pages/362603/index.htm>) である。

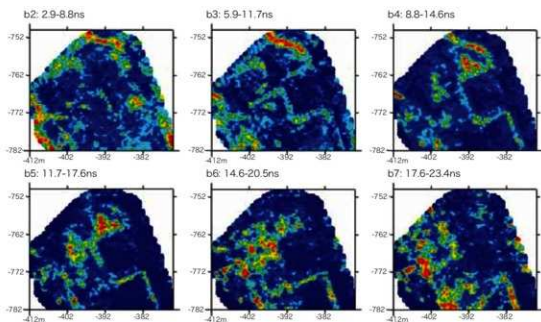
A測定区 (第 137 図) 後円部北西側で周壕あるいは墳丘の限界を探ることを目的とした測定区で、東西 15 m、南北 22 m の長方形の範囲である。使用したアンテナは 200MHz のみである。

結果を見ると、浅い範囲の 5.8 - 19.8ns、すなわち深さにすると約 0.6 m 程度の深さまでは、東側すなわち墳丘に近い部分で、墳丘を示すような円弧を描く構造が見える。しかし、この円弧は墳丘と見るにはやや径が小さい。また、浅すぎるように思われる。

そこで、断面図を参考にして壕の位置をみると、 $X = -709.5$ 画像で認められるように、東から 5 ~ 6 m ($Y = -411 \sim -412$) あたりから測定区のほぼ西端近くまでの幅約 9 m ほどが、窪んだ構造となっており、これが壕を示すものと推定した。



第 137 图 A 测定区平面·断面图



第 138 图 B 测定区平面图

しかし、この壕と推定する範囲では、電波が減衰の様子を示さず、周囲と比較すると、むしろ反射の大きなことが分かる。通常、濠の部分は土中であっても水分が多い状態で存在し、電波の減衰も大きい部分として観察されると想像されるが、ここでは反対なのである。後世に濠部分を埋め立てた際に、粒子の粗い砂や礫あるいは塵芥などを含む土が使われたと想像される。

B測定区 (第138図) 前方部西側で、先に造り出しの存在が確認された箇所を含む東西38m、南北32mに設定した範囲である。しかし、実際の測定では、東西は現填丘裾から西側の道路直下まで、南北は北の一段高い地境から造り出しを含むと想定できる限界までを対象としたので、探查範囲は不整形となっている。使用したアンテナは400MHzのみである。

結果を見ると、浅い範囲の6.9 - 10.8 ns、すなわち現地表面直下より、測定区の東側で造り出しの平面形を明瞭にみることが出来る。そして填丘の裾を表す反射の大きな線状構造は、ちょうど現在遺存する填丘に沿うように北西と南東方向へ延びることが分かる。

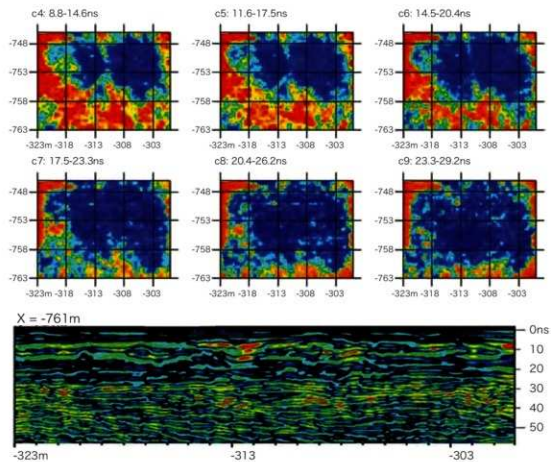
造り出し部分における石列は、40bよりも深くなると次第にその位置が外方へ広がる。つまり、浅い位置から深い層位へ向かって、傾斜しながら位置がずれる。平面図は遺構をスライスして表示するので、浅い位置では面積が狭いが、深くなると広がっていくのである。そして、最下部に至ると厚みを増すようにみえる。濠の底では、転落石が積み重なったような状態にあると想像されるが、範囲は面として北と西へ広がる。濠底部に堆積した石の散布状況と理解できよう。

この造り出し部分の西北隅からは、西南の方向へ延びる幅の狭い線状の構造がある。深さは約20 - 30b程度のみで観察することができ、それよりも浅い層位と深い部分でもみえないので、ここを埋めている土壌にある何らかの変化で、古墳とは関係のないものである可能性がある。しかし、これの起点が造り出しの隅に合致している点からは、遺構である可能性も捨てきれない。

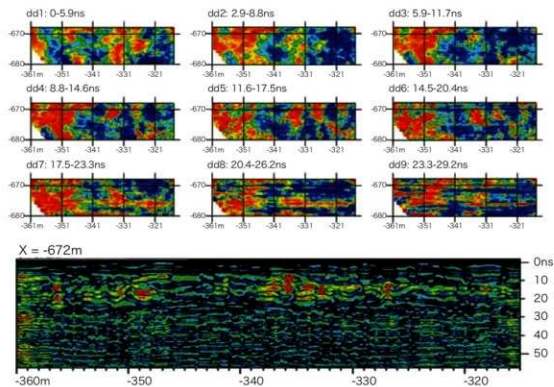
測定区の西辺には、この造り出しや填丘裾の線と並行しながら、北でやや広くなるような形に存在する線状構造を読みとることができる。濠の西側の限界を示すものと考えられる。これも現地表面直下の6.9 - 9.5nsから始まるので、遺存する深さは造り出しと同様と思われる。しかし、部分的に途切れる反射の状況からみると、ここにある石の残存状況は余り良くないと推定できよう。本測定区で興味深いのは、発掘調査によれば造り出しを構成する斜面の石の存在状況は、それほど明確でない。すなわち、墓石である石と、それを覆う土壌中の石とは、サイズの上では大きな差異はなく区別がつきにくい。しかし、レーダー探査では明瞭にみえる。これは、今回のアンテナが放射する電波の波長では小さな石を捉えることができず、土砂と一体のものとして記録したことが原因と思われる。一定の大きさを越える石からのみ、大きな反射を得たため、結果として墓石のみが明瞭にみえる状況となったと推測する。

C測定区 (第139図) 前方部填丘の東辺部と周濠が存在すると想定される部分で、東西23m、南北17mに設定した測定区である。測定区の東辺は東にある学校の校庭との間にある段差まで、西は古墳の境界をつくる鉄製ネットフェンスの至近距離までを探查した。ゲートボール場である現地表面は、これを造成するために整地がなされ硬くしまった状態にあるようにみえた。

本測定区においては、最初に述べたように400MHzアンテナによる測定では、十分な結果を



第 139 图 C 测定区平面・断面图



第 140 图 D 测定区平面・断面图

得ていないと思われたので、200MHz アンテナによる測定を追加したものである。ここでは、その200MHz アンテナによる結果を報告する。

平面図による結果では、深さ約0.2～0.3m程で、暗渠と思われる線状の構造がみえる。それは、北から南へ直線的に延びる基幹と、一定間隔でそれから東南と西南の方向へ分岐する部分とで構成されている。ゲートボール場を整備した際に建設された設備と思われる。

古墳の前方部と濠に関連する構造としては、測定区の西辺にある反射の大きな範囲が墳丘を表すものと考えられる。平面図では、墳丘裾の線が必ずしも明瞭でないが、その範囲が西北から東南の方向へ拡大する状況は、前方部とみなしても不都合がない。

これを確認するために断面画像を点検すると、これよりも深い約0.8mほどでも上層のみたのとはほぼ同様の位置に、濠のように窪む構造がある。どうやら、これが実際の遺構であり、上層の濠状にみえる変化は偶然の一致か、下層の遺構が影響して生じた土壤変化と思われる。可能性として、濠の上部が埋め立てられたのは古い時代で、その後現代の整地がなされたと考えられる。

断面画像によると、濠の幅は15m弱の規模と読みとれる。埋設している濠の肩から底面までは約50～60cm程度の深さと思われる。この推定幅が妥当かどうかは、他の位置における発掘調査や探査の結果を照合しながら考える必要があるだろう。

なお、測定区の東辺にも反射の大きな範囲が狭いながら南北へ延び、同様の反射が見られる西辺との間が、あたかも壕を表すようにみえる。しかし、この反射異常の範囲は、東側の校庭を造成する際に生じた何らかの土壤変化に起因するもので、遺構を反映するものではないと考えた。

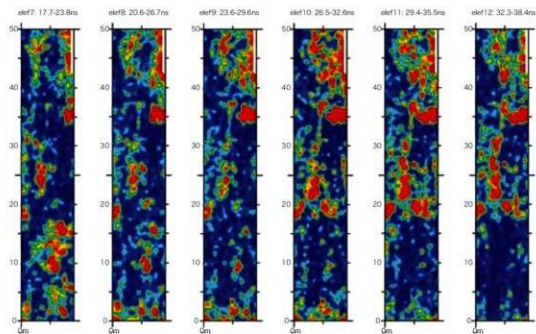
D測定区 (第140図) 周濠を探ることを目的として、東西に細長く試掘トレンチのような要領で設定した測定区で、東西45m、南北12mの範囲である。対象範囲のほとんどはグラウンドで一部テニスコートをまたぐが、C測定区と同様に硬く乾燥した地表面であった。後円部に近い西辺には僅かながら草の生える部分を含む。ここでは、200MHz アンテナを使用した測定のみである。

まず、断面図をみると、15ns程度の深さ、すなわち地表面の反射が他よりも大きいことに気がつく。ゲートボール場よりも強固な地固めがなされているようにみえる。平面図として整理した結果では、墳丘裾あるいは濠らしき構造を認めることができない。強いてあげると、測定区の西端に近い箇所、南へ傾斜しながら下がる構造がみえるので、これが墳丘裾を表しているのかも知れない。しかし、北側で浅くなるはずの壕の限界がみえない。

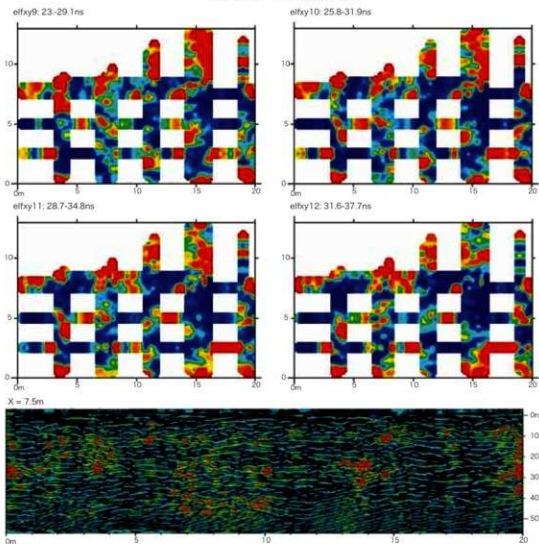
ここでは、探査で十分な地下情報が得られていない可能性もあるが、濠が存在しないかも知れない点も、考慮しておく必要があるであろう。

E測定区 (第141図) 本測定区は墳丘東側のくびれ部および造り出し部が存在すると想定される位置で、南北方向に細長く設定した範囲である。東西9m、南北50mの範囲内は、砂利敷きの園路と草地からなっている。すなわち、地表面の状況が部分的に異なるので、これが探査データに影響すると予想された。

結果をみると、測定区の中央付近より南半部では電波が減衰するが、それより北側ではそれが



第 141 图 E 測定区平面図



第 142 图 後円部頂上測定区平面・断面図

みられない。北半部の反射の大きい部分が、あたかも後円部の裾を表すようにみえるのである。そこで、結果を地形図のなかへ表示して、位置関係を検討することにした。

地形図のなかへおき、電波の反射状況を詳細にみると、深さ約0.6 m程度から東側へ湾曲する曲線があり、それは1 m程度と深くなるほど明瞭かつ幅広くなることに気がつく。これは、後円部の裾を限る石列の線で、上層では石の表面を捉えているが、それが深くなるに従って、次第に石全体からの反射を得た結果、幅が広くなると理解できよう。後円部の形状を表すにはやや不整形であるが、位置的には不都合がない場所にあるのである。

後円部頂上測定区 (第142図) ここで探査の対象とした範囲は墓地であった。そこで、各々の墓地区画の間の幅狭い通路を利用してアンテナ走査をする必要があり、したがって、通常の測定のように測線の各々を一定間隔に設定することはできなかった。また、ときには墓地を区画する緑石に沿わせるような形でアンテナを走査したので、その石からの側面反射がノイズとして加わると予想された。探査範囲として設定できたのは東西20 m、南北13 mである。

結果を示す平面図には空白が多く、したがって判読を困難にしているが、それでも大局的にみると、測定した範囲のほぼ中央で、北で西へ傾いた長方形の構造がみえる。東西10 m、南北5 m程の範囲なので、墓坑と見なしても良いと考えた。この範囲が、ちょうど古墳の主軸と直交するらしき方位を取る点は、非常に興味深いと指摘しておきたい。

この範囲の中央を横断する断面をみると、埋葬施設をつくると思われる窪んだ構造がある。断面がこの構造を斜めに縦断していることを考慮すると、長さとしては8 m以内と推定される。石を表すような反射状況がないので、粘土層のような材質を考えた方がよいだろう。

しかし、この埋葬施設と思われる構造は、現地表面から約0.7 m程の深さである。墳丘の削平をどの程度と見なすかによるが、この深さが妥当であるかどうか、考古学的な検討が必要であろう。

(4) おわりに

本古墳の周辺で、その規模と形態を探ることを目的とした探査の結果は以上である。それぞれの測定区では、地表面の状況と遺構が存在する深さに差があるらしく、得られた結果が大きく違った点が興味深い。

すなわち、最も良好な成果が得られたB測定区では、遺構は極めて浅い位置に存在しており、したがって、十分強度が大きいかつ明瞭な電波の反射信号を受信することができた。これが良好な成果が得られた要因であったといえよう。

他の墳丘と塚を探ったすべての範囲では、B測定区のような明瞭な結果が得られなかった。これは、主として厚い客土が原因と思われる。しかし、遺構の位置や構造を明確に指摘できなかった測定区でも、もし、30 ns すなわち約0.9 mよりも深い層位に着目して検討すると、どうやら遺構が読みとれそうである。つまり、これらの測定区のいずれでも、最近に客土をしたことを前提にして上層を除外すれば、判読できる可能性が残されている。

しかしながら、先に述べたようにD測定区では濼の構造を読み取るのが難しい。この測定区では、探査した範囲内に塚が存在しない可能性も顧慮しておく方がよいだろう。

いばの帯
恵解山古墳第4次調査 現地説明会資料

2003年10月4日(土)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査名 恵解山古墳第4次調査、長岡京跡右京第783次調査(7ANQMK-4地区)

推定地 恵解山古墳、長岡京跡右京八条一坊十四町、南栗ヶ塚遺跡

所在地 京都府長岡京市勝竜寺1204、久貝二丁目813、814

調査主体 長岡京市教育委員会

調査担当 (財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査期間 2003(平成15)年8月11日～現在継続中

調査面積 約186㎡

1 調査の目的

恵解山古墳は、古墳時代中期に築造された乙訓地域で最大の規模を誇る前方後円墳です。1981(昭和56)年10月13日に国の史跡として指定されて以来、用地の買収が徐々に進められ、20年余りを経て2002(平成14)年度中によりやく史跡指定全域の公有化が完了するに至りました。これに伴い、長岡京市では、古墳を史跡公園として保存整備し、広く市民に活用をはかる計画を押し進めようと考えています。そこで、整備計画を立案するため、墳丘や周濠の形態、規模、構造などの基礎資料を得る目的で発掘調査を実施することになりました。



第11図 恵解山古墳の位置

2 過去の調査

恵解山古墳は、1968（昭和43）年に京都府教育委員会が墳丘の測量を行って以降、3回の発掘調査が長岡京市教育委員会によって行われています。

第1次調査 西側の周濠外堤部分を対象に1975（昭和50）年に行われたものですが、外堤とみられる遺構は確認されませんでした。

第2次調査 1976（昭和51）年から1977（昭和52）年にかけて行われたもので、後円部と前方部で葦石の一部が確認され、現存する墳丘が大きく原形を損ない、瘦せていることが明らかになりました。また、周濠と外堤の一部も確認されました。

第3次調査 1980（昭和55）年に行われたもので、墳丘上段傾斜面の葦石と前方部のほぼ中央で副葬品のみを埋納した施設が確認されました。葦石は、遺存状態が比較的良好で、墳丘西側のクビレ部の状況が明確になりました。また、副葬品埋納施設からは、刀、剣、鏃、兼手刀子など武器類を主体とする鉄製品が700点近くもみつかり、全国的に大きな注目を受けました。その他、後円部の壑穴式石室に使用されたであろう安山岩や結晶片岩、それに副葬品の一部と見られる碧玉が出土したことも重要な成果でした。

3 調査の概要

調査区の設定 古墳は、全長約120m、後円部径約60m・高さ約8m、前方部幅約55m・高さ約6.5mほどの規模に復元されていますが、墳丘は墓地の造成や竹藪の開墾、土取りなどによって大きく改変を受け、本来の形態をとどめている箇所は少ないようです。そこで、今回の調査では、南東面する前方部の形態と規模の解明を主眼とし、前方部の中央部と東側に2箇所の調査区を設定しました。

1 トレンチは、墳丘の主軸とほぼ併行するように設定した調査区で、長さ約31m、幅約3m、墳丘部から周濠に相当する水田面にまで長く及んでいます。2 トレンチは、現存する前方部墳丘の南東隅付近から東側に設定した長さ約20m、幅約3mの調査区です。

墳丘と葦石 今回の調査では、前方部前面の裾部に施された葦石を1・2 トレンチで確認することができました。特に、2 トレンチでの確認は予想外の大きな成果でした。

墳丘は、裾部のみを地山を削りだして形成し、その上に盛土を施して墳丘の大半を構築していることが明らかになりました。

葦石は、墳丘の裾部付近に上方の傾斜面から転落した大小様々な石が多量に堆積しており、原位置をとどめる葦石との区別が苦慮しましたが、基底石付近の葦石を確認できました。葦石には、拳大～人頭大ほどの大きさの石材を使用し、その種類はチャート、砂岩、粘板岩などが主体ですが、当地域には産出しない結晶片岩もごく少量出土しています。

基底石は、長さ20～35cmほどの比較的大きめの石材を多く用いており、おおむね一直線になるように並べて据え置かれていました。基底石より上の葦石は、拳大の石を多用しており、墳丘面に対して長軸を差し込むように葦っていました。また、2 トレンチでは、基底石と直交するよう

に並ぶ大きめの石列を確認しましたが、これは葺石を葺く際の作業単位を示す区画の石列ではないかと考えられます。

ちなみに、埴輪はすべて転落してきたもので、樹立した埴輪列は確認されませんでした。

周濠 周濠は、1・2トレンチで確認することができました。地山を削り出して形成しており、周濠底での幅は約22m前後ありますが、深さは約0.3~0.4mほどしかなく、とても立派な周濠といえるものではありませんでした。外周部の立ち上がりは、緩やかな傾斜面を呈し、その上面で2~5cmほどの小礫が敷かれたような状態で確認されました。底部はおおむね平坦で、その性格は不明ですが、1トレンチにおいて楕円形をした浅い土坑状の遺構が並んだ状態で確認できました。また、周濠内に水平堆積する土層からは、埴輪片や人頭大の石をはじめ長岡京期中世の土器などが出土しており、周濠は中世頃に埋没したことが明らかになりました。

出土遺物 今回の調査では、整理箱に5箱程度の遺物が出土しています。遺物には、古墳に伴う埴輪や結晶片岩のほかに、長岡京期の土師器、須恵器、瓦、土甕、中世の土師器、瓦器、白磁、陶器などがあります。

埴輪は、円筒埴輪と衣蓋形埴輪^{ハカマ}がありますが、その大半は小破片で、磨滅したのもも多く、全形が分かるものではありませんでした。すべて、黒斑のある軟質に焼成されたもので、ヨコハケを施したものがあります。

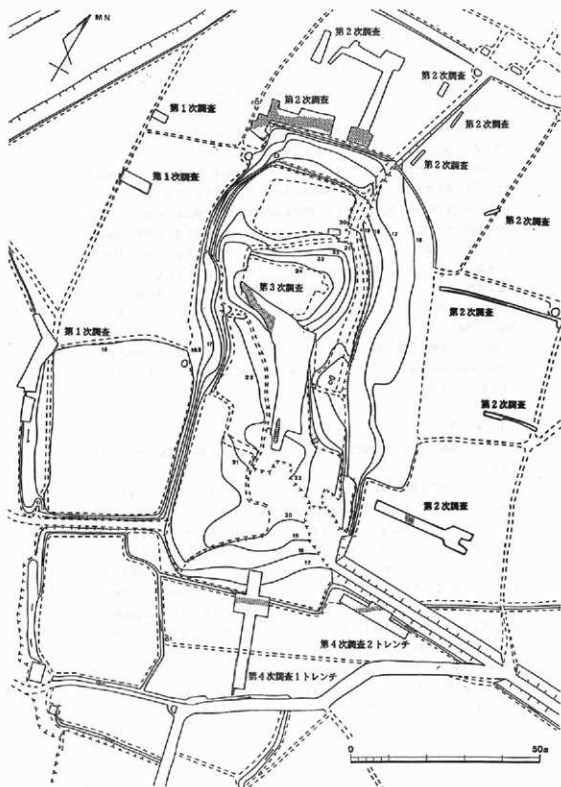
4 まとめ

今回の第4次調査では、不明瞭な点が残るものの、前方部の情報がある程度確認することができました。

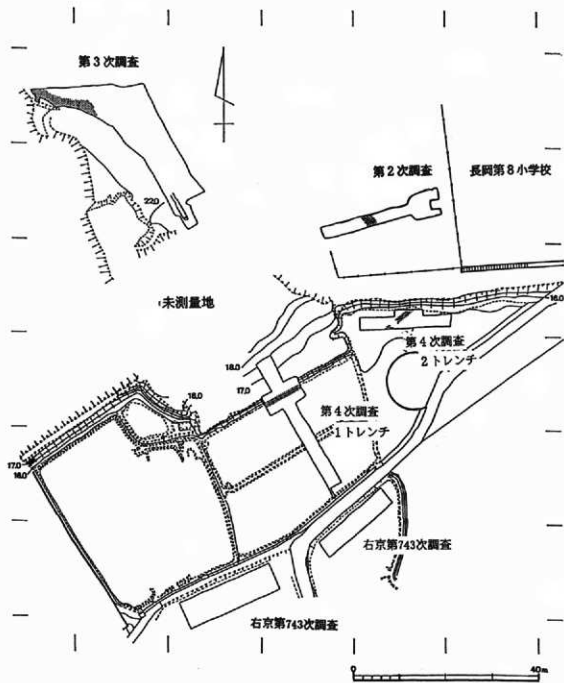
まず、前方部の前面裾部で葺石を確認できたことは大きな成果です。基底石は、現存する墳丘の端部とほぼ同じ位置で確認されたことから、現存する前方部の前面端は、後世にいくらか改変を受けているとはいえ、ある程度当時の形態をとどめていると考えることができます。

次に、前方部の幅については、2トレンチで葺石を確認したことによってさらに大きくなることが明らかになりました。南東コーナーは確認できませんでした。第2次調査での成果を考慮すると、すぐ東側に位置している可能性が濃厚です。そこで、第3次調査で検出された副葬品埋納施設が古墳の中軸線上にあると仮定し、これを境に西側に折り返すと、前方部幅は70m前後の規模に復元することができそうです。このことから、前方部の側面は、東側だけでなく西側についても大きく削平を受けていることが考えられます。

第3に、周濠については、底での幅が20m前後あるとはいえ、非常に浅いものであることが明らかになりました。これを周濠とするには、躊躇しますが、外周部の緩斜面に石を敷いていることを重視するなら、周濠として整備した意図をうかがい知ることができます。



第2図 志摩山古墳調査区配置図



第3図 第4次調査調査図

いげのやま
 恵解山古墳第5次調査 現地説明会資料

2004年10月2日(土)

助長岡京市埋蔵文化財センター

調査名 恵解山古墳第5次調査、長岡京跡右京第827次調査(7ANJKR-5地区)
 推定地 恵解山古墳、長岡京跡右京八条二坊三町、西一坊大路、南粟ヶ塚遺跡
 所在地 京都府長岡京市勝竜寺1203-1、久貝2丁目815-3他
 調査主体 長岡京市教育委員会
 調査担当 助長岡京市埋蔵文化財センター
 調査期間 2004(平成16)年9月1日～10月中旬
 調査面積 218㎡

1 調査の目的

恵解山古墳は、古墳時代中期に築造された乙割地域で最大の規模を誇る前方後円墳です。1981(昭和56)年10月13日に国の史跡として指定されて以来、用地の買収が徐々に進められ、30年余りを経た2002(平成14)年度中によりやく史跡指定全域の公有化が完了するに廻りました。これに伴い、長岡京市では、古墳を史跡公園として保存整備し、広く市民に活用をはかる計画を押し進めようと考えています。そこで、整備計画を立案するため、墳丘や周濠の形態、規模、構造などの基礎資料を得る目的で昨年度に引き続いて発掘調査を実施することになりました。

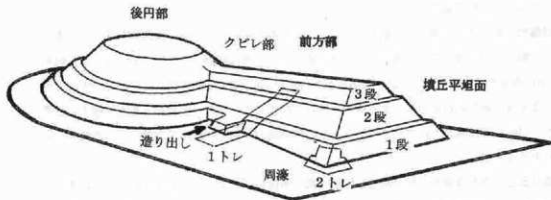


図1 前方後円墳の名称

2 過去の調査

恵寿山古墳は、1968（昭和43）年に京都府教育委員会が墳丘の測量を行って以降、4回の発掘調査が長岡京市教育委員会によって行われています。

第1次調査 西側の周濠外堤部分を対象に1975（昭和50）年に行われたものですが、外堤とみられる遺構は確認されませんでした。

第2次調査 1976（昭和51）年から1977（昭和52）年にかけて行われたもので、後円部と前方部で葦石の一部が確認され、現存する墳丘が大きく原形を損ない、覆せていることが明らかになりました。また、周濠と外堤の一部も確認されました。

第3次調査 1980（昭和55）年に行われたもので、墳丘上段傾斜面の葦石と前方部のほぼ中央で副葬品のみを埋納した施設が確認されました。葦石は、遺存状態が比較的良好で、墳丘西側のクビレ部の状況が明確になりました。また、副葬品埋納施設からは、刀、剣、鏃、蕨手刀子など武器類を主体とする鉄製品が700点近くもみつきり、全国的に大きな注目を受けました。この他、後円部の壙穴式石室に使用されたであろう安山岩や結晶片岩、それに副葬品の一部と見られる管玉が出土したことも重要な成果でした。

第4次調査 2003（平成15）年に行われたもので、前方部の中央と南東部の2箇所から葦石を確認しました。これにより、前方部の幅は従来より大きくなることが明らかとなりました。墳丘はかなり削平を受けていましたが、旧表土と墳丘盛土が確認されました。周濠は、深さ0.3mと浅く、水をたたえた状況は認められませんでした。

3 主な調査成果

調査区の設定 今回の調査では、南面する前方部の形態と規模を明らかにすることを主眼に、前方部の西側と南西隅に2箇所のトレンチを設定しました。前方部の西側は栗林となっており、以前は畑でした。竹藪の開墾と土取りで大きく改変を受けている前方部の東側と違い、平坦地となっています。

1 トレンチは、墳丘部西側から水田面の周濠にかけて、墳丘の主軸とほぼ直交するように設定しており、長さ約35m、幅約3mです。2 トレンチは、前方部の南西隅付近に設定しており、長さ約14m、幅約5mです。

埴輪列 段築された墳丘の2段目とみられる平坦面から、一列に並ぶ埴輪列が見つかりました。埴輪は、第1段のタガと透かし穴が残る程度で、上部は残存しません。据え付けは、幅約0.5mの布張りによるもので、16本の埴輪が芯距離で約0.4m間隔に横立されています。このうち2本は、後世の抜き取りによる破損を受けていました。なお、埴輪列を覆う地覆土には葦石および転落石は確認されませんでした。鉄器埋納施設が発見された前方部頂との高低差は約3mあります。

造り出し 墳丘西側のクビレ部に近い前方部から確認されました。上面は削られています。墳丘裾から約10m周濠へ張り出しており、緩やかな斜面には小振りの石が葦かれています。造り出しに伴う埴輪列や土器類は見つかっていません。

前方部の南西隅コーナー 前方部南辺と西辺の墳丘裾から葦石を確認しました。南辺の葦石

は、第4次調査の葦石と直線的に揃っており、およそ80度の角度で西辺と交差します。鉄器埋納施設を墳丘の中心軸と仮定して反転すると、前方部幅は76m前後に復元できます。第4次調査の基底石と、今回の調査で確認した遺り出しと南西隅の基底石の標高はおよそ14.7m前後であり、ほぼ水平に整地されていることがわかります。なお、基底石の内側には一定の幅の平坦面があり、大小の石を敷き詰めたとような状態が認められます。これについては、墳丘盛土の基礎地形ではないかと考えられます。



図2 恵解山古墳の位置 (1/2500)

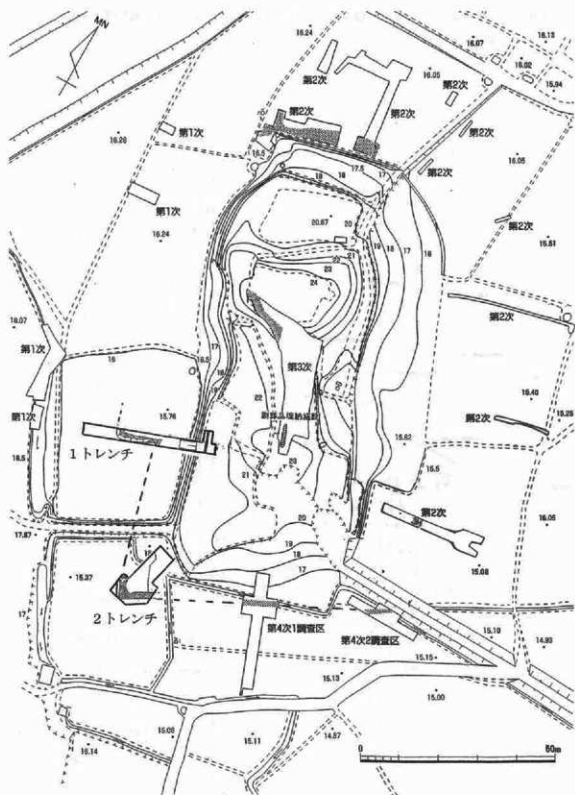


図3 意解山古墳の調査区配置図 (1/1000)

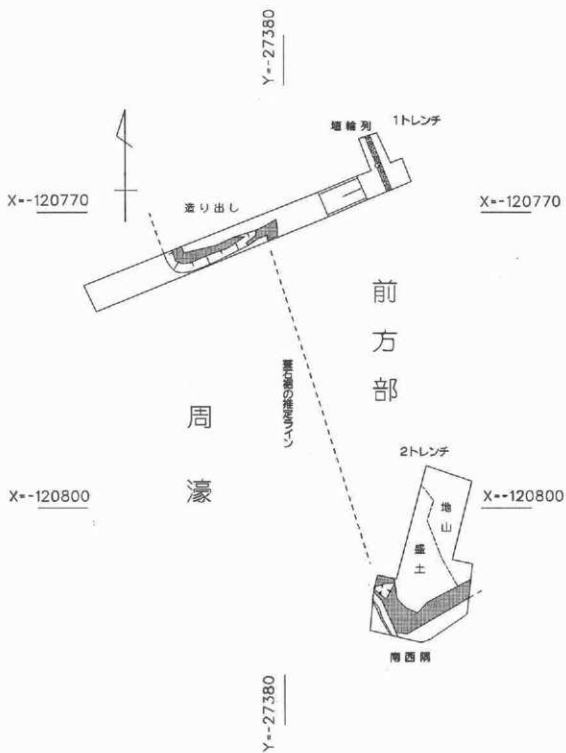
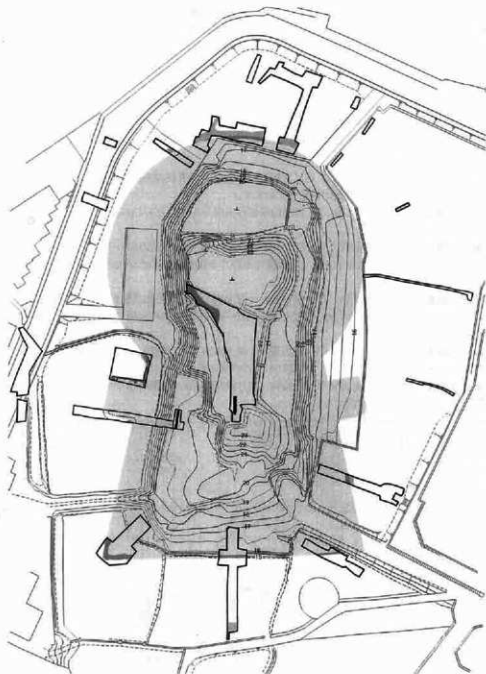


図4 第5次調査遺構平面図

恵解山古墳第6次調査 現地説明会資料



平成17（2005）年10月22日

長岡京市教育委員会
(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査名 恵解山古墳第6次調査、長岡京跡右京第859次調査(7AN●KK-6地区)
 推定地 恵解山古墳、長岡京跡右京八条二坊二町、西一坊大路、八条条間小路、南粟ヶ塚遺跡
 調査主体 長岡京市教育委員会 調査機関 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
 調査期間 2005年9月20日～10月下旬 調査面積 約140㎡

1 調査の目的

恵解山古墳は、古墳時代中期に築造された乙訓地域で最大の規模を誇る前方後円墳です。1981(昭和56)年10月に国の史跡として指定されて以来、用地の買収が徐々に進められ、20年余りを経た2002(平成14)年度に史跡指定域の公有化が完了しました。これに伴い、長岡京市では墳丘や周濠の形態、規模、構造などの基礎資料を得る目的で、2003(平成15)年より発掘調査を行っています。

2 過去の調査

恵解山古墳は、1968(昭和43)年に京都府教育委員会が墳丘の測量を行って以降、長岡京市教育委員会によって5回の発掘調査が行われています。

第1次調査 1975(昭和50)年。西側の周濠外堤部分を対象に行われましたが、外堤と見られる遺構は確認されませんでした。

第2次調査 1976(昭和51)～1977(昭和52)年。後円部と前方部の古墳裾が対象で、裾部の葦石、周濠、外堤が確認されました。この調査で現存する墳丘の東半部が大きく削られていることが明らかになりました。

第3次調査 1980(昭和55)年。前方部のほぼ中央で多量の鉄製武器を埋納した施設が確認され、全国的に大きな注目を受けました。また、後円部から前方部の上段斜面で良好な状態の葦石が確認されました。

第4次調査 2003(平成15)年。前方部の中央と南東部の古墳裾と周濠が対象となり、古墳裾では基底石が確認されました。また、外堤にも小石が敷かれていることが分かりました。

第5次調査 2004(平成16)年。埴輪列(第2段平坦面)、西側の造り出し、前方部の南西隅を確認するなど、大きな成果が収められました。

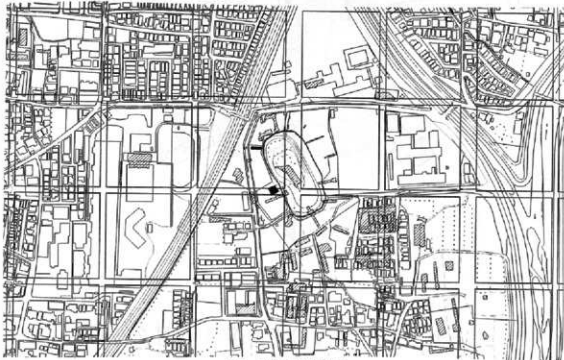
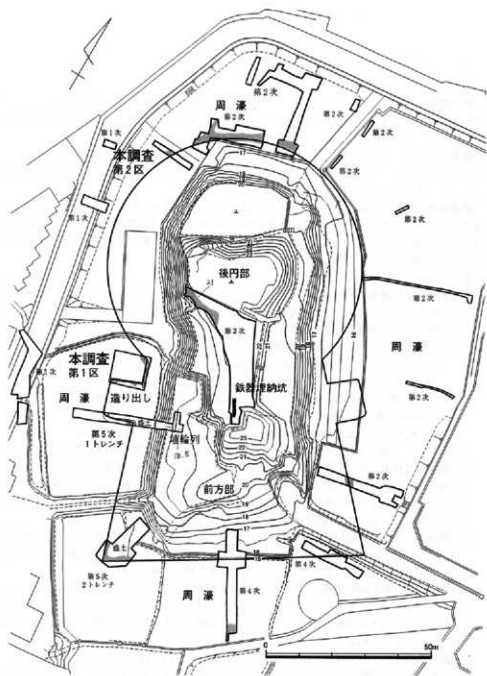
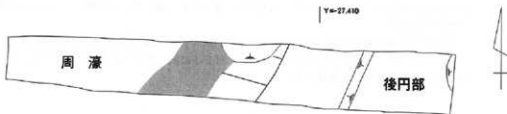


図1 発掘調査地の位置



※ 網掛けは基石の範囲

図2 恵贈山古墳の調査区と墳丘修復元図 (1/1000)



※ 網掛けは基石の範囲

図3 本調査第2調査区平面図

X=120.700

0 5m

3 今回の調査成果（第6次調査）

地中探査 発掘調査の着手前に、奈良文化財研究所の協力を得て地中探査を行いました。その結果、西側造り出しや後円部の輪郭がおおよそ明らかになり、第1区の設定を始め、発掘調査全体を効率的に進めることができました。

調査区の設定 第1区は後円部の南西（第5次調査1トレンチの北）に設定しました。ここでは、造り出しの規模、くびれ部の位置、後円部幅の確認を目的としました。第2区は後円部幅の確認を目的として、後円部の北西部に設定しました。

調査成果 発掘調査の結果、とくに第1区で造り出しから前方部にかけての基底石を良好な状態で確認しました。第1区・第2区ともに、後円部の基底石は後世の削平のため失われていましたが、転落石や地山面の傾斜から、くびれ部、後円部幅についても位置を推定することができ、恵解山古墳裾部の復元が可能になりました。

ポイント

1. 墳丘裾部の復元 恵解山古墳の墳丘裾部を復元することが可能になりました。恵解山古墳は乙訓地域を含む山成盆地北半部で最大の規模を誇る前方後円墳であり、本地域における古墳のあり方を考える上で重要な成果と言えます。

<墳丘各部の規模> ※今後の発掘調査でさらに正確な数値に変わる可能性があります。

造り出し—南北長（主軸方向）=12m、東西幅（周濠への出）=9.7m

・くびれ部から7m前方部寄りに接続する ・造り出し内側に石列

くびれ部幅—東西幅=約53m 後円部径—直径=約78m

前方部幅（第5次調査）—東西幅=76m前後

前方部長—南北長約61m 全長—南北主軸=約128m

・後円部径と前方部幅が拮抗し、主軸方向の前方部長が比較的短い

2. 形態的な特徴 後円部径と前方部幅が拮抗し、主軸方向の前方部長が比較的短いという墳丘の形態的な特徴は、はる山古墳（大阪府羽曳野市）、太田茶臼山古墳（大阪府茨木市）、コナベ古墳（奈良県奈良市）などとの類似性が認められ、他地域との政治・勢力関係や畿内地域全体の古墳の動向を検討する上でも意義深い成果と言えます。

3. 築造 古墳築造に関わる情報を得ることができました。後円部西側では前方部の西側と異なり、基底石や盛土が確認されていません。このことから、後円部の西側では基底石の高さや置き方、葺石背後の構造などに、前方部とは異なる造作なされたと考えられます。

4. 造り出しと前方部の接続 造り出しの北側接続部では、造り出しの内側（墳丘側）からも石列が確認されました。この部分からは、埴輪、土師器ミニチュア壺が出土しており、谷状の斜面が設けられた可能性が推測できます。さらに、土師器ミニチュア壺の存在から何らかの祭祀が行われたことも推測されます。

5. 出土遺物 第1区では整理箱にして11箱、第2区では2箱の遺物が出土しています。普通円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか、家形・蓋形・盾形の形象埴輪、土師器ミニチュア壺、結晶片岩が出土しています。形象埴輪では家形埴輪の出土量が比較的多く、その出土位置から造り出し上に配置されていたと考えられます。また、家形埴輪では梁行、桁行ともに1間で、床を表現した類例の少ない個体が出土しています。祭祀用の土器（埴）を模した、土師器ミニチュア壺も類例の少ないものです。

古墳時代以降の遺物では、長岡京期・平安時代・中世の土器と時期不明の木製品が出土しています。このうち、木製品の出土は後円部北西の第2区に限られています。周濠に堆積した土から、後円部の北～北西側は覆地状であったと考えられます。

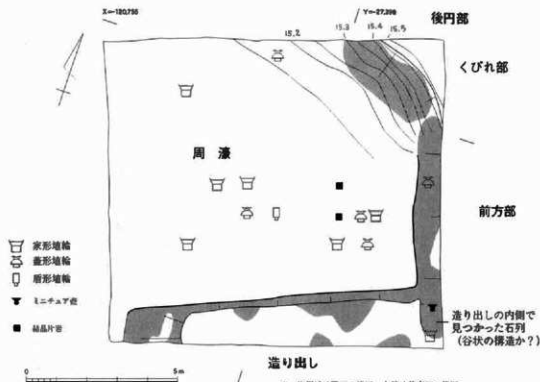


図4 本調査第1区平面図 (墓石・形象埴輪の分布) (1/100)

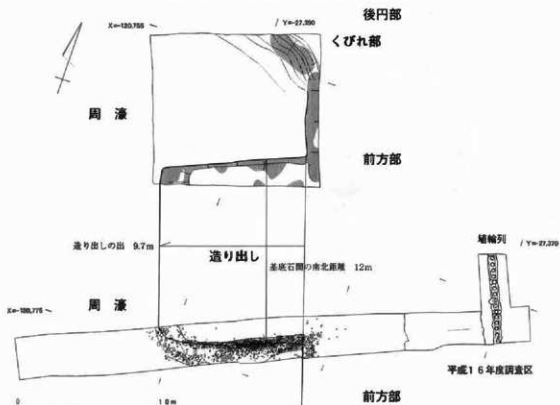


図5 本調査第1区と第5次調査平面図 (造り出しの縦寸)

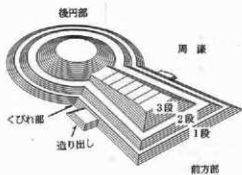


図6 前方後円墳各部の名称

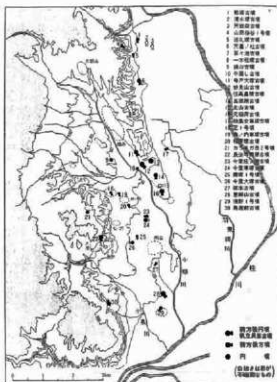
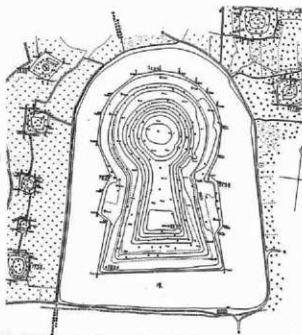


図7 乙訓地域の古墳 (山本輝雄氏作成)



図出典：下掲・左記「『丹波国中津郡山崎町』」

葦山古墳 (大阪府羽曳野市)



図出典：下掲・左記「『古墳の成立と発展』」

コナベ古墳 (萩県真庭市)

図8 平面形態が類似する前方後円墳の例



図10 築造当時の恵静山古墳を想像すると

いげのやま
恵解山古墳第7次調査現地説明会資料

日 時	平成 19 年 2 月 24 日 (土) 午後 1 時 30 分～
調 査 名	恵解山古墳第 7 次調査、長岡京跡右京第 893 次調査
推 定 地	恵解山古墳、長岡京跡右京八条一坊十五町・八条二坊三町・西一坊大路、 南栗ヶ塚遺跡
所 在 地	長岡京市勝竜寺 1206-1 他
調査機関	(財)長岡京市埋蔵文化財センター
調査期間	2006 年 12 月 1 日～2007 年 2 月末日 (予定)
調査面積	約 231 m ²

調査経過

恵解山古墳は、古墳時代中期(5世紀前半)に築造された墳丘長が128mほどに復元される前方後円墳で、桂川右岸流域に分布する古墳の中では最大級の規模を誇っています。これまでに、土木工事など開発行為に伴う調査(第1～3次)と範囲確認など保存・整備に関わる調査(第4～6次)の計6回の発掘調査が行われており、古墳の形態や規模、構造などを復元する上での貴重なデータが蓄積されつつあります。

今回の第7次調査においても、保存・整備事業に不可欠な基礎的資料を入手するため、前方部を中心に当初3箇所の調査区を設定し、その後2ヶ所の調査区を追加して調査を進めてきた結果、以下に説明するような成果が得られました。

なお、7-3調査区は、調査進行の都合上すでに埋め戻しを完了しています。

調査成果の概要

(1) 7-1調査区

第5次調査(5-1調査区)で確認された埴輪列の延長部分を追究する目的で設定しました。調査の結果、検出が予測された平坦面(テラス)と埴輪列はずでに削平を受けて存在せず、墳丘の盛土面とそこに営まれた近世以降の土葬墓を確認しました。

埴丘と盛土 本調査区では、盛土の構築方法を知る興味深い手がかりが得られました。盛土は、調査区の東西で様相が異なっていて、まず東半部ではおもに赤褐色系を呈した粘質土および礫混じり土を交互に積んでいる状況を確認しました。それらは、比較的大きな単位で、おおむね水平に施されているようです。これに対して、その外側にあたる西半部では細かい単位の盛土で構成されていて、断面ではおおむね厚さ10cm前後の凸レンズ状、平面的には径30～40cm程度の楕円形を呈した小単位がモザイク状に分布している状況を確認できました。盛土に使用された土は、赤褐色系、茶褐色

系、黒色系、黄白色系など色調の異なる粘質土や礫混り土など数種類に分けることができ、そのうち黒色や黒褐色系が古墳築造時の旧表土起源、黄白色系などは地山起源と考えられます。

(2) 7-2調査区

前方部東側面の墳丘斜面と葺石の追究、それに平坦面の確認などを目的に設定しました。調査の結果、竹藪の客土や2次に堆積した墳丘盛土層など後世の土層によって厚く覆われており、しかも近世以降の墓地によって破壊されている箇所も少なくありませんでしたが、上段（3段目）に推定される傾斜面とそれに連なる下位の平坦面（テラス）を確認することができました。なお、この調査区で7-1調査と同様な近世以降の土葬墓群を検出したことは、予期せぬ成果でした。

墳丘と盛土 墳丘の傾斜面は、約28°ほどの傾斜角があり、水平距離で5.5m以上、高さになると3m以上あることを確認できました。墳丘の盛土は、暗褐色系の土に地山起源の黄白色系の土が斑粒状に混在するものを主体に用いており、比較的大きな単位でもって構築しているようです。先に述べた7-1調査区における盛土の様相とは大きく異なり、場所によって使用する盛土や構築法などに違いのあることが明らかになりました。

葺石 葺石の遺存状況は必ずしも良好とはいえませんが、基底石とみられる石列と傾斜面の上部に残存する葺石を確認することができました。

まず基底石と考えられる列石は、土葬墓を埋葬する際に動かされた可能性がありますが、傾斜面と平坦面とのほぼ境目に位置していること、比較的大振り石材を横方向に用いてほぼ直線的に配していることなどを重視して、基底石であると判断しました。次に傾斜面の上部に残存する葺石は、拳大ほどの大きさの礫を墳丘に差し込むように小口積みしている状況を確認できましたが、盛土との間に裏込めは認められませんでした。葺石に使用された石材種は、チャート、砂岩、頁岩～粘板岩、緑色岩類などであり、これらは古墳の南西を流れる小泉川から採取されたものと推察されています。

平坦面 平坦面は、現状では幅が1.75m以上あり、南側、すなわち前方部の前面に向かって緩やかにではあるが上昇していました。この平坦面のレベルは約18.5m前後あり、第5次調査（5-1調査区）で埴輪列が確認された墳丘西側の平坦面と標高がほぼ一致することから、同じ段の平坦面であると判断できました。なお、調査区内において、埴輪列の存在を確認することはできませんでした。

(3) 7-3調査区

前方部の東側面における墳丘盛土などの確認を目的としました。調査では、調査区

の東端部が現代の溝で破壊されていましたが、地山とその上に積み上げられている3層ほどの盛土層を検出しました。

(4) 7-4調査区

前方部西側面の墳丘裾部を再確認する目的で設定しました。調査の結果、基底石を含む遺存状態の良い葺石を検出することができ、前方部西側面での墳丘裾を確定することができました。

葺石 墳丘から周壕にかけて広範囲に転落石が堆積していましたが、それらを除去すると基底石がほぼ完存し、そこから上に幅約0.9m、高さにして約0.4mほどが残存していました。

葺石は、傾斜角度が約22°程度の勾配が緩やかな傾斜面に施されていて、基底石はおおむね20cm×30cmほどある大振りの石材を横方向に使用し、それより上部には単大および兩半大ほどの礫を多用して墳丘に差し込むように小口積みしていました。ここで注目されるのは、葺石の隙間に2本の角杭が打ち込まれていることを確認できたことです。2本の角杭は、約2.4mほど離れていましたが、ともに基底石の西辺から約0.35m程度東側(内側)にあり、ちょうど葺石の隙間を縫うように打ち込まれていることなどを重視して、古墳の築造に伴う可能性が高いものと判断しました。その性格について確信できる証拠はありませんが、墳丘裾部の構築にあたり、盛土を施す際の範囲を示す基準杭ではないかと想像することができます。

(5) 7-5調査区

古墳の西側に配された周壕の外縁部分を確認する目的で設定しました。調査の結果、調査区の西端で耕作土直下に地山面があらわれ、その地山面が東に向かって一端落ち込んでから平坦に近い面を形成しつつ伸びている状況を確認できました。地山の上面には、おもに長岡京期の遺物を包含する土層が約10~20cmほどの厚さで堆積していて、その層を切り込んで土坑状の遺構が掘り窪められていました。土坑状の遺構は、東西約4m、南北8.7m以上、深さ約1.2mほどの規模がある長楕円形の凹みで、縁部には丸杭が打ち込まれ、瓦器や土師器、陶器、銭貨など中世を中心とする遺物が出土しています。

ところで、この底部が平坦に近い落ち込みを周壕と考えることも可能ですが、これまでの調査で確認されている周壕内の堆積層が認められず、また緩やかに立ち上がる傾斜面に小礫を敷詰めているという第4次調査(4-1調査区)で確認された外縁部の状況とは異なるなど、現時点では周壕の外縁部を確定できませんでした。

(6) 出土遺物

今回の第7次調査では、埴輪や結晶片岩など古墳に伴う遺物の他、土師器、須恵器、緑釉陶器、墨書土器、瓦器、陶器、瓦、土馬、銭貨、鉄釘、杭、板材など長岡京期、平安時代、中世、それに近世以降にまで下る各時代、各種類の遺物が整理箱に10箱程度出土しています。

埴輪は、7-2調査区が最も多く出土し、次いで7-4、7-1の順となり、他の調査区ではほとんど出土していません。埴輪は、普通円筒、朝顔形円筒、壺形、蓋形などを確認できましたが、いずれも破片資料であって、原位置をとどめたものはもとより、全形のわかるものも皆無でした。円筒埴輪は、口縁部片が極めて乏しいのに対して、底部片が目立つ特徴があり、底面には棒状による圧痕が残るものなども認められています。

まとめ

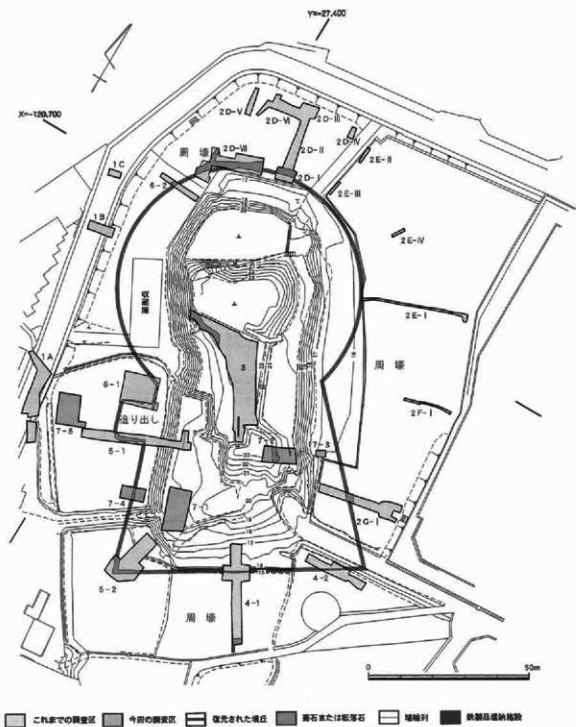
以上のように、今回の第7次調査では、恵解山古墳を復元する上でいくつかの貴重な情報を得ることができました。

1. これまで情報量の乏しかった前方部東側面の一端が明らかになったことです。上段（3段目）と考えられる傾斜面が確認され、その上部を中心に部分的にはありますが葺石が残存していました。また、その斜面と下段で連なる平坦面は、埴輪列が確認された西側面のそれに対応するものであることも明らかになりました。

2. 前方部の西側面裾部を再確認できたことです。この裾部は、これまでの調査成果を加味して判断すると、低くて短い段築を盛土して形成している可能性が強いと考えられます。これを下段（1段目）と認識するか否かは評価の別れるところですが、傾斜面に基底石を伴う葺石を完備していること、前方部と造り出しをほぼ全周するように巡らしていることが確実視されることなどから、下段と考えるのが妥当でしょう。こう考えた場合、前方部は3段築成とすることができますが、ただしこの段は後円部になると地山を削り出して形成し、しかも葺石を施していない可能性が濃厚です。

3. 検出が予測された前方部西側面の埴輪列は、残念ながら削平を受けて破壊されていたましたが、盛土の堆積状況を確認することができたことです。特に、小単位で施された盛土の形態がほとんど崩れず、その範囲を読み取ることができたのは、1単位ずつを丁寧に運搬して積み上げたことを示唆しており、墳丘の構築法を復元する上で興味深い知見が得られたことは大きな成果といえます。

4. 現在後円部には、古くから営まれた勝竜寺区の墓地が存在していますが、前方部においても墓地の存在を確認できたことで、古墳の大部分が墓地として利用されていた可能性が濃厚になりました。



恵解山古墳の墳丘と調査区配置図

恵解山古墳第9次調査現地説明会資料

日 時	平成21年3月14日(土)午前10時～
調査名	恵解山古墳第9次調査、長岡京跡右京第959次調査
推定地	恵解山古墳、長岡京跡右京八条一坊十四町・十五町、南粟ヶ塚遺跡
所在地	長岡京市勝竜寺1207-6他
調査期間	2008年12月1日～2009年3月31日(予定)
調査面積	273㎡
調査経過	

恵解山古墳は五世紀前半(古墳時代中期)に築かれた全長128mの前方後円墳で、桂川の右岸流域では最大規模を誇り、乙訓地域を中心に広い範囲を包みこんでいた「王」の墓と見られます。昭和55年(1980)に前方部で、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、藤手刀子などの大量の鉄製武器類が発見され(第3次調査)、昭和56年(1981)に国指定史跡として保存されることが決定しました。その後、平成15年(2003)からは、範囲確認と保存・整備のための調査が行われることとなり、毎年貴重な一タが蓄積されています。

本年度は、後円部の正確な規模を把握するために、後円部北側に9-1調査区、東側に9-3調査区を設けました。また埋葬施設の手がかりを得るために、後円部中央付近には9-2調査区を設定。そのほかに墳丘東側のくびれ部と車造り出しの検出を目指して9-4調査区を、前方部南側周壕外周の確認のために周壕南東部に9-5調査区を設けました。また調査の進行に伴って新たに後円部9-1調査区の東に9-6調査区、周壕南東9-5調査区の西側に9-7調査区を設けています。なお9-3東調査区は調査の都合上、記録を取った後すぐに埋め戻しを行っています。

9-1 調査区

後円部北側の第1段テラス、埴輪列、墳丘斜面と墓石などの検出を目的として設定しました。現地表下約0.2mで黄色粘土、黒色粘土、茶褐色砂質土からなる盛土層があらわれ、調査区北端の斜面裾部分で第1段埴輪列が見つかりました。いずれも円筒埴輪で、北側を削り取られています。ほとんど失われたものを含めて14個体分が確認できています。上部も削平を受けていて、かろうじて底部だけが残っている状態でした。円筒埴輪の直径は20～23cmで、幅約0.4m、深さ約0.1mの溝の中に10～15cmの間隔で密接して並べられています。

なお調査区内では、当初の目的であった第2段墳丘斜面と墓石はまったく残っていませんでした。断面を観察すると、残されている埴輪の上面より南はすべて削平されていて、その後厚さ約1～1.5mにわたり灰色粘土、黄色粘土、黒色粘土、茶褐色砂質土が堆積していることが判明しました。さらに、断面の状況から調査区南側にある一段高い墓地北側の崖面も後世の堆積であることが判明しています。ただし堆積土内からは遺物が出土しておらず、堆積した時期やこれが地震などによるものなのか、あるいは人工的なものなのかなどについては今後の検討課題です。

9-2 調査区

当調査区は、恵解山古墳の主体部に関する手がかりを得るために、後円部のほぼ中央付近に設けたものです。恵解山古墳第6次調査では地中探査レーダーにより、後円部中央付近に東西約10m、南北約5m長方形の落ち込みが存在する事が判明しています。今回の調査区はこの長方形の落ち込みの北側約3mの崖面に設定しました。調査区の表面から約0.5mには腐植土の堆積があり、さらにその下には南側からの堆積土と見られる黄褐色砂質土が約0.3m堆積しています。これらを取り除くと墳丘盛土と見られる比較的堅く締まった灰白色砂礫土が確認されました。直上に墓地があるためこれ以上掘り進むことはできませんでしたが、竪穴式石室や粘土層に関連するような土層・土質の変化は確認できませんでした。

9-3 調査区

当調査区は、後円部の正確な規模を把握する目的で東側に設定したものです。調査区にはちょうど中学校のグラウンドと恵解山古墳を隔てるフェンスと排水溝があるため、それを境にして古墳側に西調査区、中学校グラウンド側に東調査区を設けました。

西調査区では地表面下1~1.2mで江戸時代の水田耕作土が見つかり、それを除去すると地表面と恵解山古墳の墓石と埴輪片が検出されました。墓石・埴輪はほぼ後円部經推定線に沿って調査区東辺で見つかっていますが、墓石はいずれも拳大の小形の石で、出土状況もまばらで、大形の石が並ぶような状況も無いことから、すべて転落したものとみられます。またこの墓石の上には同じく転落した円筒埴輪が比較的まとまって出土しています。

東調査区では、地表面下0.8mに水田耕作土があり、さらにその下に周壕内の堆積層である約0.4~0.5m礫を含んだ灰色粘土層があります。それらを取り除くと灰オリーブ色シルトと明赤褐色礫からなる地山になります。周壕の堆積土内にはほとんど遺物が出土しておらず、また転落した墓石も確認できませんでした。このことから後円部墳丘の裾はフェンスと排水溝の下のあるものと見られます。なお東調査区は記録をとった後、埋め戻しを行っています。

9-4 調査区

当調査区は、恵解山古墳の東側くびれ部の検出と、西側で見つかった造り出しが東側にも存在するのを確認するために設定しました。調査の結果、ほぼ推定位置で後円部東側の墳丘裾部と同じく後円部の第1段埴輪列が見つかりました。

調査区内では、現地表面下約1~1.2mでほぼ全面に灰色粘土の江戸時代の水田耕作土が確認され、これにより大部分が削平を受けていることが判明しました。また調査区の北西隅には後円部墳丘が高さ約1mの高さで残されていて、その崖面に沿って幅約1m、深さ約0.3mの溝と、その東に幅0.5~0.7m、高さ0.4mの断面半円形に盛り上げられた畦が作られています。この溝の中には砂の薄い堆積が見られることから水論として利用されたものと見られます。この溝の南側には直径3.5m以上の井戸と見られる非常に大きな落ち込みがあり、おそらく一連の灌漑用の施設と考えられます。昭和43年(1968)の京都府教育委員会作成の墳丘測量図(第2図)を見ると、この部分では大きく墳丘をえぐるように等高線が弯っていて、これより西側にはかなり大規模な落ち込み

が存在した可能性があります。この水田耕作土と床土を除去すると調査区の北と南では地山面となり、中央付近では灰色粘土層と転落した墓石が現れます。南側ではこの地山面を切り込む形で幅0.5m、深さ0.2mの蛇行する溝が、中央付近には水溜と井戸が検出されました。いずれも水田より以前に作られたものですが、すべて江戸時代の遺物を含んでいます。水溜は直径1.6m、深さ0.8mの堀方内に直径1.3mの曲物の杵を入れたもので、周囲は灰色粘土で埋められています。井戸は直径約0.8mの底を抜いた桶を倒立させて井戸杵としたもので、上部1段目までを確認しています。この井戸の堀方は異様に大きく、南北約5m、東西約3mの楕円形で、このため前方部と東側造り出し部は大きく破壊されています。

この江戸時代の遺構と灰色シルト、暗灰色粘土の堆積を掘り下げると、後円部東側の墓石とくびれ部付近の周壕が検出されます。周壕は深さ0.3～0.4mと浅く、底部には部分的に密集して直径5cm前後の細かい石が張り付いています。墓石は斜面中段付近に比較的大きな石が並んでいて、これが基底の石と考えられます。東側造り出しは、検出状況から存在することは、ほぼ明らかとなりましたが、近世井戸の攪乱などにより正確な形や規模についてはまだ不明点があります。また今回、造り出しの東半部は黒色粘土と灰白色粘土を積み上げて整形していることが判明しました。さらにこの盛土は部分的に周壕底部にも及んでいることも明らかとなっています。

北西部の墳丘はかなり削平を受けていて、灰白色の地山の上に厚さ約0.4mの旧表土である黒色土があり、その上に盛土がわずかに残されていました。この面の後円部1段目の壇輪列が、削平されたものを含めて14個体分見つかりました。直径は確認できるものでは約20～24cmで、壇輪の間隔はそれぞれ約12～15cmです。これらは幅約0.4m、深さ0.1mの溝に設置されていました。

9-5 調査区

当調査区は、恵解山古墳の南側周壕外周部の検出を目的として、周壕南東隅に設定しました。恵解山古墳の周壕外周部は、昭和42年(1967)の京都府教育委員会作成の墳丘測量図(第2図)を見ると水田の畦として明瞭に残されていますが、恵解山古墳の第1次調査以降、発掘調査ではあまり明確には検出されていませんでした。発掘調査で初めて外周部と見られる緩やかな立ち上がりを確認されたのは、第4次調査の前方部南側調査区で、その後第8次調査では周壕南西隅付近で不明瞭ながら外周部と見られる傾斜面と石の集積が検出されています。今回の調査区はこの2つの調査区を結んだ延長線上にあたります。

調査の結果、耕作土・床土・中世遺物を含んだ暗灰黄色粘質土を取り除くと明黄褐色シルトの地山面となり、現地表下0.5mで東から西に向かって緩やかに傾斜する外周部が見つかりました。この結果南側の周壕外周部は推定よりもさらに南に広がる事が明らかになりました。周壕は深さ約0.4mで、最上層は厚さ約0.2mの長岡京期～平安時代の遺物を包含する褐色粘土層でそれ以下、粘土、シルトの薄い堆積が続いています。地山直上には地山のシルトと黒色粘土が細かく混じった薄い堆積が見られ、人為的に敷きつめているようです。これらの層は遺物をほとんど含んでいません。また周壕外周部の東側には幅0.6～0.7m、深さ0.2mの溝があり、方向は外周部よりもわずかに南で西に振れていて、調査区南側で接しています。内部の土は周壕外周部の肩付近に

堆積している土とまったく同じもので、周壕と同時期に埋没した状況が分かります。ただ現在の所どのような性格のものかは不明です。

9-6 調査区

当調査区は、9-1調査区で第1段埴輪列が検出されたことから、その東側延長部の検出と、さらにその上の大規模な後世の堆積土の広がりを確認するために新たに設けたものです。調査の結果、当調査区内では江戸時代以降に上面が大きく削平されていて、埴輪列、後世の堆積土ともに検出されませんでした。ただし下層ではわずかに古墳の盛土が残されていることが確認されています。また葦土の堆積からは大量の葦石と見られる石に混じって多数の結晶片岩が出土しています。これらの石は浅瓦などと一緒に出土しており、江戸時代頃の整地に伴って集積されたものと見られます。恵解山古墳ではこれまでの調査でも結晶片岩の出土は確認されていますが、今回の調査では小片を含めて14個見つかり、そのうち9個が本調査区で出土しています。

9-7 調査区

当調査区は、9-5調査区で周壕外周部がさらに南に広がることが判明したため、これまでの調査で確認されている南側周壕外周部との間に新たに設定したものです。調査の結果、ほぼ第4次調査と第8次調査で見つかった周壕外周部の延長上に南から北に向かって緩やかに傾斜する南側周壕外周部が検出されました。またこの外周部はわずかに南に広がっていて、9-5調査区の南に伸びています。周壕の深さは0.2mと非常に浅く、ベースは青灰色の砂質土となります。また部分的に深くなった個所には黒色粘土が堆積していて、その上面には直径2~5cmの小さな石が集積しています。これらのすぐ上で長岡京期から平安時代の遺物が出土しています。

出土遺物

今回の調査では多くの遺物が出土していますが、恵解山古墳に関するものとしては、9-1調査区と9-4調査区で見つかった後円部第一段の埴輪列があります。埴輪は削平のためどれも底部のみの破片で、一段目の突起が残っているものは1個体しかありませんでした。外面はかなり摩滅していますが、残りの良い埴輪では、底部に縦方向のハケメ後に横方向のハケメを施している状況が観察できます。この他に9-4調査区の周壕内や江戸時代以降の堆積土内からは円筒埴輪の他、蓋形、椀形、盾形などの形象埴輪片なども出土しています。また9-3調査区でも葦石上に転落した状況で円筒埴輪片が多く出土しています。9-6調査区では、埴輪列のものと異なる非常に大形の円筒埴輪片も出土しています。この他には石室の主体部に使用されていたと考えられる結晶片岩の破片が9-1、9-3、9-4、9-6調査区で出土しています。また石英斑岩も少数出土しています。

長岡京期の遺物は9-3、9-4、9-5、9-7調査区で周壕内から出土しています。いずれも小片ですが、9-4調査区のくびれ部付近や9-7調査区では周壕底に張り付いた状態で出土するものもあり、長岡京期に恵解山古墳周辺で土地利用が行われていたことを示す例といえるでしょう。

平安・鎌倉時代の遺物は9-5、9-7調査区の周壕堆積土内に集中していて、江戸時代の遺物は9-4調査区の井戸、水田堆積土内から多く、9-6調査区では葦土内に多く含まれています。本調査では江戸時代の墓などは見つかっていないため、水田開墾時に伴うものと考えられます。

ま と め

今回の恵解山古墳第9次調査においても多くの新たな成果を得ることができました。

まず後円部の第1段埴輪列が確認された点があげられます。埴輪列は9-1調査区と9-4調査区で確認されていて、上部はかなり削られてはいるものの、溝の中に円筒埴輪が密集して立て並べられた状況が明確に観察できました。埴輪列はこれまで前方部の東側と西側で第2段のものがそれぞれ見つかっています。埴輪の大きさや間隔などはほぼ同じで、今回新たに後円部の第1段が検出されたことにより、埴輪列復原のための貴重な成果となりました。

次に9-4調査区において後円部葺石裾部が検出されたことがあげられます。残念ながらくびれ部に関しては、江戸時代の井戸によって破壊され正確な位置は不明ですが、墳丘復原のための貴重なデータが得られました。さらに東側にも造り出しが存在することが確実となり、恵解山古墳は東西に造り出しを持つ前方後円墳であることが判明しました。東側の造り出しはこれも残念ながら、江戸時代の井戸による擾乱を受けていたため正確な規模・形状は不明ですが、西側の造り出しと少し形状が異なる可能性もあります。また造り出しは部分的に盛土によって整形されていることも判明しました。この盛土は東側では周壕底部にも認められ、9-4調査区北西隅で確認された地山と旧表土面と合わせ、古墳の構築状況や旧地形を知る上で貴重な成果です。

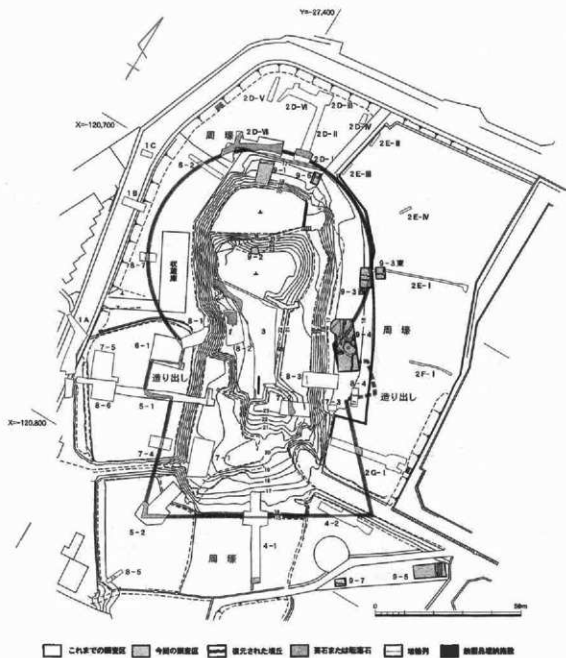
9-5調査区では当初の予想とは異なり、南北方向に東側周壕外周部層が検出されました。このことから9-7調査区の成果と合わせ、南側の周壕外周部は南東部で緩やかに南に広がることが判明しました。また9-6調査区では肩部付近に小瀬の堆積が見られない点が9-7調査区を含むこれまでに確認されている外周部とは異なっています。また地山と粘土を混ぜた層を周壕底部に敷き詰めているのが確認されたのも新たな発見です。

また今回多数の結晶片岩と少数ながらも石英斑岩が確認され、恵解山の堅穴式石槨がわざわざ遠くから運び込まれた石材によって築かれていたことも判明しました。

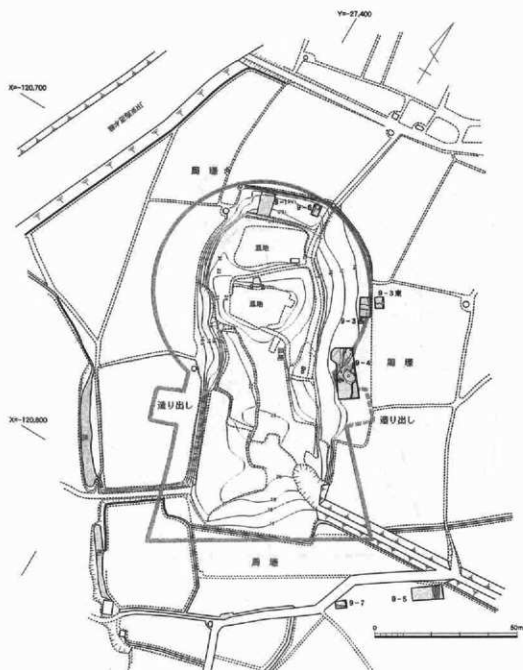
このほかに後世の恵解山の土地利用が明らかとなったことがあげられます。長岡京期では恵解山古墳は大路と小路の交差点に位置していて、古墳が破壊されていないことから長岡京の造営が及んでいないものとされてきました。しかし周壕内からは長岡京期の遺物が多く出土していて、周辺に長岡京期の施設が存在した可能性は高く、別の観点からの考察も必要と思われる。

江戸時代には恵解山古墳の東側が水田開発による削平を受けていることが判明しました。これまでの調査では前方部の東西で江戸時代の土葬墓群や火葬骨が検出されていることから、墓地としての改変が指摘されていましたが、水田開発による改変もあることが判明しました。

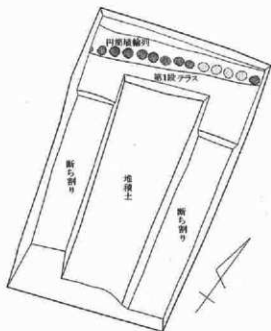
最後に9-1調査区で明らかとなった大規模な堆積土の問題があります。これは今回見つかった後円部第1段埴輪列の上面から南はすべて削平されていて、その上に厚さ約1～1.5mにわたる堆積土が存在し、さらに調査区南側にある一段高い墓地北側の崖面も後世の堆積であることが判明した点です。現在のところ人工的に大規模に盛土を行ったという考えと、地震による地滑りが起きた結果と見る考えがあります。これに関しては今後検討していく必要があるでしょう。



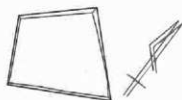
第1図 意解山古墳の墳丘と調査区配置図 (1/1000)



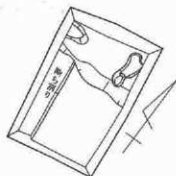
第2図 昭和43年の志解山古墳の墳丘と今回の調査区配置図 (1/1000)



9-1 調査区



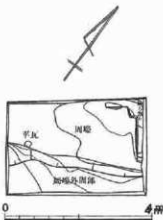
9-2 調査区



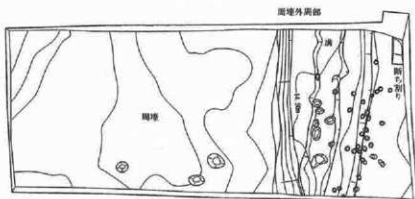
9-6 調査区



9-3 調査区

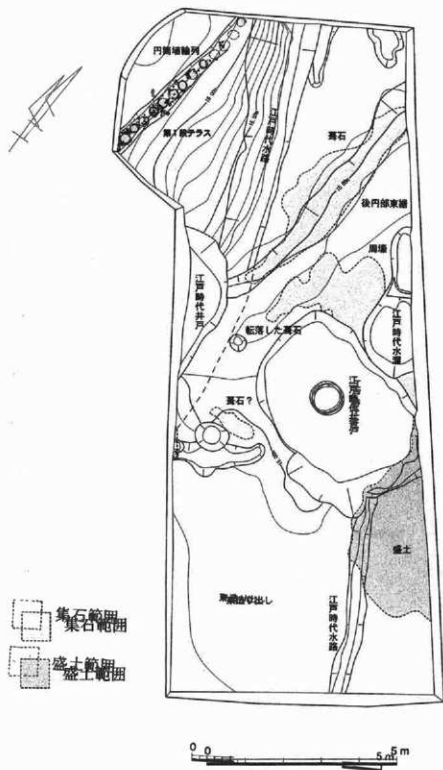


9-7 調査区



9-5 調査区

第3図 調査区平面図



第4図 9-4 調査区画図 (1/1000)

付表-6 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうぎほうこくしょ
書名	長岡京市文化財調査報告書
副書名	国史跡惠解山古墳の調査
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第62冊
編著者名	岩崎誠、金田明大、木村泰彦、中島哲夫、西村康、原秀樹、山本輝雄
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いげのやまこじん 惠解山古墳 なごかきょうし 長岡京跡 なごかきょうし 南栗ヶ塚遺跡	長岡京市 勝竜寺、久具 二丁目	26209	200	34°54'39"	135°42'02"	19800415 ∩ 19800715	313 m ²	緊急調査
			20030811 ∩ 20031110			179 m ²	範囲確認	
			20040901 ∩ 20041028			218 m ²	範囲確認	
			20050920 ∩ 20051109			142 m ²	範囲確認	
			20061201 ∩ 20070305			231 m ²	保存整備	
			20071101 ∩ 20080229			272 m ²	保存整備	
			20081201 ∩ 20090331			277 m ²	保存整備	
			20091124 ∩ 20100331			360 m ²	保存整備	
			20100607 ∩ 20101209			242 m ²	保存整備	
			20110926 ∩ 20111027			102 m ²	保存整備	

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恵解山古墳第3次	古墳	古墳時代	副葬品埋納施設、 墳丘斜面の葺石、 墳丘平坦面の埴輪列、東西の造り出し、周濠 近世の土葬墓群	鉄製武器類、鉄刀、 短刀、鉄剣、鉄鎧、 鉄鎌、蔵手刀子、 ヤス状刺突具、鉄 斧、鋤先、鉄鎌、 刀子、手鎌、石製 斧、管玉、ミニチュ ア土器、円筒埴輪、 朝顔形埴輪、壺形 埴輪、家形埴輪、 蓋形埴輪、盾形埴 輪、鞍形埴輪、水 鳥形埴輪、船形埴 輪、結晶片岩、石 英斑岩、竜山石 弥生土器、土師器、 須恵器、緑輪陶器、 灰輪陶器、瓦器、 白磁、青磁、染付、 陶器、軒平瓦、丸 瓦、平瓦、土馬、 陶磁、銭貨、鉄彈	桂川右岸流域で最大 規模の前方後円墳。 大量の鉄製品（武器 類、農・工具類）を 調査する。 埋蔵施設は他地域か ら持ち込まれた石材 を使用する。
長岡京跡	都城	長岡京期			
南栗ヶ塚遺跡	集落	旧石器～江戸時代			
恵解山古墳第4次					
長岡京跡（右京第783次）					
南栗ヶ塚遺跡					
恵解山古墳第5次					
長岡京跡（右京第827次）					
南栗ヶ塚遺跡					
恵解山古墳第6次					
長岡京跡（右京第859次）					
南栗ヶ塚遺跡					
恵解山古墳第7次					
長岡京跡（右京第893次）					
南栗ヶ塚遺跡					
恵解山古墳第8次					
長岡京跡（右京第920次）					
南栗ヶ塚遺跡					
恵解山古墳第9次					
長岡京跡（右京第959次）					
南栗ヶ塚遺跡					
恵解山古墳第10次					
長岡京跡（右京第987次）					
南栗ヶ塚遺跡					
恵解山古墳第11次					
長岡京跡（右京第1001次）					
南栗ヶ塚遺跡					
恵解山古墳第12次					
長岡京跡（右京第1029次）					
南栗ヶ塚遺跡					

※ 緯度、経度の測点は調査区の中で、国土座標の旧座標系を使用している。

図 版



(1) 古墳 遠景 (南から)



(2) 古墳 遠景 (北東から)



(1) 古墳 近景 (北東から)



(2) 古墳 近景 (南東から)



(1) 8-7区 後円部裾部の転落石検出状況
(北東から)



(2) 8-7区 後円部裾部の墓石 (南西から)



(3) 10-5区 全景 (西から)



(1) 6-2区 後円部裾部の転落石検出状況
(西から)



(2) 6-2区 後円部裾部の周濠の完掘状況
(西から)



(3) 6-2区 後円部裾部の葺石 (西から)



(4) 6-2区 後円部裾部の土層堆積状況
(西から)



(1) 9-1区 全景 (東から)



(2) 9-1区 後円部第1段平坦面の埴輪列
(西から)



(3) 9-1区 後円部第1段平坦面の埴輪列
(東から)



(1) 9-1区 後円部第1段平坦面の埴輪列と断面（北西から）



(2) 9-1区 後円部第1段平坦面の埴輪列と断面（北東から）



(1) 9-2区 全景 (北西から)



(2) 9-6区 全景 (東から)



(1) 9-3東区 全景 (北西から)



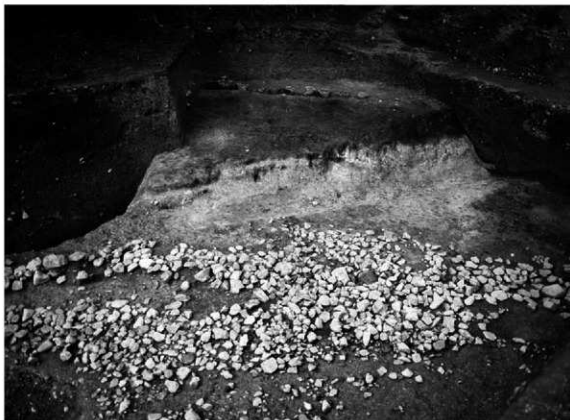
(2) 9-3西区 全景 (南西から)



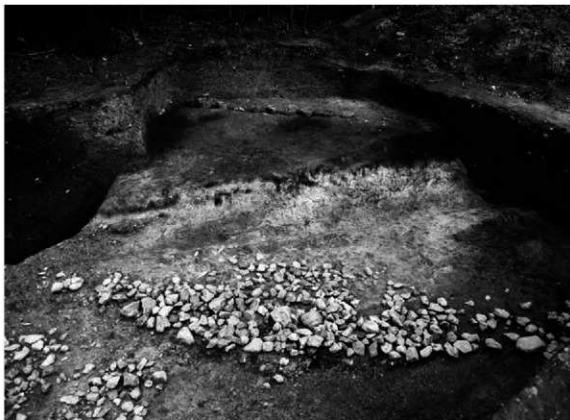
(1) 9-4区 全景 (北西から)



(2) 9-4区 全景 (南東から)



(1) 9-4区 後円部裾部の転落石検出状況(東から)



(2) 9-4区 後円部裾部の葺石(東から)



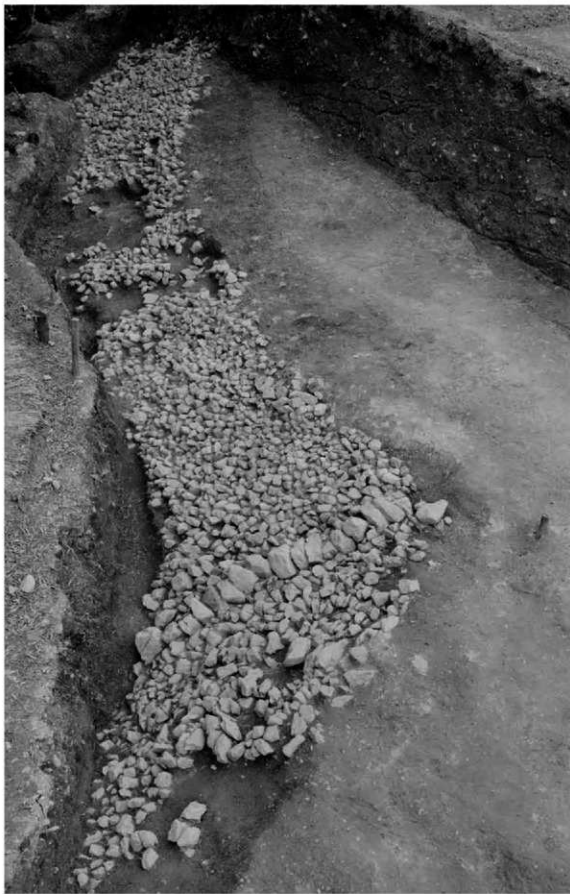
(1) 9-4区 後円部第1段平坦面の埴輪列 (東から)



(2) 9-4区 後円部第1段平坦面の埴輪列
(北から)



(3) 9-4区 後円部第1段平坦面の埴輪列
(南から)



3区 西くびれ部第3段斜面の葺石（東から）



(1) 3区 後門部第3段斜面の葺石 (西から)



(2) 3区 後門部第3段斜面の葺石 (南西から)



(1) 3区 西くびれ部第3段斜面の葺石（東から）



(2) 3区 西くびれ部第3段斜面の葺石（南西から）



(1) 8-1区 全景 (西から)



(2) 8-1区 近景 (北西から)



8-2区 全景 (南東から)



(1) 8-2区 西くびれ部第3段斜面の葺石 (南東から)



(2) 8-2区 西くびれ部第3段斜面の葺石 (南東から)



(1) 8-2区 西くびれ部第3段斜面の葺石 (北西から)



(2) 8-2区 西くびれ部第3段斜面の葺石
(南西から)



(3) 8-2区 西くびれ部第3段斜面の葺石
(北東から)



(1) 5-1区 全景 (西から)



(2) 5-1区 西造り出し南辺の検出状況 (南西から)



(1) 6-1区 後円部裾部から西造り出しの転落石検出状況 (西から)



(2) 6-1区 後円部裾部の転落石検出状況
(北西から)



(3) 6-1区 後円部裾部の転落石検出状況
(東から)



(1) 6-1区 後円部から西造り出し完掘状況 (西から)



(2) 6-1区 後円部から西造り出し完掘状況 (北西から)



(3) 6-1区 後円部から西造り出し完掘状況 (南から)



(1) 6-1区 西造り出し北辺の基底石 (北西から)



(2) 6-1区 西造り出し北辺の基底石
(西から)



(3) 6-1区 西造り出し北辺の基底石
(東から)



(1) 6-1区 西造り出し接続部の谷状の葺石 (北から)



(2) 6-1区 西造り出し接続部の谷状の葺石
(北西から)



(3) 6-1区 西造り出し接続部の谷状の葺石
(南東から)



(1) 11-2区 西造り出し接続部の検出状況
(南東から)



(2) 11-2区 西造り出し接続部の完掘状況
(南東から)



(3) 11-2区 西造り出し接続部の検出状況 (北西から)



(1) 11-2区 西造り出し南側接続部の完掘状況 (南から)



(2) 11-2区 西造り出し溝状遺構の完掘状況 (南東から)



(3) 11-2区 西造り出し埴輪列の検出状況 (南東から)



10-2区 全景 (北西から)



(1) 10-2区 東くびれ部第1段平坦面の埴輪列 (北東から)



(2) 10-2区 東くびれ部第1段平坦面の埴輪列 (南東から)



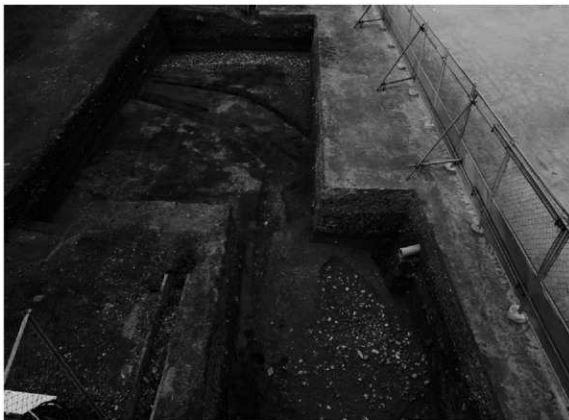
(1) 10-2区 東くびれ部第1段平坦面の埴輪列 (北から)



(2) 10-2区 東くびれ部第1段平坦面の埴輪列 (南東から)



(1) 10-3区 全景 (北西から)



(2) 10-3区 全景 (南東から)



10-3区 東造り出し北辺の葦石（北から）



(1) 10-3区 東造り出し北辺の葺石 (北東から)



(2) 10-3区 東造り出し北辺の葺石 (南西から)



(1) 11-1区 東造り出しの埋没状況
(南東から)



(2) 11-1区 東造り出し上の堆積層掘削状況
(北東から)



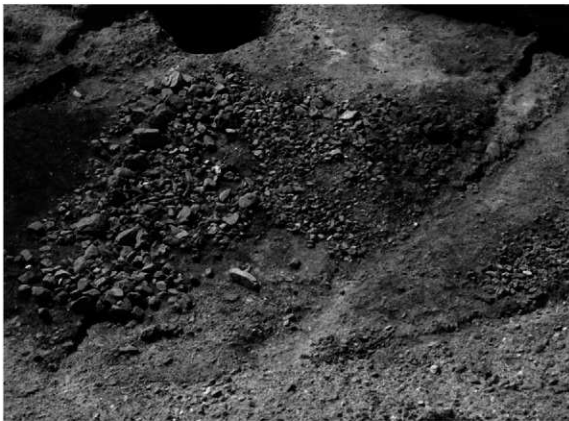
(3) 11-1区 東造り出し周辺の礎の検出状況 (南東から)



(1) 11-1区 東造り出しの完掘状況
(南東から)



(2) 11-1区 東造り出しの完掘状況
(北西から)



(3) 11-1区 東造り出し周辺の蹴の完掘状況 (南東から)



(1) 11-1区 東造り出し南辺の基底石
(北東から)



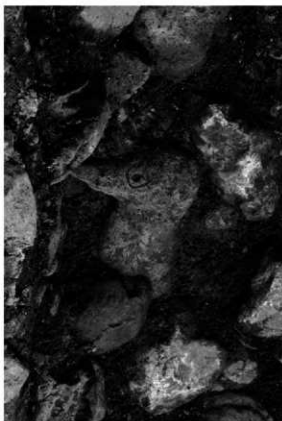
(2) 11-1区 東造り出しの区画石列
(北西から)



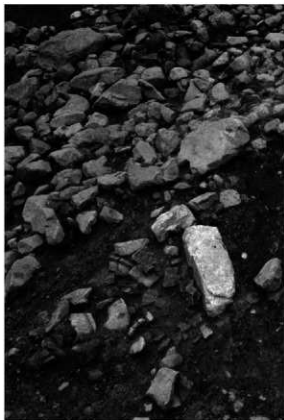
(3) 11-1区 東造り出し基底石と周辺の礫 (北西から)



(1) 11-1区 区画石列と水鳥形埴輪
(南東から)



(2) 11-1区 水鳥形埴輪出土状況(南東から)



(3) 11-1区 水鳥形埴輪などの出土状況
(東から)



(4) 11-1区 円筒埴輪出土状況(東から)



(1) 8-4区 全景 (東から)



(2) 7-3区 全景 (北から)



(3) 10-4区 全景 (西から)



(1) 8-3区 全景 (東から)



(2) 8-3区 全景 (西から)



(1) 8-3区 前部東側第2段平坦面の埴輪列 (北東から)



(2) 8-3区 前部東側第2段平坦面の埴輪列 (北東から)



(3) 8-3区 前部東側第2段平坦面の埴輪列 (北西から)



(1) 7-2区 全景 (南西から)



(2) 7-2区 前方面東側第3段斜面の墓石と土葬墓群 (東から)



(1) 7-2区 前部東側第3段斜面の墓石と土葬墓群（北東から）



(2) 7-2区 前部東側第2段平坦面と土葬墓群（北西から）



(1) 11-5区 前部東側掘部の転落石検出状況(東から)



(2) 11-5区 前部東側掘部の葺石(東から)



(3) 11-5区 前部東側掘部の葺石(北東から)



(1) 11-5区 前部東側裾部の葺石
(北西から)



(2) 11-5区 前部東側裾部の盛土堆積状況
(北西から)



(3) 11-5区 前部東側裾部の葺石 (北東から)



(1) 4-2区 前方面南側裾部の転落石検出状況 (南東から)



(2) 4-2区 前方面南側裾部の葺石 (南東から)



(1) 4-2区 前方部南側裾部の葺石 (南東から)



(2) 4-2区 前方部南側裾部の葺石
(南東から)



(3) 4-2区 前方部南側裾部の葺石
(南東から)



(1) 4-1区 前方部南側裾部の転落石検出状況(南西から)



(2) 4-1区 前方部南側裾部の葺石(南西から)



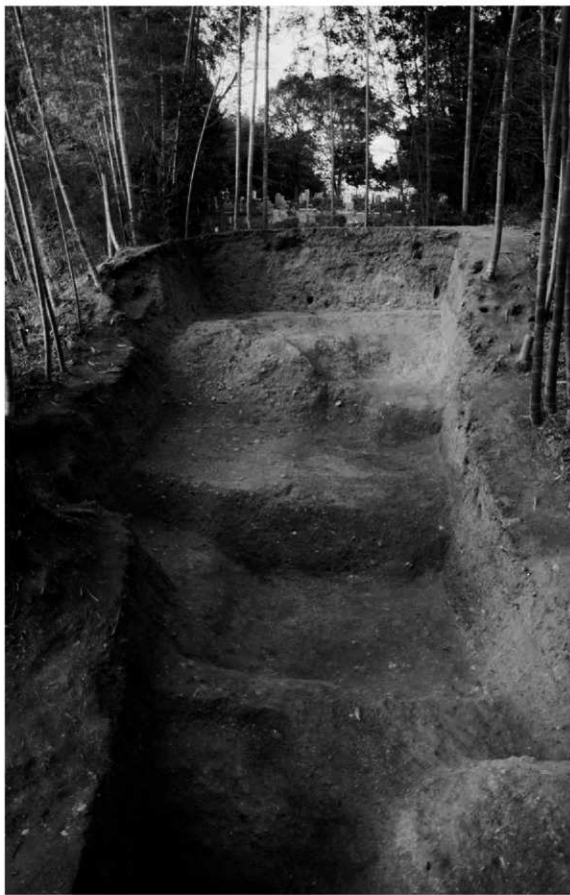
(1) 4-1区 前南部南側裾部の葺石 (南東から)



(2) 4-1区 前南部南側の旧表土層 (東から)



(3) 4-1区 前南部南側の旧表土層 (北東から)



10-1区 全景 (南東から)



(1) 10-1区 掘削全景 (南東から)



(2) 10-1区 掘削全景 (東から)



(1) 7-1区 全景 (北から)



(2) 7-1区 全景 (南から)



(3) 7-1区 墳丘盛土の単位 (南西から)



(1) 5-2区 全景 (南西から)



(2) 5-2区 前方面南西隅裾部の葺石 (南西から)



(1) 5-2区 前方部南西隅裾部の葺石 (南東から)



(2) 5-2区 前方部南西隅裾部の葺石 (南西から)



(1) 12-1 北区 完掘状況 (北西から)



(2) 12-1 北区 墳丘盛土 (南西から)



(3) 12-1 区 土手下部の状況 (北東から)



(1) 12-1南区 前部西側掘部の転落石検出状況(南から)



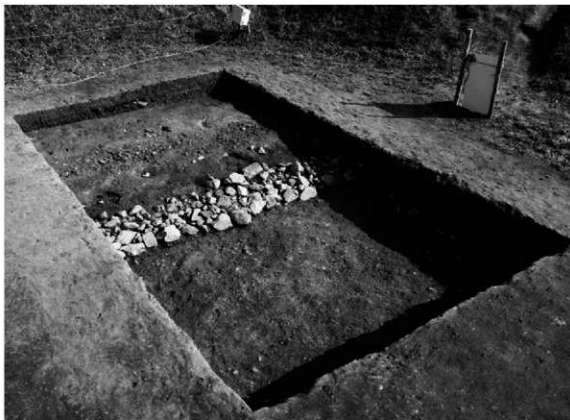
(2) 12-1南区 前部西側掘部の葺石(南から)



(3) 12-1南区 前部西側掘部の葺石(西から)



(1) 7-4区 前方部西側裾部の転落石検出状況(北西から)



(2) 7-4区 前方部西側裾部の葺石(北西から)



(1) 7-4区 前方部西側裾部の葺石 (北西から)



(2) 7-4区 前方部西側裾部の葺石と杭 (西から)



(3) 7-4区 前方部西側裾部の葺石と杭 (南西から)



(1) 5-1区 前部西側第2段平坦面の埴輪列 (南から)



(2) 5-1区 前部西側第2段平坦面の埴輪列 (北西から)



(3) 5-1区 前部西側第2段平坦面の埴輪列 (南東から)



(1) 11-3区 周濠の埋没状況 (北から)



(2) 11-3区 周濠の完掘状況 (北東から)



(3) 11-3区 周濠の完掘状況 (南から)



(1) 9-5区 周濠の検出状況 (北東から)



(2) 9-5区 周濠の完掘状況 (北東から)



(3) 9-5区 周濠の完掘状況 (南西から)



(1) 9-7区 全景 (東から)



(2) 9-7区 全景 (北西から)



(1) 4-1区 周濠の完掘状況 (南東から)



(2) 4-1区 周濠の完掘状況 (北西から)



(3) 4-1区 周濠外堤の内側斜面 (北西から)



(1) 11-4区 周濠の埋没状況 (南東から)



(2) 11-4区 周濠の完掘状況 (南東から)



(3) 11-4区 周濠の堆積状況 (南西から)



(1) 8-5区 全景 (北東から)



(2) 10-6北・南区 全景 (南から)



(1) 12-2区 池と水路下部 (南東から)



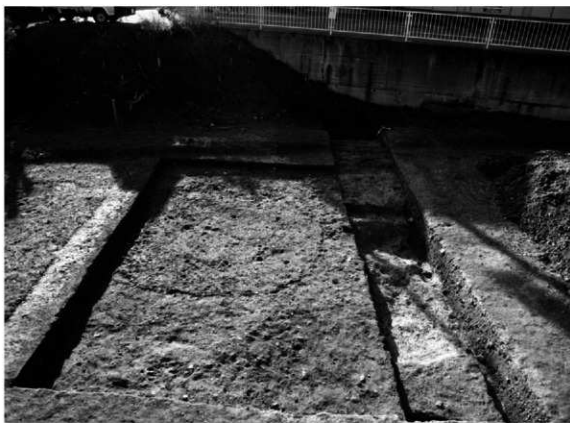
(2) 12-2区 周濠の西側への傾斜 (北西から)



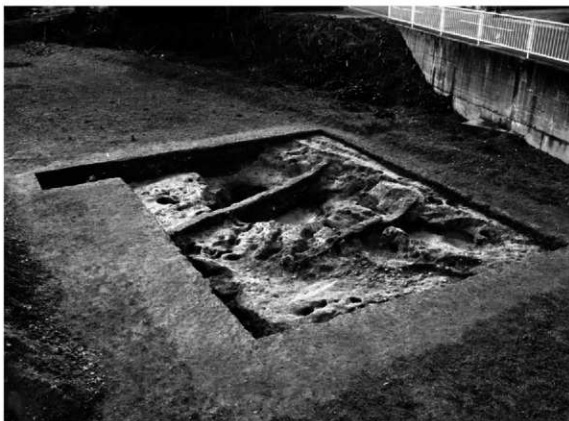
(3) 12-2区 池・水路・周濠の状況 (南東から)



(1) 8-6区 全景 (北西から)



(2) 8-6区 全景 (北東から)



(1) 7-5区 全景 (北から)



(2) 7-5区 周濠の完掘状況 (南東から)



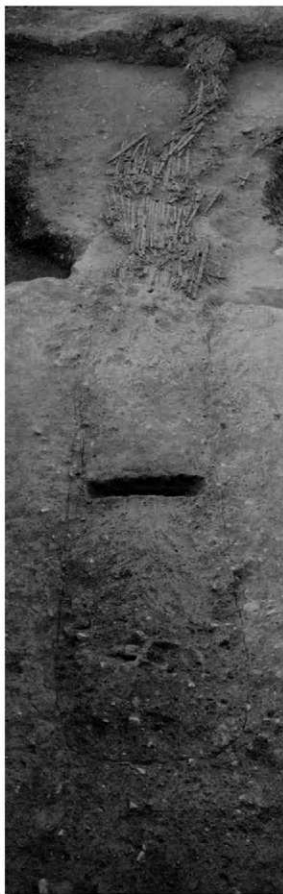
(1) 3区 鉄製品出土状況 (南東から)



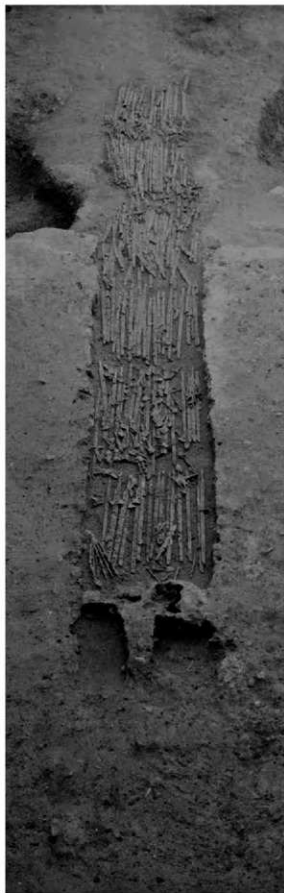
(2) 3区 鉄製品出土状況 (南東から)



(3) 3区 副葬品埋納施設検出状況 (北西から)



(1) 3区 副葬品埋納施設検出状況 (北西から) (2) 3区 副葬品埋納施設検出状況 (南東から)



(1) 3区 副葬品埋納施設完掘状況 (北西から) (2) 3区 副葬品埋納施設完掘状況 (南東から)



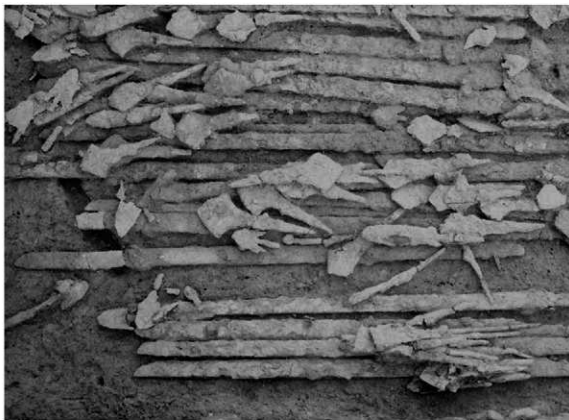
(1) 3区 副葬品埋納施設E群の断面 (南東から)



(2) 3区 副葬品埋納施設D群の断面 (南東から)



(1) 3区 副葬品埋納施設F群のヤス状刺突具出土状況（北西から）



(2) 3区 副葬品埋納施設E群の鉄鏃出土状況（北東から）



(1) 3区 副葬品埋納施設 A 群の上面



(2) 3区 副葬品埋納施設 A 群の下面



(3) 3区 副葬品埋納施設 B 群の上面



(4) 3区 副葬品埋納施設 B 群の下面



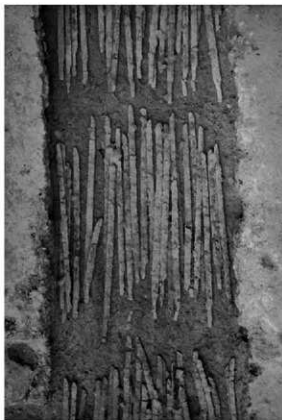
(1) 3区 副葬品埋納施設 C群の上面



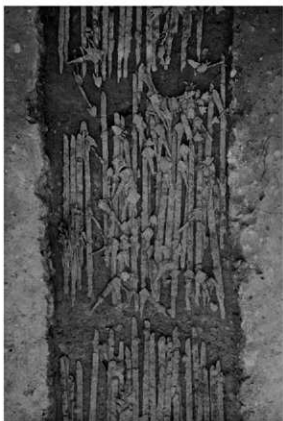
(2) 3区 副葬品埋納施設 C群の下面



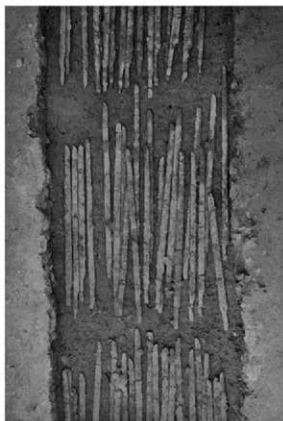
(3) 3区 副葬品埋納施設 D群の上面



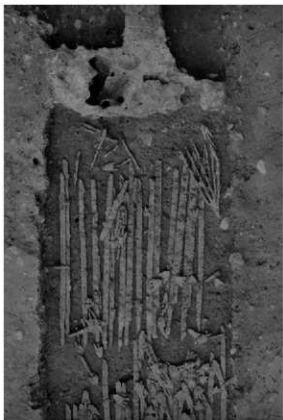
(4) 3区 副葬品埋納施設 D群の下面



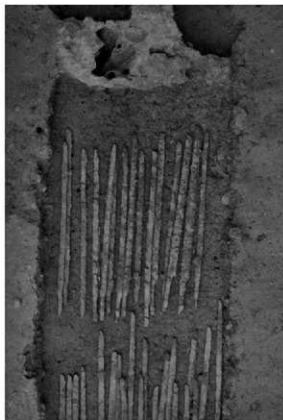
(1) 3区 副葬品埋納施設E群の上面



(2) 3区 副葬品埋納施設E群の下面



(3) 3区 副葬品埋納施設F群の上面



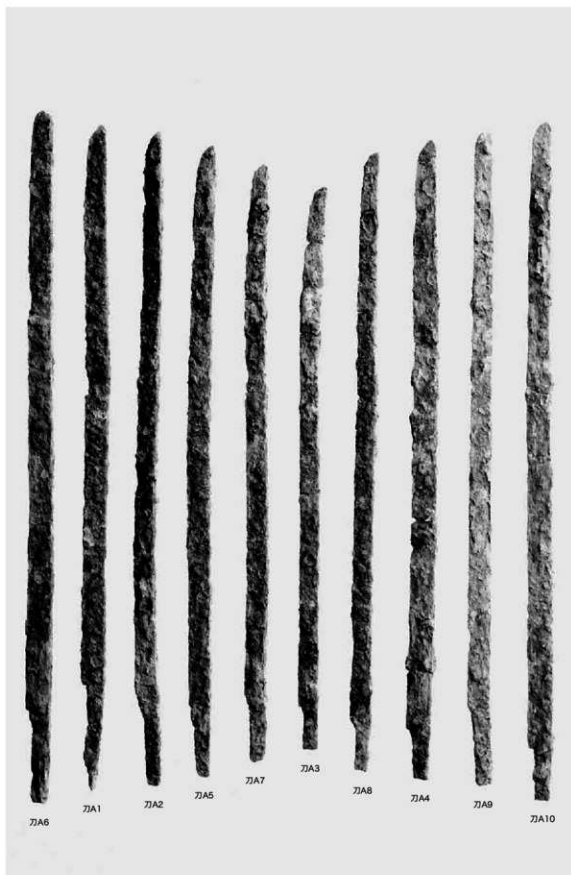
(4) 3区 副葬品埋納施設F群の下面



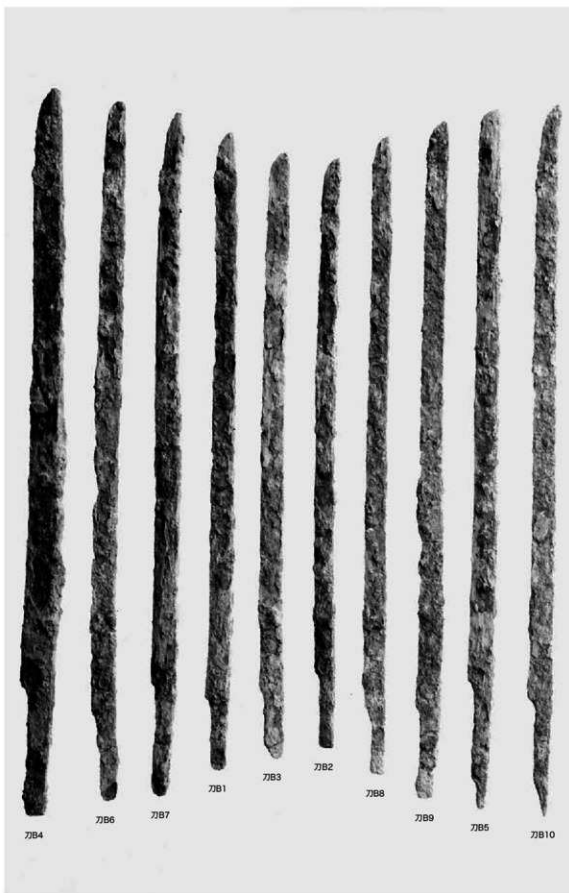
(1) 3区 副葬品埋納施設の掘形断面（北西から）



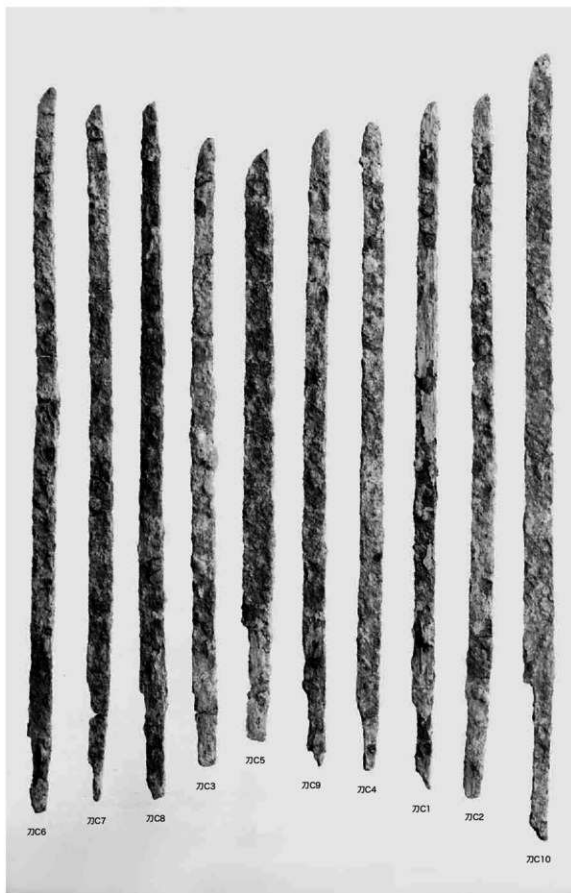
(2) 3区 副葬品埋納施設南小口の粘土塊（北西から）



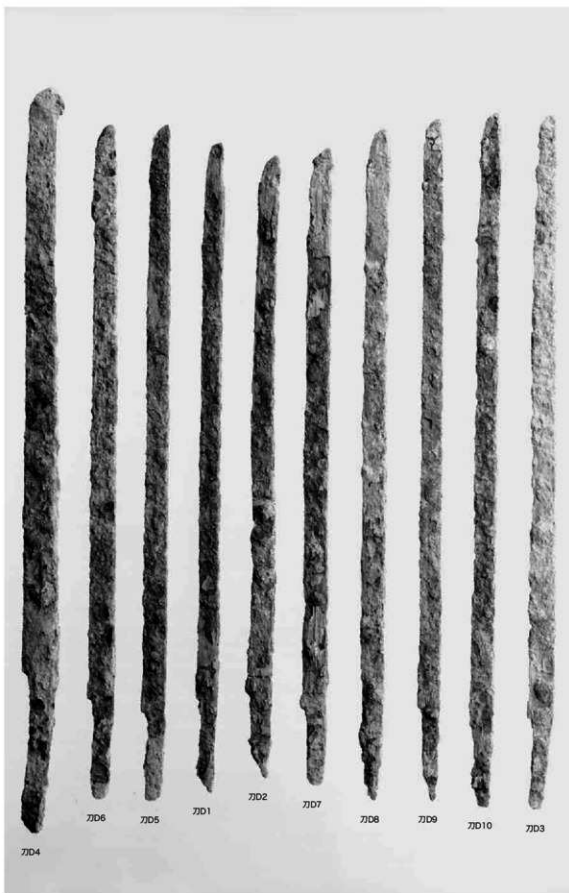
A群の鉄刀



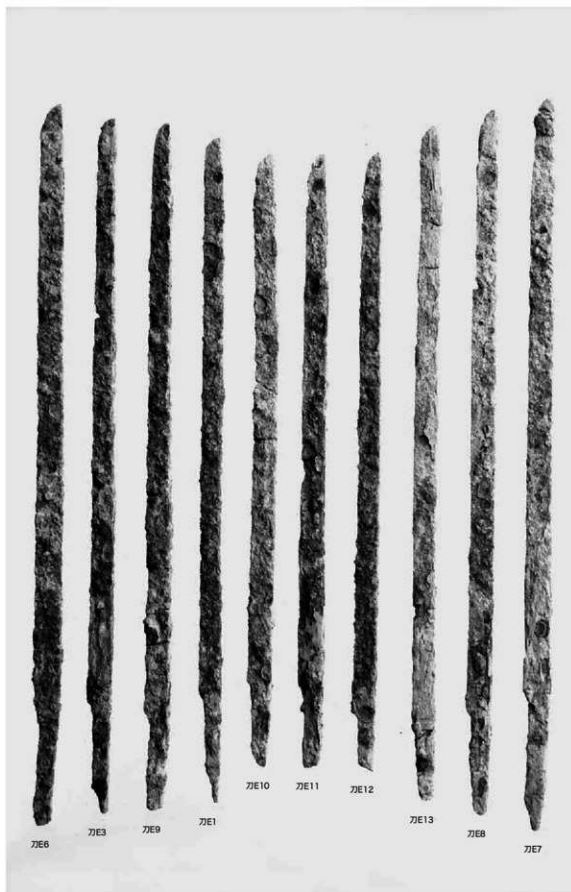
B群の鉄刀



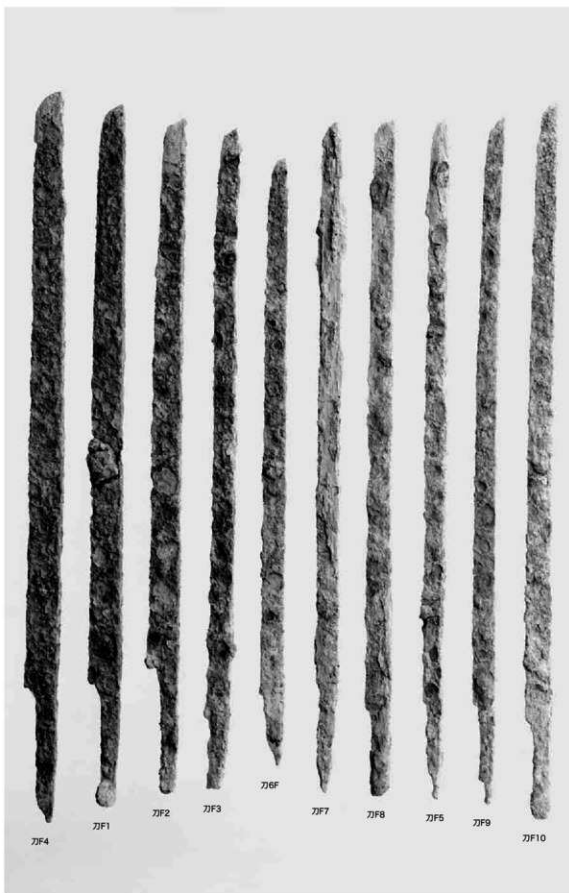
C群の鉄刀



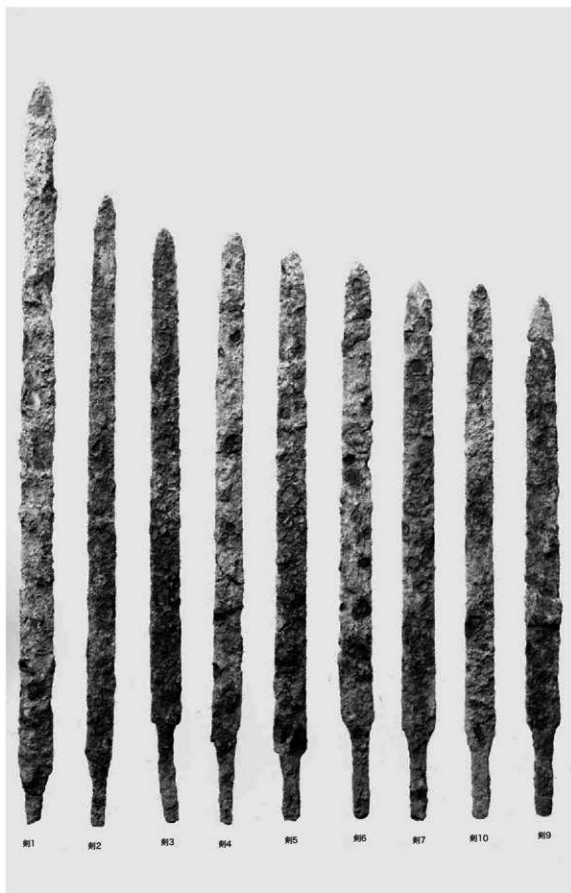
D 群の鉄刀



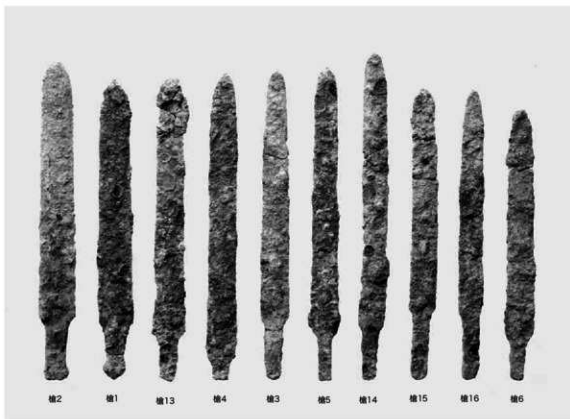
E群の鉄刀



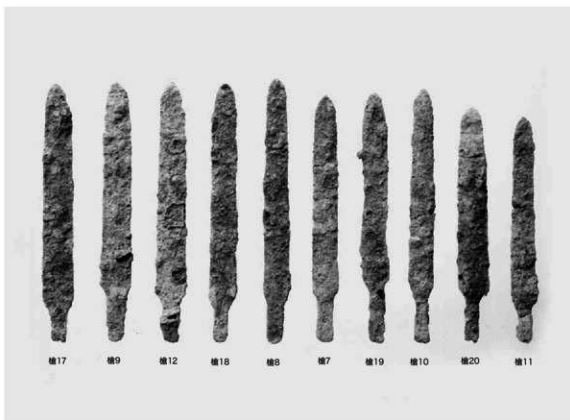
F群の鉄刀



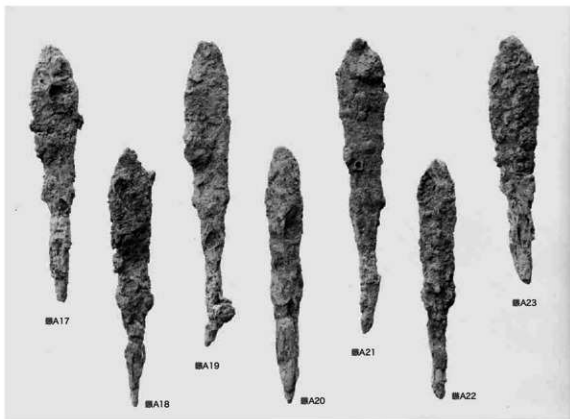
鐵劍



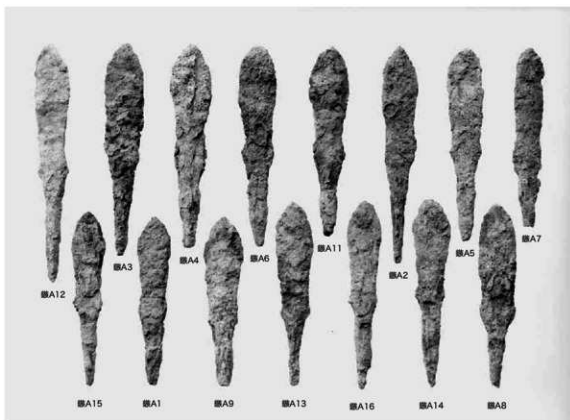
(1) 鐵槍 1



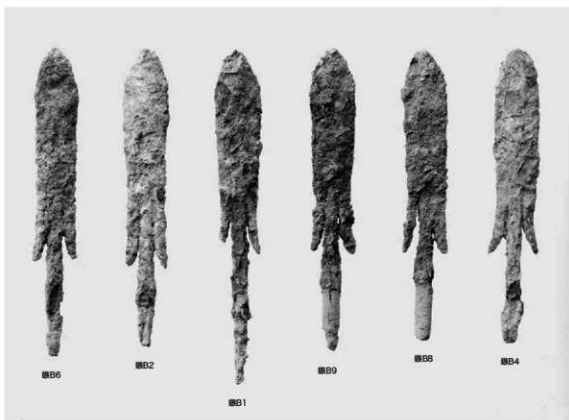
(2) 鐵槍 2



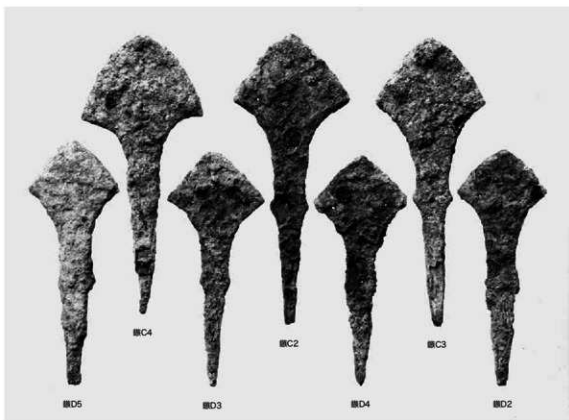
(1) 鉄鏃1 (A形式)



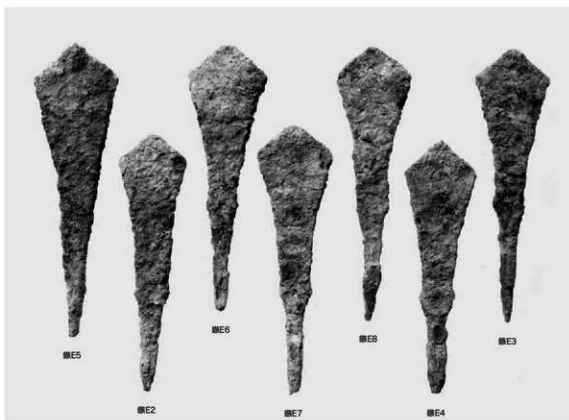
(2) 鉄鏃2 (A形式)



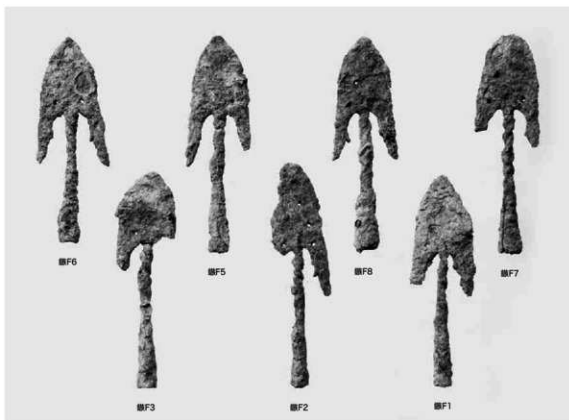
(1) 鉄鐵 3 (B 形式)



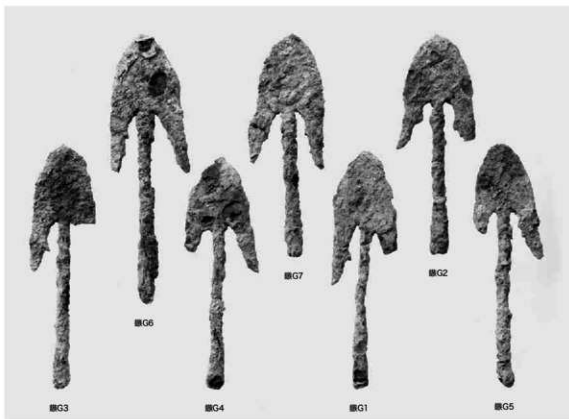
(2) 鉄鐵 4 (C・D 形式)



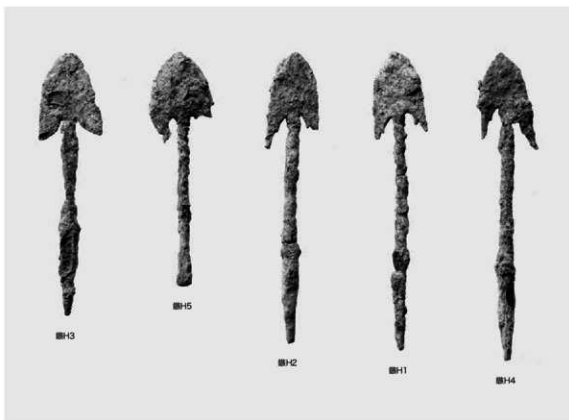
(1) 鐵鐵 5 (E 形式)



(2) 鐵鐵 6 (F 形式)



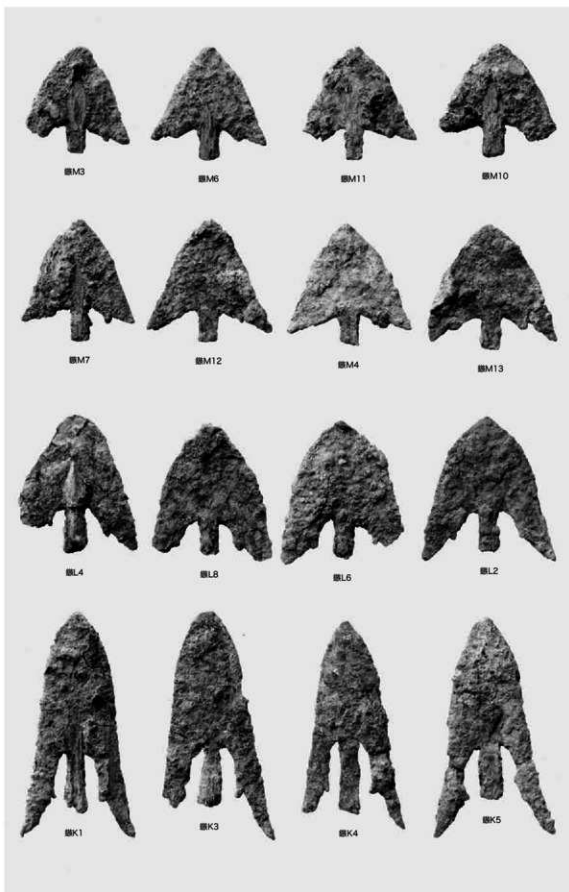
(1) 鉄鏃 7 (G 形式)



(2) 鉄鏃 8 (H 形式)



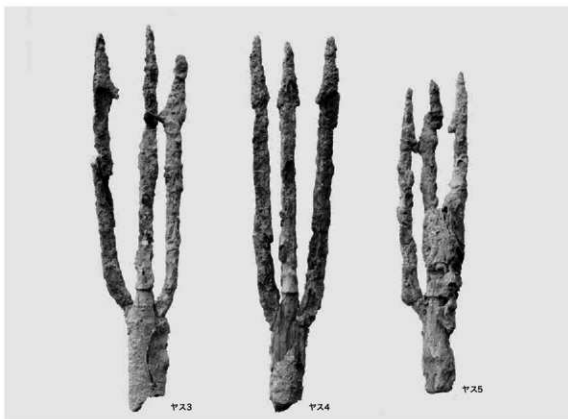
鉄鍔 9 (I・J 形式)



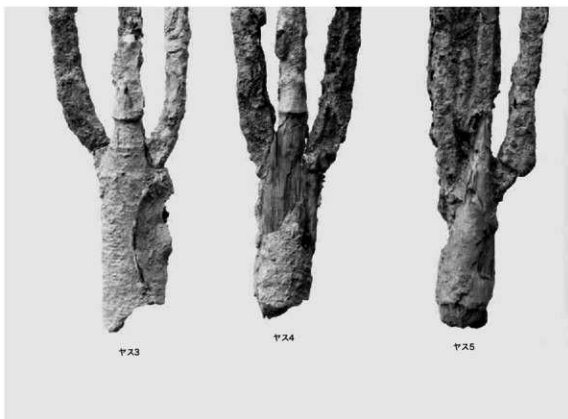
鉄鏃 10 (K・L・M形式)



ヤス状刺突具 1



(1) ヤス状刺突具 2



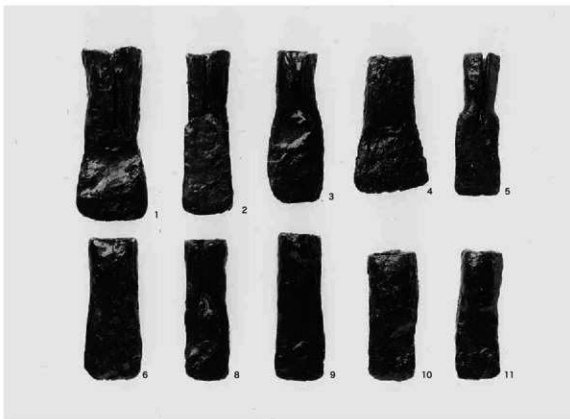
(2) ヤス状刺突具 3



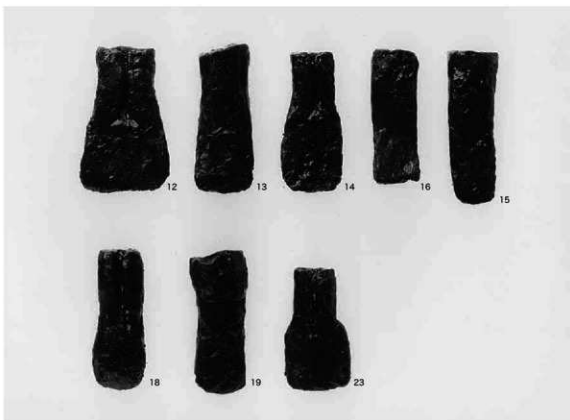
(1) 短刀



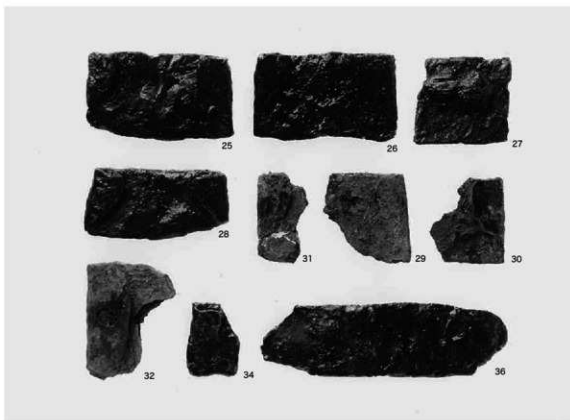
(2) 藏手刀子



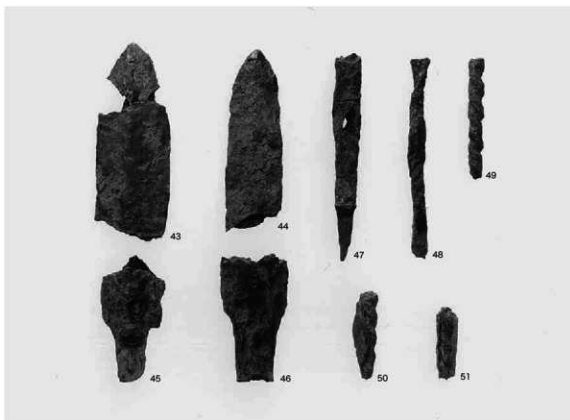
(1) 鉄斧 1



(2) 鉄斧 2



(1) 鋤先、鉄鎌



(2) 鉄刺、鉄釘など



円筒埴輪 1



円筒埴輪 2



(10号)



(12号)



31



1

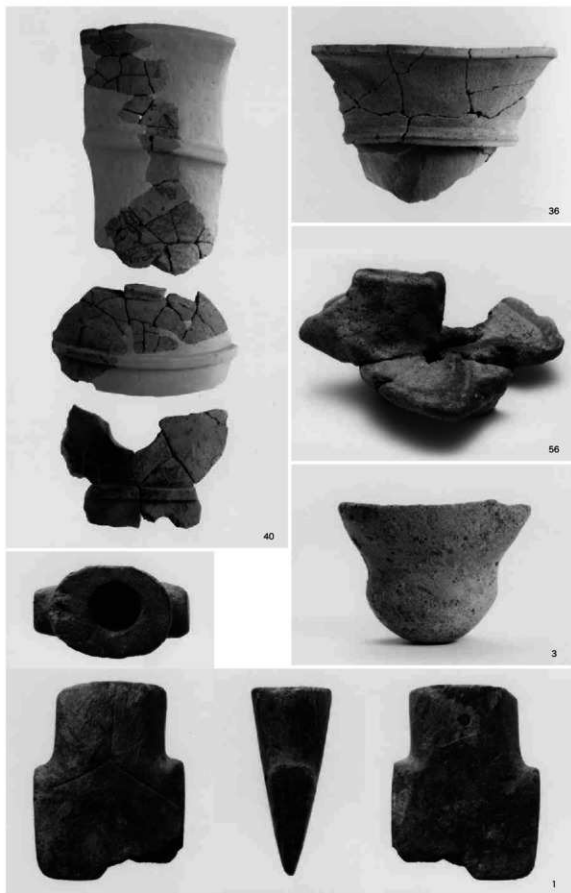
円筒埴輪 3



(1) 家形埴輪 1



(2) 家形埴輪 2



朝顔形埴輪、蓋形埴輪、土製品、石製品



(1) 水鳥形埴輪



(2) 結晶片岩

長岡京市文化財調査報告書 第 62 冊

— 国史跡惠解山古墳の調査 —

平成 24 (2012) 年 3 月 21 日 発行

- 編 集** 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒 617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1
電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427
- 発 行** 長岡京市教育委員会
〒 617-0851 京都府長岡京市開田一丁目 1 番 1 号
電話 075-954-3557 FAX 075-954-8500
- 印 刷** ヨシダ印刷株式会社
〒 604-8277 京都府京都市中京区西洞院通り 御地下ル
三坊西洞院町 572NOA 高松殿ビル
電話 075-252-5421 内 FAX 075-252-5423